

# 山 岳

2011年



Vol. 106



バルチャモ (6.273m) ネバル Photo by Emi Kamimura

## 山への想いに応えたい。

1970年の第1号エススペースの発売以来シンプルなフレーム構造で高い剛性を保持することを基本設計とし、数々のアイデアと改良を重ねながらいつしか山岳テントの代名詞とまで言われるようになったエススペース。現在ではシーズンテントから厳冬期遠征仕様まで10種類がラインナップされ最先端技術と革新的な発想で理想の山岳テントを目指し日々研究開発が続けられています。

### ESPACE.

### HILL

カモシカスポーツではエススペーステント全機種、ヘリテイズ商品を多数取り扱っております。取り扱い商品は店舗によって異なります。



ヘリテイズは、エススペーステント、アウトドアウェアなどの登山道具を企画、開発している日本のアウトドアメーカーです。



## カモシカスポーツ OPEN AM10:30~PM8:00(月~金)~PM7:00(土・日・祝)

- 山とスキー高田馬場店 TEL03-3232-1121 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-28-6・2F
- 山の店・横浜店 TEL045-440-0711 〒220-0011 神奈川県横浜市西区高島2-6-32日産横浜ビル1F
- 山の店・松本店 TEL0263-48-2424 〒390-1242 長野県松本市和田1478-1



### ●山とスキー高田馬場店

\*高田馬場駅戸山口徒歩3分  
駐車場はありません。  
個性的で経験豊富なスタッフ  
に何でもご相談ください。



### ●山の店・横浜店

\*横浜駅東口徒歩5分  
駐車場あり。  
移転オープン1周年、スマート  
ウール売り場面積日本最大。



### ●山の店・松本店

\*松本ICから約6KM  
駐車場あり。  
北アルプスのお膝元。広い  
フロアに豊富な品揃えです。



第百六年（通卷一六四号）

山

岳

二〇二一年



# 山岳 二〇一一年 目次

マウントローガン南東壁初登攀（*）	.....	横山勝丘	7
四川省 シャーチャンラー峰初登頂（*）	.....	吉村千春・松島宏	20
西ネパール チャンラ峰初登頂	.....	小林博史	29
四川省 印嶽山系、野人峰初登頂（*）	.....	デイラン・ジョンソン	38
冬季ハンター峰西稜	.....	栗秋正寿	45
雲南・四川踏査行 2010年夏（*）	.....	中村保	57
エヴェレスト―発見と命名の歴史	.....	金子民雄	104
天山山脈ムザルト河流域の山々	.....	小川務	123
秩父宮記念山岳賞を受賞して	.....	山森欣一	135
熊野修験「大峰奥駈道」を歩く	.....	石岡愼介	145
二〇一〇 ヨーロッパ紀行（ポーランド・スペイン・ドイツ）	.....	中村保	156

図書紹介

空白の5マイル(角幡唯介)……松原尚之…176 / 十五年戦争下の登山―研究ノ一  
 ト(西本武志)……水野 勉…178 / 水河地形学(岩田修二)……児玉 茂…181 /  
 DAS NEBELMEER 報告第4号(東京農業大学山岳会)……成川隆顕…185 /  
 ヒマラヤ世界(向一陽)……大西 保…188 / ヒマラヤのドン・キホーテ(根深  
 誠)……石田要久…192 / Wielka Encyklopedia gor I Alpinizmu (A.Gory)……田  
 村俊介…195 / Mountaineering in Antarctica (D.Gildia)……南井英弘…199 /  
 Shichsen Glacier The Battle of Rose (H.Kapadia)……永田秀樹…204

追悼

堀田弥一さん(今村千秋)…208 / 梅棹忠夫さん(平井一正)…210 / 大森薫雄さん  
 (浜口欣一、孫 慶錫)…213 / 中世古隆司さん(小川 務)…217 / 柳澤昭夫さん(山  
 本一夫)…219 / 木名瀬亘さん(松本恒廣)…223 / 田辺 治さん(尾上 昇)…225 /  
 熊谷義信さん(平山善吉)…229 / 吉川尚郎さん(松浦輝夫)…233 / 寺本 滉さん  
 (藤本三樹雄)…237 / 廣瀬幸治さん(酒井敏明)…241 / 川 善市さん(古市 進)  
 …244 / 松本徭夫さん(渡部秀樹)…247

会務報告

支部の活動報告

……253

支部の活動報告 ……279

山岳圖書目錄（二〇一〇年）

..... A30

英文梗概（\*）

..... A15

表紙写真 富士山 小岩井大輔

## 表紙写真に寄せて

20歳の時、写真愛好家の親父に連れて行かれたのが運命の出会いだった。自然や山などまったく興味がなかったが、精進湖からの富士山の夜明けを見て体全身に衝撃が走り「こんな世界があったのか」一瞬にして富士に魅了され、カメラを購入し毎週末富士山の麓に通い続けた。しかし、2000年1月、勤務していた会社が倒産。多額の借金を背負いどん底の日々、自問自答を繰り返しながら改めて富士を眺めた時に、自分の人生と照し合せてみた。「今、自分は人生の何合目に立っているのだろうか、てっぺんにはどんな世界が広がっているのか。」美しい富士の形状にとらわれず、富士山を全身で感じたいと思った。

その夏から富士山頂上にある山小屋で勤務し、撮影活動をはじめた。山頂では自然現象だけでなく、小屋仲間や日本一を目指す登山者との心と心の触れ合いがあり、喜びや悲しみを分かち合い、人生観が変化していった。そんな生活も今夏で12年目を迎える。たくさんの方々を支えられ、大嫌いだった山が何時しか生きる希望となり、人生の師となっていた。かけがえの無い命を大切に、自分らしく生きて行きたい。オンリーワンの写真家として…。今を撮り、今を生きる。

**小岩井大輔**：1973年生まれ。埼玉県在住。麓からの変幻極まりない山容、頂上の神秘的な姿を追い続ける。夏の間は山頂の扇屋（山小屋）で働きながら写真を撮る。

2008年『Mt. FUJI 3776』（山と溪谷社）を出版。

# マウントローガン南東壁初登攀

横山 勝丘

## 〈メンバー〉

隊長 横山勝丘 (31、信州大学学士山岳会)

隊員 岡田康 (36、日本プロガイド協会)

隊員 鳴海玄希 (29、同人クライミングクラブ)

## 〈行動概要〉

四月十三日 ヘインズジャンクションのクルア二国立公園外

フイスにてプリーフィンク

四月十六日 スワード氷河までフライイン

四月二十一日 順応開始 コルを越えてハバード氷河入り、四月

二十八日まで順応 (東稜を四五七〇メートルまで)

五月一日 南壁偵察

五月四、六日 南壁登攀 (横山、岡田)

五月七日 東峰山頂まで行ったあと東稜を下降 三一七〇メー

トルまで

五月八日 下山 ハバード氷河からスワード氷河まで

五月九日 フライアウト、五月十一日 ホワイトホースにて解

散

## 〈登攀概要〉

五月四日 2時起床 3時出発 8時半取付 23時チムニー下

B P 0時半就寝

五月五日 4時半起床 7時半出発 23時チムニー上 B P 1

時半就寝

五月六日 5時起床 8時出発 22時50分稜線 B P 1時就寝

五月七日 5時起床 8時出発 14時東峰山頂 23時東稜下部

east peak 2500m on May 7, 12:40

May 6, 22:50  
/ May 7, 8:00

5100m

May 5, 23:00  
/ May 6, 8:00

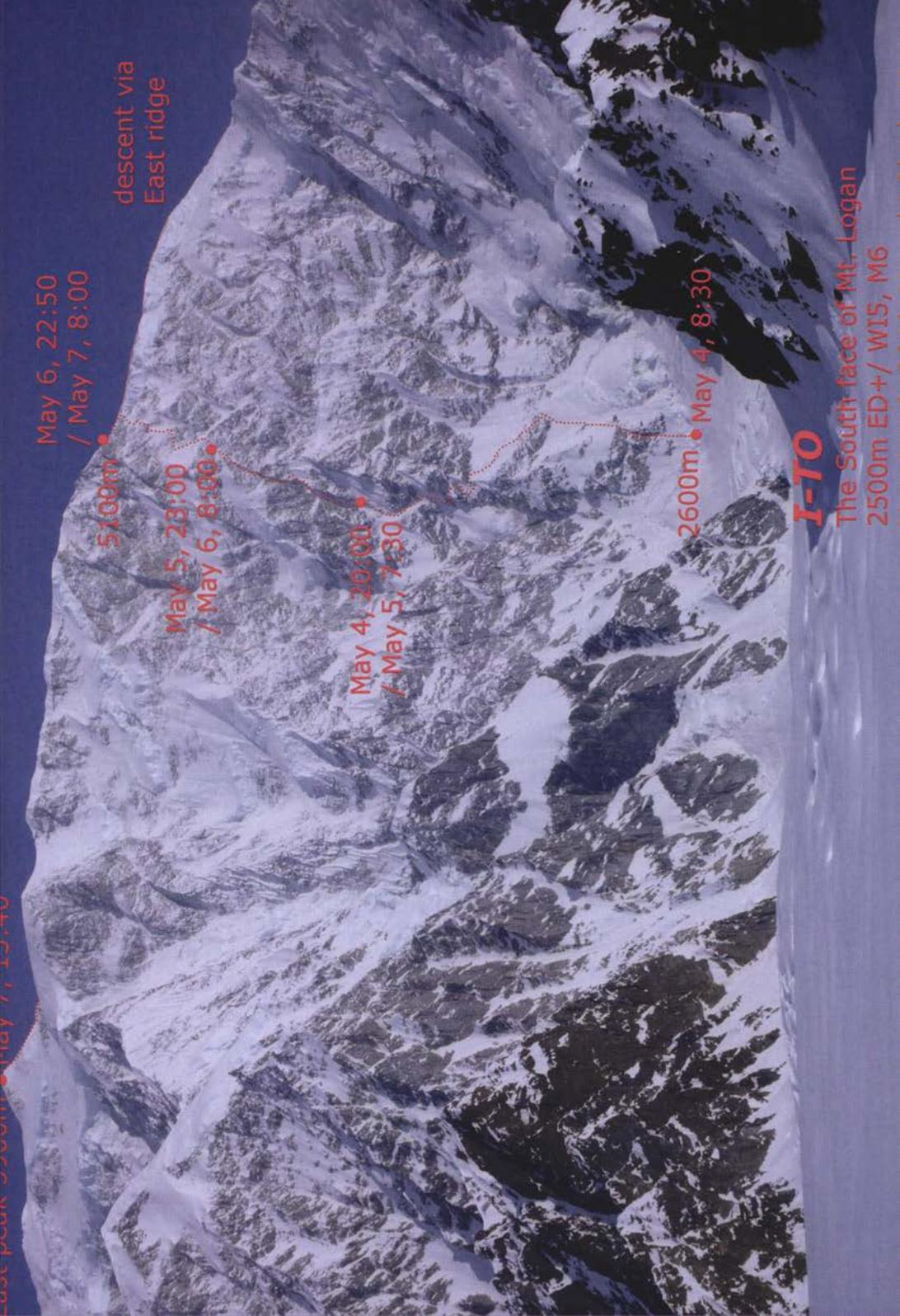
May 4, 20:00  
/ May 5, 7:30

2600m  
May 4, 8:30

descent via  
East ridge

**I-70**

The South face of Mt. Logan  
2500m ED+ / WI5, M6



B P 0時半就寝

五月八日 5時半起床 8時出発 9時半東稜取付 17時ス

ワード氷河へ

23時45分 ベースキャンプ帰着

ローガン南東壁初登 1-T-O糸

ED+ / AI5+M6、2500m

岡田康 横山勝丘

いまだかつて、これほどまでに悩み、迷い、身も心も削った山があっただろうか？そしてそれに伴う、山を降りてからの充足感。たった一ヶ月の間に、僕たちは本当に多くの経験をした。今、こうして平穏な生活を送りながら、僕はこう思う。「最高の冒険だった！」と。

「でかい」。氷河に降り立った瞬間、思わず口にしてしまった。得体の知れぬ何か、とでも言えはいいのだろうか、とにかく僕たちの想定内には収まりきれぬ大きさと、それに付随するエネルギーがあった。翌日から早速、その何かを身をもって知ってゆくことになる。

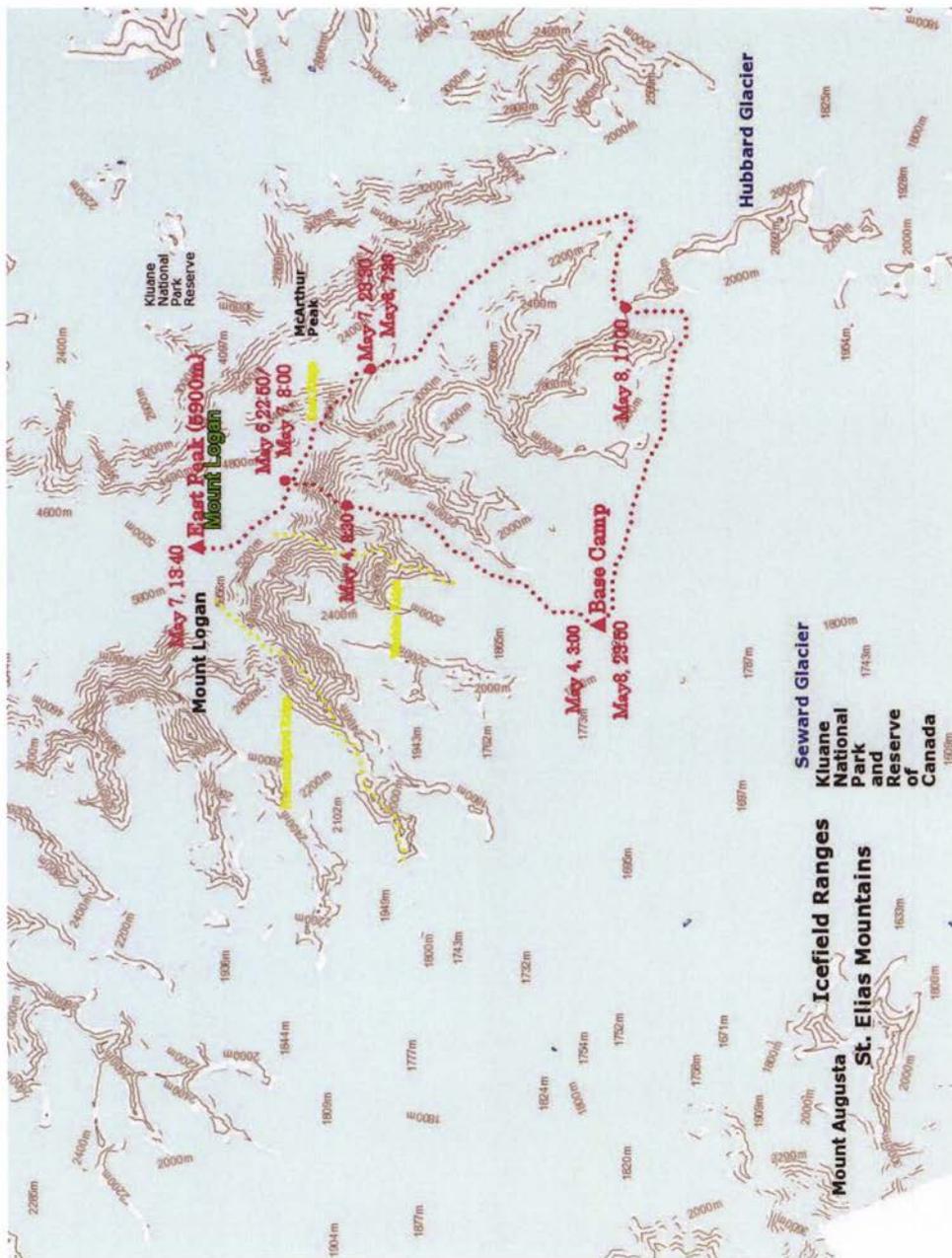
最初の障壁は順応だった。僕たちのいるスワード氷河側には、いくら探しても順応に適した安全な登路は見当たらなかった。

た。検討の結果、一度北側のハバード氷河に入ってから東稜に登るのが、最も安全かつ最短のルートとわかった。氷河生活三日目、ベースキャンプを出発する。二時間近く歩いたところに、顕著なコルがある。そこまでたどり着き、来し方を振り返り見た瞬間、僕たちの背に冷たいものが走った。「やばい」。

広大な氷原にボツリと浮かぶベースキャンプ。それが深い霧の中に消えようとしていた。順応から戻ってきたとき、一体どうやってあのベースキャンプを見つけられよう。ベースキャンプを覆うだけの大雪、一歩先も見えないほどの深い霧……。ここでは十分に有り得ることだった。もしそうなれば、僕たちは大海原にボツンと取り残された難破船のようなものだ。それに気づいた瞬間、僕たちはベースキャンプに向けて即座に踵を返していた。

港を確保すべし。これが僕たちに最初に課せられた命題だった。とはいえ、周囲には誰一人としておらず、GPSも持たない僕たちにはできることと言えば、大雪にも埋まらないだけの目印を設置し（テントポールを雪面に突き立てた）、ベースキャンプの位置をコンパスで正確に測るくらいのものであった。しかしそれをしない限り、何事も始まらないのもまた事実だった。

悪天をやり過ごした後、ようやく順応が始まったが、予想に違わず順応そのものが一つのアドベンチャーだった。片道三〇キロの道のりは、言わば大航海。東稜は美しい雪稜を描いて山



ローガン峰地図

頂まで延びていたが、順応と呼ぶにはあまりにクライミング要素が大きかった。そして噂どおりの悪天。これに対して完全に丸腰の僕たちは、毎日行動を終えると雪洞を掘ってそこにテントを張った。さもなくば、テントは雪に潰されていたことだろう。順応五日目、天気は完全に悪化傾向にあった。三時間かけて丹念に雪洞を掘る。翌日、案の定ひどい地吹雪となった。停滞。さらに翌日、標高四七〇〇メートルに達したところで再び雪が降り始めた。もう順応云々言っていられなくなってきた。このまま粘れば、体力的にも精神的にも次の本番はない。そもそも、残りの時間だって少なくなっているうえに、この天気だ。僕たちは躊躇なく下山を始めた。

そしてもうひとつ、この順応で確認したことがあった。それは、「南東壁を登った後、下降でこの尾根を使うことはあり得ない」ということ。この順応は、下降路の偵察という意味もあったのだが、実際にこの尾根を登下降してみても、クライミング後の下降路に東稜を使うことは、非常な困難を容易に想像させた。心も体も消耗した体で一体どうやってこの尾根を降りられよう。南東壁を登った後は、「可能なならば同ルートを下降したい」。それが偽らざる希望だった。

順応八日目、再び三〇キロの道のりを歩いてベースキャンプのある氷河に戻ってきたが、あと一息というところで、ついに視界を完全に失った。一週間前のトレースなぞ残っているはず

もない。コンバスだけを頼りにジワジワと進む。二一時。一瞬開けた霧の隙間に、見慣れたベースキャンプを確認するや否や、思わず雄叫びを上げずにはいられなかった。

順応を終え、僕は不思議な興奮を覚えていた。これこそがローガンの恐ろしさであり、魅力でもあった。「こういう山登りがしたかった！」。

ここ数年、僕は仲間たちと一緒にアラスカのデナリ周辺でいくつかのクライミングを実践してきた。そこでの経験は非常に有意義だったし、今でも、すぐに飛んで行って登りたい対象はまだたくさんある。しかし一方で、アラスカの山に対する新鮮さが失われつつあったのも事実だ。そしてそれは、山そのものに対してだけでなく、そこに関わるすべての物事もまた然りだった。ルート、天気、情報ならいくらでも手に入る。いざというときの逃げ道だって数多い。

二〇〇九年五月、ハンターのウォール・オブ・シャドウズに鳴海と僕はいた。初日、予想以上のスピードでルートの三分の二まで達したが、そこでとんでもない強風に捕まり、不安定な雪の上で二晩を過ごさなければならなかった。クライミングを諦め、やつとのことで氷河まで戻ってくると、デポしておいたホールバックはどこかに吹き飛んで消えていた。人々はこう聞いてくる。「なぜこんな天気のとときに突っ込んだの？」と。「知

るか！」そう言いたくもなるが、一方では、彼らの言うとおり、この場所だったら詳細な天気予報などいくらでも手に入れることはできたのだった。

数日後、諦めきれない僕たちは再びウォール・オブ・シャドウズに取り付いた。今度は、「二日半の晴れ」という「有益な」情報とともに。与えられた時間からして、山頂は諦めざるを得ないことはわかっていて。しかし僕たちは、ルートの半分以上をすでに知っている。ここから導き出された結論は、「二人とも小さなウェストバッグだけ持って」、「壁を一日で登る」というものだった。かくして再び壁を登り始めたが、クライミングを始めて八時間後には、前回の最高到達点クリスタルハイウェイまで達していた。数日前と比べて、ルートが簡単になったなんてあり得ない。ただ違うのは、「僕たちがこのルートを知っている」という事実だけ。何かしらの情報を持っているのさうでないのでは、そもそもそのクライミングの本質さえも違ってくるのだ。

クライミングを始めてから十八時間後、ムーンフラワーに合流する。ここで数時間の休息の後、残りの斜面を駆け上がってバットレスの頭に立った。悪天を恐れ、そそくさと下降を始めた僕たちは、数時間後には氷河に降り立った。心配した天候の悪化は杞憂に終わったようで、一面を覆っていた雲は既にどこかに消えていた。

安全に下まで戻ってきた事実には喜ぶ一方で、本当の山頂は、僕たちの最高到達点（バットレスの頭）からまだ遙か先にある、それもまた事実だった。天気予報が思わしくないから山頂まで行かない、というのは、結局は弱い者の言い訳だ。言い方を変えれば、僕たちは「悪天」という情報に踊らされているに過ぎないのだ。

二〇〇八年のデナリ。そういった閉塞感を打開するためのパチンコだった。それは純粹にチャレンジングで楽しいクライミングだったが、これも所詮は既成ルートの繋げものなのだ。そもそも、「誰かが以前に登っている」というその事実だけで、クライミングは格段に簡単になるのだ。

整備の行き届いた場所でクライミングに集中する。それは純粹に楽しい。しかしそれとはまったく逆の場所で、多くの不安を抱えながらの行為こそ本物の山登りなのではないか。

そんな思いを抱いていた矢先に見たローガン南東壁の写真。その虜になるのに、時間は要さなかった。「三〇〇〇メートル未登の大物」。そんなフレーズもその助けにはなかったが、ただそこに写る山の姿に魅かれた。そして何より、僕が今求めているクライミングが、ここにはありそうだった。

また、この壁には北米の名だたるクライマーの挑戦を退けてきた過去がある。この壁が現代までビッグプロジェクトの一つとして残された理由。それは、技術的な困難によるものではない。



上部のトラバース



核心部

い。多くのクライマーはこう言う、「あそこの天気は最低だ」周囲には誰もいないぞ」「セラック崩壊に気をつけろ」。そして、「でかいぞ」と。これらのフレーズを聞けば聞くほど、僕の思いは傾いていった。アルパインクライミングの本当の難しさとは、技術ではカバーできない部分にあると僕は信じる。「よし、この山と真正面から対峙して、この山のすべてを受け入れよう」。

願望を終えて興奮する岡田と僕をよそに、鳴海の様子はどこかおかしかった。それは、チーム内の不協和音とかそういう類のものではなく、ただローガンという山の捉え方の違いだった。そして、南東壁の偵察を終え、それは明らかにってしまった。彼の口について出るネガティブな理由を、岡田も僕も理解できないわけではなかった。しかし、要はそれを自分の中に受け入れるか否かだ。鳴海は受け入れなかった、それだけの話だ。これはやはり、もう仕方のないことだ。ここに集まる三人が三人とも、これまでに多くのクライミング経験を積んできている。それぞれの登山観というものも持っている。鳴海が「行かない」という決定を下したのも、彼なりに熟考し、散々悩んで決定を下したのだ。あとは本人の意見を尊重するしかないのだ。

鳴海はベースキャンプにて待機。岡田と僕は二人になった。タクティクス等、いくつかなの変更を余儀なくされたが、基本的

に僕たちのやることは変わらない。何事が起ころうとも耐え忍ぶ、自分自身を保ち続ける。そして幸運、すなわち好天。それがこの壁を登るキーワードだ。

五月四日。月明かりの氷河を詰める。不気味に垂れ下がるセラックを縫うようにして壁の基部にたどり着く頃、夜が明けた。壁を見上げる岡田が一言、「これ、一日で抜けられるんじゃないの?」「冗談半分、しかし残りの半分は期待を込めて本気で言っているのがよくわかる。いつものことだ。そしてほぼすべての場合において、その期待は裏切られることも知っている。傾斜のあまり強くない雪壁を同時登攀で登る。この時はやはりそのスピードに、「あれ、一日で行ける?」と錯覚を覚えるほどだった。

先人たちの荷物が残置された最初の岩壁に突き当たる。当初の予定では、ここから右に続く顕著な弱点を突いて最上部まで達するつもりだったのだが、ゴーアップ直前にベースキャンプから双眼鏡を確認すると、そのライン上にただ一カ所、上部のセラックの影響を受ける場所を見つけてしまった。ロシアンルーレットは好みではない。否応なしに、そのラインは放棄せざるを得なかった。唯一残された安全な登路は、下からもはつきりとそれとわかる顕著なチムニーだった。今いるこの場所からは、尾根を一本左に越えて、チムニーへと続く雪のガリーに入ってゆく。一日でこの壁を抜けるなんていう戯言は捨てたと



核心部のピッチ

しても、今日中にあのチムニーの下までは達したい。

ところが、この場所で僕たちはがっくりとうなだれた。容易に左の雪壁に移れると考えていたのだが、僕たちのいる場所と雪壁を寸断する断崖。そして、雪壁の下半分を大きく穿つセラック。強引にでも懸垂下降して、左の雪壁に入り込むことは可能だった。しかしひとたび入り込んでしまえば、退路を塞がれることも覚悟しなければならぬ。思い切って飛び込んでしまおうか、それとも別の登路を探るか。僕たちは後者を選択した。これだけ大きくて複雑な壁だ。どこかに抜け道はあるはずだ。そして、まだ焦るときではない。人は、とかく甘い妄想に惑わされがちだ。でも、冷静に考えてみる。一日でこの壁を抜けるはずなどないのだ。

論理的な登路は、案外すぐに見つかった。その分時間も食ったが、僕たちに悲壮感はない。左の雪壁に入ると同時に雪も舞い始めたが、それもすでに親近感さえ沸き始めていた。夜十一時、目標だったチムニーの下までは結局到達できなかった。それでも、最初の懸案だった左トラバースを終えて満足感を覚えた僕たちは、雪のアレットを削ってブラットフォームを作り上げた。この頃になってようやく、「一日で」という甘い妄想を振り切り、この山とガップリ組み合うのだという気分になった。思いのほか快適なビバーク地を作り、満足感とともに眠りに就く頃には、空には星が瞬き始めていた。

二日目。午後を過ぎてもまだ、僕たちは核心のチムニーを越えられずにいた。想像以上の傾斜と氷の薄さ、そして岩の脆さは、なかなか僕たちを進ませない。フォローは相変わらずの荷の重さ。デリケートなブアプロテクションのトラバースでは、リード以上に神経を使う。あれこれと逃げ道を探っては追い返され、焦りとともに墜落も喫してしまつた。

また、この頃から僕たちは、それぞれの頭の中で同じことを考え始めていた。「同ルートの下降はありえない」と。そのトラバースの多さと、ここの岩や氷の脆さは、筆舌に尽くしがたい。万が一雪が降れば、ルートは雪崩の巣と化す。その氣になつて時間をかけさえすれば同ルートの下降も「理論上は」可能なのかもしれない。しかし少なくとも、僕たち自身がこの長く煩雑な下降を、冷静さを保ちながら続けられる自信は、まるでなかつた。

この頃には、東稜を下るのが最も確実な下降路なのだと、二人とも気づき始めていた。順応時、「下降でここはあり得ない」と一旦は判断したにもかかわらず。さあ、もう登り続けるしかなくなつた。

何とかチムニーを抜ける頃には、既に日は暮れて二度目の夜が訪れた。そして、期待していた平坦な場所を探し出せない。ロープをハンモック状に吊るし、そこにテントを乗せて過ごす夜。

そんな悲惨な状況でも、岡田の明るさは変わらない。それは天性の部分もあるだろうが、何よりも山のすべてを受け入れ、そこにいる自分自身の存在そのものを楽しめる感性が、こんな状況を笑ひに変える。二人の合言葉はいつだって、「俺たち最高」だ。

三日目の朝も、完璧な青空で迎えた。こうも晴天が続くと、逆にいつ嵐が訪れるのだろうかと不安になる。「世界で最も天気の良い山」「一晩で首までの雪が積もつた」。そんなフリースト、水河入りしてから三週間弱の悪天の経験が相まって、僕たちに疑心暗鬼を生じさせる。今日中に壁を抜きたい。「行けるでしょ!」とポジティブに進む次の瞬間には、「まだかよ、いい加減にしろよな。」と、覆いかぶさるヘッドウォールに悪態をつく。いくら登ろうとも、壁は決して僕たちへの手をゆるめない。アルパインクライミングで何が一番辛いかつて?五〇〜六〇度の硬い氷壁。あれほどの拷問はない。技術的な核心部は既に越えていたけれど、標高と寒気、そして一向に減らない荷物は、最後まで僕たちを苦しめる。アルパインクライミングはスポーツなんかじゃない。耐えて、忍んで、不安を抱え、ボロボロの体で上を目指す。どんなに素早く登ろうが、どんなに高いグレードが現れようが、そんなものはこのクライミングの本質をひとつも物語つてはいない。

拷問の斜面は永遠に続くと思われた。それでもついに夜十一

時、最後の危うげなセラックを縫って越え、僕たちは稜線に出た。さらに嬉しいことに、どんな吹雪が来ようとも耐えられるであろうクレパスを見つけ、そそくさとそこにもぐり込んだ。

ホツとしたのも束の間、あまりの寒さに二人の靴下がダブルブーツの中でバリバリに凍り付いていたことに気づいた。その晩、寒すぎて僕は一睡もできなかった。それでも、僕たちは未登の南壁を完璧なスタイルで登ったのだ。まだ実感は薄かったが、それは紛れもない事実だった。

しかし、物語はまだ終わらない。

四日目の朝。奇跡かと思うほどの晴天が、まだ続いていた。しかし、僕たちの疑心暗鬼もまだ続く。「すぐに悪天が訪れるに違いない」。壁は登った。ならば、「さあ早く下山するべきだ」。論理的に考えれば、結論はそうだった。それでも僕たちは足を西に向けて歩き始めた。直線距離四キロ、標高差八〇〇メートルの「ただの歩き」だけのために。そう、山頂に立ち上がった。

山頂に達する最後のコルまでに三時間以上も費やしてしまった。ラッセルと、僕たち自身の疲労は予想以上だった。ここから山頂までは、まだ標高差六六〇メートルが目の前にあった。僕たちはすでに限界に近かった。そして、「雲一つない青空」を見上げながら、天気心配をした。いや、悪名高いローガンの天気を、ただ敗退の理由に使おうとしただけなのだ、正直に言

うならば。

三十分近い議論の後、僕たちは引き返すことに決めた。口惜しさはもちろん残った。でも決めたことだ、もう何も言うまい。そう心に決めて、鈍い動きで荷物をまとめ、いざ下降に移ろうというその瞬間、僕はつい口にしてしまった。ただ一言、「あー」。その声を聞いた瞬間、堰を切ったように岡田の口から言葉が出た。「ジャンボ、やっぱり行こう。このままじゃダメだ、行くべきだ。」

その三時間後、僕たちは東峰の山頂に立っていた。それはも



ローガン東峰の頂上にて

ちろん、疲労困憊した僕たちにとってみればまさに拷問のような道りだった。ある人は、ただの歩きこの道のに何の意味があるのだ、と言うかもしれない。また別のある人は、山頂まで行きたいのならば、何故主峰まで行かなかったのか、と問うかもしれない。主峰までは、まだ更に大きなギャップを越えなければならなかった。それはある意味で、僕たち自身の限界でもあった。しかし、これ以上でも以下でもない。今いるこの山頂こそが僕たちの最終目的地なのだ。

この半日の行動が、このクライミングの価値を高めたと言いはない。しかし、「この山のすべてを受け入れよう」、そう誓ったその瞬間からすでに、僕たちの最終目的地はこの場所に定められていたのだ。そして、この大きな山懐に抱かれながら過ごした僕たち自身のために、この半日の行動と山頂を目前にした心の中の葛藤は、なくてはならなかったスパイスなのだ。

さあ、あとは安全に鳴海の待つベースキャンプまで戻るだけだ。東稜の下降は決してやさしくなかったし、疲労困憊してスノーシューもスキーも持たない僕たちにとって、三〇キロの道のりは一つの苦行だった。しかし、今は歩きさえすればよいのだ。心はこれまでにないほど晴れやかだった。

山を降りた後、僕は一人でアラスカに向かっていった。ただクライミングのことだけを考えて過ごした僕の旅は、あつという

間に十四ヶ月が経ち、日本への帰国が迫っていた。

僕は、今までずっとこう思っていた、「クライミングの世界は狭い」と。あるクライマーとまた別の場所で再会したり、話してみたら共通の知人がいるなんてザラだ。それはなにも日本国内に限った話ではない。世界を基準に考えてもそうなのだから、この世界は本当に狭い。思い返せば、実に多くのクライマーとの出会いと親切に支えられた一年だった。「パーティーに來い」、「うちに泊まれ」、「友人紹介するぜ」、「で、次どこ行くの?」、「ほう、奇遇だね、僕もだよ」、云々。そんな会話とともに日々は過ぎてゆき、お陰で旅は順調に進んだし、単純に彼らと出会い、登り、酒を飲んだ日々は財産だ。アラスカで過ごした最後の一週間、この旅で出会った何人かのクライマーと再会するたびに、様々な出来事がつい昨日のことのように思えてきた。

そして、ローガンでのクライミングを終えて気づいたことがひとつある。クライミングの世界は「狭い」かもしれない。でももっと大切なことがある。それは、すべては「つながっている」のだという事実。最後の最後まで、僕は「クライミング」という名で呼ばれるコミュニティの恩恵にあずかることができた。「二期一会」という言葉を心の底から実感する。

あの一枚の写真があったからこそ、旅の最後に最高のクライミングができた。ジャック・タックルにとつての最大のプロジェクト。それを登ろうとする門外漢の僕たちに、彼は寛大に

も多くのアドバイスを与えてくれた。そして、ローガンに挑んだ多くの先人たち、彼らの努力と同じ線上に、僕たちのクライミングがある。

この一年の間に会った、すべての山、岩、そして友人たちへの感謝として、このラインを「糸」と命名する。

※本登山は平成二十一年度後期日本山岳会海外登山基金を受けて実施された。

## 四川省 シャーチャンラー峰初登頂

吉村 千春

松島 宏

### プロローグ

写真を眺め、楽しかった日々を思い出している。

二〇〇七年、正確な日は覚えていないが、日の丸産業の河尻社長に見せて頂いた、一枚の写真が事の始まりだった。抜けるような青空に、天に突き立てたような山が映っている。一目で、行こうと思った。

よくよく聞いてみると、四川省、甘孜藏族自治州の、丹巴からそう遠くない。二十日で勝負がつく。まだまだ稼がないといけない私にとって、願ってもない魅力的な山に思えた。その年の秋は広島支部の十周年で、霸王山に登った。

遠征後、(二〇〇八年)次の山にと目標を定め、準備を進めた。

一九八三年、シャモニで知り合い、九二年の四姑娘山で一緒に苦勞した、小寺敬止さんをまず誘う。(愛媛県西条市在住)小寺

さんの後輩でパートナーの、加藤満さんも参加を希望した。ところが、数ヶ月後、父親の病状が悪化、小寺さんは大工を一時休止し、父親の介護に専念する事になった。遠征は振り出しに。翌年は、四川大地震の影響や、チベット暴動のあおりで、登山許可が出なかった。二〇一〇年、年が明け、いよいよ一人で行くかと覚悟を決めていた。

ある朝、霸王山の戦友、松島宏さんにダメもとで声をかけると、「行ってもいいよ」という返事。また数日後、佐藤建さんも写真に惹かれ参加表明。トントン拍子に登攀隊員がそろった。一時は諦めていた加藤さんも遠征が具体的にになると、「思い切って行くことにするよ」と言ってきた。これでメンバーが揃い、遠征の準備に拍車がかかる。JAC広島の主催、岳連の後援も決まり、一月二月は大山でトレーニング。お互いの実力を知る。



シャーチャンラー峰遠望

何度か私の事務所で、鍋をつつきながら、遠征の夢を語り、シャーチャンラーが皆の胸にスコンと落ちた頃、広島を出発した。

遠征はシンプル、そして短期間、そして出来るだけ安くというのが、スタイルだ。今回の世話役、成都の張兄弟は私の老友。ガスボンベや行動食、また山の麓の子供たちのお土産（文具）もリクエストして事前に購入してもらっておく。

遠征成都に着いた翌朝、山に向かって出発。登山期間は2週間。基礎体力がしっかり有れば、五〇〇〇メートル台の山はそれくらいの期間で登れる。要は、高度順化をうまくこなす事、特に初期の行動が肝要。焦らず、のんびり、ゆっくりと動き、ストレスを貯めない。馬鹿話やY談で盛り上げよう。ダイアモックス（半錠）を成都から朝、晩と飲み、順応出来たら、アタックに出かけよう。きつと上手く行くはずだ。後は天気次第。

「大きく崩れる事は無いようです」という宮田先生の出国前のお話に正直勇気付けられた。

四月二十六日、最終の部落、ダンリン村に到着。翌日、ヤクに荷をつけ、BCを目指す。峠に着くと、憧れ続けたあのピークが、写真と同じように突立っている。いつもの登高欲がフツフツと湧いてくる。やはりお山はカッコ良くないとね。美しいルートからそのピークに立ちたい。その為にはどんな苦労もい

とわれない。ただそれだけの事。こんな海外のアドベンチャーに心惹かれ、早や三十年近くになる。Life is too short. Adventure for my best life.

ベース傍ら、湖面に浮かぶシャーチャンラー山群。雪面には狼の足跡。そして、夜には満天の星空。ゆったりとした時間。私たちの為に腕を振るってくれる調理人、シヨウさん。安全登山の為に、お世話をしてくれる連絡管、パンさん。また、ヤクを操り、荷物を運んでくれたシャーチャンラーBoys（地元青年）。ダンリン村では、村長（旧）のムーゾンさん一家の方々に世話になる。

私たちのささやかな冒険の為に、心よく動いてくれる人達がいる。皆さんに心から感謝の言葉を送ろう。

#### 頂上アタック

五月二日、頂上アタックはスピード重視、二隊に分かれる。吉村隊は、北稜のコル、北稜に登るもの。松島隊は北東壁のルンゼを登り、喉（狭くなった箇所）を越した辺りから、壁に取り付き、直接ピークを狙う。

緊張した出発の朝を迎え、四人の気持ちは、シャーチャンラーへと昇華していく。私たちは、複雑な稜線でしかも不安定な岩にてこずり、あつと言う間に時間が経っていった。六〇メートルザイルで十五ピッチ位登って来ただろうか。行く手を大きなピークが立ちふさがる。



シャーチャンラー峰の登山ルート

その頃、松島隊と初めて無線が通じ、松島さんが頂上（Ⅰ峰）に登った事を知る。無事だったことに胸を撫で下ろし、隊の成功を心から喜ぶ。そして私達の行く手のピークが頂稜の一角、Ⅲ峰とわかり、闘志が湧く。その後、松島隊も、Ⅱ峰・Ⅲ峰のコルへ下降を開始した。焦る気持ちを抑え、確実に雪壁をトラバースし、我々もコルに降り立つ。時計は既に四時を回っている。

相棒の了解を得て、私たちの登攀をここで打ち切る。（Ⅲ峰の数メートル下で記念撮影をした）

頂上のⅠ峰まであと2ピッチ、高度差にして四〇〜五〇メートルであろうが、松島隊を待たすわけにはいかない。

早くそして安全にアタックキャンプに帰りつく事が隊長としての責務。六〇メートルザイル二本での懸垂下降。恐ろしい雷が間近にとどろき、暗闇の中、なんとか北東壁の急なルンゼを降りる事が出来た。後は、慎重に後ろ向きで下ってゆく。

連続十五時間の行動。アタックキャンプに帰り、長い緊張か

## Ⅰ峰登頂

### 一目惚れ

二〇〇七年に霸王山に登ってから丸二年、忙しさに翻弄され

ら解き放たれた。

三日、パンさんとショウウさん、そしておいしいワインが僕たちを待っているはずだ。ふらふらするが、元気を絞り出して降りて行こう。

### エピソード

今回、もう一人、お世話を頂いた人を紹介したい。大川健三さん。

若いころより山岳写真の愛好家で、NEC（技術者）を退職後、丹巴美女と結婚。七歳の一人息子と共に丹巴で暮らす。夏は四姑娘山の環境保護の傍ら、四川省の山岳地帯の風物誌を撮影。座右の銘…人生は感動の旅路。

私も九〇年からの三年間、同じ四姑娘山に情熱を注ぎ、運よく南壁の初登攀を勝ち取る事が出来た。その後、横断山脈研究会にお互い入会し、この山域の情報を送って頂いていた。

憧れだった大川さんに丹巴で初めてお会い出来、そして心より歓迎された事は、私にとって正に「感動の旅路」となった。

ているときに吉村さんに誘われた。「松島さん、シャーチャンラに登りませんか？」見せられた写真は古い友人の河尻清さんが撮ったもの。河尻さんの息子とは二十数年前の鳥取国体で監督・選手の関係で優勝した仲である。その写真の山は見た途端

に一目惚れした。マッターホルンのようにとがった美しい秀峰であった。因縁めいたものを感じ、何とか行くことにした。そのうち九八年に岳連隊で天山山脈と一緒に行った佐藤建が参加を表明した。サトケンは当時ハンテングリ七〇一〇メートルには登ったものの、高所順応に失敗し、高所登山を封印していた。彼の復活は個人的に嬉しく、なんとか一緒に頂上に立ちたいと思った。吉村さんとは霸王山と一緒に初登頂し気心は知れてい

る。吉村さんの四国伊予西条の友人加藤満さんも大山で一緒に登り、実力もあり、楽しいあちちゃんであることを確認した。かくしてシャーチャンラ登山隊が結成された。松島・吉村・佐藤はJAC、名越さんに相談すると霸王山と同じ中国四川省でもあるし、「JAC隊でいいんじゃない」支部長ほかの承認をいただいた。多くのカンパもいただいた。登山は元々プライベートな遊びであるので気心の知れた好きな奴と登りたい。加藤さんにはJACに入会をお願いした。これで準備が整った。感謝。

## 速攻

四月二十四日に広島を出発し四日目には四三五〇メートルのベースキャンプに到達した。今回は短期速攻、二週間で決着をつけるアルパインスタイルである。高所順応の失敗は許されない。今まで使ったことのない高山病予防薬のダイアモックスを

使用した。この薬は元々緑内障の治療薬で利尿効果があり、眼圧を下げる薬だ。なぜかその緩やかな利尿効果が高山病の初期症状の頭痛や食欲不振、平衡感覚の麻痺を緩和してくれるらしい。チョモランマで亡くなられた福山の太田祥子先生にも薦められたことがあった。三五〇〇メートルのダンリンの村から朝夕半錠ずつ呑むことにした。

五日目、写真で見た北東稜の裏に回りこみ北東壁の下五〇二〇メートルにアタックキャンプを決定した。東壁は垂直であるが北東壁は少し傾斜が緩くなるとかなりそうな予感がした。六日目、休養。七日目、悪天候で休養。二日間の休養で脈拍も六〇を切るまでに落ち着いた。いよいよアタック体制が整った。

## アタック

八日目の五月一日、何とか晴れて、アタックキャンプ入りする。スノーシューが大活躍である。高まる期待感と緊張感が久々で心地よい。サトケンもかなり緊張してきたみたいだ。十一年前の天山では隊長の自分が一番登りたくて興奮していて隊員の様子なんか見ていなかった。今回はサトケンの様子も冷静に見ている。サトケンは気力も体調も大丈夫だ。偵察の時にすでにルートは決めていた。隊としては初登頂することを優先し、易しそうな北稜ルートと決めていた。私は吉村隊長にお願い

し、ダイレクトルート、つまりアタックキャンプから北東壁の雪のルンゼを直上し、頂上に続く岩稜を左上する。それが私の理想のラインだ。岩登りが得意で順応も上手くいつているサトケンを誘うと快諾。アタックは吉村隊長・満兄（マンニイ）の北稜隊、松島副隊長・サトケンの北東壁直上隊に分かれてのアタックとした。下山は一緒だ。

九日目の五月二日、朝四時起床、六時出発。四人とも緊張はしているものの元気に出発。ここからは当日の日記

### サトケン復活、大活躍！

松島・佐藤は北東壁、吉村・加藤は北稜へ向かう。松島先頭でラッセルし雪の斜面を登り始める。雪の斜面は意外と柔らかく膝までのラッセルだ。疲れる。傾斜が段々急になりルンゼ状に狭くなった「喉」に近づく。雪は徐々に締まり、キックステップとなる。喉は三メートル程垂直となり岩が狭まった場所である。松島、なんとかフリーで抜けようと悪戦苦闘するも、失敗。観念してロープを出す。しっかりした支点は作れないが、頭上に大きなサイズのカムをきめて突破。雪壁はほとんど急になるが確実な支点が取れないのと、落ちるときは一人で！という考えで、ロープなしでどんどん登る。これがアルパインスタイルだ。四時間程度頑張り、ルンゼの終了点に到達、岩がジャンク



北東壁の登攀ルート

シヨン状になつた場所、標高五三五〇メートル。目の前にⅡ峰とⅢ峰のコルが見える（ジャンクシヨンから一五〇メートル）

我々はここから頂上まで岩稜を辿ることに決めていた。一ピッチ目、サトケンがリードする。アイゼンは外し、登つていく。約一時間かけ六〇メートルのロープいっぱいルートが延びた。落石・浮石のオンパレードで時間がかかる。サトケンは久々のアルパインクライミング。アルパインのリードは怖い。フォーローしてみると、これでもかというくらいプロテクションを上手にとりまくっている。さぞかし、ロープが重かつただろうと笑ってしまう。でも上手に工夫して支点を作っている。二ピッチ目、松島がトップに代わり支点は省略しまくり三つか四つの支点で五〇メートル程度ルートが延びる。三十分。支点が少なくランナウト状態であるが落ちない自信があれば時間が短縮できる。サトケンは私の落とした落石で鼻の横から出血。ヘルメットにも食らつたらしく。頭がクラクラすると嘆いている。落石で死ななかつたことに感謝。三ピッチ目、サトケンがトップでリード、遅々として進まない。松島、夜のビバークがチラつき始め焦りが募る。下から「急げ！急げ！」と怒鳴り散らしているのだが、どうやら聞こえていないようだ。一時間位たち岩場に雪が混ざり始めたようアイゼンを付けると言う声が聞こえる。もう三十分かり松島が続く。登ってみると三級

程度の階段状のルンゼ状岩壁。雪が混ざつたので敬遠しようだが傾斜のかなりきついカンテ状の岩稜にルートが伸びる。わたし的には「勘弁してよー」の世界であるが、サトケン六〇メートルいっぱいルートを伸ばしてくれた。感謝

### 初登頂！

四ピッチ目、松島がリードを始める。目の前の岩から雲が流れ、たなびき、頂上が近いことを感じる。一〇メートル登つて、視界が開け目の前に頂上らしき雪のピークが現れる。頂上に間違いなくと確信したとき、喜びが溢れ出してきた。思わず、下で確保するサトケンに向かってガッツポーズをとり、嬉しさの余り「ウオー！」と絶叫する。頂上に着いたのが二時四十分。サトケンもかなり疲労しているみたいで時間がかかる。三時二十分サトケン到着。頂上は地元の人々に敬意を表して踏まなかつた。一メートル下で記念撮影。前回の霸王山ではJAC旗がなく岳連旗で記念撮影したら、怒られた。（笑）今回はかわいい日章旗とJAC旗でパーフェクトだ。初登頂を味わっていると突然吉村隊長の声が無線が入ってくる。かなり下である。初登頂を報告した。喜んでくれた。そのうち十五時三十分、Ⅲ峰の肩に吉村さんが現れる。吉村隊は十六時、Ⅲ峰到着。しかし、時間切れである。十六時半下山を開始する。下りは吉村隊が登ってきた北稜を予定していたが、かなり悪いので松島隊の雪

壁を下ることにした。最初六〇メートルの懸垂下降二ピッチ。ロープ回収に手間取り、二時間かかりジャンクションへ。暗くなり大粒の雪が激しく降り始める。落雷の音に怯えながら喉の通過も懸垂下降。午後八時四十分全員疲労困憊でアタックキャンプに転がりこむ。ピバークは避けられたが、十五時間の行動はダメージが大きく、疲れすぎて食べることができなかつた。翌日の朝も食べる気がせず、水分摂取のみでBCに這うように帰還した。今回の遠征はどんぴしゃりの完全試合。パーフェクトだった。理想的な遠征となつた。力がついたのであるかもしれない。ただの幸運にしても。山の神に感謝。支えていただいた皆様  
様に感謝。

(松島 宏)

## 西ネパール チャンラ峰初登頂

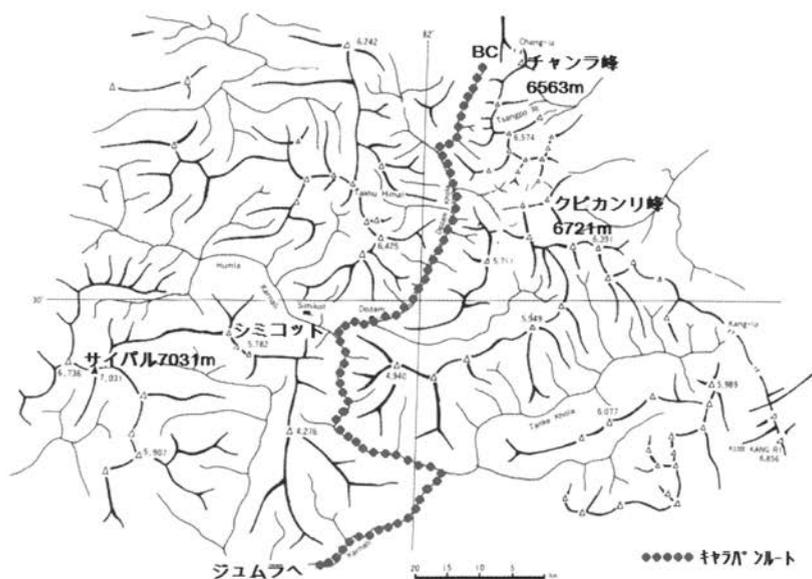
小林 博史

学生だけでヒマラヤに登る。これがこの登山隊を結成した一番の理由でした。二〇〇九年夏頃からヒマラヤに興味のある学生を集め、勉強会を開きました。登山隊があまり入っていない地域で、六〇〇〇<sup>ポ</sup>クラスの未踏峰で、学生だけの技術での登頂が可能な山はないか。そこで見つけたのがチャンラ峰（六五六三<sup>ポ</sup>）でした。二〇一〇年夏の出発を目指し登山隊を結成しました。当初は京都をはじめ関西の大学からメンバーを集め、合同登山隊で行う予定でしたが、日程の都合上、残ったのが同志社の学生だけになりました。たった四人で本当に行けるのだろうかという不安もありましたが、四人の強い意志から、同志社隊という形で登山隊を再結成しました。

隊員は同志社大学山岳部の現役学生四人。二〇〇九年に日本山岳会学生部バンポチエ登山隊に参加し、クライミングを得意

とする中務成哉（四回生）。大学二回生から山を始め、たったの一年半でヒマラヤに挑戦できるほど急成長した努力家の山口尚紀（四回生）。高校山岳部出身でヒマラヤを志し大学山岳部に入部した柴山雄太（三回生）。そして私、小林博史（四回生）が隊長となり同志社大学山岳会、日本山岳会京都支部の元、登山隊派遣が決定しました。

チャンラ峰は西ネパールのフムラ郡、チベットとの国境稜線上に位置し、アプローチはシミコットからドザムコーラを遡りチャンラ（峠）に至るルートを進みます。シミコットには空港がありますが、全天候型ではないためモンスーン期は飛行機が全く飛びません。車でアプローチ可能なジウムラから十日かけてシミコットへ、そしてさらに五日かけてドザムコーラを遡りBCに至る合計十五日間のキャラバンです。BCはドザムコー



チャンラ峰周辺概念図

ラ上流の標高約五〇〇〇メートルに設営し、そこからチャンラ峰南西面のルンゼを登攀し国境稜線に至り、稜線を登り頂上に至るルートを計画しました。

八月十日、日本を出発しバンコク経由でカトマンズに到着。隊荷整理、食料買い出し、観光庁でのフリーフィングを済ませ、八月十六日にチャーターバスでカトマンズを後にしました。メンバーは隊員四名とサーダー一名、ガイド一名、コック一名、キッチンポーター三名の合計十名です。このメンバーが登山期間中共にする心強い仲間となりました。ガイドを多く雇用した背景には、チャンラ峰の登山許可を取得するためにネパール人ガイドを三人以上雇用することが義務付けられていたためです。

カトマンズを出発し、インドとの国境に近い南部の平原（タライ）をバスで一路西へ向かいます。ジユムラまで本当に道路が通れるかどうか不確定だったので、我々本隊の出発前にガイド一名とキッチンポーター一名を四日ほど前に先発隊として派遣していました。もしバスが通れなかった場合、現地でポーターを集めておいてもらうためです。案の定、道路はジユムラのはるか手前で土砂崩れにより寸断されており、四日かけてジユムラに向けて歩くことになりました。ケリケジュラという村でバスと別れ、ポーター二十五人を集めた先発隊のガイドと合流しました。不確定要素とトラブルが絶えない西ネパールの

キャラバンと聞いていたのが現実のものとなり、不安と同時に「これこそキャラバンや！」と必ずBCに辿りついてやるという強い意気込みが溢れてきました。

このあたりのポーターは登山隊のポーター経験がほとんどなく、中には女性や子供もいました。そのため交渉が難航し、大変苦労しました。彼らにとって現金収入は貴重で、少しでも多く稼ぎたいという思いから毎日、時には日に何度も賃上げを要求してきました。少しでも早くジユムラに着きたい我々と、できるだけ日数をかけて日当をたくさんもらいたいというポーター達との間で意見が分かれ、夜は明日とこまで進むのかの交渉で、遅くまで話し合いました。

八月二十一日、なんとか予定通りの日程でジユムラに辿りつくことができました。世話を焼かせたポーター達を解雇し、ジユムラからはロバを雇いキャラバンを進めることにしました。ロバは人間より多くの荷物を運ぶことができるためコストパフォーマンスがよく、何より文句を言わないことが一番ありがたいことです。ジユムラの村をゆっくり観光する暇もなく、ポーター費の精算や食料買い出しに追われ、二日の滞在でジユムラを後にしました。

八月二十三日、十九頭のロバと馬方三名、卵など壊れやすいものを背負うポーター二名を雇用し、ジユムラを出発しました。ここから十五日かけてBCへ向かいます。ロバを雇用したので

トラブルが無くなった！とはもちろんなりません。今度はキャラバンで通過する村の人達と交渉しなければならないのです。

具体的に宿泊地（テント場）代、ロバの草代、通行料の請求に対しての交渉です。言われるがままを出しては到底隊費が足りません。貧乏登山隊である我々は、「日本人〓億万長者」という彼らの期待には到底答えられないのです。計画段階では村の学校のグラウンドにテントを張らせてもらい、先生と交渉し、学校への寄付という形でテント場代を支払うことを考えていました。先生とであれば、英語で交渉が可能で、かつある程度論理的な交渉ができ、スムーズに運ぶことができます。しかし、学校がそうたくさんあるわけでもなく、キャラバンの進行上とうまくかみ合わない場合がほとんどでした。そのため村外れの空き地にテントを張ることになったのです。夜になると村の人たちが我々のテント場に集まり、費用の請求が始まります。キャラバン中はほぼ毎晩こういったことが続きました。領収書を発行するきちんとした村もあれば、その土地が誰のものが定まっておらず、村人どうして喧嘩が始まる村もありました。

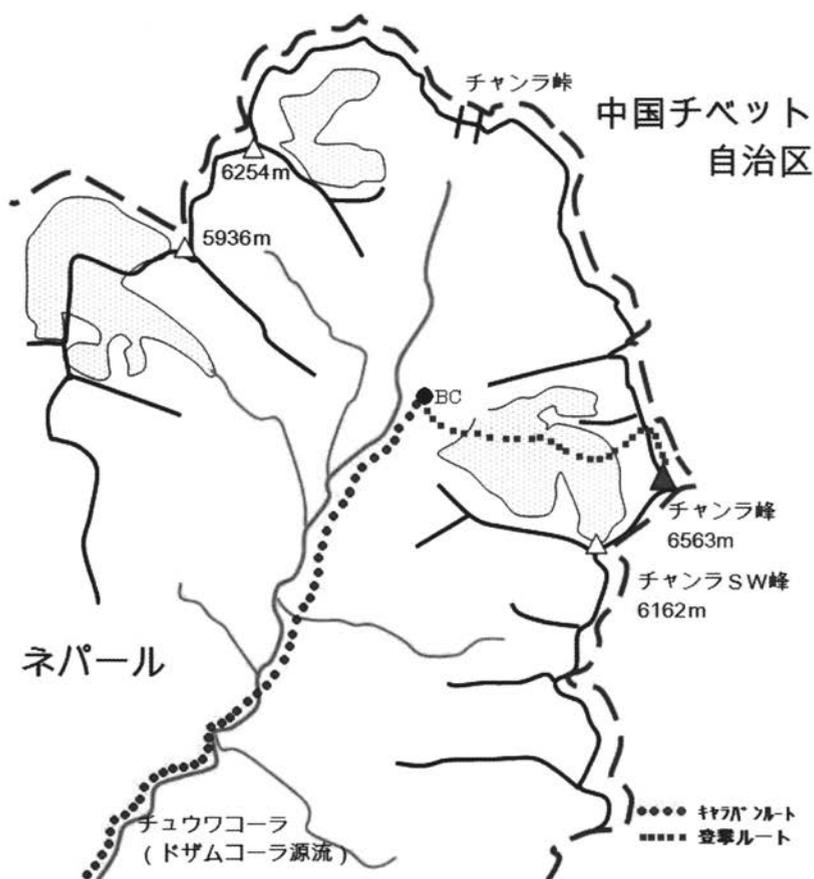
村人との交渉以外にも、頭を悩ませることがありました。キャラバン中、隊は深刻な食料不足に陥っていました。隊荷重量を均一に保ち、キャラバンコストを下げる目的で、野菜や肉などの生鮮食品はキャラバン中の村々で随時補充しながら進む計画でした。しかし、予想に反し、どの村も野菜がほとんどな

く、肉に至ってはキャラバン中一度しか購入することができませんでした。毎日缶詰を食べる生活が続きました。

トラブルの絶えないキャラバンでしたが、良いスタッフに恵まれ、計画より一日オーバの九月六日に無事ベースキャンプに辿りつくことができました。ベースキャンプに着いた時は、あまりの達成感にチャンラに登りに来たことを忘れてしまうほどでした。

ベースキャンプは当初予定していた標高五〇〇〇メートルには到達することができず、二キロほど手前の標高四七〇〇メートル付近に設営することになりました。馬方達がこれ以上は口バ食べる草が生えていながらと言って帰ってしまったからです。

とりあえずチャンラを見ないことには始まらない。九月十一日。高度順応も兼ねて、当初予定していた五〇〇〇メートルの地点（チャンラ南西面がよく見える所）にTC1を建設し、偵察及び基部までのルート工作を進めました。登攀予定のルンゼに近づくこと、十一年前大阪山の会が試登した時の写真に比べ、氷河が後退し、地面が露出しており、そのルンゼは土砂が積み重なった状態で、登るにはリスクが高い（アンカーが取れない、落石が多い）と判断し、チャンラバスより周りこんで登る第2案の作戦に変更しました。TC1を撤収し、そのまま、チベツト国境よりのチャンラバス付近にC1（五二〇〇m）を建設し、



ドザム・コーラ周辺概念図

一旦BCに戻りました。

九月十五日。予定では十六日に再度、荷揚げ、ルート工作のためにC1入りを考えていましたが、悪天候が続いたため、しばらくBCで沈むことになりました。昼は雨、夜は雪と、降水がひたすら続きました。

九月二十一日。天気がようやく回復し、活動を再開しました。

約八日分の食料、装備を背負いC1に入り、C1をさらに高い国境稜線上の標高五五〇〇メートルまで上げて、ここからC2に向けての荷揚げを行いました。C1からC2にかけてはいよいよ未踏の水河の上を歩きます。クレバスも少なく非常に安定した水河ですが、人類が誰も踏み入れたことのない水河であり、胸は高鳴ります。二十二日にC2(六〇九〇m)まで到達し、装備をデポ。二十三日は強風のため、C1にてステイ。この晩強風でテントが破れ、翌日二十四日に予備テントをBCに取りに帰ることになりました。二十六日にキャンブアップをし、C2泊。六〇〇メートルを越えると一気に高度障害が出てきます。降雪直後のラッセルで十メートルほど進むだけで息が切れます。テントを張るのも一苦勞。食事も睡眠もままならないまま登頂の日を迎えました。

二十七日午前四時にC2を出発。国境稜線上の懸垂氷河地帯を六〇m×六ピッチで通過。予想より積雪が少なかったため、雪壁は比較的安定しており、アックスとアイゼンを利かせなが

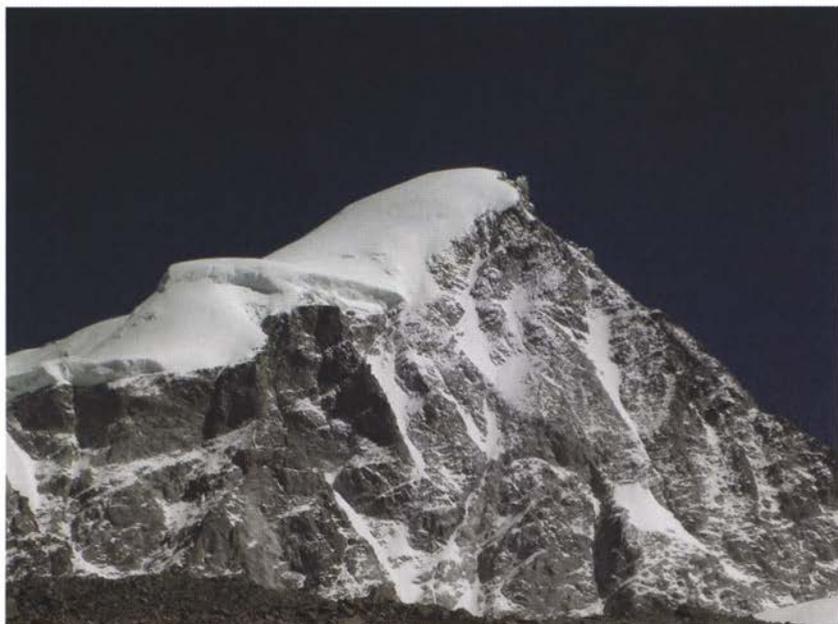
ら慎重に登っていきました。懸垂氷河を越えると、なだらかな尾根上に乗る、頂上に向けて登ります。十一時四十三分快晴の頂上にメンバー全員が立つことができました。チャンラに登った時の気持ちよさは高度障害を吹き飛ばし、もうそれは言葉にできるものではありません。メンバー全員柄にもあわず涙しました。

快晴で、気温も上昇していたため、懸垂氷河の下降は雪崩の危険があると判断し、北東に伸びるならかな尾根を下降することに決め、下降を開始。この尾根がとてつもなく長く、また下降地点から氷河を登り返さないといけなく、C2に帰還したのは夜の二十三時半でした。

翌日二十八日にC2を撤収し、二十九日に全員無事BCに帰還し、登山活動が終了しました。

今回我々は、未踏峰チャンラ峰の全員登頂を果たし、事故や大きな怪我をすることもなく全員無事に帰国することができました。また同時にヒマラヤ登山という壮大なプロジェクトの難さ貴重さを改めて痛感することができたように思います。個人として、隊として反省し、改善すべき多くの課題を与えてくれました。

私は今回の登山で、登頂することよりも、プロの登山家や社会人の手を借りず、学生だけでヒマラヤにチャレンジすること自体に意義を見出していました。登山技術、社会経験が未熟な



チャンラ峰の全景

(大阪山の会提供)



9月27日 4人全員で頂上に立つ

学生が、自分たちの持っている力を最大限に活用し、それをヒマラヤにぶつけて一体どこまで通用するのかを確かめてみたかったのです。学生だけで隊を組み、入山者の少ない地域を選び、普段は現地のエージェンツ任せにすることを自分たちで行いました。登頂を目的とした登山隊としては非効率な形ですが、始めからスマートな手段をとってしまおうと成長しません。立ちはだかる問題を解決し、時には諦めるといふ判断を下し、前進することは苦勞の連続です。しかし、それらを克服することにより自らを成長させ、同時になものにも替えがたい喜びを手に入れることなのです。登山隊結成までの道のり、カトマンズからBCまでの道のり、BCからピークまでの道のりは、性質は違えどどれも困難な道でした。登頂成功という事実は大きな成果ですが、たとえ登頂できなかつたとしても、今回の登山隊は私にとって非常に有意義なものであつたと自負しています。

一学生だけでヒマラヤに登るといふ無茶を聞き入れ、暖かく支援して下さつた多くの皆様に厚く御礼申し上げます。今後とも学生登山のさらなる活性化を目指し、活動していきたいと考えています。

隊員…日本人四名 ネパール人六名

隊長 渉外・食料 小林博史(22) 同志社大学政策学

部四回生  
隊員 装備・通信 山口尚紀(21) 同志社大学商学部

部四回生  
隊員 医療・ウェブ 中務成哉(21) 同志社大学社会学部

部四回生  
隊員 会計・広報 柴山雄太(21) 同志社大学法学部

三回生

現地スタッフ サーダー一名 コック一名 ガイド一名  
キッチンポーター三名

行動概要…

8月10日 関西空港↓(TGナイトフライト) ↓カトマンズ着  
8月11日～15日 登山隊準備期間(打ち合わせ、装備梱包、食

料買い出し等)

8月16日 カトマンズ出発↓(チャーターバス) ↓クリシュラ

8月16日 クリシュラよりポーター25名を雇いジユムラへ

8月21日 ジユムラ着

8月23日 ジユムラよりBCへ向けてキャラバン出発

9月6日 ベースキャンプ着

9月11日 5000m地点にTC1

9月15日～20日 BC停滞

9月21日 C1入り

9月26日 C2入り  
9月27日 チャンラ峰全員登頂  
9月28日 C2撤収  
9月29日 BC帰着  
10月2日 BC出発  
10月4日 シミコット着  
10月5日 シミコット(空路) スルケット(夜行バス)  
10月6日 カトマンズ着

※本登山は平成二十二年度日本山岳会海外登山基金を受けて実施された。

## 四川省 チヨンライ 邛崃山系 野人峰初登頂

北東リッジ經由ルート 源頭部 二〇一〇年九月の記録

ディラン ジョンソン (Dylan Johnson)

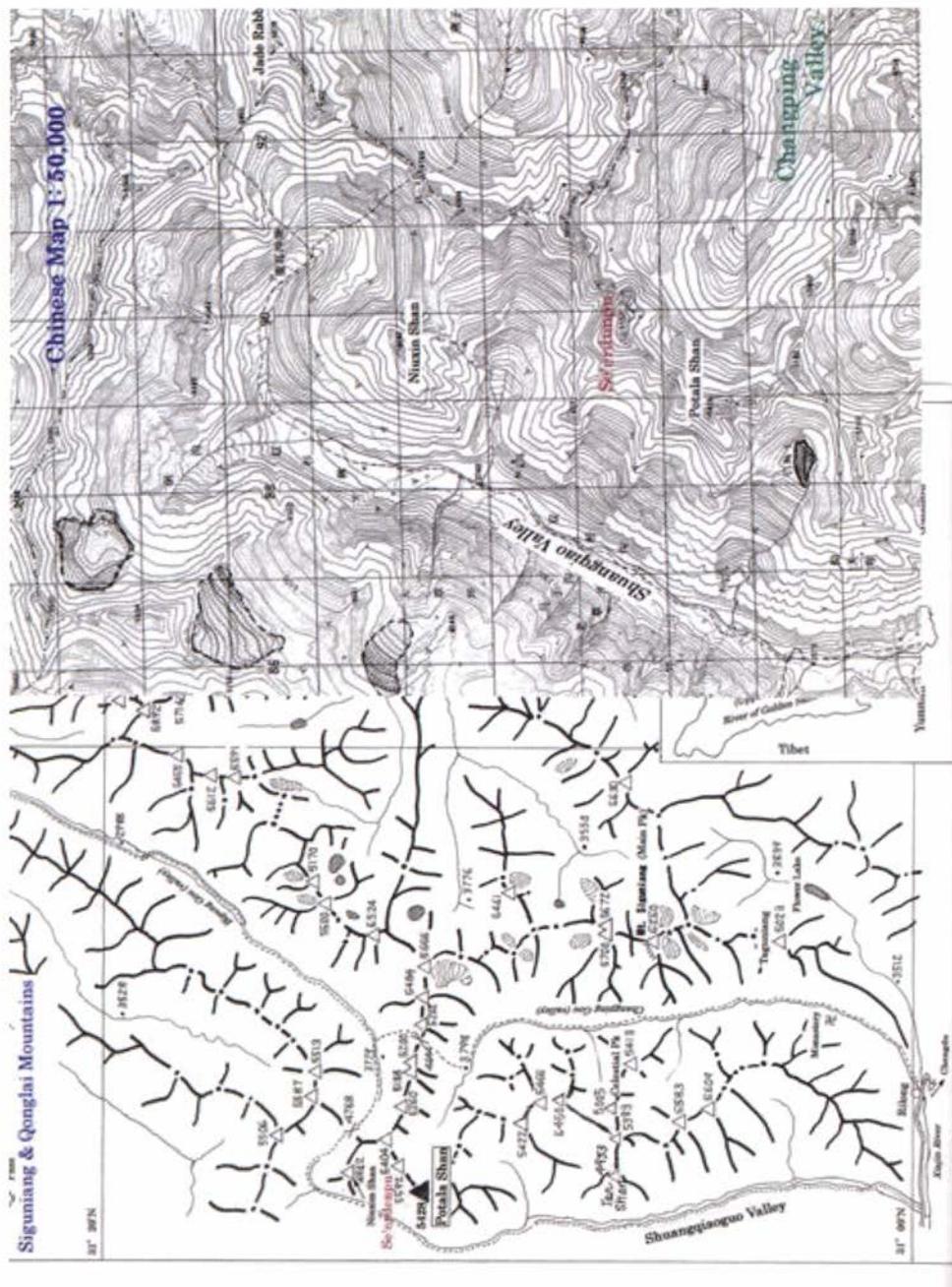
二森 茂充 訳

アメリカン・アルパインクラブ (AAC) から授与されたマックススタンプ賞とライマンスピッツァー賞を資金にして、チャッド・ケロッグ (Chad Kellogg) と私 (Dylan Johnson) は

中国四川省の未登峰、野人峰 (Se'erdempu) に遠征し三度の試登の後九月十三日に登頂した。このピークは二つの河川の水源部の上に位置している。チャンピン (Changping) 川は南東側に流れ出し、シヤンキオ (Shuangqiao) 川は北西側のフランケを下だつて流れ降る。一六〇〇メートルの花崗岩の壁から北と西のフェイスは近づき易そうながみた目で分かる。舗装道路を走る路線バスの便があり、ペースまではバスを降りてから二時間程度の歩きで誰でも行ける。そこからやや離れた場所の

南や西のフェイスは二二〇〇メートルほどの高度のアルパインスタイルでこなせる大きな壁や混合スタイルになりそうに入り組んだ地形で成り立っている。

チャッドと私は二〇〇八年、スークーニヤン (四姑娘) 山群に登頂した後この山の北フェイスへの偵察行をしたが、その時からこの偶像のような花崗岩のピークにいつか登ってみたいと考えていた。直訳すれば「イエティ」とか「野蛮人のピーク」といわれるこの山はで北側から見ると「野蛮人」の頭部と顔に格好がそっくりなのだ。私たちの当初の計画は、その目立った一五〇〇メートルあるイエティの鼻を登攀することだった。こ



チョンライ山系概念図と 1:50000 地形図

の十年の数多くの遠征経験から、威圧するような山容と簡単にアクセスできることがこの地域にどこか魅力を感じていた。到着してすぐこの八月と九月だけで二隊が入山して試登したことを知った。最初に着いたチームは日本からで、私たちが来る一週間前に落石に遭い救助された。

行動予定では九月中旬まで四姑娘山群に近いチャンピン溪谷あたりで高度馴化をしておこうと考えていたので、すぐに野人峰の東面の下の谷の上部に前進ベースキャンプの設営のため出かけた。そうこうしていると、ポーランドチームがすでに北フェイスの基部に到達したことを私たちのリエゾンオフィサーが教えてくれた。置き去りにされた日本隊のテントは鼻までの三分の一の道のりの場所に残されていた。九月の第一週に嵐が吹き荒れ、この秋の初雪が山々を覆ったのだ。北フェイスの上に積もった新雪を見て、私たちは東フェイスの入り組んだ地形を目標に集中することに奮い立った。いろいろ話し合った後、北東リッジに沿って歩を進め始めた。最初の試みで二五〇メートルほどをS10級のフリークライミングで行けるしつかりした花崗岩の岩登りルートを見つけた。暗くなったので難所のスラブに固定ロープを残してハイキャンプにとつて返し、夜明け前の出発に合わせ起床時間のアラームをセットした。天候は夜を通して悪く、午前四時には一五センチほどの雪が積もっていた。

四日後、怪しげな天気の中にベースに戻った。しかし他にすべきことがなければ、さらに高度を稼ぎ、順応しておこうという気持ちに駆り立てられた。私たちは北東リッジの高度を着実に稼ぎ、チャッドのリードで難度M5級程度までの雪とミックス登攀で行けそうなまっすぐなルートを隠れたガリーの中に見つけて喜び勇んだ。天気も悪く、ありもしないものが見えるような悪い視界だったが、私たちは上へと登って行った。五二〇〇メートル地点で小さなコルになりガリーは終わり、たくさんの入り組んだジャンダルムがさらに上の山をガードしていた。薄暗い日光の中、私は乾いた薄いクラックの険しいジャンダルムをリードして行った。雪を払って登攀道具を探っていたとき、強風のため道具が衣服を切り裂き、初めてアルプスの鞭のように背中であざった。少し身震いがして尻込みし、ピバーク道具も持って来なかったこともあり、明日の朝またトライすることに決めた。翌朝の明け方まで新雪が降り続き、朝起きて二〇センチほどの積雪があることに気がついた。再び食料と燃料をデポしてベースキャンプへ早々に滑るようにつった。

ベースキャンプで一日休養したあと、見通しの読みにくい天気予報の中、妻のジェンナが電話をしてきた。私たちは荷物のキツトを詰め直して午後一時半沼地や起伏のある八キロのベースへ



野人峰東壁 ルートは右のスカイライン



野人峰 源頭部、ルートをトラバースするC. グロック

の道を登って行つた。峡谷の最上部に着いたが、また急な風に襲われて途中で撤退するリスクを避けるべく、ベストの戦略はペー  
スに着いたらすぐに登攀を始めることだと意見が一致した。ハ  
イキャンブで急いでお茶を飲んで休んだ後、午後十一時半に登路  
についた。Ⅲ級難度のスラブは雪が溶けて流れていたので私  
はヘッドランプを頼りにA2級のクライムを強いられた。2  
ピッチ目の一角にロープを固定して残しておいたが、前の嵐の影  
響でロープが信頼できるかどうか気になっていたので、固定ロー  
プの「ロープマン」に守られながら濡れてゆるんだ雪のピッチを  
ほとんどフリークライムで登った。夜明けにハイポイントに到  
達するまで、残りの岩壁や雪と岩のあるガリーを登っている間  
ずっと月もなくチベットの天空は星で埋まっていた。

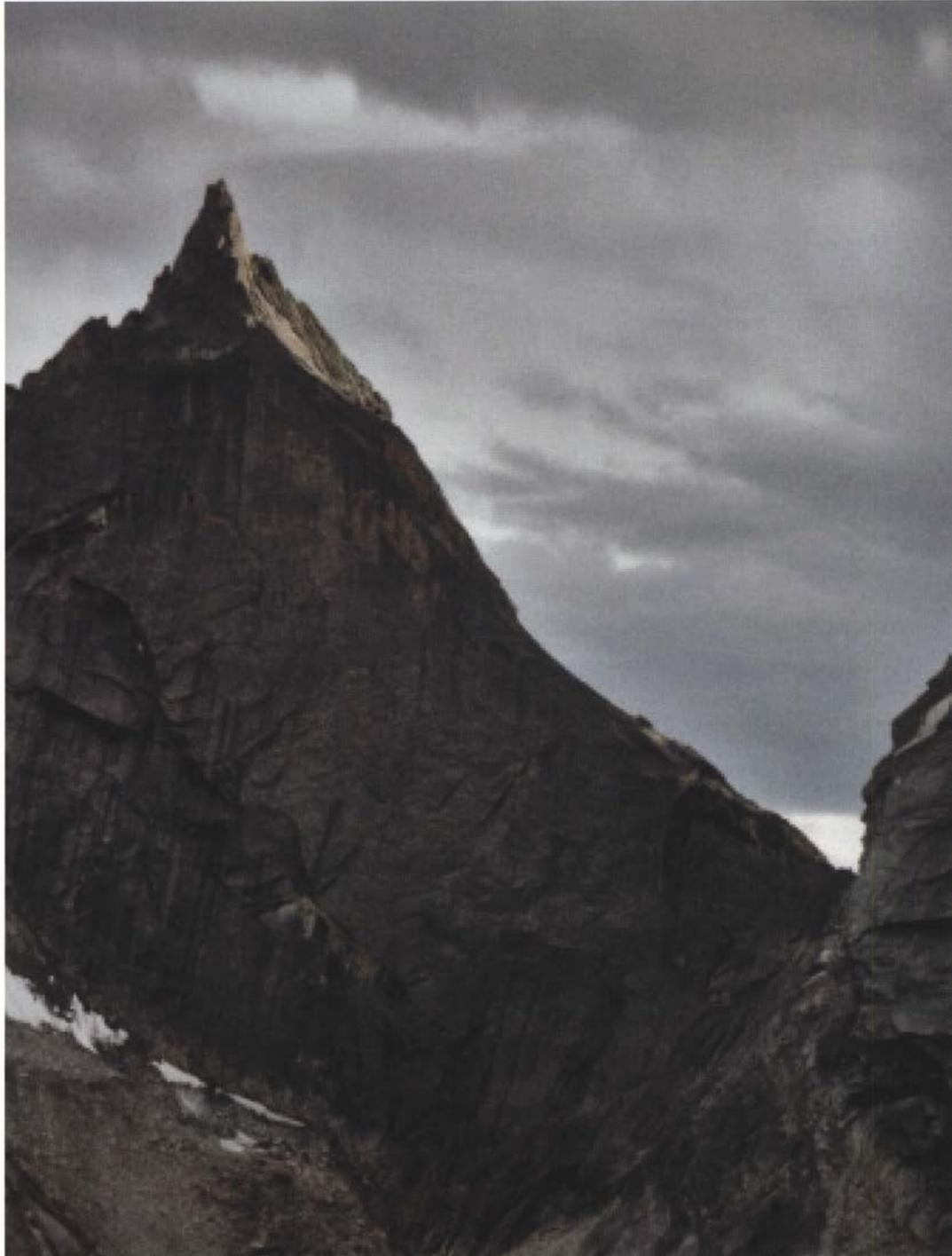
朝食の後私たちはジャンダルムの下部を左側にトラバースを  
試みた、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ級の困難な水平な4ピッチをこなし上部の山  
の同時登行できる地形の場所に到達した。天気は持つてくれた  
ので三〇〇メートルの登りで頂上へのリッジに一気に到達し  
た。頂上リッジには見事な雪尻があり、大きな鷲が下に飛ぶの  
を見ながら気持ちのいいミックスクライムを楽しんだ。

午後二時半に頂上に着いて比べようもない壮大な全山の景色  
を眺め楽しむ。初めて複雑なチョンライ（印嶽）山系全体の地

形を頭に刻むことができた。この地域の山ではこれが私の3度  
目の登頂、チャットにとっては何度目だ。下りは比較的にス  
ムーズだったが、戻りのトラバースは難しく、振り子をしたり、  
斜かにルートをとったりして切り抜けた。二か所のコアの難  
所で苦しめられ、最後のところで雪のフレークをかぶりながら  
オーバーハングのアップザイレンをしたときロープは惨めにも  
スタックしてしまった。回収しようと懸命の努力をしたにもか  
かわらず、失敗し残念ながら残して来た。ハイキャンブには午  
後十一時半に到着、出発してから三十四時間経っていた。

私たちはこのルートを「源頭部」と名付けた。それは水分地  
勢学からみても明らかにこの地域の「水源部」であり、「イエ  
テイ」の名前のしるしとしてもふさわしい。そして氷河の後退  
がこの下流に広がっている人口過密な中国の低地への脅威とな  
りつつあることへの警告していることも納得できた。

数日後私たちはジョン・ディッキー (John Dickey) を伴って  
野人峰に近い、素晴らしい花崗岩で出来た五〇八六メートルの  
高峰にもう少しで初登頂出来るところまで行った。不運なこと  
に暗い夜の中、全くの六〇〇メートルのクラシックフリークラ  
イミングを敢行したが、ボルトキットもなく手の打ちようがな  
い険しいアレートの登攀を強いられ、頂上の手前二五メートル



5086 m峰東壁 正面のリッジを登り頂上の下25 mまで達した

のところから引き揚げた。下る途中の残った唯一のリードライ  
ンも失った。

チャッドと私はベースキャンプをたたみ、ピークの麓のリー  
ロン（日隆 Ridge）に戻ったところ、ポーランド隊が北壁で落  
石にやられ成都の病院にいることを知った。彼らは手を骨折し  
てはいるが無事ようだ。一方とって代わった中国隊は北壁の  
鼻のルートから出発していた。私たちは窓越しに天気を見て、  
登れる見通しはなくなったものと落胆した。ロープも失くし、  
問題が山積して勝ち目はなさそうだ。あの中国隊はすでに北壁  
の目的地に達しているし、そのあとの天気予報は厳しいもの  
だった。初登頂を終えて、家では山のような仕事が続いている。  
私たちは建築会社の経営者で、チャッドは請負の仕事、私は設  
計である。私たちはこれで行動を終了し一週間早く帰国した。

AACおよびマッグスタンプとライマンスピッツァーのクラ  
イミング表彰のこの遠征への暖かいサポートに私たちは心から  
感謝したい。アジアにおけるこの探検踏査行はこれらのサポー  
トがなければ果たし得なかったであろう。この遠征はフォアシ  
スターズフィルム（Four Sisters Films）プロジェクトにもサ  
ポートを受けた。強い感銘を与えるような彼らの支援の功績を  
決して忘れてはならない。

## 山名について

四姑娘山国立公園の管理に携わる写真家大川健三さんの山名  
に関するコメントを付記する。

四姑娘山の太川健三です。双橋溝側で名前が通っている「野  
人峰」は比較的最近（漢族の伐採業者が多く入り込んだ数十  
年前以降）に創作された名前です。それ以前は別の現地名が  
有った筈ですが私は未だ確認しておりません。

当地ギャロンでは谷が変わると山の名前も変わる事が多く有り  
ます。「Sardapu」は東隣の長坪溝側に残る名前ですが意味は判  
らなくなっています。判らなくなっている理由の一つは二五〇年  
前の大戦争とその後の大規模な異民族による移民の影響です。

双橋溝は五〇年代前まで藏族だけでなく羌族も多く住んでいた所  
ですが、その後大規模な伐採が有って漢族が多く入り込み、現在で  
は戸籍上殆ど藏族になっています（隣り合う谷や下流の集落では藏  
族が多数派なためです）。そして漢族の山名も多く作られています。

更に注意しなければならぬのは当地の村人や成都から来た  
ガイドが観光客（登山家も含みます）の歓心を得るためにもつ  
ともらしい作り話をする事です。私が初めて四姑娘山を訪れた  
一九九二年にもこの手の比較的最近創作された話を幾つか聞か  
された事を憶えています。

## 冬季ハンター峰西稜

### 53泊の雪洞滞在、83日間におよんだハンター単独挑戦

栗 秋 正 寿

二〇一〇年二月二十四日、時刻は午前四時になろうとしていた。ここは、ハンター（四四四二ト）西稜に設けたキャンブ4（C4、三三三〇ト）。未完成の雪洞のなかの気温はマイナス二〇度。寝袋にもぐり込んでウトウトしていたが、口もとに吹き込んでくる雪の冷たさに目を覚ました。

前日の午前、C3（三三〇ト）からC4に移動。午後、雪洞掘りに取りかかったが、雪が硬く、アイスアックスで深さ八〇<sup>センチ</sup>の横穴を削るのが精一杯だった。やむを得ず、その小さな穴に上半身を押し込み、下半身はツェルトで覆った状態で一夜を凌いだ。

起床後、再び雪を削る作業を続けた。夕方になってようやく畳一畳ほどの寝床を確保することができた。入山五十六日目にして、最も厳しいビバーク（緊急露営）を強いられたが、「頂上

に立ちたい」という意志は揺るがなかった。

なぜ？

一九九五年七月、大学の山岳部員と二人で初めてウエストバットレスからマッキンリーに登り、白夜の中を登頂。山頂から目の前にそびえるフォラカーとハンターの雄姿に見惚れた。「この二つの山頂から、マッキンリーを眺めてみたい」という思いが募った。

アラスカから帰国後、中央アラスカ山脈三大高峰登山のバイブルともいえるHIGH ALASKA (Jonathan Waterman 著)を再読。マッキンリーの現地名が「デナリ」（高いもの）と呼ばれるように、フォラカーは「スルタナ」（女性・妻）、ハンターは「ベッケヤ」（子供）と呼ばれ、いずれもアラスカ先住民に家

族」として崇拜されてきた山であることを知り、縁を感じた。

九六年四月春、マッキンリーの「フアミリー」である両峰の登頂を目指した。大学山岳部の後輩たちを誘ったが、皆それぞれに事情があり、結局単独行となった。

天候不順のため、両峰とも途中で断念することとなったが、この四十九日間の単独行で多くのことを経験した。引き返すかどうか決断する勇氣、孤独な時間の過ごし方、ひとりならはるの大自然とのより強い一体感、登山を終えたときの充実感、そして、もうひとりの自分との対話など……。なかでも、冬の名残の四月から初夏の六月のアラスカ山脈を体験したことで、今まで抱いていた冬季のマッキンリー登山に対する恐れが、「こういう世界を知りたい」という興味へと移り変わった。その思いが通じるかのように、冬のマッキンリーの登山経験者や気象研究者との偶然の出会いが重なり、冬のアラスカ山脈について多くの情報を得ることができた。

九六年秋から冬にかけてネパール・ヒマラヤで高所順応と耐寒訓練を済ませた後、翌九七年二月、世界で最もオーロラに近い山——憧れの冬季マッキンリーへとひとり旅立った。初めての冬のマッキンリーは、ウエストバットレスの標高五二〇〇メートル地点で引き返した。猛烈なブリザード（暴風雪）に阻まれてピバークが長く続き、計画した下山日までの残り時間がなかったからである。氷壁を下りながら「また来年も登らせて

もらうばい」と山の女神に誓った。

九八年三月八日、ウエストバットレスからひとりマッキンリー山頂に立った。気温マイナス三七度、南からの疾風。ガスが覆い始め、天候悪化が迫っているため約一分間の頂上滞在。ホワイトアウトのため山頂からフォラカーとハンターを望むことはできなかったが、次はマッキンリーの「妻」と「子供」に同じスタイル——冬季単独行で登りたいという計画がひらめいた。

九九年以降、マッキンリーの「妻」であるフォラカーの冬季単独行登山を四度試みた。初回の九九年は、入山四十二日目の四月三日、スルタナ稜から登頂。二回目の二〇〇一年は、入山五十三日目の三月三十一日、南東稜から登頂した。入山からフォラカー登頂に至るまで、ブリザードが続き停滞を余儀なくされたため、いずれも登頂日が春にずれ込んだ。

デナリ国立公園局の規定によると、「冬季」は「冬至から春分の日の前日まで」とされている。すなわち日照時間が12時間を上回る春分の日が、アラスカでは「春の到来」を意味するため、三月二十一日以降に登頂しても「冬季登頂」とはみなされないからである。

三度目の二〇〇二年は、記録的な暖冬だったので、不安定な雪質のため雪庇を三回崩した時点で断念。南東稜（南西支稜）のわずか二五九〇メートル地点で踵を返した。

四度目の挑戦となった○七年三月十日、南東稜からフォアラカー冬季単独登頂に成功した。快晴、気温マイナスイ四五度、風速十<sup>ノ</sup>ノから十五<sup>ノ</sup>ノのつむじ風。体感温度マイナスイ七〇度のフォアラカー山頂から、残る課題となったハンターを見据えた。

### 五度目のハンター挑戦

ハンターはマツキンリーの南約十四<sup>ノ</sup>ノ、フォアラカーの東約十六<sup>ノ</sup>ノに位置する。三つのピークを持ち、標高はそれぞれ、北峰が四四四二<sup>ノ</sup>ノ、中央峰四一〇〇<sup>ノ</sup>ノ、南峰四二五七<sup>ノ</sup>ノである。北米に八十以上ある一四〇〇〇フィート級（四二六七<sup>ノ</sup>ノから四五七<sup>ノ</sup>ノ）の山のなかで最も登頂困難な山とされている。なお、ハンターの初登ルートは西稜（一九五四年、Beckey、Harret、Meybohm、難易度：Alaska Grade 4 + 58、AI3）であり、「北米クラシック・ルート50」のひとつに数えられている。また、ハンターの冬季登頂の記録は、一九八〇年のケネディ・ロウ・ルートからの一隊（Bocarde、Denkewalter、Tejas）のみである。

○三年以降、マツキンリーとフォアラカーの子供であるハンターの冬季単独登山に西稜から四度挑戦したが、ことごとく敗退したため、三部作<sup>ノ</sup>はいまだに完結していない。ハンター初挑戦となった○三年は、連続十二日間にわたって地吹雪につかまり、西稜主稜に設けたC2の雪洞（二七〇〇<sup>ノ</sup>ノ）に閉じ込められ、断念。○四年と○五年は悪天候に加え、雪崩の危険が

あったため、北西支稜（一九七八年、Babcock、Naslund、Duggan）のC2までもたどり着くことができず、あきらめた。

○九年は八度のラッセルの末、北西支稜のC2予定地（二六〇〇<sup>ノ</sup>ノ）までルートをのぼしたものの、その翌日から天候悪化。C1（二〇二〇<sup>ノ</sup>ノ）のテントで連続十五日間の停滞を強いられ、撤退した。そして今回、五度目のチャレンジとなる。

○九年十二月三十日、山麓の町タルキートナから約一〇〇<sup>ノ</sup>ノ離れたカヒルトナ氷河のベースキャンプ（BC、二二三〇<sup>ノ</sup>ノ）に小型機で向かった。BCに持ち込んだ荷物の重さは一五〇<sup>ノ</sup>ノを超えた。このうち燃料が約三〇<sup>ノ</sup>ノ（容量四〇<sup>ノ</sup>ノ）、食料がおよそ八〇<sup>ノ</sup>ノ。快晴だが、ここBCでは終日陽が当たらない。夏と異なって太陽の軌道が低く、陽射しが尾根に遮られるからである。加えて、日照時間が四時間半と短いため、行動できる時間も制限される。気温はマイナスイ十五度、氷河上流から吹き下ろす風が冷たかった。

アラスカ山脈は北極圏に近いため、殊に冬場は気温がマイナスイ四〇度を下回り、ジェット気流による強烈な風に見舞われ、天候が激変する。好天は長続きせず、いったん荒れると地吹雪やブリザードが一週間から二週間続き、その間テントや雪洞のなかで停滞を強いられる。今回のハンター登山もこれまでと同様、極地特有の暴風を安全に凌いで登頂チャンスをはひるげのため、二か月以上の登山期間を設け、雪洞を多用し、カプセルス



ハンター峰の全容と西稜（中央）

フオラカー南東稜 4080 mから写す

タイルで臨んだ。

カプセルスタイルとは、必要最小限の登山ロープを張り替えて使用し、荷上げを繰り返しながら、ひとつずつ上のキャンプに移動して山頂を目指す登山スタイルである。このスタイルの利点は、滞在キャンプに常に十分な食料と燃料を確保でき、長い停滞にも対処できることにある。

### 生活技術 雪洞編

十二月三十一日、荷上げ開始。BCから四・八<sup>キ</sup>離れたC1(二二三〇<sup>ト</sup>)までスキーを履き、ソリを引いて氷河を往復する。長さ四・二<sup>ト</sup>のポールを腰の左右に装着して、クレバス転落防止に努めた。好天を見計らい計四往復して、一〇年一月九日、C1にテントを設営。ここから、標高差二三〇〇<sup>ト</sup>、全長約七・二<sup>キ</sup>の西稜(北西支稜)がハンター山頂へと延びている。

一月十一日、登攀開始。傾斜四〇度から六〇度、一部に七〇度ある尾根に取り付いて、北西支稜の中間に位置するC2(二六二〇<sup>ト</sup>)を目指す。効率よくルートを延ばすため、この急峻な尾根の下部を最初だけ迂回して登り、下りで尾根上をラックセルした。ただし、この迂回ルートは、三方向を懸垂氷河に囲まれた谷にあり、その崩落による雪崩が頻発していた。今にも崩れそうなセラック(氷塊)が、十日に起きた大きな崩落で落ちてくれたため、次の崩落までに少し時間がかかると判断し、そ

の翌日に迂回を決行した。

膝から腰の深さまであるサラメ雪と格闘しながら、ルート工作と荷上げに計九日間費やし、一月二十三日、C2に移動するためC1を撤収。取り付きに張ったロープに登高器をセットし、傾斜のきついガリー(岩溝)に登攀中、頭上を飛ぶワタリガラスと。会話。することができた。こちらから「コロン、コロン」とワタリガラスの鳴き声を真似すると、「コロン、コロン」と同じ数だけ返事をしてくれるのである。毎冬、食料を狙って飛来する厄介者ではあるが、雪と氷と岩だけの高山地帯で出会う唯一の。生き物。と思うと親しみがわいた。

C2に移動した後、翌二十四日から三日間かけて、C1とセラック手前(二二三〇<sup>ト</sup>)に設置していたデポを回収。一月二十六日、C2から上部ヘルートを延ばす態勢を整えることができた。テントは風で飛ばされやすいので、ここC2からはすべて雪洞を利用した。

冬のアラスカ山脈登山で最も注意を要するのが極地特有の風である。日本山岳会科学委員会が、マッキンリーの五七一五<sup>ト</sup>地点で観測した結果、九五年二月に風速五〇<sup>ト</sup>を超す風が約七時間半にわたって吹いた(注1)。最大瞬間風速は優に一〇〇<sup>ト</sup>を超えると推測された。もしこの状況で尾根にテントを張っていれば、吹き飛ばされるのは必至である。ちなみに台風の暴風域は風速二五<sup>ト</sup>以上を指す。冬季の烈風がどれほど過酷かを、



C 3の雪洞 ここには計23泊した

この観測データは物語っている。

この猛烈な風に対処するため、雪洞を多用する。九八年のマッキンリー登山以降は氷河上にもテントを張り、急峻な尾根や氷雪壁が始まる地点から上部のキャンプはすべて雪洞を掘っている。雪洞キャンプの利点は、外がどんなに激しい嵐でも風で飛ばされる心配がなく、静かな空間が確保でき、より安全に休息できることにある。

雪洞の掘り方は次のとおりである。初めに、ゾンデ棒で雪面をさし、硬い層がないかチェックする。道具はシャベルとアイスクラスのみ。斜面に対して水平に掘り進み、入口のトンネルを作る。そこから横斜め上に室内用の空間を作ると、暖まった空気が逃げにくい。雪をかき出す作業は、できるだけ腕を使わず、脚で蹴り出す。幅の狭いヒドン・クレバスがうまく見つかればそれも利用する。雪洞の奥の雪を外へかき出すのはひと苦労だが、クレバスがあれば割れ目を塞ぐために雪を落とすことができるからである。仕上げとして、天井の凹凸を削り取る作業は入念に行なう。これを怠るとストープ使用時に天井から水滴が落ちて不快だけでなく、床や装備が濡れてしまい後始末が大変になる。完成までにかかる時間は雪質や地形にもよるが、だいたい三時間から四時間である。広さは畳二畳ほど、高さは立て膝がつける程度。換気が必要ないときは、室内に冷気を入れないため入口にツェルトを張っておく。風で雪が吹き込

む場合は、雪のブロックを積んで入口を塞ぐ。

雪洞のなかで炊事をする際は、直径五寸ほどの換気口をストープの真上に開け、入口からの空気の流れを作つて換気をし、一酸化炭素(CO)中毒や酸欠症の予防に努める。COは無色無臭なので発生に気づきにくく、吸い続けると死に至ることもある有毒ガスである。そのうえ、CO中毒と高山病すなわち高所での低酸素症は誘発しあつて発症するので、高地でCOを吸うことは、海拔ゼロの地点で吸うよりもはるかに危険である(注2)。COが発生する主な原因として、鍋についた結露が炎に近すぎるために起こる不完全燃焼がある。雪をいっぱい入れて鍋を温めるよりも、雪を少しずつ加えて鍋を冷やさないようにしたほうがCOの発生はずっと抑えることができる。

### 生活技術 食事編

一月二十七日、C2から西稜主稜との合流地点にあたるC3を目指す。北西支稜の不安定な雪庇と岩稜を避けるため、稜線直下の雪壁を斜上する。厳しいラッセルが続くなか、傾斜六〇度から七〇度のガリーに直径八リ、長さ六十メートルのロープ三本を設置し、北西支稜を突破。ルート工作と荷上げに計七日を要して、二月四日、C3に移動。ここまでは比較的天候に恵まれたが、翌日から大荒れとなり、計十五日間の足どめをくらった。C3の雪洞でひとり、雪を溶かして水を作り、炊事や食事

をし、除雪や気象情報をチェックするなど日課をこなしながら、ラジオ(31局も入る!)を聴いたり、日本にいる家族のことを想いつつ、停滞の日々を過ごした。

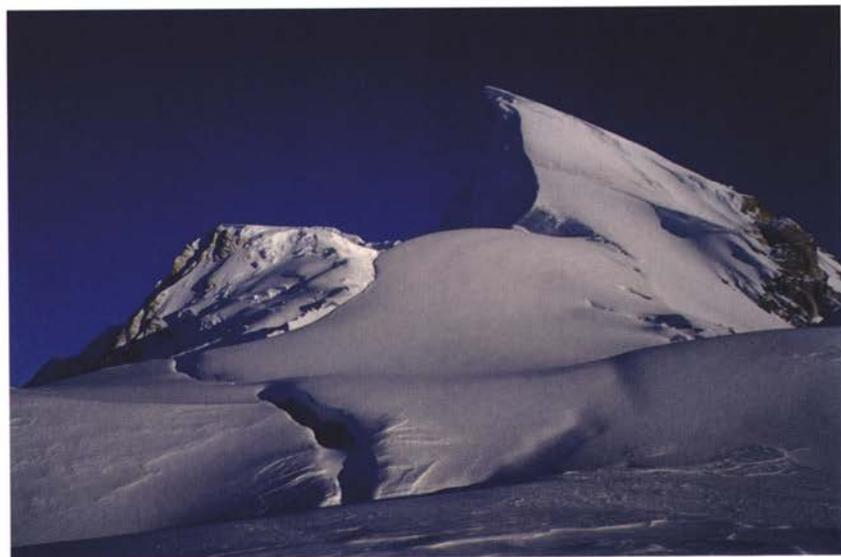
「二か月間もひとりで寂しくないのか?」九八年、冬のマツキンリーから下山後、アラスカを歩いて縦断した「水平の旅」の道中で、こんな声をよく耳にした。その問いに「ない」といえば嘘になるかもしれない。下界でひとりには寂しい。けれども、誰ひとりない冬のアラスカ山脈で過ごすこと自体を楽しんでいるのであまり寂しいとは思わない。自分と向き合い、孤独な時間を楽しむ、とでもいえるだろうか。

ここで、停滞中にとつた食事として、二月六日の献立を紹介したい。朝食は海鮮・野菜焼きそば、にんじんのポタージュスープ、バター入りホットミルク、コーヒー、アミノ酸サプリメント。昼食は数回に分けて、バランス栄養バー(カロリーメイトなど)、ナッツ入りチョコレート、スポーツドリンク(容量一・五リットの魔法瓶に満タン)をとつた。夕食はバターライス、茶わん一杯分の牛丼・親子丼・中華丼の具(これはうまい!)、豚肉・野菜入り卵スープ、各種のドライフルーツ、バター入りココア。フルコースのシメとなるデザートはお汁粉と昆布茶。最後に栄養補助として、総合ビタミン剤を緑茶で飲む。一見妙な和洋折衷だが、極寒の山のなかでは意外と美味しくいただける。

献立をつくる際は、米やパスタ・麺類を主食に、十数種類の



西稜（北西支稜）の2900 m地点にて



西稜主稜との合流地点  
右奥にハンター山頂がわずかに見える

主菜と副菜、汁物、甘味類をうまく組み合わせさせて変化をつけ、できるだけ飽きがこないように心がけている。

一日の食材の総重量は約一キロ。行動日は体力の消耗が激しいため、一日約四〇〇〇キログラムから四五〇〇キログラムを摂取する。悪天候で何日も停滞するときは、エネルギー消費量が少ないことや今後の食料確保を考慮して、食事の量を三割ほど減らしている。包装も徹底した軽量化を図り、ゴミの量を一日約五〇グラムに抑えている。さらに、容量四割の空になった燃料缶に、たまったゴミを押し込んでおくとかさばらなくて済む。

山に持っていく食料は、コンパクトで軽く、高カロリーなものが最適なので、ドライフーズつまり乾燥した食品が中心となる。一日平均で一〇〇グラムとっているバターを除けば、残りはすべてドライフーズの類といえる。水分の多い食品は、重いだけでなく、低温だと凍るので、解凍するためにより多くの燃料と時間を要するからである。夏山では定番のチーズやソーセージが冬山では凍って硬くなり、休憩時にとる携帯食料として適さず失敗したことがあった。

ドライフーズに欠かせないのが水である。一日三五〇リットルから四〇〇リットルの無鉛ガソリンを使い、朝晩それぞれ二時間から三時間を費やして鍋に入れた雪を溶かし、六リットルから八リットルの水を作る。粉雪は乾燥しているので溶けにくいのが、水分を多く含むザラメ雪は溶けやすく、わずかだが燃料と時間を節約できる。

数年前から、鍋底に粉末状のアルミを吹き付けたチタン製鍋を愛用している。この特殊加工によって、熱が鍋底の広範囲にいきわたるため、通常のチタン製鍋と比べて早くお湯が沸き、燃料が〇・五割から一割ほど節約できる。さらに、熱による変形や焦げ付きも抑えられるうえに、ザラザラした鍋底はゴトクの上での滑りを防ぐ効果もあり、三拍子揃った優れたものだ。

長期にわたる登山の成否は、環境が厳しければ厳しいほど、生活技術が物を言う。とりわけ食事や水作りは大きなウエイトを占める。食事について、こんな英語のことわざがある。You're what you eat。「何を食べるかであなたが決まる」。すなわち登山も食事で、ひいては生活技術で決まるのである。

#### 天候に見放され敗退

二月十三日、西稜主稜の登攀を開始。C3から雪庇とクレバスが並行して走る尾根を登り下りしながら進むと、頂上へ続く大斜面の基部にあたるC4に至る。荒天の合間を縫って三往復し、三週間分の食料と燃料を荷上げた。順調にいけば、もうひとつ先に最終キャンプ(C5)を設け、そこから頂上にアタックする計画だった。しかし、C4に入った後も天候は芳しくなく、再び雪洞に釘付けにされた。日ごとに減っていく食料と燃料を前に、C5を設けず、C4から直接アタックすることも思案した。



西稜のルートとキャンプ位置

三月五日、C4滞在十一日目、入山六十六日目。夜になっても地吹雪が収まる気配はなく、寝袋の中で自問自答した。これだけ天候に見放されると、今回もまたダメか。頂上を狙える所にいるだけに、残念でならない。だが、何はともあれ、生還が最優先。命あつての物種だ。明日も動けないなら、そろそろ潮時だろう。

翌六日も地吹雪。この日も身動きが取れず、日程の遅れと残り少ない食料と燃料をかんがみ下山を決意した。翌七日、風が弱まったのを見計らって、氷壁直下(三三三〇m)に設置していたデボを回収することはできたが、それから三日間、再び地吹雪につかまってしまった。

三月十一日、十六日間過ごしたC4を後にし、C3に戻った。ところが、C3から荷下げを始めて数日で天気が好転した。「この好天がもう数日早かったら登れたのに」という惜しい気持ちにもなったが、この好天があつたからこそ無事に下ることができたのだと思ひ直した。

三月二十二日、BCに戻り、タルキートナに下山。最高到達点は標高三三〇〇m、雪洞に計五十三泊。自己最長となる八十三日間(八十二泊)のハンターが終わった。

険しいルートが連続するハンターは、一度に運べる荷物の量が限られているため、荷上げの回数が増える。従って、登頂までの日数もかかり、登山の成否は天候に大きく左右されること

になる。標高ではマッキンリーやフォラカーに及ばないものの、ハンターはとてつもなく手ごわい山である。これまで十二回、延べ六一五日経験した冬のアラスカ山脈登山から、ハンター冬季単独登山は十年に一度チャンスがあるかないかだと思う。そのわずかなチャンスを、今後もひたすら待ち続けるつもりだ。

なおこの登山は、日本山岳会から平成二十一年度海外登山基金(秋・冬分)の助成を受けました。

(注1)「マッキンリー気象観測機器設置登山隊 全十一次にお

よぶ登山記録と学生等青年隊員の総合的登山能力育成の報告」(社)日本山岳会 科学委員会マッキンリー気象観測プロジェクト編、2000年、大蔵喜福

(注2) 1986 Analysis of the CO poisoning deaths of two Swiss climbers on Mount McKinley by Peter Hackett, M.D.

〈ハンター冬季単独行83日間の行動日程〉

- 12/30 タルキートナから軽飛行機でBC(2130m)に入山
- 31 BCからC1手前(2090m)へ荷上げ、BCに戻る
- 1/1~2 BCからC1(2130m)へ荷上げ、BCに戻る

る

- 3~7 雪のためBCで停滞
- 8 BCからC1へ荷上げ、BCに戻る
- 9 BCからC1に移動
- 10 C1からC1手前のデボを回収。西稜の取付へ荷上げ、C1に戻る
- 11 C1からセラック手前(2330m)までラッセルとルート工作、C1に戻る
- 12 C1で休養
- 13 C1からセラック手前まで荷上げ、C1に戻る
- 14 C1からC2直下(2560m)までラッセル、C1に戻る
- 15~18 雪のためC1で停滞
- 19 C1からC2(2620m)までラッセルと荷上げ、C1に戻る
- 20~21 C1からC2へ荷上げ、C1に戻る
- 22 C1で休養
- 23 C1からC2に移動
- 24~25 C2からC1のデボを回収、C2に戻る
- 26 C2からセラック手前のデボを回収、C2に戻る
- 27 C2から2770m地点まで荷上げ、C2に戻る
- 28 C2から2900m地点までラッセルとルート工

25	24	23	17 22	16	14 15	13	12	11	5 10	4	3	2	2 1	31	30	29			
C 4からC 3のデボを回収、C 4に戻る	C 4で雪洞掘り	C 3からC 4に移動	風と雪のためC 3で停滞	C 3からC 4 (3 2 3 0 m) まで荷上げ、C 3に戻る	風と雪のためC 3で停滞	C 3からC 4手前(3 2 5 0 m)までルート工作、C 3に戻る	霧と雪のためC 3で停滞	C 3からC 2のデボを回収、C 3に戻る	風と雪のためC 3で停滞	C 2からC 3に移動	C 2からC 3へ荷上げ、C 2に戻る	地吹雪のためC 2で停滞	C 2からC 3へ荷上げ、C 2に戻る	C 2からC 3 (3 1 0 0 m) までラッセルとルート工作、C 2に戻る	C 2から3 0 0 0 m地点までラッセルとルート工作、C 2に戻る	作、C 2に戻る			
		22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	8 10	7	5 6	3 4	26 3 3	
	下山	C 1からBCへ荷下げ、C 1に戻る	C 1からBCに帰り、軽飛行機でタルキートナに	索、C 1に戻る	C 1から西稜の取付へ。雪に埋まったスキーを探	C 1からセラック手前のデボを回収、C 1に戻る	C 1からセラック手前のデボを回収、C 1に戻る	C 2から2 9 5 0 m地点のデボを回収、C 2に戻る	C 3からC 2に移動	霧のためC 3で停滞	C 3からC 4のデボを回収、C 3に戻る	C 3からC 4のデボを回収、C 3に戻る	雪のためC 3で停滞	C 4からC 3に移動	地吹雪のためC 4で停滞	地吹雪のためC 4で停滞	C 4から氷壁直下のデボを回収、C 4に戻る	C 4から氷壁直下(3 3 0 0 m)までルート工作、C 4に戻る	風と雪のためC 4で停滞

# 雲南・四川踏査行 2010年夏

中村 保

## 1 2010 雲南キリスト教会探訪

雨季の雲南四川踏査は十二年ぶりである。ブルースカイの山を望むチャンスはないであろうが、二つの欲張った計画を立てた。

第1ステージでは、①雲南北西の陸の孤島、独龍族の棲む独龍江（イラワジ川源流部）流域の踏査を行い、あわせて帰路に怒江（サルウィン川上流部）流域のキリスト教会を探訪する、②昆明で雲南省の登山許可について雲南省体育局の責任者と会談することとした。

第2ステージでは四川西部高地・理塘高原の緑豊かな美しい夏の景観を楽しみながら沙魯里山系の相丘切克山群の探査と理

塘高原のピーク同定の情報集めをすることであった。

結果は、雲南では異常気象による水害の危険のため独龍江へは入れなかったが教会探訪では多くの収穫があり、雲南省の登山許可について最新の情報を得た。四川では理塘高原横断の馬のキャラバンはできなかったが、未踏峰の写真を撮りピーク同定の材料を持ち帰ることができた。

### 1. 独龍江と秘峰カワカブ

独龍江へ

七月六日成田を発ったが、冒頭で記した通り、垂涎の独龍江



独龍江への標識（貢山）

前に開通していたが、来てみると貢山県当局による下記の交通規制（期間は二〇一〇年六月一日から二〇一二年十二月三十一日までの二年半）が公布され、大規模な補修工事が始まった。

- (1) 三台以上の車が連なって通過してはいけない
- (2) 三トン以上の車両は通航不可
- (3) 探検、調査、観光のためには特別の許可がなければ入域できない

入りは果たせなかつた。メンバーは横断研の盛田・鈴木・中村、私以外のお二人は既に二回独龍江に入っている。今回の不成功は事前情報の不足も影響した。怒江（サルウイン川）から独龍江（イラワジ川上流）への分水嶺（高黎貢山）を越える九六<sup>キ</sup>と独龍江沿いの一部分の自動車道路は数年

表向きの規制には書かれていないが、外国人は安全のため独龍江には入れさせない。六月十八日には乗用車が独龍江に転落、一人は流れから這い上がるが、二人は流されて行方不明、我々が分水嶺を越えようとした七月十二日の前夜にトラックが独龍江に転落し貢山県政府幹部ほか二名が川に流され行方不明、運転手と幹部の部下だけが助かる事故が起こった。怒江も恐ろしいほど増水している。こんな状況だったので、貢山県旅遊局と二日間交渉してみたが、入域を頑なに拒否された。馬か徒歩での独龍江入りを検討してみたが、今年の三月にアメリカ人グループが二人死亡、一人が怪我をするという事故があり、貢山県旅遊局は我々に許可を出してくれなかった。独龍江入りは後三年待たねばならなくなった。独龍江は人口が最も少ない中国少数民族の一つ「独龍族」の住処である。簡単に紹介しておこう。

### 独龍族について

人口五七〇〇一五八〇〇人。チベット系。居住地域 雲南省西北部の怒江僑僑族自治州貢山独龍族怒族自治県の独龍江流域の溪谷地帯に居住する。言語は漢・チベット語系チベット・ミャンマー語派に属する独龍語を使用。独自の文字はない。独龍族は、かつては統一した名称がなく、居住地域周辺の名称をとって「独龍」、迪麻、などと自称していた。「大元一統志」に初め

て独龍族の名称が現れ、明清代には、*球曲*、*曲人*と呼称されてきた。新中国成立後、独龍 (Dulong) という名称に統一された。

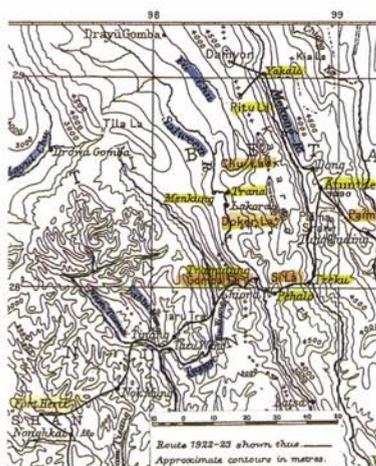
二十世紀中頃までは、その居住地が陸の孤島ともいべき隔絶された場所であったため、その生活様式は原始社会の名残を色濃く残すものであった。大部分は狩猟と採集、焼き畑農業を主な生活手段としており、衣服も麻布や毛皮といったものしかなかった。近年では手工芸が盛んで、特に、独龍毯 (Dulong tan) という織物が有名である。

現在でも原始社会末期の父系家族公社の特徴を保っている。女性は一九五〇年代までは、顔面に入れ墨をする風習が残っていたため、現在でも年配の女性には、*文面* という入れ墨が見られることがある。雲南省の少数民族に共通していることで、お客を招くことを非常に好み、通りすがりの見知らぬ人も家に招き歓迎する。また、信義を重んじる質素儉約な道德意識を持っており、道に落ちているものでも拾わず、夜間でも戸締りをしなくていい、というのが彼らの美德として現在でも残っている。キリスト教の信者もいて幾つかのプロテスタントの教会がある。独龍江下流 (イラワジ川上流) のミャンマー領内には多数の同民族 (ミャンマーではタロン) が住んでいる。

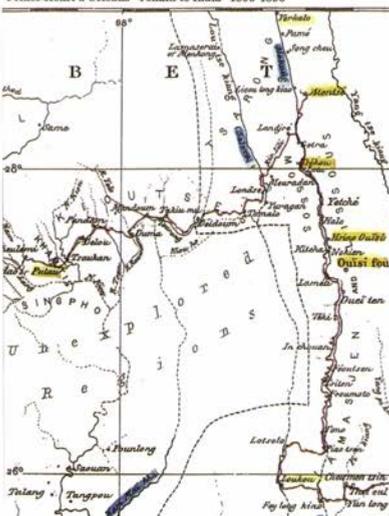
## ゴンパ・ラはいずこー秘峰カワカブ 5128 m

独龍江踏査にあたりどうしても確認しておきたいことがあった。プラントハンター、F・キングドン・ウオードが一九二二年十月に外国人として三番目にサルウィン川から分水嶺の高黎貢山を越えて独龍江へ入り北ビルマのプタオ (Fort Hertz) に至った。ちなみにキングドン・ウオード以前に東から独龍江に入ったのは一八九五年のフランスのオルレアン公の隊 (*From Tonkin to India — by the Sources of the Irrawadi, January, 1955, January, 1961*; Prince Henri d'Orlean, London 1898) と一九〇六年に英国人探検家の E・C・ヤングである (*A Journey from Yunnan to Assam, The Geographical Journal, August 1907* Vol. 30 No. 2)。分水嶺を越えるルートは4つある (あった) と言われる。キングドン・ウオードが越えたのが「ゴンパ・ラ (Gompa La)」で、その位置の特定に難儀していた。キングドン・ウオードの紀行 *From China to Khamti Long* (Edward Arnold & Co. London 1924) を丹念に読み直し「ゴンパ・ラ」こそ幻の秘峰カワカブであることを確信した。彼は頂上には立っていないが氷河をさけて険しい岩道を辿り分水嶺を越えている。近年ではスコットランドのプラントハンター、マイケル・ウィッケンデンが二〇〇〇年の夏にゴンパ・ラを越えている (*Exploring The Upper Dulong River — The KWL Expedition to North-West*

F. Kingdon-Ward "China to Khamti Long" 1922-1923



Prince Henri d'Orleans "Tonkin to India" 1895-1896



私は二〇〇四年にカトリック宣教師の道を辿ったときに東面の全容を写真に収めた。私の知る限り、谷間から仰いだ写真は別として、カワカブのプロファイルの写真は私の二枚とウィッケンデンの一枚だけである。

「幻の秘峰」と表現したが、このピークが僻遠の地にあるわけではない。サルウィン川（怒江）流域、雲南省とチベット自治区との省境に近い貢山独竜怒族自治県の最奥の町、丙中洛の西側、サルウィン川の右岸に聳える五二八メートルの岬々たる双耳峰である。二枚の写真を見て頂きたい。辺境は急速にインフラ整備が進み道路は舗装され街は現代的になりつつある。サルウィン峡谷の奇観を観光開発に役立てている。その意味では最早秘境と呼べる場所ではない。にもかかわらず、カワカブは登山家の目からみると知られざる山である。

標高は五二八メートルで低いこともあるが、晩秋を除いてはいつも雲に覆われていて見えないことも影響している。高黎貢山のこの辺りは雲南では最も降雪量の多い地帯で僅か五〇〇〇メートルの山に氷河が存在し、分水嶺の峠は五月末まで雪で閉ざされる。地勢と気候条件がカワカブを秘峰にしていると言えよう。

カワカブの標高について触れておこう。キングドン・ウォードは一九一一年の踏査行を名著『青いケシの国』（白水社）ヒマラヤ（人と辺境）3 倉知敬訳 一九七五 原書は『The Land



梅里雪山巡礼路・察瓦龍からの遠望（1996年10月）



## Kawakabu 5128m East Face



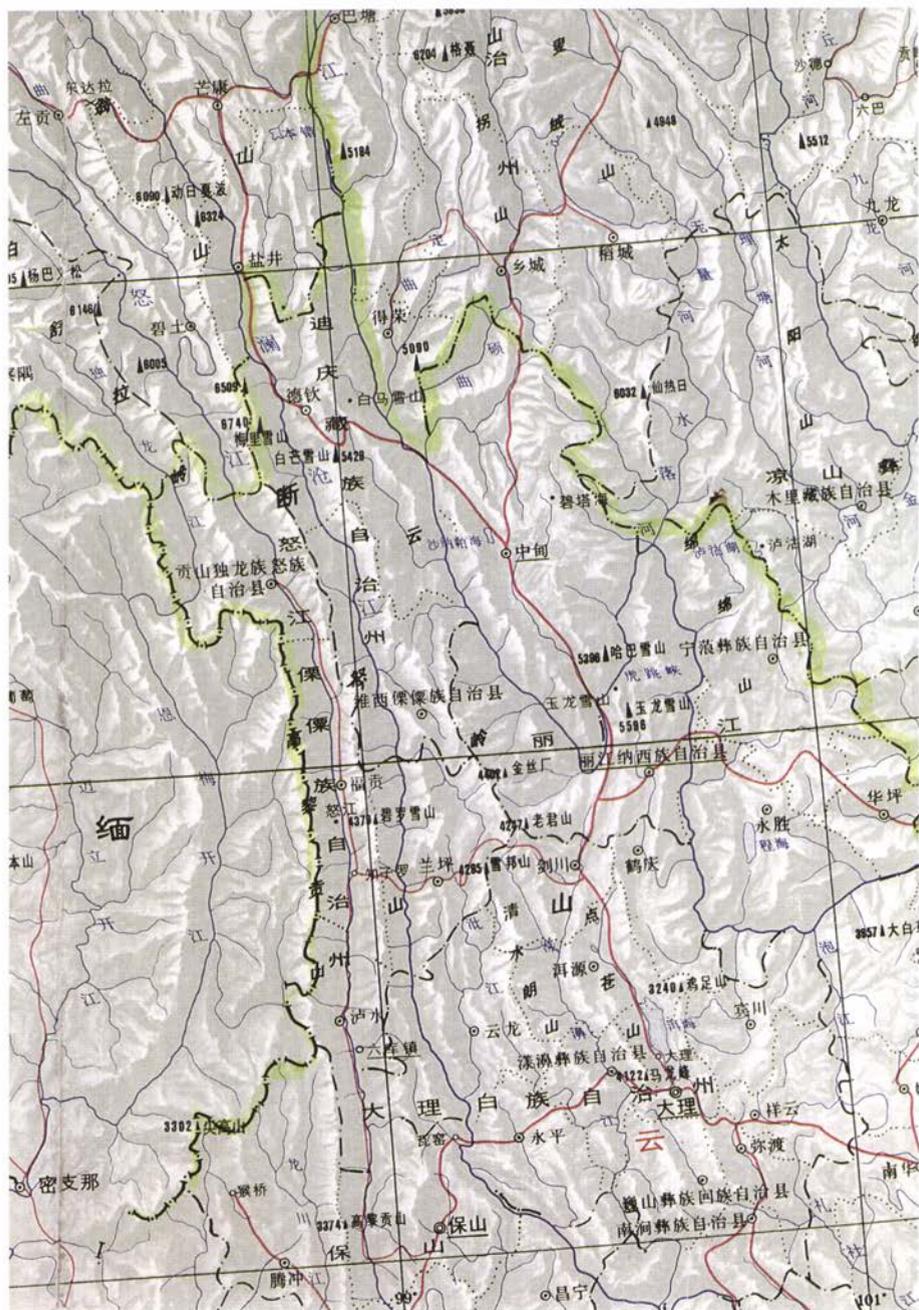
宣教師の道—白漢洛とパラゴン峠の中間地点からの遠望（2004年10月）

*of the Blue Poppy*) の中で “Kenichunpu (over 20,000ft)” と地図に記載している。そのときは六〇〇〇<sup>ft</sup>と判断したようだ。しかし一九二二年の雲南からビルマへの横断の旅では、ゴンパ・ラの峠 13,000ft から 17,000ft (5182m) と推定している。現在の標高に近い。National Geographic から一九二〇—三〇年代に数度に亘って雲南・四川・青海の踏査に派遣され、後に麗江に住み納西族の東巴文化の研究に傾注したプラントハンターのジョセフ・ロツクは一九二三年十月にカワカブを望見しているが、彼はキングドン・ウオードと同じく Kenychunpu (over 20,000ft) と地図に記している。実際は五二二八<sup>ft</sup>の高さに過ぎないが、サルウィン河畔の丙中洛からは三五〇〇<sup>ft</sup>もの高さがあるので高く感じたのであろう。他にはないカワカブの写真と探検家の地図・現代の地図をご覧頂きたい。ゆっくり偵察したい吸引力のある「秘峰」である。

### 2. キリスト教会探訪—新しい風

独籠江入りを断念した後、七月二十八日の一週間、盛田さん・鈴木さんとサルウィン川（以下怒江と記す）流域の教会を精力的に探訪し、この地におけるキリスト教の普及の状況を取材した。カトリックの衰退とプロテスタントの隆盛が印象的であり、新しい発見であった。以下日記風に綴る。

（注記：中国では—プロテスタント⇨基督教、カトリック⇨天







貢山から独龍江への道筋のプロテスタント新教会



貢山のプロテスタント教会



貢山プロテスタント教会  
ーダンスに興じるリス族の信者

主教、経堂Ⅱ教会)

七月十二日、貢山、曇後薄日、7:00 20℃、標高一五二五

独龍江を諦め、タ方リス族の基督教経堂に行く。貢山のプロ  
テスタントの信仰の中心である。教会の前の広場で大勢のリス  
族がダンスの練習をしていた。

七月十三日、貢山、曇、7:30、20℃、一五二〇、丙中洛  
着 12:30、一七六〇



丁重カトリック教会



丁重カトリック教会の庭にある任安守神父の墓、左から中村・盛田・鈴木

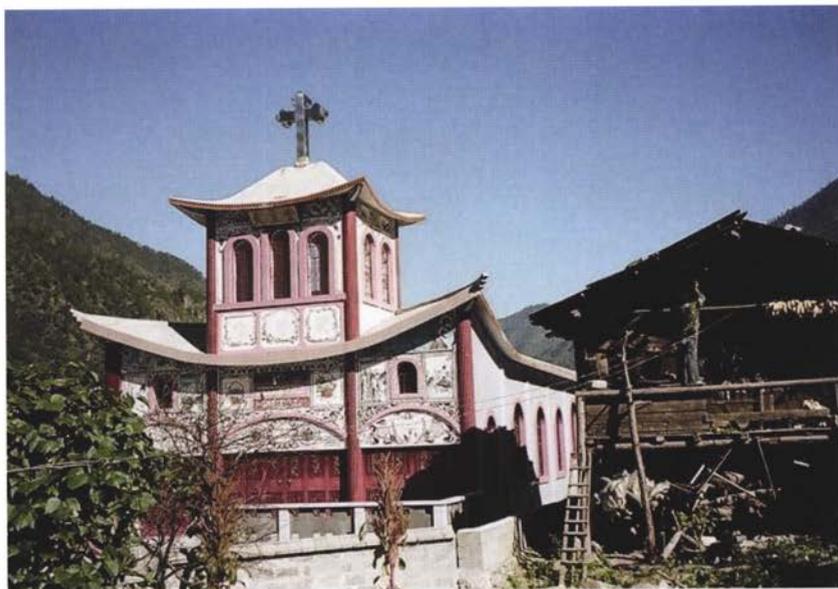
丁重経堂訪問、六年前に会った経堂の鍵を預かるチベット族の女性が来てくれる。元気な笑顔が懐かしい。フレンチ・ローマン・カトリック、パリ外国宣教会(MEP)の任安守神父の墓の写真を取る。荒廃が進む天主教の教会の中では元のデザイン通りに新築なった丁重経堂はよく整備されている。

カトリック弾圧の拠点であったラマ寺・普化寺(整備中)も訪れる。直ぐ近くの東風基督経堂も見ると。その後、観光地図にある「香巴拉遺跡」に行こうとしたが、村人は誰も知らなかった。途中、これも地図にあるカワカブ(五一二八頁)展望台についても村人に尋ねたが知らなかった。ただ一人の熱心な村人がカワカブへの情報を提供してくれた。氷河の末端までは徒歩で往復一週間かかる、悪路なので馬は使えない、人夫は五〇元・一日・一人で集められると。

このトレイルは「青いケシ」で名高い英国のブランドハンター、F・キングドン・ウォードが一九二二年十月に雲南から北ビルマのイラワジ川支流の上流フォート・ヘルツまで旅するために、丙中洛の少し北からカワカブ(キングドン・ウォードのゴンパ・ラ)の近くの峠を越えて独龍江(イラワジ川本流の上流部)に入ったときのルートである。その時、彼は任安守神父のアドバイスを受けている。ゴンパ・ラ越えてキングドン・



怒江—石門関 マーブル・ゴージュ



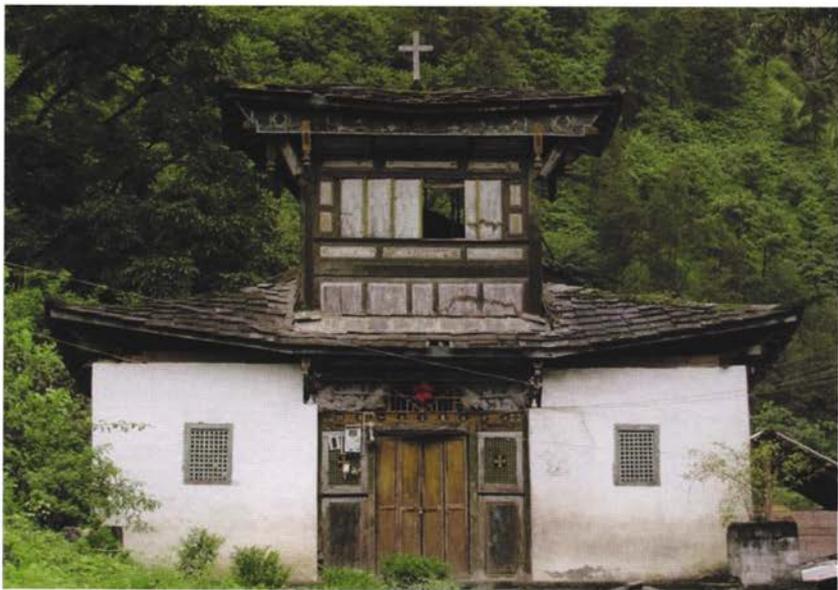
双拉カトリック教会

ウオードは大変な苦勞をしている。

七月十四日、丙中洛、7:00、20℃、前夜から雨、終日雨止まず

察瓦龍への自動車道を北上、石門関（キングドン・ウオードのマーブル・ゴルジュ）を過ぎチベット自治区との省境の手前の峡谷地帯まで進み引き返して秋那桶に行く。自動車道は三年前と比べて相当荒れている。怒江は急激に増水していて流れは恐ろしいほど迫力がある。秋那桶（一八〇〇㊦）へは怒江左岸の谷に入る。ボンガ経堂跡、阿丙への旧道沿いにある。最近は中国人の観光客が訪れるというが、特に美しい景観でもない。有名は秋那桶の天主堂は荒れていて失望した。

秋那桶から徒歩で車道を上り、嘎卡当（ガガタン 一九四〇㊦）の小学校で昼食、さらに自動車道の終点、初干（チヨカシ 二〇四〇㊦）の天主堂を訪れる。この谷最奥の教会である。村は二十四家族、一六〇人ですべて怒族、八〇%がカトリック信者である。初干からボンガまで峠を越えて徒歩で四時間、阿丙まで八時間という。アル中気味の天主堂管理人は徳欽のチベット族で七十四歳、代々カトリックで父は任安守神父の案内、お供をしたと言う。帰路、怒江沿いの尼大当（ニダタン 一五七〇㊦）の建築中の教会を見て丙中洛に戻る。



迪麻洛のカトリック教会

七月十五日、丙中洛、朝霧、後雨、7:00 20℃。雨は午前中に止み暑くなる

怒江左岸へ、平安棒当経堂（一五六〇<sup>ト</sup>）を訪れ、この日の目的地、迪麻洛（デマロ 一八四〇<sup>ト</sup>）に行く。二〇〇四年に永井さん、陳少宏と一緒にメコン川沿いの茨中から怒江へ、分水嶺のシ・ラ（四一七〇<sup>ト</sup>）を越えてカトリック宣教師の道を四日かけてキャラバンしたときの馬方のリーダー・阿洛さんを訪ねた。彼はチベット族のカトリック信者で、地図を読める実に優秀なガイドでもある。今では丙中洛に拠点を持ち、迪麻洛では民宿を経営、観光開発や自然保護の仕事にも携わっている。自らも怒江・独龍江流域のガイドもしている。二〇〇四年の旅のことはよく覚えてくれていた。美人の奥さんにも再開できた。次回の独龍江入りの時は彼にガイドを依頼する。迪麻洛の経堂も廃屋寸前のように荒れていた。

迪麻洛は十二村、三〇〇〇人、八〇%がカトリック信者で、住民はチベット語・英語・中国語の三つの名前をもっている。迪麻洛の後は同じ左岸の永拉嘎天主堂（二五七四<sup>ト</sup>）に行く。二〇〇六年に再建、信者百人のうち二十人はまだ文盲であると言う。夕方貢山に帰着、県の民生局を訪れ貢山県の地図を八五元で買うことができた。県の地図を県政府から買うことができ



老朽化が目立つ貢山の天主堂（カトリック教会）

たのは初めてのことである。

貢山の天主堂に行くが、このお伽の国のような経堂も六年前と比べて老朽化が目だった。何故だろうか、プロテスタントの基督教経堂の新しい教会が増えているのにカトリックの天主堂は衰退しているように見える。その理由は保山で知ることができた。

怒江流域におけるカトリックとプロテスタントの普及分布は、大別して貢山から北がカトリック、南がプロテスタントと言えよう。そして、プロテスタントの教会は地形的な影響から怒江右岸に多い。

七月十六日、貢山、朝雨、7:30、20℃。六庫（八六〇坪）へ移動

雨止んで陽が差し蒸し暑い。たくさんの教会の写真を撮る。福貢で昼食、六庫の手前ウェイラバで珍しく白い十字架の天主堂の写真をとる。ちなみにプロテスタントの教会の十字架は赤である。気温32℃。六庫の市街地の発展振りにあらためて目を見張る。三年前も大きな町になっていたが、さらに膨張し都会化しており、怒江下流沿いに新市街地の建設が進んでいる。新車があふれている。ホテルも混んでいる。物資も豊富である。亜熱帯性の果物が多様で、とりわけマンゴーが美味しい。何が

辺境の谷間の経済発展の原動力になっているのだろうか。

七月十七日、六庫、曇、7.00 24℃。保山（一六八〇ft）へ移動

六庫の南約三十分、瀘水県上江郷、怒江右岸の百花嶺基督教経堂を訪れ管理人および教会ナンバー2の実力者（48歳）とインタビューする。以下要約する。

―百花嶺の村人は六〇〇―七〇〇人（漢族は十五人で九九％はリス族）、教会の信者は三〇〇人であるが、この教会には近在の村も含めると一〇〇〇人の信者が集まる。教会の四二〇の座席はいつも一杯になる。瀘水県全体では教会は三〇〇あり、すべてプロテスタントである。上江郷だけでも五十二の教会がある。驚くべき数の教会である。

―現在の新教会は二〇〇三年に建設、建設費四七〇〇〇元は信者の寄付で賄った。二〇一〇年に屋根の改修をしている。神父は村の人で、創立者は現在八十四歳のリス族の老人である。外国人の神父は来ないが観光客は結構来る。日本人も来る。教会は州政府・県政府の宗教管理局により統括されている。神父の後継者は村人の互選により決められよう。



百花嶺教会（プロテスタント）のリス族合唱団

―州政府はリス族の瀘水県百花嶺合唱団（雲南省で有名）の文化活動支援のため四十万円を提供している。一方、教会は村人の寄付により運営されている。プロテスタント教会が増加している要因の一つにリス族の文化を残すための政府による少数民族支援策がある。原始宗教から基督教へ、合理的思考へ移行するための啓蒙でもある。

―信者の数は、一九四七・四八年には四〇〇〇人であったが、現在は四万人に増えている。一九四七年には瀘水県には教会は二つしかなかった。基督教（プロテスタント）が怒江に入ってきたのはビルマ経由で一九二八年である。本格的に布教活動を始めたのは一九三六年頃である。新中国になり宗教は禁止されたが、一九八一年の開放改革以後宗教活動が復活、百花嶺教会では一九八〇年には信者は二十人しかいなかったが、現在は三〇〇〇人いる。増加の原因は原始宗教（迷信）からの脱却を促すことと政府の積極的支援による。上江郷の教会は州・県政府の規則・法令に遵守して運営されている。

―瀘水県の経済は、農業収入と出稼ぎ労働者の送金によって支えられている。政府の経済的支援はない。農業ではタバコ葉の収入が一番多い。米、玉蜀黍、果物（マンゴー、桃、バナナ、

胡桃、ライチ）に加えてコーヒーも最近始めている。以前は米が一番の収入源だったがタバコが取って代わった。

午後早く怒江の谷から標高一九六〇位のメコン・怒江分水嶺を越える新道をドライブしてメコン沿いの道を離れて、昆明からミャンマー国境の町瑞麗に通じる高速道路に入る。高速道路を三十八<sup>キ</sup>走って雲南西部の広い盆地の中の交通の要衝、保山に着く。豊かな土地である。近年急速に生産が増えているコーヒーは保山市の怒江流域で栽培されている。保山で車の旅は終わる。この日、保山基督教本部・学校を訪問する。飛び込みの訪問ながら親切に対応して頂いた。感謝したい。以下は事務局の説明である。

―保山市（州と同じ行政単位）の人口は二六〇万人。教会は七十五あり、全てプロテスタントでカトリックはない。教会に来る信者は五万人、七〇%が漢族である。ここでは文革の影響は比較的少なかった。雲南省でプロテスタントの信者が一番多いのが保山である。

―教会本部・学校の活動資金は、寄付・学校の授業料・宿舍費・政府の支援（A、基本 年10万円 B、行事別スポット C、外国からの支援・日本から30万円）により賄われている。学校

の授業は、一年生は漢語などの基礎知識、二・三年生は法律など。学生は一二〇人。外国人神父は十名、英国人など。外国人は神父も信者も日曜日だけに教会にくる。

「カトリック（天主教）」とプロテスタント（基督教）の普及に差がついた要因は、一九八一年の開放改革後の両者の対応の違いによる。カトリックは消極的だったが、プロテスタントは積極的に活動し、政府ともタイアップしながら普及拡大に努めてきたためである。この説明で、貢山県の天主教の教会が少なくとも外観は荒廃し、教会の数も増えていない現実を理解できた。

保山市は新興のコーヒー生産地（サルウィン川流域の亜熱帯気候）として世界のマーケットで認知されつつある。

### 3. 横断山脈は第二次世界大戦の戦場

保山空港に第二次世界大戦・抗日戦争のパネルがかけられていた。中国人の歴史認識あろう。米軍機C-46、蒋介石や連合軍司令官や将官の顔ぶれ、援蒋ルート、騰沖の奪還の写真が空港の待合室に展示されている。保山は第二次世界大戦時、援蒋ルート攻防の中国軍・連合軍の橋頭堡であった。

連合軍はインドから陸路・空路で中国を支援した。レド公路と呼ばれた陸路援蒋ルート（重慶政府の蒋介石を支援）の遮断

のため日本軍（菊兵团）はビルマ東部戦線で死闘を繰り広げました。サルウィン川（怒江）に近いところ「拉孟（現在の松山）」「騰沖」勇猛な日本軍玉砕は年配の方なら記憶にあると思う。攻防の前線となったサルウィン川に架かる惠通橋は高速道路の近くに今も記念として保存されている。

陸路を遮断された連合軍はインド、ビルマの基地から輸送機で支援物資を中国に運んだ。「ハンブ Hump（駱駝の瘤の意味、ここではヒマラヤ・横断山脈を指す）越え」として知られる連合軍の輸送作戦が展開された。多くの飛行機が悪天候のなかサルウィン川流域の山に激突して遭難した。このことはアメリカ人プロテスタント宣教師の著書のなかにも書かれているし、土



地の古老も覚えていた。飛行ルートを誤り北に向かいラッサ近郊に不時着したアメリカの軍用機もある (*Lost in TIBET, The Untold Story of Fine American Armen, a Doomed Plane, and the Will to Survive*, Richard Starks and Miriam Marcut. The Lyons Press 2004)

フィールドが横断山脈というだけでなく、私が興味を持つ理由には三つある。

1. 一九九一年に「菊兵团」の生き残りの元少尉の方とサルウイン川(怒江)流域の戦場巡りをした。関連の戦記物をかなり読んだ。

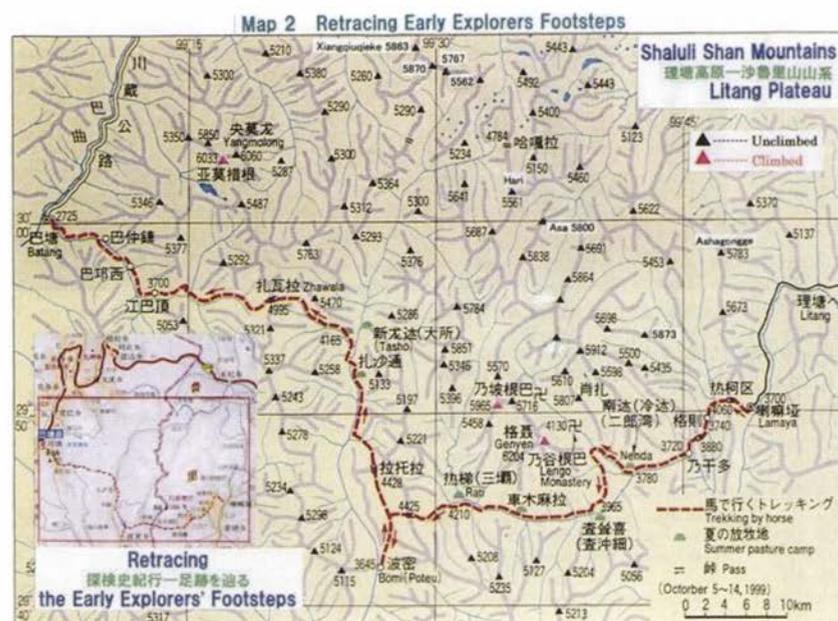
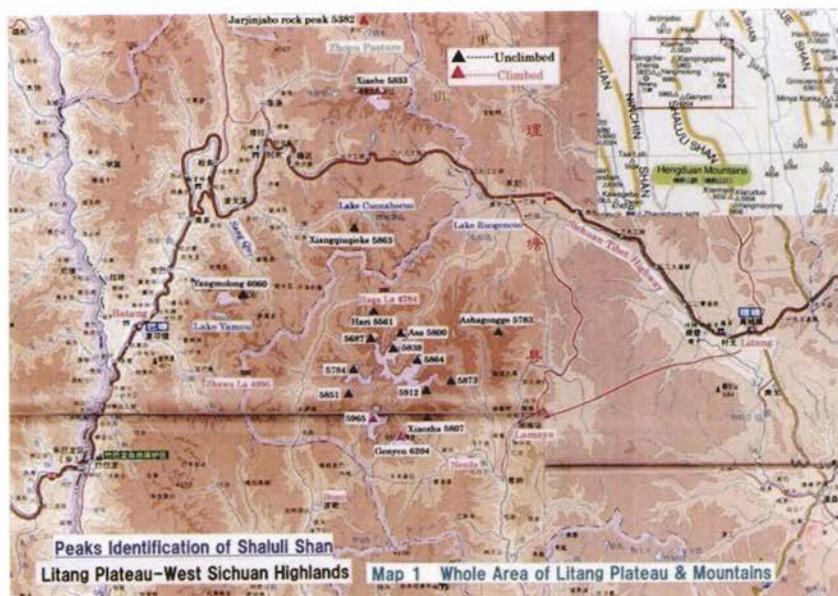
## 2 四川理塘高原・沙魯里山系ピーク同定

雲南北西、怒江流域のキリスト教会探訪を終えて、旅の第2ステージ四川西部高地踏査のため七月十九日に昆明から成都に移動した。二十一日にミニヤ・コンカ西面のツアーから戻ってきた横断山脈研究会の松本征夫先生、長岡正利さん、渡部秀樹さんとお会いすることができた。二十六日には広島から永井剛さんが着いたので、いつもの老年隊で二十七日に理塘高原に向

2. 長年の友人、元アメリカ山岳会会長のニコラス・クリンチさん(カラコラムのヒドン・ピーク、マッシュヤールム、南極のビンソン、崑崙最高峰ウルグ・ムスタークを初登頂)との縁である。クリンチさんのお父さんが前線で連合軍輸送部隊のロジスティックを担当していた。

3. 輸送機が墜落した場所は「深いゴルジュの国」の核心部である。ブランドハンターのキングドン・ウォードが最も心を奪われたところである。キングドン・ウォードは白雪の梅里雪山の輝く峰々より、濃い影を落とす深いゴルジュの深淵により惹かれていたようである、深い畏怖の念を感じながら。また、フレンチ・カトリックがチベットへの布教活動に苦闘した歴史とも重なる部分がある。

かった。二週間かけて巴塘の東、未踏のヤンモローン六〇六〇北東の知られざる五七〇〇―五九〇〇の山塊の探査と馬のキャラバンで理塘高原横断を計画したが予定通りには行かなかった。しかし、理塘高原・沙魯里山系のピーク同定と未踏峰の確認の材料を持ち帰ることができた。と同時に、辺境の急速な発展、開発がもたらす矛盾、東チベット圏の目に見えない



センシティブで不安定な状況と直に向き合うことができた。旅程を辿る前に、強く印象に残った二つのことについて記しておきたい。

### 開発のバラドックスー遠ざかる辺境

私が中国南西辺境に思い始めて二十年、その間の変貌振りは隔世の感がある。国家的重点プロジェクトである西部大開発が進み、僻遠の地にも文明の利便性が浸透しつつある。二十年前は政府の汚い招待所が一軒しかなかった雲南省・玉龍雪山の麓、納西族東巴文化の故郷、麗江は世界遺産になり近代的な大都会になった。西部劇に出てくるような荒ぶれた三三〇〇<sup>1</sup>の高原のチベット族の町、中甸は政府の観光政策の肝いりで「香格里拉(シヤングリ・ラ)」と名を変え観光都市に発展し人口的にチベット村すらつくられていく。徳欽の梅里雪山を取り巻く長江・メコン川・サルウィン川(怒江)の「三江併流」峡谷も世界自然遺産となり中国人観光客で賑わっている。

四川省では成都から至近の四姑娘山周辺はトレッカーとクワイマーで賑わい、山麓にはホテルが林立している。ミニヤ・コシカ山塊や四川の香格里拉・貢嘎雪山も同様である。道路が整備されロープウェイができ、お仕着せの観光開発が加速している。日本からも多くの観光ツアー客が訪れている。

しかし一方では、開発が進むと、文明の便利さが辺境の奥地を過疎化するという皮肉な現象が起きている。自動車道路が急速に整備され、車が馬にとって代わり、昔からある交易路が使われなくなる。モーターバイクが普及し、これも馬にとって代る。今夏の理塘高原踏査では予期しない事態に遭遇した。高原の未踏域横断のため十日間の馬のキャラバンを計画していた遊牧民と交渉したが、な「そんな遠くには行きたくない」と断られた。

一九九九年の秋に我われ老年隊は理塘の西のラマヤから旧道を馬で辿り、ゲニ峰山塊の南側を迂回して二つの高い峠を越え一週間かけて巴塘に到着した。ガベとユック、ウイリアム・ギル、T・T・クーバー、F・M・ベイリー、能海寛などの探検家の足跡を検証する旅であった。この旧道は成都とラサを結ぶ往時の幹線道路である。ネパールからの朝貢使節団も通った。が、今は土地のチベット族さえ旧道を案内できる者はいないと言う。ラマヤから理塘を経て舗装された川藏公路をドライブすれば巴塘まで一日で楽に行ける。馬なら急いでも五、六日かかる。旧道はやがてヤク道になるだろう。

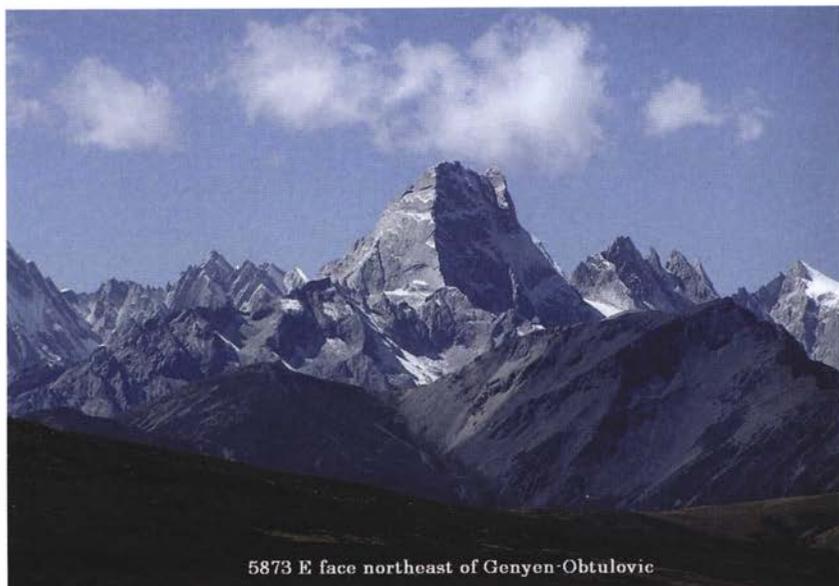
辺境では別の変化も起こっている。冬虫夏草で金回りがよくなったチベット族の拝金主義である。キャラバンは馬からモーターバイクに代わり、法外な値段を要求する。二〇〇九年秋、四川のヤンモーロン六〇六〇<sup>2</sup>は英米登山隊はバイク代を吊り上



野人峰 5592 m南面、双橋谷より望む (大川健三)



牛心山 4942 m南面、双橋谷より



ゲニ峰北東 5,873 m峰東面 花崗岩の岩峰—オブツロビック (チェコ) 撮影

げられただけでなく、B Cの荷物の盗難にあった。以前は素朴なチベット族は我われを家に泊めて歓迎さえてくれたが、ここ二年ほどのカンバの抵抗のせいも、東チベットでは公安当局の指示で外国人を泊めさせないよう規制しているところもある。二〇〇九年の秋に易貢藏布の尼屋で盗難にこそ遭わなかったが、高いバイク代を払わされ、チベット族の民家に泊まることはことごとく拒絶された。チベット問題の影響からか、期待に反して開放から規制へと政治的には逆戻りして、東チベットの未開放地域への入域許可に陰を落としている。

### 将来のクライミング・パラダイス

四川省阿壩州の四姑娘山を擁するチョンライ山系の五五〇〇<sup>①</sup>前後の花崗岩の岩峰群には交通の便がよいこともあって、今や世界的にも有名になり内外のクライマーが押し寄せ賑わっている。日本のクライマーもチャレンジしている。事故は頻繁に発生している。二〇一〇年九月には残り少ない未踏峰の顕著な岩峰・野人峰五五九二<sup>②</sup>をアメリカ隊が初登頂し、山梨岳連隊は岩峰・牛心山四九四二<sup>③</sup>に新ルート<sup>④</sup>の東南壁から登頂した。

チョンライ山系の次に期待されるクライミング・フィールドは理塘高原・沙魯里山山系のゲニ(Geni)山塊の岩峰群である。主峰のゲニ六二〇四<sup>⑤</sup>は一九八八年に日本ヒマラヤ協会隊が初登頂、ゲニ峰北西の鋭峰五九五六<sup>⑥</sup>は二〇一〇年十月に

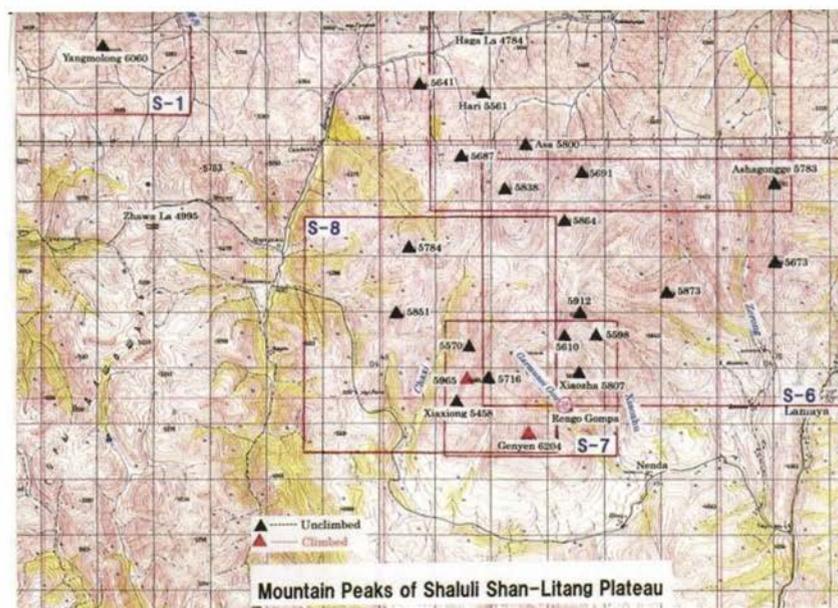
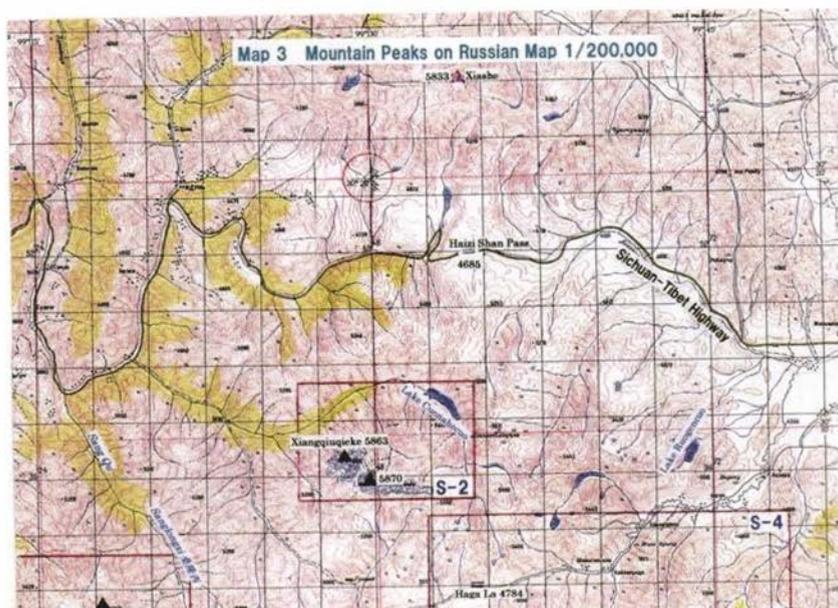
チベットの Labuche Kang 七三六七<sup>⑦</sup>で遭難死したアメリカの Joe Puryear により二〇〇七年に初登頂以来この広範な山塊の五五〇〇―五九〇〇<sup>⑧</sup>のピークは全て手付かずで残されている。その中でゲニ峰周辺の花崗岩の岩峰群は近い将来、チョンライ山系のようにクライミング・パラダイスとして脚光を浴びるだろう。ここでは代表的な花崗岩のピークの写真を示しその将来性を想像して頂こう。

### 理塘高原―沙魯里山 二〇一〇夏

二〇一〇年の四川踏査は思い通り行かなかったことは既に書いた。雲南では異常気象の被害に災いされたが、四川西部高地の天候は比較的安定していて、豪雨による道路の遮断もなかった。計画挫折の原因は、目的の谷は外国人には閉ざされたこと、遊牧民の協力が得られなかったこと、そんな状況のなかでも粘って交渉するという執念が薄らいでしまったことだろう。老年探検隊のボルテージは下がってきたようだ。もうそろそろ境界のオデッセーは終りにしようかと、永井さんとしみじみ語った。

### 成都にて、大川健三さん

七月十九日、昆明から成都に移動する。相棒の永井剛さんが来るまで一週間成都に滞在する。四川大地探検の張継躍と世界



文化遺産の楽山大仏を見に行ったり、雲南紀行を書いたりして時間を潰す。その間に経験したこと、見聞きしたことを幾つか記そう。四川でも大雨の被害は起こっており、大渡河上流の大金川で路線バスが川に転落、乗客三十六名中二十数名が車体もろとも川に流され行方不明になった。四川大地探検は今年（二〇一〇年）は繁盛している。アルバイン・ツァーとタイアップして四姑娘山とミニヤ・コンカのトレッキングに多くのグループを送り込んでいる。

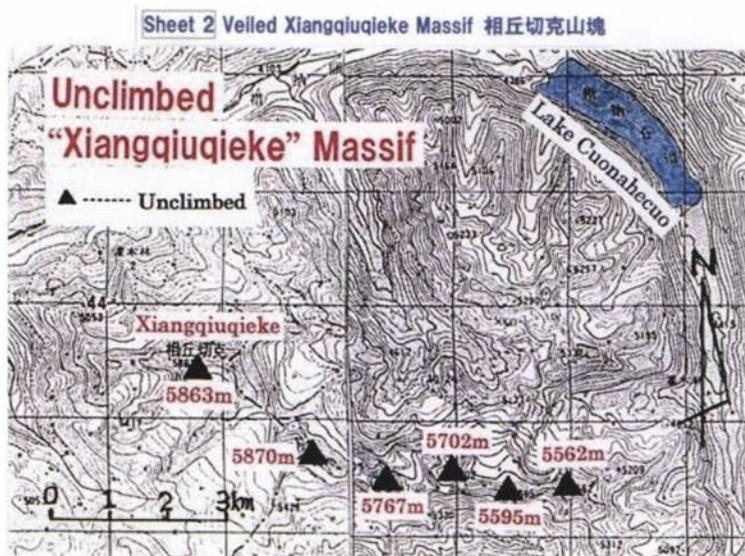
大川健三さんのドキュメントが企画されていたが、中止となった。理解できない理由であるが、日本で放映された場合の中国側のリアクションが大川さんにおよぶことを懸念して止めたという。大川さんによると、(テレビ取材に関連して)中国当局は、外国のテレビ会社が取材し外国で商売することを好まず、中国自身で取材、作品を作って外国に売りたいと考えているので、外国メディアの取材を制限している。大川さんの四姑娘山の美しい写真集『蜀山女神』は、一刷目は一万部刷って完売、コスト百万円、二刷目は五千部では完売、コスト二百二十万円、三刷目は二年後に出版される。この素晴らしい本は外国でも評判である。私は海外の多くの山岳会や友人に送り、またブック・フェアにも展示している。丹巴から成都に出てきた大川さんと張少宏もいれ民族飯店の専門店で中国牛のしゃぶしゃぶを食べる。中国の牛肉は食指をそそらないが、このしゃぶ

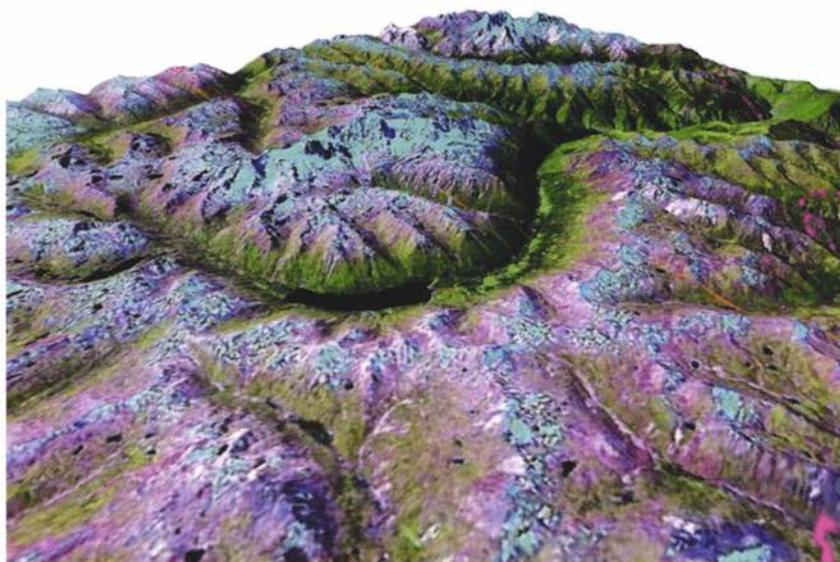
ぶしゃぶは期待以上に美味かった。

中国のテレビは抗日戦争の反日映画を頻繁に放映しているが、期せずしてビルマ・雲南を結ぶ援蒋ルート攻防のドキュメンタリーをテレビで見た。重慶政府救援のためミャンマー・チベット・雲南国境の「ハンブ（駱駝の瘤の意）」横断山脈を越えて物資を輸送する連合軍飛行機の映像も出てきた。数日前に雲南の保山空港に展示されている写真を見ただけに印象的だった。いつものように新華書店と覗いてみる。興味を惹く新しいチベット関係の本は見当たらなかったが、中国の本の出版の急増に驚く。「徳川家康」など日本の翻訳も多い。家康の戦略・戦術を学ぼうというのだから。

#### 西部四川高地・理塘高原へ

探査の当初の計画は巴塘とヤンモロン山塊の北東、川蔵公路南側の相丘切克五八六三<sup>3</sup> (Xiangqikekewu) 山塊解明と理塘高原中心部を横断することであった。相丘切克山塊は二〇〇五年に山梨県岳連傘下の隊が川蔵公路から北面にアプローチし、天気には恵まれなかったが、不鮮明ではあるが氷河湖越に北面のパノラマ写真を撮った。また二〇〇九年の英国ヤンモロン登山隊は南東面のパノラマ写真を撮っている。一九九九年、私と永井さんがラマヤから巴塘へ旧街道を馬のキャラバンでトレースした時に南面の二つのピークを谷筋から写真に収めた。





Satellite image 北(下)から南へ 相丘切克山塊(下) ヤンモーロン山塊(上)

私の知る限り記録はこれだけで、登山や本格的な偵察をした隊は寡聞にして知らない。全て未踏峰である。二〇一一年の秋にニュージーランドの若い男女のペアが相丘切克に挑む。ヤンモーロンに関しては最後の章で詳しく書きたい。

我々の計画では巴塘の付近から山塊北面の大きな氷河湖・措納合措(Cuonahecuo)への谷に入り、北面を先ず偵察し、その後南面を探查し東に向ってキャラバンをして五〇〇〇の峠を越え、さらに哈嘎拉(四七八四)を越えて理塘高原中央部を横断するかなり欲張ったアイデアだった。しかし目論見は外れた。

七月二十七日、成都を出発する。メンパーは永井さんと私の他次の三名である。ガイド・パン・ヤユ 47歳、コック・ツォン・ジンピン 41歳、運転手・ワン・ヨンリヤン 43歳である。パンさんは日本に留学経験があり日本語はほぼ完璧、重慶に住む。四川大地探検の日本担当のベテランで日本人の評判はすこぶる良い。みなみ・らんぼうや関野吉晴の案内もしている。ただ漢族であるため奥地のチベット族との交渉は得手ではなく、センシティブな東チベット辺境の踏査の水先案内には不向きと思う。チベットの踏査はチベット族のガイドを使うべし、という大探検家F・M・ベイリーなど往時の英国探検家の教訓は今

でも生きている。コックのツォンさんは二〇〇九年の英国ヤンモーション隊にコックとして参加しているので、巴塘近辺の谷とチベット族についてある程度知っているが、今回は彼の経験は役立たなかった。

成都から東チベットの玄関口、康定まで七時間、折多山峠（四二九八<sup>メートル</sup>）を越え新都橋を通過して雅龍江の辺の雅江（二六八〇<sup>メートル</sup>）まで長駆五二〇<sup>キロ</sup>のドライブで足を延ばす。標高の高い理塘（四〇一五<sup>メートル</sup>）に泊まらないためだ。雨季にもかかわらず川蔵公路の道路はよい。何十組もの大学生がマウンテン・バイクで西に向かってペダルを漕いでいる。成都から二十五日かけて目的地のラッサに着くという。現代の巡礼だ。

七月二十八日、夏の理塘高原の緑は鮮やかで美しい。東チベット高原のなかでの最も肥沃な高原で水利がよくヤクや馬の飼育に最適の場所の一つで、勇猛果敢なカンバ族の遊牧民が住む。毎年八月一日には有名な「理塘馬祭り」が開催され、外国からも多くの観光客が来る。しかし、今年は突然中止になった。理由は政治的というだけで、誰も説明してくれない。カンバ族の抵抗による不穏な状況があるのかもしれない。

（雅江を出発し剪子湾峠（四六五九<sup>メートル</sup>）、卡子拉峠（四七一八<sup>メートル</sup>）を過ぎ理塘に着く。途中沢山の青いケシの花（ブルー・ポピー）

を見る。天気は安定している。舗装された川蔵公路を西へひた走り海子山峠（四六八五<sup>メートル</sup>）を越えると正面に城砦のような夏塞五八三三<sup>メートル</sup>とトルコ石色の氷河湖が現れる。展望台で自転車の学生グループと記念撮影をする。日本から来たのかと英語で話しかけてくる。明るくてタフな若者だ。公路は下り一方で巴塘に向けて二〇〇<sup>メートル</sup>下る。五つの新トンネルができ、時間は著しく短縮されるようになった。

相丘切克とヤンモーションへのアプローチとしては海子山峠の少し東の①と峠から南西に巴塘に入る②④⑤の五つの谷がある。チベット族の性格や外国人に対す対応は谷により違うことを知っておくべきである。北から順に記す。



川蔵公路を西に向かう学生



夏塞 5,833 m 南面展望台

① 牧民定居点から南への谷―相丘切克北面へ…外国人のアクセスには問題ない。二〇〇五年の山梨隊はこのルートで山塊に接近した。

② 三三六工班から打日隆谷―相丘切克南北両面へ…村人は排他的で、村長の威令が届かない。粗野で危険である。外国人は入らない方がよい郷の副書記長のアドバイスがあった。

③ 三三六工班と党巴の間、桑曲谷・桑隆西―ヤンモロン北面へ…地形的には最適であるが、最も危険な谷で、二〇〇九年英国隊はベイス・キャンプの物資が留守中に全部盗難に遭った。馬とバイクの調達でも法外は要求をされトラブル続出した。以後、巴塘県当局はトラブルを避けるために外国人がこの谷に入ることを禁止している。英国隊の後は、ドイツ隊もアメリカ中国隊も村人に追い返され南面ヘルト変更を余儀なくされた。村人に「外国人がくると天変地異が起こると」恐れられたという。数年前に英国隊はゴンカラ山系の主峰カワラニ五九二二(未踏)で付近のラマ僧から同じ理由で追い返されたケースもあった。

④ 党巴から東/東の谷へ―ヤンモロン北西面へ…ここチベット族は友好的で協力的である。二〇一〇年秋に早稲田太学山岳部学生隊がヤンモロン山塊の未踏の五八五〇(峰頂)峰頂の谷に入った。同時にアメリカ中国合同隊はヤンモロ

ン主峰を狙ってこの谷から峠を越えて北面に入った。

⑤ 党巴から東/南東の谷へ(冲覇經由)―ヤンモロン南面へ…村人は協力的で入山は問題ない。二〇〇〇年六月に中村・永井は初めてこのルートで入りヤンモロン南面を偵察した。以後、党結真拉五八三三(峰頂)を初登頂した横断研京都隊など幾つものパーティー入っていて問題を起こしていない。

谷によって、同じカンパであるチベット族の反応がかくも異なるのは何故か、全く理解できない。



新しく造られているラマ僧院と遊牧民住居





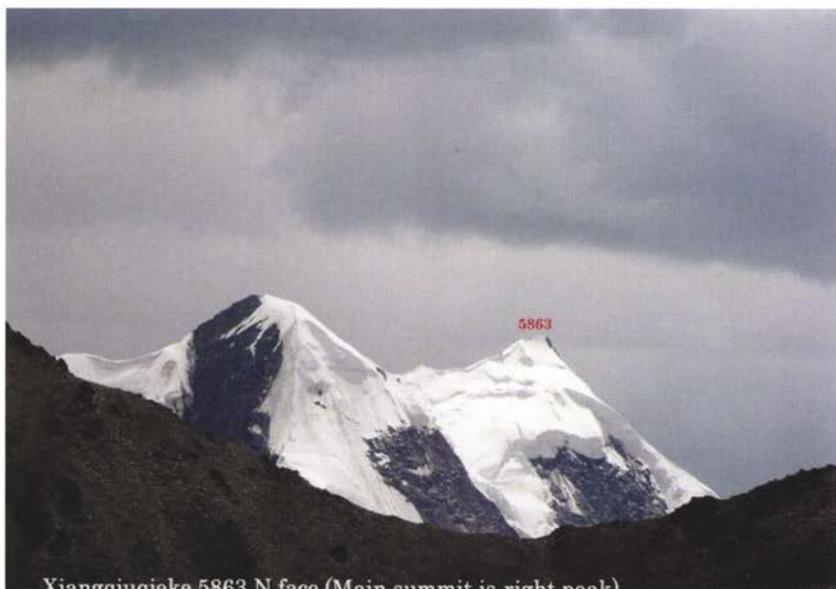
相丘切克山塊南南西パノラマ—Derek Buckle (瑛) 撮影 2009

計画変更、ピーク同定に比重を移す

我われは②の川蔵公路三三六工班から打日隆谷へ入り相丘切克山塊の南北両面を偵察し、その後理塘高原を横断することであった。いったん巴塘に行き情報を探るが良いニュースは得られなかった。村人が受け入れてくれない可能性が高そうなのでリスクを避けて当初の計画を断念する。

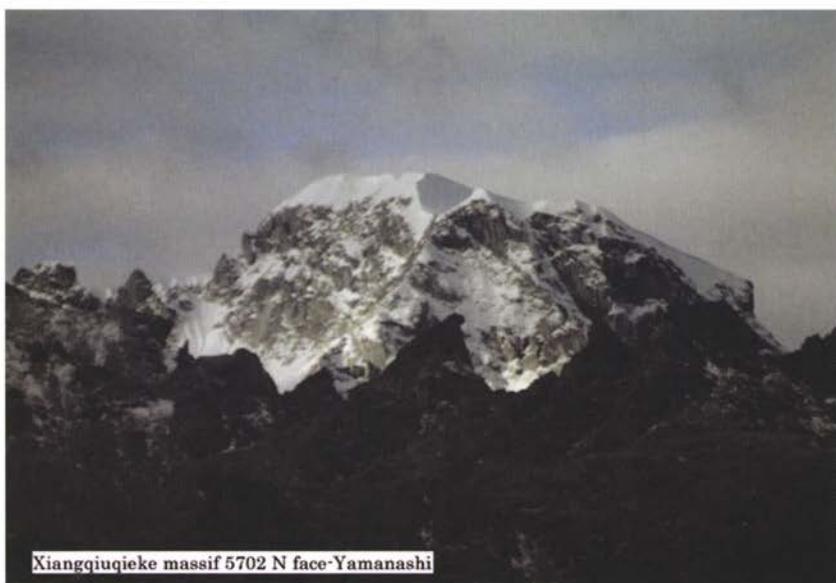
辺境を旅していて困難に直面した時はいつも私の座右名「Anything happens in China, nothing is impossible in China」を自分に言い聞かせて対応策を思索する。お金のかかる東チベット圏の踏査行から手ぶらで帰るわけにはゆかないので、いつも幾つかの代案を用意して行く。今回は理塘高原とその周辺の山域の地図を全て持参した。打日隆谷へ入り相丘切克山塊の南北両面を偵察することができなくなったので、川蔵公路を海子山峠まで戻り、牧民定居点の新しくできたラマ僧院から尾根沿いの上って相丘切克五八六三の北面を写真に収めた後、東隣のの谷から南下して理塘高原を馬で横断しようと考えた。

七月二十九日、巴塘を発って川蔵公路を戻る。雨季にもかかわらず晴れていて天気は安定している。ラマ僧院から三時間かけて四七〇〇の地点まで登り相丘切克五八六三の北面の写真撮ることができたが、天気が急変し突然に雹、霰、強風、雷



Xiangqiuqieke 5863 N face (Main summit is right peak)

相丘切克 5,863 m 北面 (右)



Xiangqiuqieke massif 5702 N face-Yamanashi

相丘切克山塊 5,702 m 峰 北面

鳴に見舞われ、下手をすれば凍死の危険もあった。夏山の恐ろしさを体験した。この日は理塘まで行き泊まる。

七月三十日、理塘から川蔵公路を西に戻りながら南側に時々姿を現すピークを丹念に追ってドライブし川蔵公路を離れて7km南の禾然色巴村（四三一〇）に着く。ここを横断トレッキングの起点と考えた。

横断研の中島さんたちが二〇一〇年の五月に禾然色巴村から哈嘎拉近くまで車往復しているの、我われは馬のキャラバンで理塘高原を横断すべく村長さんのテントを訪れ交渉を始めたが断られてしまった。開発のパラドックスの章で書いたとおりである。

村長さんに「誰か村人で行ってくれる馬方はいないか、その手配をしてくれないか」と執拗に頼んだが、誰も行きたがらないと断られてしまった。馬が使えないなら車道からできる限りピークの写真を撮って帰り、手持ちの資料、写真と突き合せ理塘高原・沙魯里山のピークの同定をしようと方針を変え早速行動に移した。日本ヒマラヤ協会の一九八八年ゲニ峰初登頂、私と永井さんの一九九九年ゲニ山塊周遊、二〇〇〇年ヤンモールン踏査の写真とチェコの登山家のゲニ峰山塊の写真が役立つ。

幸い禾然色巴村から二つの顕著なピーク、アサ（Asa）とハ



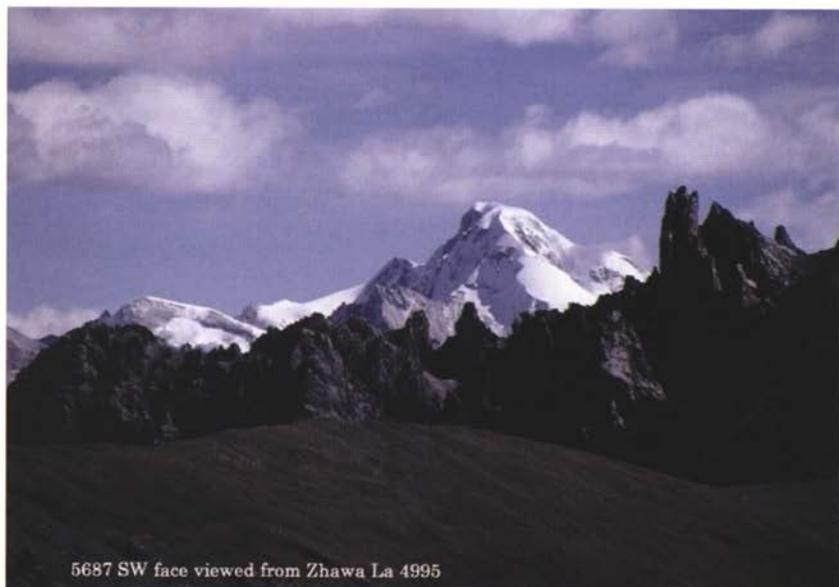
禾然色巴村の村長と馬の手配を交渉



アシャゴンゲ遠望 理塘高原 4,300 m 面

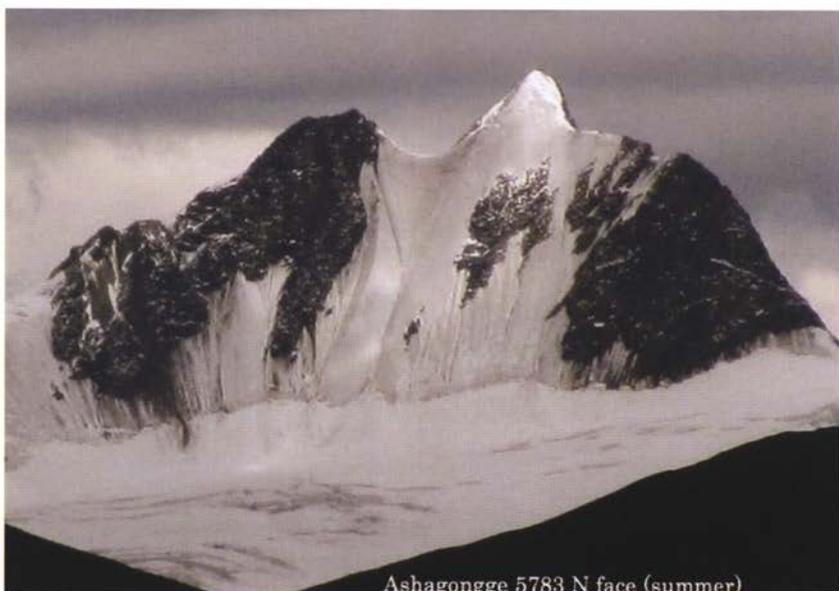
リ（Hati）が近くに見える。アシャゴンゲ（Ashagongge）も遠望できる。山の写真を撮り位置を測定し理塘に戻った。

七月三十一日、朝は晴れていたが曇りだす。理塘高原を車で北から南に縦断すべく再び川蔵行路を西に向かい、禾尼（ホニ）から格則、ラマヤに通じる道に入ろうとしたが、橋が落ちていて車は通行不能、仕方なくまた理塘に引き返し、ラマヤへの旧道を行く。一九九九年には極端な悪路で理塘から西に向かってラマヤまでのドライブに十時間かかったが、今は舗装こそされてはいないが道はよく整備され僅か三時間で着いた。途中の鍛冶屋三兄弟の峠（四八三〇）を少し下ったあたりからゲニ峰山塊東面の大パノラマが南北に展開する。写真日和ではないが、チャンスを見つけた。ラマヤに一泊して八月一日に理塘に戻っ



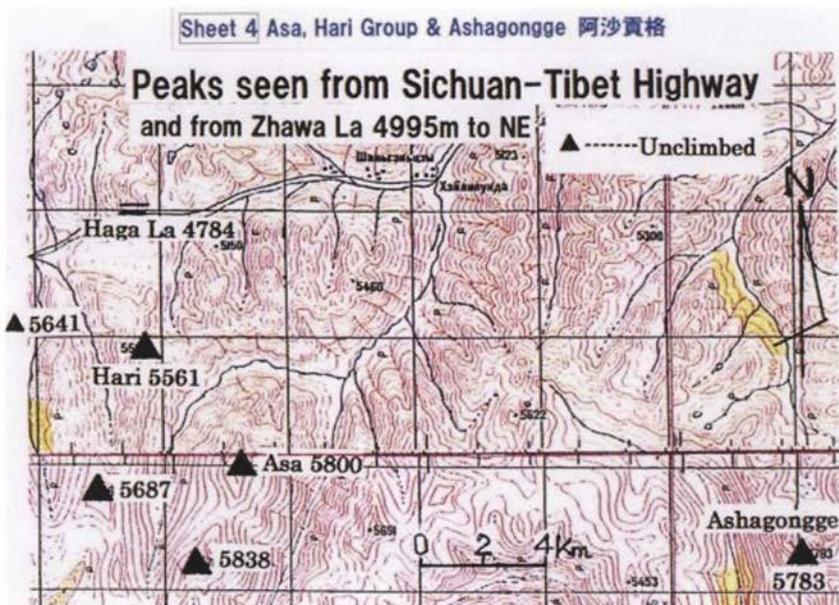
5687 SW face viewed from Zhawa La 4995

5,687 m 峰南西面 扎瓦拉 4,995 m より望む



Ashagongge 5783 N face (summer)

アシャゴンゲ 5,783 m 北面



た。

ゲニ峰六二〇四は一九八八年に日本ヒマラヤ協会隊により南面から初登頂された。数年前にイタリア隊が東壁の新ルートから第二登、その後アメリカの有名なクライマー、チャーリー・ファウラーとクリストフ・ボスコフが遭難死し話題を播いた。ゲニ峰北側には冷谷寺(乃谷根巴)谷を圍繞する五五〇〇―五九〇〇級のクラスの際立った岩峰が綺羅星のごとく連なっている。地図と写真に語ってもらおう。まさにアルパイン・パラダイスである。

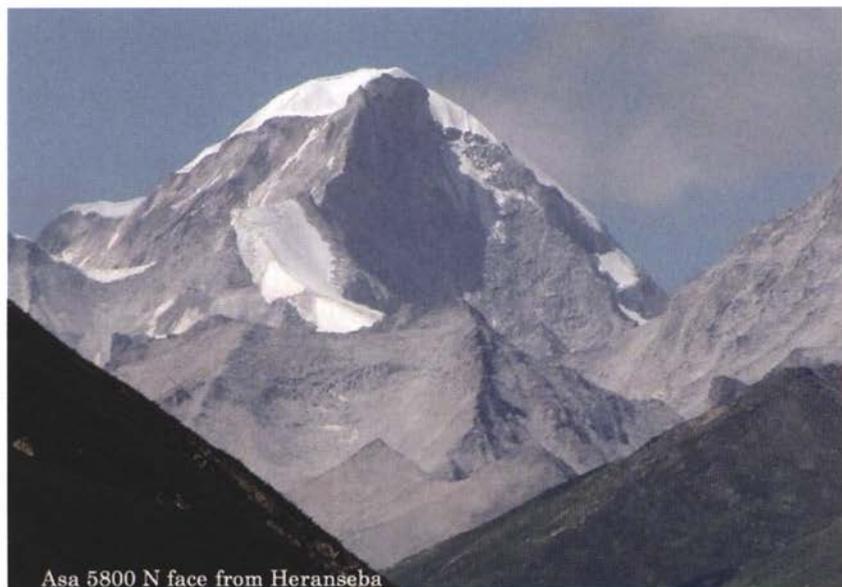
ご覧のように、クライマーにとって垂涎の知られざる岩峰群が眠っている。これらのピーク同定の写真と地図を世界に発信したところ多くの反応があった。クリス・ボニントンとジョン・ハリソンⅢ(アメリカン・アルパイン・ジャーナル編集長)のメールを原文で紹介する。

Tom,

A belated thanks for your wonderful information on all those peaks and fascinating areas. The thoroughness of your exploration and reportage is truly magnificent.

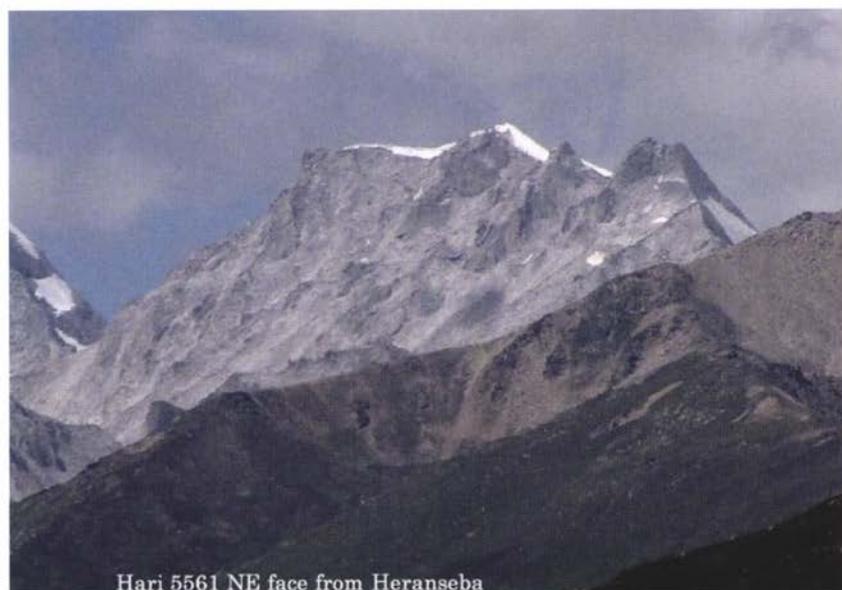
Very best wishes,

Chris Bonington



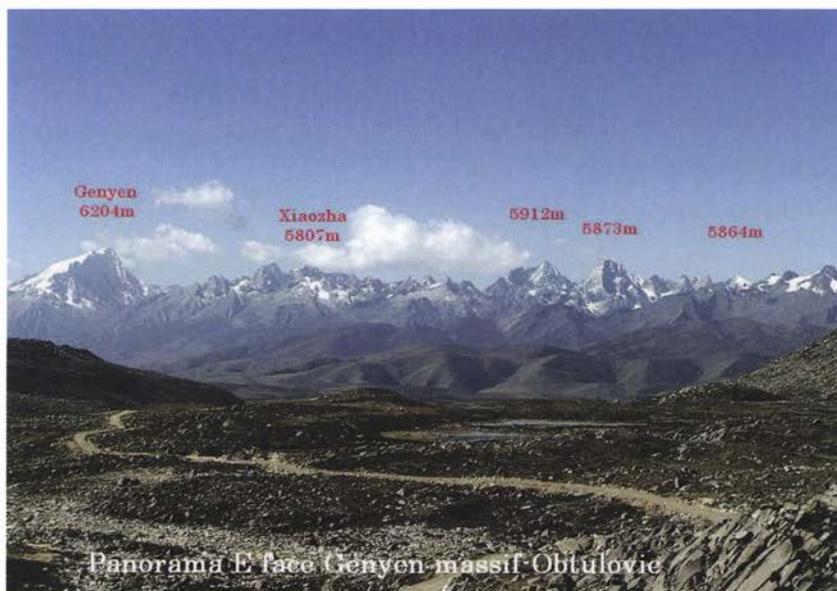
Asa 5800 N face from Heranseba

アサ 5,800 m 北面

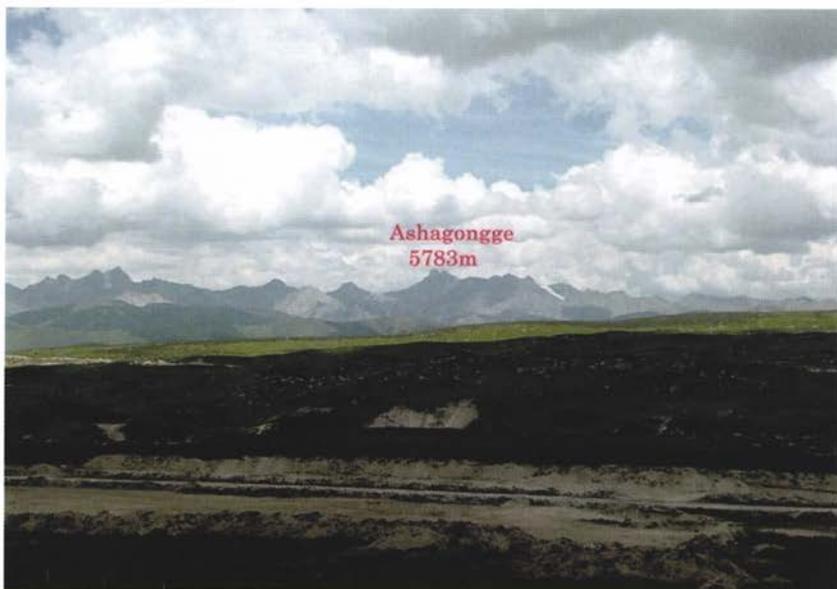


Hari 5561 NE face from Heranseba

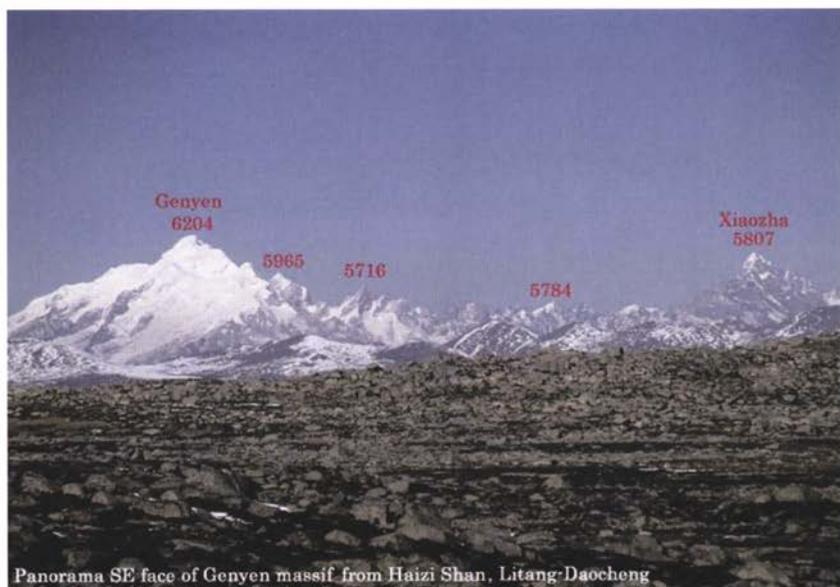
ハリ 5,561 m 北面



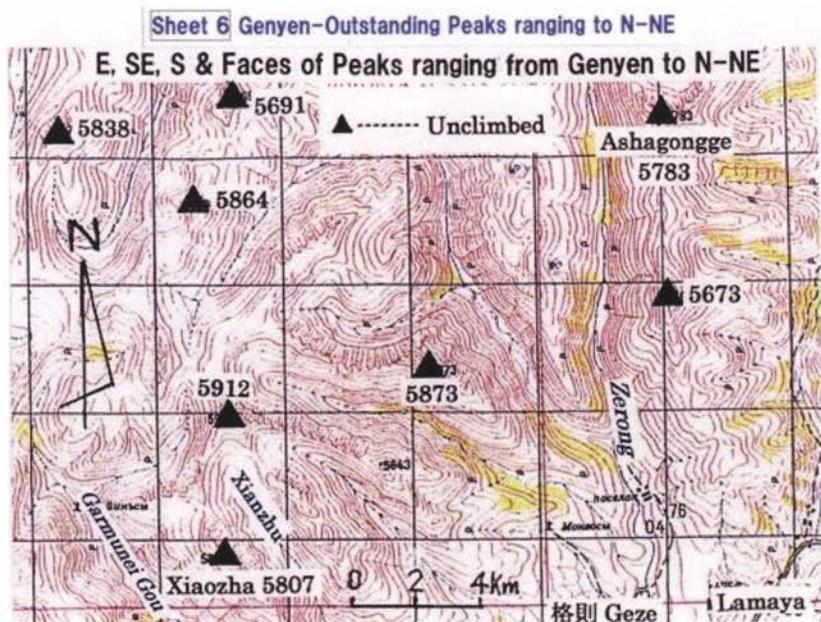
鍛冶屋三兄弟の峠 4,830 mから下った辺りから望むゲニ峰山塊東面のパノラマ (1)

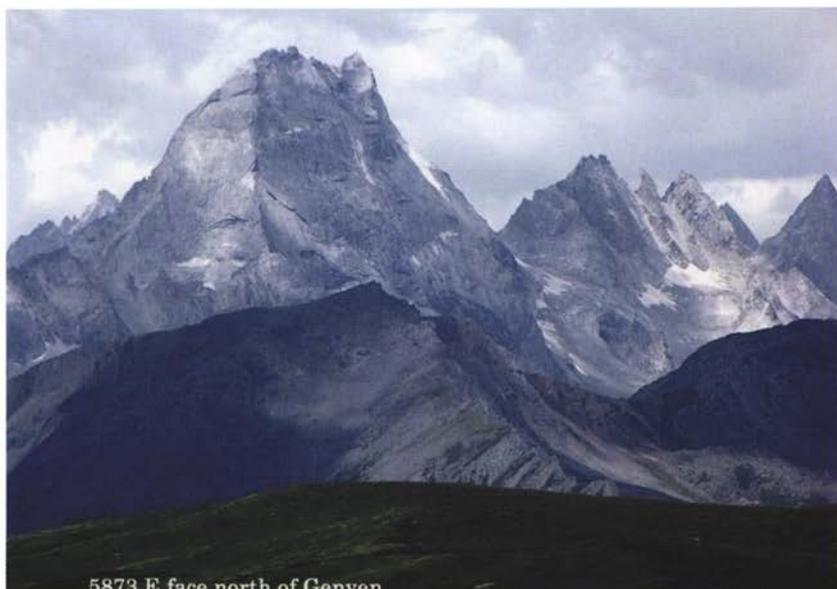


鍛冶屋三兄弟の峠 4,830 mから下った辺りから望むケニ峰山塊東面のパノラマ (2)

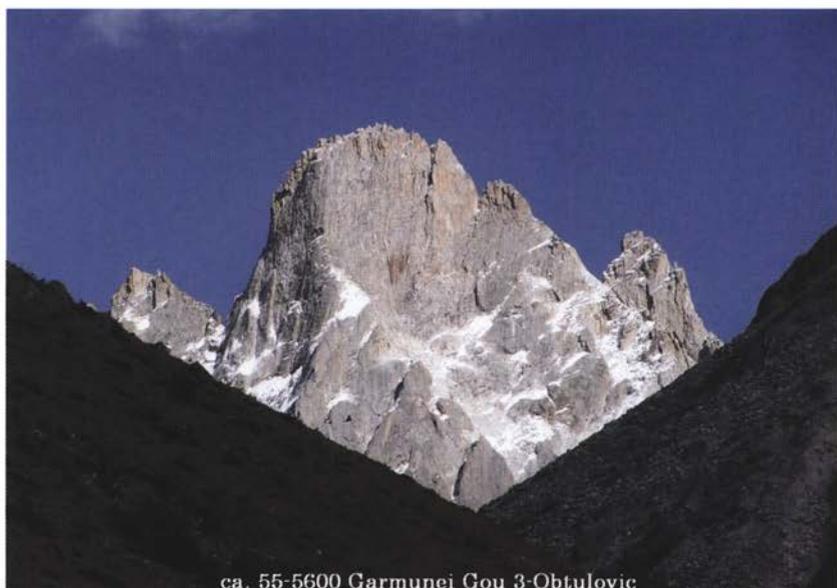


理塘から稻城への海子山高原からみたゲニ峰山塊南部の東南面のパノラマ (2008)

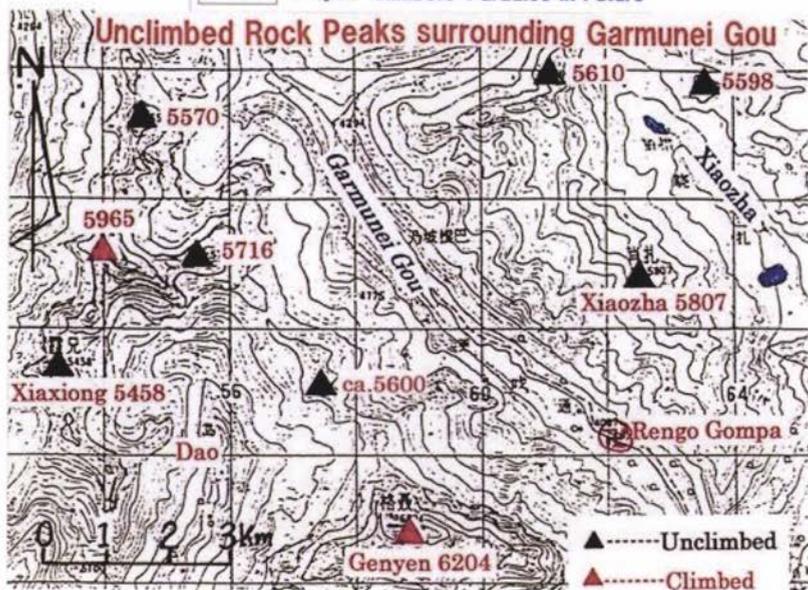




ゲニ峰北東 5,873 m峰東面



ゲニ峰の北 ca. 5,600 m峰



Hi Tom,

Wonderful photos, thanks!

Can you tell me what all those flags/colors are in the Nagai & Nakamura photo (left side)? How do they stand up without trees?

I'm particularly impressed by the "5873m E face north of Genyen" photo. Do you know the rock type-granite? Size of cliff? (花崗岩、壁の高さは五〇〇一六〇〇mと返事)

Looking forward to your report and maps!

Cheers,

John

John Harlin III

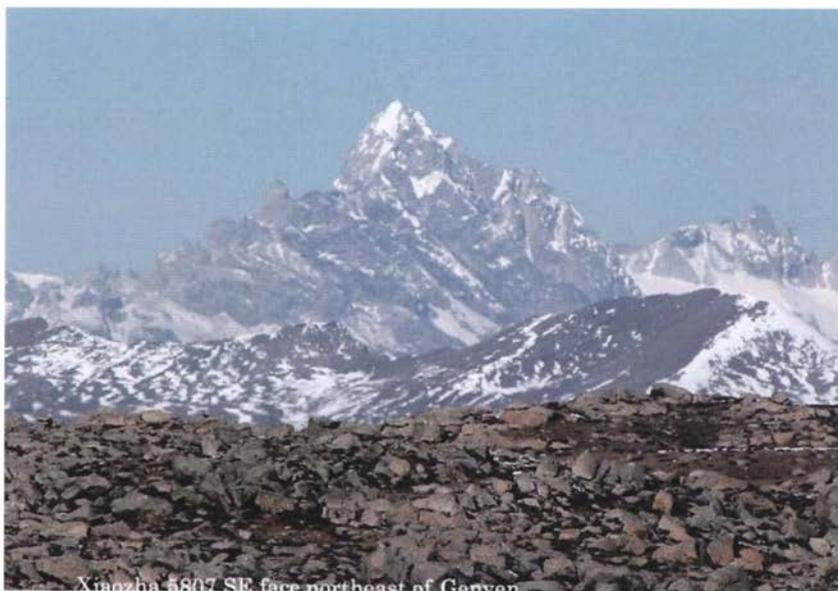
Editor, *American Alpine Journal*

ゲニ峰山塊へのアクセスはそう不便ではない。遠くない将来、四姑娘山のチヨンライ山系の岩峰群のようにクライマーが押しかけてきて賑わうだろう。

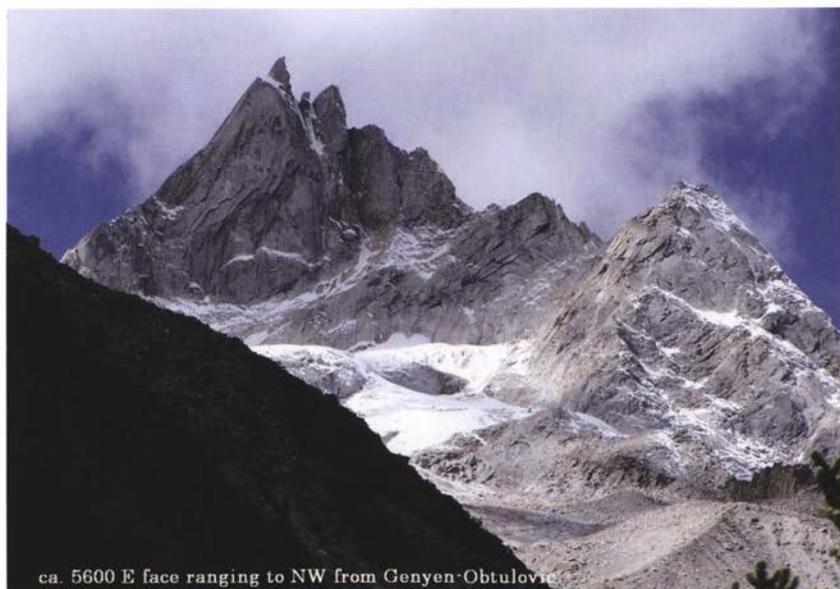
ゲニ峰の北東、冷谷寺(乃谷根巴)谷周辺だけでなく、その北側にも半ば隠れたピークも多い。一九九九年秋に永井さんとゲニ峰の南を迂回し昔の交易路を馬で辿り、往時の探険家たちも越えた扎瓦拉四九五をを経て巴塘までキャラバンをした時に



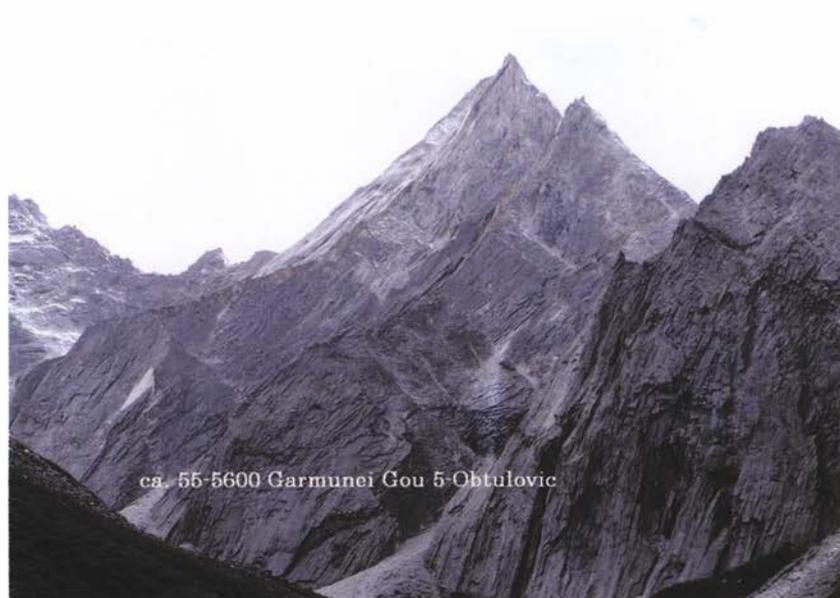
ゲニ峰北北東 5,912 m峰東面



ゲニ峰北東 肖垭 5,807 m南東面



ゲニ峰北西 ca. 5,600 m 東面



ゲニ峰の北 5,600 m 峰



理塘高原の新しいラマ僧院の一部面



理塘高原の新しいラマ僧院

撮ったゲニ峰北西のピークをも紹介する。

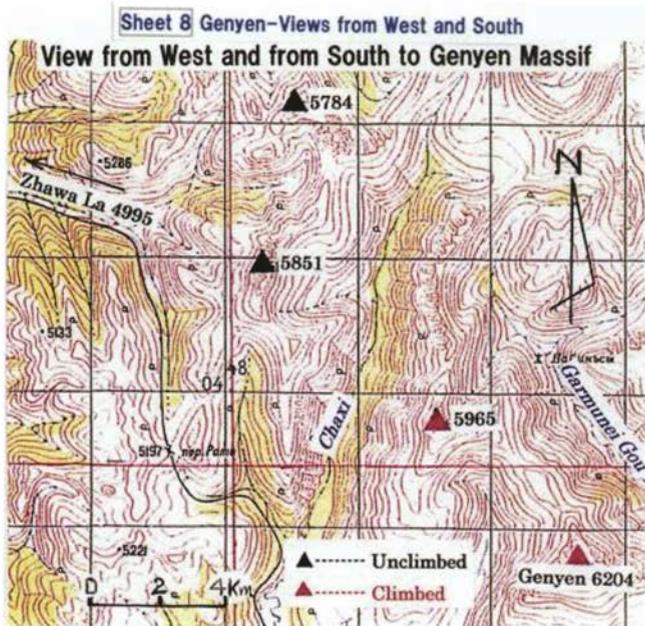
央莫龍ヤンモーロン山塊―難攻不落の主峰六〇六〇トイ

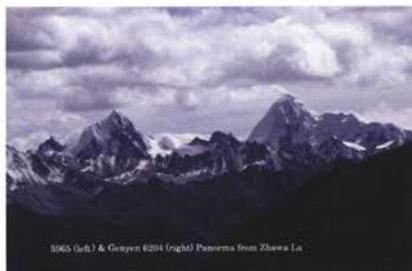
先ず地図と写真をご覧頂きたい。写真は前半が山塊の南面、後半が北面である。

ヤンモーロン山塊において登山と踏査が始まったのは一九九一年になってからである。クロニクルを概略記す。

一九九一年…日本大学工学部の山岳会が北面から主峰6060mに挑みC1、C2と進めたが悪天候と雪崩の危険のため5500m地点で退却した。

二〇〇〇年…6月に中村、永井が初めて南面を偵察した。

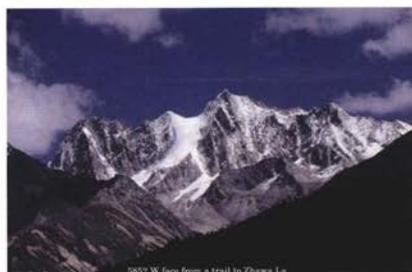




5,965 m峰西面 (左) ゲニ峰 6,204 m西面 (右)



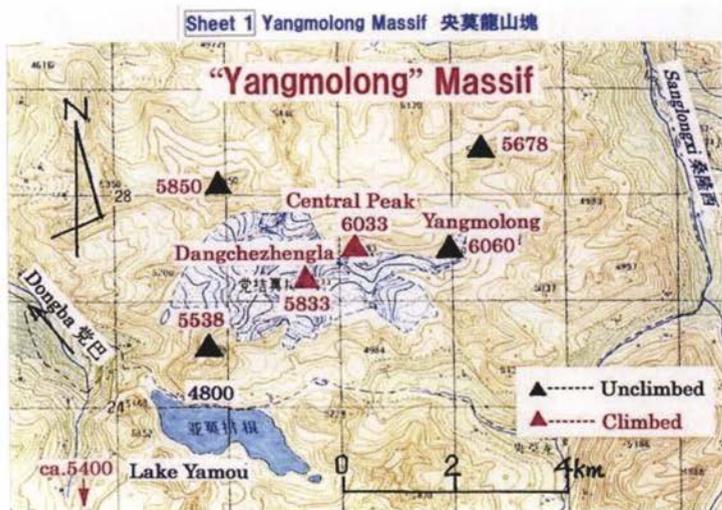
5,838 m峰 (右) 5,784 m峰西面



ゲニ峰北西 5,851 m峰西面



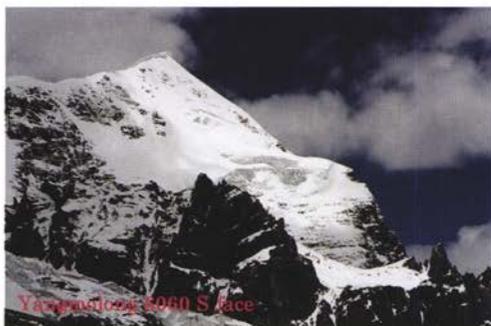
相丘切克山塊 5,702 m峰南面



2002年…韓国隊が中央峰6033m (Makara) を中央氷河からコルにて西稜經由のルートで初登頂したとの情報があるが未確認。アメリカン・アルパイン



党結真拉 5,833 m (左) 中央峰 6,033 m (右) 南面



ヤンモーロン主峰 6,060 m 南面



党結真拉 5,833 m 南面



5,858 m 峰南面



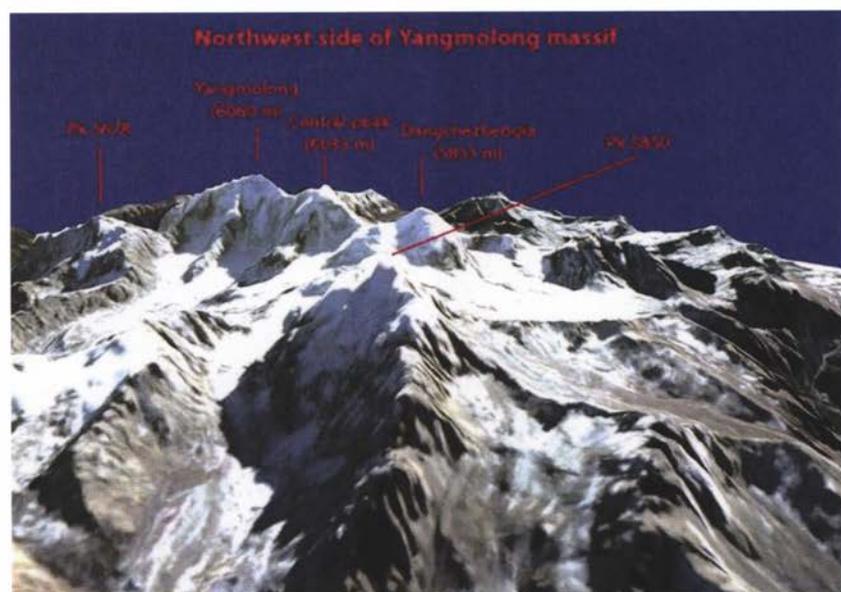
5,538 m 峰南面



亜莫措根湖 4,800 m



Satellite image 山塊北東面



Satellite image 山塊北西面

ン・ジャーナルに載った記事に疑問を呈する向きもある。四川登山協会に問合せるも返事がない。西稜はサミット・リッジが急峻な岩稜になっており登攀は困難だろうとアメリカ隊の見方である。

2003年…6月に横断山脈研究会・京都隊が党結真拉5833mを初登頂。ルートは南面からで中央氷河を登り、中央峰6033m (Makara) とのコルから東稜経由で頂上に立った。

2007年…5月に中国隊3名が日本隊と同じルートで党結真拉5833mを第2登、しかし、登頂後下山の時にトップ・クライマーとい隆われていたりユウ・シアンが滑落し行方不明になるとい事故が発生した。

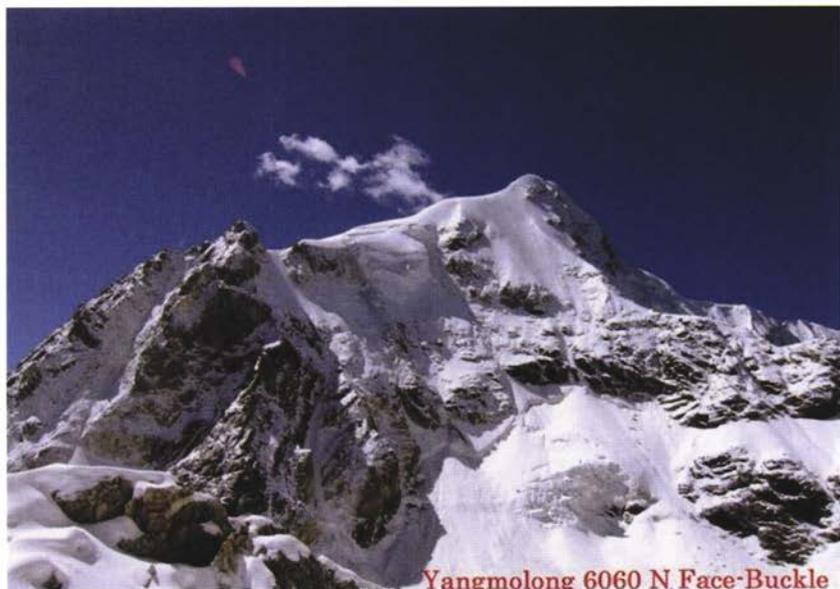
2007年…10月に4名の英米隊が北面に入った。まず4400mにBC、4900mにABCをつくり未踏の5850mを試みたが南東の5600mの衛星峰を初登頂し引き返した。その後新ルートで北面から党結真拉5833mの第3登をする。次に遠征の主目的のヤンモーション主峰6060mをアタックしたが成功しなかった。5100m地点にBCを移し、北稜(頂上直下のスパー)を5400m

まで登ったが、厳しい寒さと不安定な雪の状態のため断念した。隊長は中村の友人の Dave Wynne-Jones である。

2009年…秋に Derek Buckle と Dave Wynne-Jones の英国隊は再び北面からヤンモーション主峰を狙うが、前述のように桑曲・桑隆西のチベット族の村人との問題が発生した。北稜に挑んだが成功しなかった。

Jon Otto 率いる米中(アメリカ・中国)隊は桑曲谷から追い返されて南面に入った。ヤンモーション主峰直下の南壁に取り付いたが、不安定な下部岩壁を突破できず敗退した。ドイツ隊も南面に入ったが隊員が病気に罹り引き返した。

2010年…11月に Jon Otto、Tim Boelter (カメラマン) と中国のクライマーが北面からヤンモーション主峰に挑んだ。アプローチの楽な桑曲谷は入ることが禁止されているので、党巴から東の谷に入り5000mの峠を越えて北面に入った。峠からの下り急峻で数回のアップザイレンが必要だったという。苦労して北稜に挑んだが2007年の英米隊の5400mとほぼ同じ場所が最高到達点だった。桑曲谷が閉ざされている現在、北面に入るアプロー



Yangmolong 6060 N Face-Buckle

ヤンモーロン主峰 6,060 m 北北東面



中央峰 Makara 6,033 m 北面



ヤンモーロン主峰 (左) 中央峰 (右) 北面



5,678 m 峰西面



5,850 m 峰東面

チ・ルートを見つけた意義は大きいと Dave  
Wynne-Jones は評価している。

かくしてヤンモーロン主峰は未だに登頂を許していない。2011年は誰がチャレンジするだろうか。この沙魯里山系ピーク同定の記述は写真とともにアメリカン・アルパイン・ジャーナル (A A J) 二〇一一年号に掲載される。

## エヴェレスト―発見と命名の歴史

金子 民雄

(一)

ジョージ・エヴェレストが、一八三〇年に測量局長官に就任し、最も大きな業績を遺したのは、インド半島の先端からヒマラヤ山脈に達するまでの大三角測量網を完成させ、地球回転楕円体、ジオイドを算出したことだった。このことによつてヒマラヤの高峰の正確な高度が測定されるようになった。エヴェレストは一八四三年に測量局を退職し、その後はアンドリユー・ウォーが引き継ぐことになった。

ヒマラヤの高峰は次々と測定されていったが、山の大半は当時入国が一切禁止されていたネパール領域内にあり、なかでも第15峰(XV)とされていた「ピークが、一八五二年の計算によつて、これまで知られていた中で最も高い二九、〇〇二フィート(八、八四〇メートル)と算定された。

しかし、このピークがネパールかチベットの領域内にあつたため、この山になにか現地名が存在するのかどうかも分らず、インド測量局も一応は探したもの、一八六五年まで不明とされた。そこでアンドリユー・ウォーは前任者のジョージ・エヴェレストの業績をたたえ、この山にマウント・エヴェレストと命名する案が浮んだ。しかし、勝手に独断で命名はできないので英国地理学会とインド政庁から正式に認可してもらい、ここで初めて山名が決定された。

ただしとくに注意しなくてはならなかつたことは、エヴェレストとはあくまで人名であり、この山の名称はマウント・エヴェレストであることである。当時、インドを植民地にもつ大英帝国にとつて、この決定権はたとえネパールの領域内にある山であつても、他からの干渉は一切受けつけられないものを持つていた。

世界最高峰が発見され、新しい名称も付けられたものの、この山は謎にまつまれ、一向に新しい情報がなかった。ましてこの山塊に接近することもむずかしく、第一この山に人類が登れるかどうか、ましてこの山頂部に酸素があるかどうか不明だった。このため登山計画は夢のまた夢で、二十世紀に入るまで実現化しなかった。

エヴェレストに本気で登山計画を立案したのは、一九〇七年、C・G・ブルースで、彼は一八九三年という遠い昔、ヤングハズバンドに登山話を持ちかけたことがあった。しかし、今回も計画倒れで終わってしまった。一九〇四年、チベット使節のあと、これに参加したライダー、ローリングがツアンポー川湖上の探検調査の際、チベット側（北）から南にエヴェレストを遠望したことがあり、彼らもエヴェレスト登山計画を立てたものの、一九一四年に勃発した第一次大戦で実現しなかった。

四年間続いた第一次大戦は、一九一八年十一月によくやく終結したものの、ヨーロッパはすっかり疲弊しており、国土も荒廃していた。こうした暗い世相の中で少しでも明るい社会を取り戻したいという願いが、英国人の中でも起こりつつあった。なかでもいまだ謎にすっぽり包まれているマウント・エヴェレスト登山計画案が、英国王立地理学会（RGS）の中で生まれ始めた。そこで時の会長サー・トーマス・ホルデイクの名の下で、一九一八年、この登山計画の要書がロンドンにあるイン

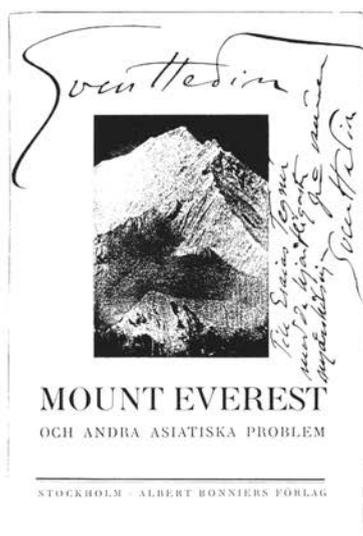
ド事務省宛に提出された。この登山計画はアルバイン・クラブとの共同事業案で、ともかくこれはインド相からインド政府へ伝えられ、いろいろ困難な問題もあったが、なんとか折衝も済んで、一九二一年早々、グライ・ラマからチベット領域内を通過してもよいという許可が得られた。

一九二一年、いよいよ登山計画は実行に移され、ハワード・ベリーの偵察隊がインドからチベットに向った。当然ながら英国の新聞や雑誌、またジオグラフィカル・ジャーナル誌やアルバイン・ジャーナル誌が、こぞってエヴェレスト（注、本文では簡単にエヴェレストと記すことにする）の記事を報道したり、紹介し出した。これは英国であったが、この一方、いよいよ本格的に登山隊がエヴェレストに向う一九二二年の五月になると、北欧スウェーデンの新聞 (*Swenska Dagbladet*) 紙にエヴェレストに関する記事が連載され始めた。これは月に一、二回程度のものであったが、執筆者は英国でもよく知られた、チベット探検家のスヴェン・ヘディンだった。

なぜヒマラヤの山々とは関わりのないヘディンが、エヴェレストのことなどにふれ始めたのか、だれもおかしく思えてくるであろう。ヘディンは、一九〇六―一八八年に南チベットの探検調査中、北側からエヴェレストを遠望する機会があった。この新聞の連載記事は、エヴェレストの登山について順次紹介する

一方で、とくにこの山の名称の歴史的な由来とその背景を論じたものだった。あくまで歴史地理学の見地から眺めたマウン・ト・エヴェレスト史ではあったのだが、次第にこの内容は決して単純なものではなくなったことだった。エヴェレストとの関わりの深い英国にとつて、たかがエッセー風の記事とはいえず、ただ傍観し、放置しておく訳にいかない問題になっていったようである。

ヘデインの新聞連載記事はそう長いものでなく、一九二二年にはこれを纏めて一冊の冊子として出版された。『マウン・ト・エヴェレストと二つのアジア問題』(Mount Everest och andra



スヴェン・ヘディン「マウン・ト・エヴェレストと二つのアジア問題」ストックホルム 1922

*statistisk problem*. Stockholm 1922) がこれで、これには別に中東の政情を論じた論文との合併本である。

これはスウェーデン語で出版されたため、一般に広く流通しなかったが、翌一九二三年にはこの一部を増補改訂して、ドイツ語版『マウン・ト・エヴェレスト』(Mount Everest, Leipzig 1923) が出版された。英国のエヴェレスト登山は前後三回派遣されたものの、一九二四年にはマロリーとアーヴィンの遭難に加えて、ダライ・ラマの登山中止の勧告が出されて中断の己む無きに至った。

英国の登山は失敗に終わったが、三回に亘る公式報告書が公刊され、この詳細な記録をもとに、一九二六年、ヘデインはさらに前の版を増補してドイツ語(第二版)を出版した。この中でとくに注目されたのが、マウン・ト・エヴェレストの発見とその名称についての詳細な探究だった。

ヘデインはちょうどこの頃、前回(第三回)のチベット探検の科学報告『南チベット』(Southern Tibet) (全十二巻)の執筆中で、チベットに関する入手できる限りの新旧の地図を調べていくうち、一七三三年、パリで刊行されたダンピルの地図にぶつかった。これを精査していくうち、ちょうどエヴェレスト山群にあたる辺りに、モン・チョモランクマという地名(山名)が記入されていることに気付いた。

そこでヘデインは、エヴェレストには従来現地名がないもの

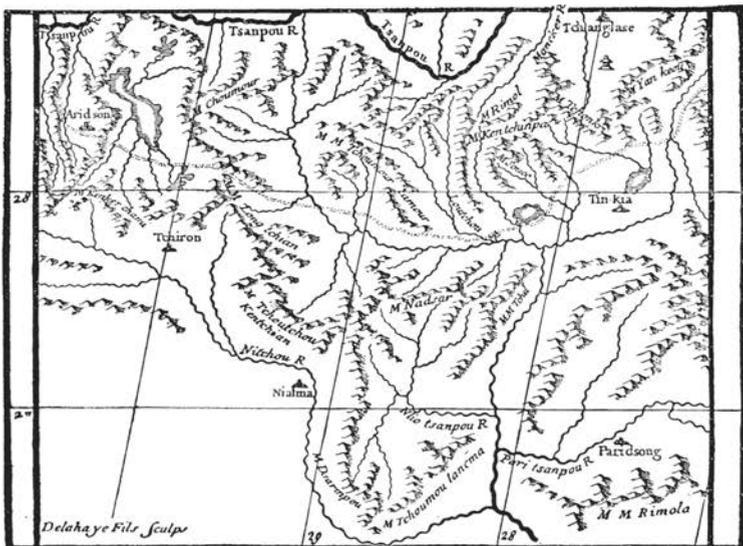
と考えられていたが、実際には山名は実在したのではないか、そう考えても間違っていないことに気付いた。これは一見単純なことにように思えるが、実際には大変煩わしい問題が絡んでくるものだった。

エヴェレストの問題が単なる山のことだけではなく、抜い方によっては抜き差しならない深みに陥ち入りかねないものだった。これには英インド測量局を抜きにしては論じられないものだったからだ。この山の測量も、測量値の決定も、さらにその上このピークの命名まで全て測量局が関わってくる。そんなことと一切無視してしまうか、そうなつたらこちらの議論はチリ紙同様になりかねない。ではどうするか。ここが考えどころだった。

(二)

世間一般では、たとえエヴェレストについてすぐれた論評を喋ったり発表したりしたところで、ほとんど問題にもされない。ではどうしたらよいのか。ここでもヘディンはきわめて外交的手段に訴える、というよりか使ったといえる。インド測量局とのあまり人目につかない所での、とりあえず直接折衝だった。

インド測量局に永年勤務し、一九一〇—一九年まで測量局長官を勤め、すでに引退していたものの、当時、ヒマラヤやチベットの子字引きとまでいわれた人に、サー・シドニー・バラ



Auschnitt aus d'Anvilles Karte von Tibet (1733).

ダンヴィルの地図 (1733年)

ドがいた。バラードは故郷で隠棲生活を送っていたが、ヘディンとは測量局に勤務していた頃から、個人的に手紙のやりとりをする親しい関係にあった。だがこの二人の間には思い出としての回想話が残っていないので、個人的な詳しいことがまるっきり不明である。ただ幸いヘディンに宛てたバラードの書簡がかなり遺っている。その中にエヴェレストにふれた部分があり、ここからまったく予想しなかつたような局面が展開することになる。

ヘディンは、第一次大戦のときドイツ側に加担したことから、英国側と関係が悪化し、そのためもあってヘディンがいくらエヴェレストについて論陣を張っても、英国側はまったく黙殺して相手にせず、コメントひとつしなかつた。

こうした中で、一九三〇年五月十六日付のバラードからヘディンに宛てた手紙がある。この中でようやくチベットにおける山脈の名称や、エヴェレストに関する意見が述べられ、次第にエヴェレスト問題に議論を移している様子が伺える。ヘディンがエヴェレストについて発表した一九二二年当時から、すでに七年も八年もたっている。なぜこの時期になって急にふれ出したのであろう。これが一つの謎である。これまであえて無視したのか、それとも知らなかつたのか。まずバラードの書簡をみることにしよう（未公開のもの）。

「拝啓

一八九九年から一九一〇年までの幾年か、私はインド測量局のあるデラ・ダンで、地図局の管理をしていました。デージー、ローリング、ライダー、スタインといった人たちと共同作業をしていました。私はすでに十一年前に測量局を引退しておりますので、いまでは測量局を代表して語る資格がありません。

しかし最近になって、一九〇六年にハイデンと共同執筆したヒマラヤの地理に関する刊行物【注、*A Sketch of the Geography and Geology of the Hindkya Mountains and Tibet, Calcutta 1907-08*】を、改訂して出さないと打診されました。」

この手紙は、当時、スウェーデン⇨中国共同の探検隊、西北科学考察団を率いて北京に滞在中のヘディンに宛てて出されたものだった。この中で、チベット領内にある山脈名をなんと呼んだらよいのかで、いま大変苦労しているところだと心中を告白している。ただここでは肝心のエヴェレストについてはふれられず、専ら山脈名についての言及だったが、これから問題になるエヴェレストの名称問題の伏線だったようである。

彼はこう言っている——チベット人は一般に山脈に名を付けないから、山脈中にある山の名を取り出して、それを山脈にするのもふさわしくない。例えば、カイラス山があるからカイラス山脈とするのはよくない。「われわれが名付けたカ

I beg to remain  
Yours very Sincerely  
S. Burrard

I already possess  
Margerie's return  
of your works.

TELEPHONE  
FARNBOROUGH, HANTS.

FOXHILL,  
SALISBURY ROAD,  
FARNBOROUGH,  
HANTS.  
England

August 13<sup>th</sup>  
1930

Dear Sir Sven Hedrin

I have to  
express to you my  
grateful thanks for  
the valuable present  
you have made to me  
of your works. I have  
received the volumes  
all in good order  
and splendidly packed

前インド測量局長官だったサー・シドニー・バラードのヘディング宛の手紙 (1930年8月13日付)  
ヘディングとの間でエヴェレストの名称の問題で手紙のやりとりがあった。

イラス山脈というのは、あなたの広大な山脈であるトランスヒマラヤにはふさわしくありません」と、言う。チベットを東西に延びる横断山脈の名称にはこれは適当でなく、ただトランスヒマラヤという名称は、ヨーロッパ側からすればよいだろうが、チベットの名ではない。これに替わるような名を捜すことで、将来、チベット人が貢献できるようになって欲しい。そして、地理教育が受けられるような環境になるよう、儂い希望を托しているとも言っている。どうやら暗にエヴェレストのことを指して言っているようにもとれる。

これからわずか一ヵ月足らずして、バラードはふたたびヘディンに宛てて長文の手紙を書いた（一九三〇年六月二十八日付）。ここでもチベットの山脈名についてふれているが、これは省略して問題のエヴェレストに移ろう。

「貴著『トランスヒマラヤ』三巻を私は愛読しており、すっかり仲良しになりました……。あなたがダンヴィル、ドウ・ハルデについてふれられていたことから、ロンドンに出かけ、あなたのお書きになった『南チベット』を調べてみました。そこでチヨウモウ (Tchounou) という名は見つけましたが、チヨウモウランクマ (Tchounou-lancma)、あるいはザリンググーツォ (Dzaring-Tso) は見つけられませんでした。この名が七十一一年のラマの測量でマウント・エヴェレストに与えられたもので

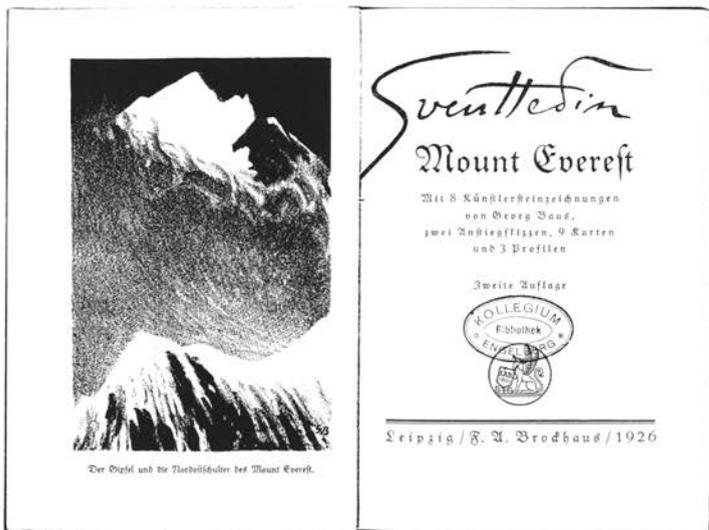
あったとは、これまで聞いたことがありません。私はガウリサンカール (Gauri-Sankar) は視界を邪魔する高峰があるため、チベット側から見られるとは思っておりません。ツアンボー川畔では、あなたもチベット名は見つけられませんでしたし、チベット学者を含めた一九〇五年のライダー隊〔注、ガルトック遠征〕も、チベット名は見つけられませんでした。チヨモ (Tchomo) という名はキシエン・シン〔注、バンディット〕によって発見され、チベットの別のピーク名に適用されました。マウント・エヴェレストという名称は、われわれの世代の生まれる以前に使用されるようになり、既成事実として受け入れられて来ました。もしチベット名が実証されたら、両者の名称が受け入れられることが望ましいでしょう。こういった二つの名称が多くのピークにも与えられるようになったならばと、私もよく思うようになりました。なぜなら、二つの民族が、高峻な山脈によって分け隔てられた場合、彼らはよく同じ山峰（ヒル）にそれぞれ違った名を使っているからで、どちらの名称が大いに正しいかなどと言うのは、不可能だからです」。

ここでバラードは、一つの山名が民族によってばらばらに違った呼び方をされているのなら、なにもどちらかに固定する必要はないだろうと、大変示唆に富んだ回答をしている。これはずっと先の予言をしているようで、十分傾聴に値しよう。当

時、英国と北京の間は船便だったので、手紙のとどくのも半月近くかかった。やがて七月十七日付のヘディンからの手紙がとどいたが、バラードは八月八日に北京のヘディンに宛てて、早速、返事を書いた。ただバラードからヘディン宛の手紙は現在遺っているが、ヘディンの手紙の存在の確認がとれない。すでに失われてしまったかもしれない。

(三)

「ちようどライプチッヒから貴著『マウント・エヴェレスト』がとどきました。本当にありがとうございます。本書は大変興味があります。ただ私のドイツ語の知識は大変にお粗末です。あなたが行ったタンヴィルの地図から現代の地図への抜粋には、私にはとても適応するのが無理です。それにタンヴィルの地図から得た、あなたの選定した経緯度には、とてもついていけません。私はロンドンまで出かけて『南チベット』の第三巻を見る必要があります。私には、タンヴィルの描いた河川、あるいは湖水を現代の地図の上で、適合させることはできません。そして、タンヴィルの山名は山脈には適応できても、山峰には無理と思います。しかし、チヨモ・ルングマの名はここにありますが、これは重要な点だと思います。ご高著お送り下さいましてありがとうございます」。



スヴェン・ヘディン「マウント・エヴェレスト」ライプチッヒ 1926 (増補改訂版)

ヘディンは、『マウント・エヴェレスト』(第二版)を版元のブロックハウス社から、直接バラードに送ってもらったらしい。この再販(一九二六年)は大巾に増補改訂されているものの、

もらったバラードは一見して、とてもヘデインの議論についていけないと告白している。バラードにしてみれば、すでに世間ですっかり定着し、登山隊まで派遣されたエヴェレストの名称が、こんな形で片がつくとはとても思わなかった。

そこでなんとしても緊急に必要となったものは、チベットの乏しい上に不正確な地理的名称を、改めて整理することだった。ヘデインのエヴェレストのチベット原名説が出て来てから、事態はすっかり混乱状態といつてよかった。そこでバラードは、書簡の中でこんなことを漏らしている。

「何年かラサに滞在したサー・チャールズ・ベルと、幾度か手紙のやりとりをしましたが、彼は次のようなことを書いて寄りました。——『小生は、ニエン・チエン・タング・ラ近くで一週間ほど滞在したことがあります。そして、高い知識を持ったラマ僧とこの名称の綴りと意味について議論しました。この語の最後の音節は峠とうげを意味するラ (ra) ではなく、精神を意味するラ (ha) で、ラサ (Lhasa) に見られるものと同じ語である』、とのことです。この点は、あなたにもご興味がおありかと思えます」。

ここに出てくるニエン・チエン・タング・ラ (Nien-chien-tang-ra) 山脈というは、チベットのほぼ中央部を東西に走る文字通

りの横断山脈のことで、(デインのいうトランス・ヒマラヤ、バラードのいうカイラス山脈の東の延長部分に当る。ここでは深い意味ではなく、チベット語はなかなか複雑なので取扱いがむずかしいと、言いたかったのであろう。語尾の部分に「ラ」とあるから、すぐ峠のことと思うと間違いだという例を、指摘したかったのかもしれない。

バラードは、あまり深く考えず、カイラス山脈と命名したものが、ヘデインの発見したトランス・ヒマラヤ山脈と重なることで、これは適当な名でなかったと言っている。これ以上深く詮索せずこれまでとお茶を濁したかったらしい。バラードがカイラス山脈と命名したときヘデインは探検中で、ヘデインもすでに名が付いているの知らなかった。ところが今度は、もつと歴史的にも複雑微妙なエヴェレスト問題が出て来てしまったのだ。バラードとしてあまりふれたくない、頭が痛むばかりか戸迷うことの方が多かったにちがいない。

ヘデインは一七三三年に出た古いフランスのダンヴィルの地図を見ていううち、エヴェレストのある辺りに山群名か、なにかが記入されていることに気付いた。これにモン・チヨウモウ・ラン・クマ (M. Tchounou Lanma) とある。現在のコシ川とアルン川に挟まれた部分から見ると、どうも間違いなさそうである。なら、エヴェレストは初めて発見された山でなく、す

でに十八世紀初めにはチベットで知られていた山であり、名もあり、ラマの測量士によって確認され、地図に記入されていたことになる。ただこの山の高度は知るすべもないが。

ヘデインはこの事実を知って、一九二二年以来、自著の中で繰り返し紹介してきたのだが、英国側は知ってか知らずか一切無視したので、バラード自身も知らなかったらしく、ヘデインから本を贈られて初めて知ったと言っている。疑えばきりがないが、こういうことは深く追求しない方がよい。

そこでバラードは、この本の紹介記事をジョグラフィカル・ジャーナル誌に投稿したと言っているが、筆者が調べた限り、見つからない。ともかく一九三一年二月二十三日付のヘデイン宛の手紙の中で、このことにふれてこう書いている。

「あなたが、古いチョモ・ランクマの名称を見つけられましたことは、大変興味深いことで、本書をインドに送りました。インド測量局長官は、本書をインド測量局のために再検討するようにと伝えてきました。そこでこのことをサー・チャールズ・ベルの助けを借りて、目下調査を行っております。……もし測量局長官がインド測量局の報告書という形で、あなたのエヴェレストの本に関する私の見解を出版してくれるようなら、オーデルとモーズヘッド大佐が回答を寄せてくれると思っています。」「こう書いた上でバラードは、「私はダンヴィルの地図を大

いに参照することで、書評を書くのが段々と気がすずまなくなっています」と、意味深長なことを言っている。これがどういう意味なのかよく分らないが、ダンヴィルの地図は見るだけで気が重くなり、まるで伏魔殿かなにかのように思えたのかも知れない。得体の知れないものが現われてくるようだったからであろう。

元インド測量局長官だったバラードは、エヴェレストの現地名発見説の出現で、友人のヘデインとインド測量局との間の板挟みにあって、大変苦しまねばならない。あちち立てれば、こちらが立たない。問題はあくまで学術的なものであるが、やがてはきつと政治問題化する惧れは多分にあるし、それに個人的感情やらなにやらが介在してくると、発言がむずかしい。うつかりすると国家間の問題がきつと絡んでくる。事実チベットがそうだ。英エヴェレスト登山隊は、毎々チベット側から突付けられる不満処理で登山どころでなかった。ヘデインは山は同じものだというが、ダンヴィルの地図と現在の地図とでは明らかにずれがあり、とてもチョモ・ランクマがマウント・エヴェレストと重なることは、まずありそうでないことをバラードは早くも感知した。

#### (四)

エヴェレストの発見・命名は、バラードの生まれる前のこと

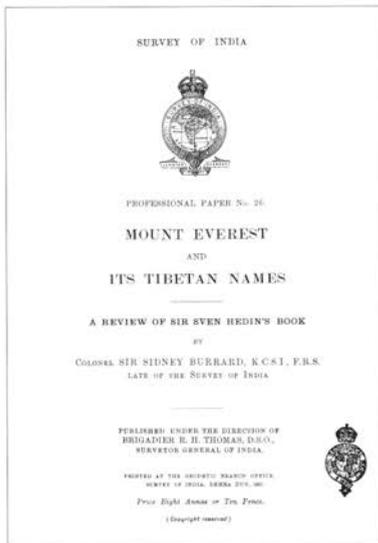
であり、いまさら自分の出る幕ではなかったのだが、あるとすれば以前測量局に勤務していたことぐらいいしかない。しかし、ないと思われるいた名称が発見されたというヘデインの新説が出た以上、やはり黙殺したりせず一応は現在の測量局長官に報告する義務はあつたろう。ちょうどこの時期は、グライ・ラマの反対でエヴェレスト登山隊の派遣が中断されていたが、早晚再開される可能性はなくはない。事実、この三年後の一九三三年から再開される。

報告を受けた現長官は、早速、バラードに対しヘデインの新説に応答するよう、言つて来たという。このバラード宛の長官の書簡の内容は不明であるが、当然、反論するようにといい指示だつたろう。言わないことではなかった。まったく敷へびだつたのだ。バラードがヘデインにふと告白しているように、どちらに加担したところで気が晴れることはなく、一層気分が重くなつたというのは事実だつたろう。しかしこのことから、測量局側の肚のうちと、タンヴィルの地図をどう処理するか、その手並をここから知ることができるのである。

一九三〇年の春の段階では、エヴェレストのチベット名などまるで何も知らないと言ひ、またそう振舞つていたバラードが、なんとその翌年（一九三一年）にはもうヘデイン説の反論の報告書を書き上げ、インド測量局から出版している。わずか二〇ページほどの小冊子とはいへ、せいぜい半年か一年足らずで書

き上げたとは、とても信じられない。測量局としてはヘデインの本の内容などどつくに知つていて、その対策や反論を十分にかつ内密に検討していたのが実情であつたろう。結論はどつくに固まつていたにちがいない。

本のタイトルは、『マウント・エヴェレストとそのチベットの名称。サー・スヴェン・ヘデインへの再考』(Sir Sidney Burrard: *Mount Everest and its Tibetan names, A Review of Sir Sven Hedin, Survey of INDIA, Professional Paper No. 26, Dehra Dun 1931*)で、現在大変稀覯本である。サー・スヴェン・ヘデインとあるのは、かつてインド帝国上級勲爵士(K・C・I・E)



サー・シドニー・バラード「マウント・エヴェレストとそのチベットの名称」インド測量局報告書 デラ・ドゥン 1931

を授与されていたからである。

まずこの報告書の結論から先に言ってしまうと、現インド測量局長官の R・H・トーマスは、その〈前がき〉の中で、「チヨモ・ルンマの名称をマウント・エヴェレストに適応(変更)させることは、正当なものとは思えない」と、一言の下に却下している。これは測量局(英国側)が、マウント・エヴェレストの名称を変えることはあり得ないと、きっぱり宣言していることになる。

たしかに第二次大戦後の一九四七年、インドが英植民地から独立するまで、エヴェレストの名称は英国の絶対的な占有下にあったと見做されていたから、他国が勝手に名称を変えて地図帖に載せようとそれは勝手であるが、英国としては断固として改名することはなかった。このことで思い出されるのは、パレードがヘーデンに宛てた手紙の中で、同じ一つの山脈なのにカイラス山脈とトランスヒマラヤ山脈に分れてしまったことにふれている。たしかに現実にはこののちにも英国地図帳はカイラス山脈に固執したし、ドイツの地図帳はトランスヒマラヤにする一方、ヘーデン山脈とも呼び、本来一つの山脈に三つの呼び名が生まれてしまったのである。

ただ英国側の態度に若干の変化が見られるのは、このときからざっと二十年以上たった一九五三年、英国登山隊が永年の念

願だったエヴェレストの初登頂に成功した。その公式の報告書がジョン・ハントによって書かれたとき、そのタイトルは「エヴェレスト登頂」(*The Ascent of Everest*)で、これには「マウント」が除かれている。その理由の明示はない。

ところで話を元に戻すと、一九二〇年に英国側が真剣に登山計画を実行に移し始めたとき、なぜ選りに選つてこの時期にヘーデンがエヴェレストの山々に難癖をつけ始めたのか、これにはだれも論評する人がいない。事情を知っていた人でもこの問題にはあえて踏み込まなかったのだらう。英国地理学会は、かつてヘーデンの発見したトランスヒマラヤ山脈を散々に扱き下ろし、その非難は学問的というより個人攻撃が露骨ですらあった。このときの急先鋒がサー・トーマス・ホルディクだった。なんと彼が英国地理学会の会長だったとき(一九一八年)、エヴェレスト登山計画が始つたのだった。

こんなことから、第一次大戦が勃発すると、ヘーデンはドイツ軍に従軍してドイツ・トルコ戦線を観戦して回つた。そのため英国地理学会とは犬猿の仲となつてしまった。まさかその意趣返しだったとは思えないのだが、それを完全に否定することもむずかしい。ヘーデンの科学報告「南チベット」(全十二巻)(1916-22)は、インド測量局に捧げられたのだったが、ロンドンのインド省の外交資料館ではこの本を受け入れようともしなかつたという。その恨みというか報復は想像を越えている。

こういった経緯を知っていた人は、エヴェレストの名称問題はやはり昔のことが絡んでいるのだらうと、きつと思つたはずである。やつたからやり返したのだと。ただこのことをだれも言及しなかつたのは、こんなことを始めたら完全に泥試合になり、お互いが泥沼に陥ちてしまうことを知っていたからだろう。ヘインもこのことは十分承知していて、エヴェレストの名称についての事情をこう説明している。このヘインの見解を測量局が巧みに要約しているので、こちらを引用しよう。

「私は、一八五二年の英国の測量士たちによる発見を奪い取ろうとは思つてもいない。しかし、忘れられた過去の正しい事実にあえて明りを当ててみたいと思つている。一九二一年、ハワード・ペリー大佐指揮下のマウント・エヴェレスト遠征隊は、チベット人がマウント・エヴェレストにチヨモ・ルングマ (Tchomo Lungma) の名を付けていたことを発見した。そして、ラサから地方のチベット人に宛てた公式の指示では、英国隊は彼らの言うチャモールングマ (Tchamo-lungma) 山に行きたいと望んでいることを伝えている。現在、この正確なチベット名であるチヨモ・ルングマ (Tchomo lungma) とは、一七一七年に、北京のフランス・イエズス会士たちによつて現地の情報から作られた地図上で、チヨウモウ・ランクマ (Tchounou lancma) として現われる。そして、これらの地図は一七三三年

に、パリのダンヴィルによつて刊行された」。

ヘインは、たまたま両者の名称が類似していることに気付いた。そこでさらにこう言う。――

「もしこの新しい名称のチヨモ・ルングマと、古い名称のチヨウモウ・ランクマとの間の類似性が、ただ単に音声上で偶然似ているのであれば、私としては最新の英国の地図と古いフランスの地図との間の名称の地理学的な位置に関しては、同意するよう喚起をうながしたい。現在の地図では、マウント・エヴェレストの緯度は北緯27度59分、ダンヴィルの地図ではチヨウモウ・ランクマの緯度は27度20分、現在の経度はフェローの東で東経104度55分、ダンヴィルの地図では103度50分に当る。これは北京の計測値が十八世紀の初めに計られたことを考慮に入れると、驚くほど正確である。こういった調査から、次のような結論が導き出される。――

- (1) 英国側が一八五二年に発見したと主張する世界最高峰は、すでに一九一九年も以前にフランスの地図上に示されている。
- (2) エヴェレストの本当のチベット名は、すなわち、英国側が、二十世紀に入るまで発見することに成功しなかつたチヨモ・ルングマは、一九〇年以上も昔に、北京にいたイエズス会士には知られていた(二一ページ)。

ヘデインの英国側に対する議論の真意は測りかねても、こう言ってくる以上は英国側もこれに同意できなければ、反論しなくてはならない。現長官はすでにふれたように、はつきり出来ない」と表明しているが、これには感情に流されず、あくまで冷静に、しかも論理的にだれにも納得できるよう、ヘデイン説を論破しなくてはならない。回答は最初から決っているのだが、ではこの厭な役回りを一体だれがするか。これはいきがかり上、バラードがすることになった。バラードならいかに反対論であろうと、喧嘩別れにはならない。しかし、彼はヘデインに言っているように、まったく気のすずまぬことだった。

### (五)

ヘデインより若干年上のバラードは、とうとうこの厭な仕事を押しつけたようである。十九世紀にインド大三角網を完成させ、地球の回転楕円体を算出したインド測量局にしてみれば、ただ地表面にある単なる山の姿から、それがどうのこうのと議論する時代は去っていた。山峰の名などどうでもよかつたのである。しかし、放っておく訳にいかない。世界最高峰にインド人ではない英国人の、しかも元測量局長官の名前が付けられている以上、逃げることはできない。

ダンヴィルの地図がどうのと言われても、手元にはない。ヘデインの本にはその複製コピーが載っていたが、いま少し精確

なものが欲しい。それはヘデインの『南チベット』にあるとうが、すぐには見れない。そのことを知ったヘデインは故国に連絡して、早速、第三巻をバラードに送った。この受け取り状が幸い残っている。――

「貴著『南チベット』をご恵送下さり、ご親切にありがとうございます。これは本当に貴重なもので、有用なものです。ただ私はいまではまったく公務についておらず、ただインド測量局の厚意で、古い拙著を校訂している身に過ぎないと申し上げねばなりません」。

バラードにとっては、自分の責任で勝手に判断は下せなかつた。ただヘデインの本を読み、ダンヴィルの地図と現在の地図とを比較検討してみれば、結論はもう出たのと同じだったろう。ただそれだけ指摘したところで、それでは回答にはならない。そのためにはエヴェレストの山の測定 of 歴史と、その名称の由来とをいま一度整理してふれなければならない。ところがここで思ってもみなかった、意外にも煩わしい問題が浮上してきた。それは民族問題だった。――「マウント・エヴェレストは、ネパールとチベットの間の国境上に聳えている。アリア民族とモンゴル民族の間にある。この山峰は、どの民族にもどの国籍にも属していない」。これはバラードがいち早く下した判断だった。ただ一九三〇年代では、民族問題などが絡んでくる可

能性はまずなかった。彼の先見の明は正しかったが、これが大きくクローズアップされるのは、ずっと後のことだった。

ヘーデンが問題にしたのは、あくまでこの山の高度のことではなく、名称の問題だった。古くからチベットの固有の名称が存在するという一点だった。そこでバラードとしては、この山の名称を歴史的にいま一度たどって表示してみることにした。

繰り返しになるが、一八五四年、ホジソンがデヴァドンガ説を唱え、一八五八年にはフォン・シユラーギントワイトがガウリサンカール説を主張した。ところがこのいずれも違うとされた。そこで一九〇三年、インド総督カーゾン卿がH・ウッドをネパールに派遣して調査させた結果、ネパール人はエヴェレストに名を与えていず、独自の名称は見つからなかったと報告に及んだ。(ただ現在、ネパール人はサガルマータを主張しているが、いつ頃から使われ始めたかよく分らない)。ウッドによると、ガウリサンカールとエヴェレストは三六マイル(約五八キロ)離れているという。

インド測量局の測量官たちが、エヴェレストを視界でとらえて測定したことは事実であった。しかし、無名峰らしいと判断して、マウント・エヴェレストと命名した。しかし、これはすでに名があったと強く主張するヘーデン説の登場で、話が段々煩雑になってきた。こんなこと放っておけばよいといえはそれ

だけであるが、これが国家間の政治的様相を帯びてくるとすれば、早急に結論を出すことが必要となってくる。まずヘーデンが主張するように、

チベット側にはチヨモ・ルンマただ一つだけしかないのかどうか、まずこの検証が必要となった。すると一九〇四年から一九二二年のエヴェレスト遠征隊の帰国報告までの間に、なんと五つの名が紹介されたことが分った。

一九〇四年 Chomo Kankar ウォデルとサラット・チャン  
ドラ・ダス

一九〇九年 Chholungbu 測量士ナタ・シン

一九〇九年 Chomo Lungmo ブルース

一九二二年 Chomo Uri ハワードペリー

一九二二年 Chomo Lungma ハワードペリー

ここに登場する山名には、みな接頭語の「チヨモ」が付いているが、これは「山」を意味するものでないという。

ウォデルたちが唱えたチヨモ・カンカールは、ヘーデンに言わせると例のラマの地図上のカンカール・チャニ(Kankar-Channi)をひっくり返したもので、エヴェレストの北西一二キロの所にあるピークという。この山名はいろいろな場所でするが、エヴェレストに特定されたものでないという。

次のチヨホルングブ、これはインド測量局の測量士ナタ・シ

ンが、一九〇七年、エヴェレストの南側のチベット人が使用している聞き知った。チベット人は国境地帯を越えて、チベットの塩をネパールに運んでいる。

チヨモ・ルンクマという名称は第一次大戦前の一九〇九年に、ブルースがネパール領内で、シエルバのポータリア人（チベット系）が使っているのを聞いた。この名は、エヴェレストとマカルーの二つの山に使っていたという。ただこの名称は、前にふれた一九〇四年のガルトック遠征隊のローリング、ライダー、ウッド、ペイリーたちのだれも耳にしなかったという。

エヴェレスト登山隊が派遣されていた当時、ラサにいたチャールズ・ベルはダライ・ラマに謁見して、エヴェレストの名称の由来をいろいろ聞いた話を、バラードに手紙で知らせてくれたという。ただこの内容はひどく複雑なので、ここでは省略しよう。ベルが言うには Chomo-lung か Chomo-lungma という呼び名は、聞いたことがないという。そして、チヨ (Cho) というのは神々の中の主神のことであり、チヨモ (Chomo) というのは女性に相当する語で、あくまでチャである。チャ (Cha) であってチヨ (Cho) ではないという。だからチヨモ・ルンクマというのはあり得ず、これはどこかで接頭語が混乱したとしか考えられなくなってくる。

ところが一九二二年、エヴェレスト登山の予備調査に参加していたインド測量局のモーズヘッドは、チベット人はこの山(エ

ヴェレスト)をチヨモ・ツェリング (Chomo Tsering)、またトラシ・ツェリング (Tashi Tsering) と呼んでいるのを知った。ここでまた新しい名称の出現である。もう数限りない。

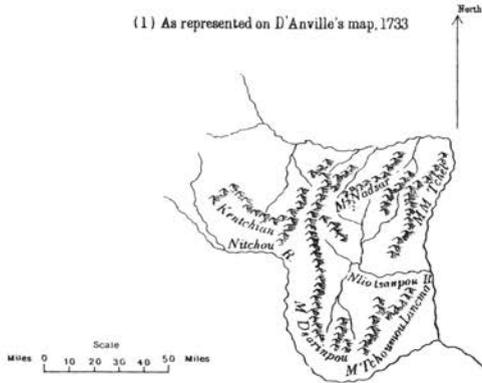
#### (六)

一般にインド測量局は、K2は別格としてもヒマラヤの山々にはみな名を付けてきたが、これは正確な現地呼び名ではない。しかもピークはみな全て南から眺めて命名していたから、チベット名を付けることはまずなかった。そこで目につく山には片端からサンスクリット語の名を付けた。一見したところ地名と錯覚を起し易いが、ここで改めて知っておくべきことは、ヒマラヤの山々の名はあくまでヒマラヤ山脈の南側に住むヒンズー人の名称で名付けたものであつて、北側のチベット人の呼び名ではないことである。ではなぜ現在でも問題が生じないのか、現地人には山の名などまるつきり関心がなかったし、外部から来た者には正しい現地名が付けられていると、信じていたからにすぎない。ヒマラヤ登山史でその登山の記録がいかに克明に記されていたとしても、その山名はまるつきりあてにならないものだったのだ。

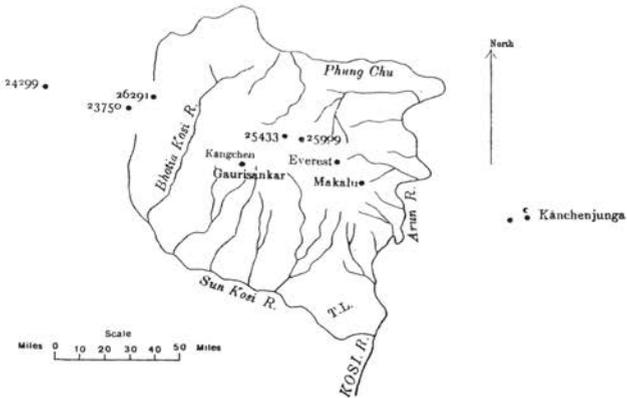
降って湧いたようなヘーデインのエヴェレスト別名説が登場したものの、初めからとうとう最後まで英国地理学会は黙殺してしまつた。名誉会員から除籍していた手前、ヘーデインには関わ

The HIMALAYAN area  
embraced by  
the arms of the RIVER KOSI

(1) As represented on D'Anville's map, 1733



(2) As represented by the Survey of India, 1926



エヴェレスト山塊の位置関係

- (1) ダンヴィルの地図 (1733年) (2) 現在の地図 (1926年)  
 チョウモウ・ランクマ (チョモルンマ) は現在の地図ではずっと下方に当る。  
 (インド測量局、プロフェッショナル・ペーパー No.26) デラ・ドゥン 1931

りたくなかったのだろう。英国地理学会内にはエヴェレスト登山隊の本部があったのだが、一切関わって来ない以上、インド測量局が名誉にかけて弁明しなくてはならなくなったのだろう。ヘデインの説など無視したところで一向にかまわなかったろうが、ヘデインの主張の基本はラマの測量によるフランスの地図帳にあったのだから、ヘデインをいくら敵いても始まらない。それにはまずフランスの地図の精度を改めて科学的に検証し、ここに描かれたいる山系を現在の測量図と比較し、山名を洗い直し、チヨモルンマという名称の山が、実在のエヴェレストと重なるのかどうかまずやってみることだろう。その上で歴史的・地理学的に証明することだった。

これまでたかエヴェレストの名称だけで、これほどまで論争になることなどまずなかったし、たとえ熱心な研究者であったとしても、最後はそつとそのままにするしかなかったろう。

第一、問題にもされなかったにちがいない。ヘデインという人物だったお陰で、インド測量局も放っておくことができず、真剣に討論に応じたにちがいない。一見ばからしいものに見える問題であるが、こうしたことが提起されたことは歴史的に見ても、決して無駄ではなかったにちがいない。

この煩わしい議論のお鉢がシドニー・バラードに回ってきてしまったことは、別の意味で大変貴重なことだったにちがいない。たしかに彼は最もヒマラヤとチベットについての、当代第

一級の専門家だった。その上、ヘデインと親しい関係にあったので、感情的な争いにまで発展する心配がなかった。ヘデインには言いたいだけ言わしておけばよい。ただなにも事情を知らぬ世間から見れば、きつとヘデインは怒り心頭に発するにちがいないく、二人の関係は最悪の状態になるにちがいないと、思うだろう。しかし、すでにお互いの話し合いは手紙のやり取りでついていたのである。感情論など起こりつこないのだ。細かな議論にふれ出すと煩わしいので、ここでは外交的なバラードの反論の要旨だけふれておこう。バラードは、ダンヴィルの地図帳を一見しただけでも結論はついていたのである。

それにはまず地図を参照していただきたい。ここには古いダンヴィルの地図と、現在の同じ場所の地図を掲げておく。ヘデインは古い歴史地図と現在のチベット調査から、*Tchounou Lanema* がいま *Chono Lungma* に当るはずであることをつき止め、このことを主張した。そこでバラードが、改めてこの兩種の地図にある地名を検討してみると、まず緯度と経度が違って、とても比較の対象にならないとした。ヘデインはこの差違はたいしたことではないとしている。ぴったり一致するはずはない。しかしバラードは地名も一致しないと判断した。

ただし山の位置関係から対比と認定がむずかしいのなら、河川の流路の比較をしようか。ラマの測量士たち（ダンヴィルの元図を作った）は、主要河川の川床をたどり、現代の測量

士たちと同じように河川沿いに測図していったので、この流路は実に両者がよく一致する。

これを見ると、エヴェレストは古地図の *Mountaine* にはほぼ当り、古地図のチヨウモウ・ランクマは、新地図の下部に入ってしまったて、一致することはない。位置が大変ずれてしまっている。ごく平靜に、ごく普通に見れば、エヴェレストとチヨウモウ・ランクマとは別々のピークと考えられる。

この新旧二枚の地図を比較して見れば、全てが一目瞭然ということになる。これから結論として、マウント・エヴェレストとするチヨウモウ・ランクマ（いまいうチヨモランマ）とは、同じ山とは言えない。なぜなら、現実には約六〇マイル（約九六キロ）もずれているからだ。

新旧の地図と比較してみれば、初めから両者がびたり一致することなどあり得ない。なにしろ一世紀以上も前に測定した山の位置が、厳密に合致することはない。ただこの誤差をどの位まで容認するかであるが、ともかくチベット人が名付けたというチヨモ・ランマは、どうも眞面目にみても、マウント・エヴェレストにはなりそうでない。分りきつたことだ。

バラードはこのことから、チヨモ・ランマはエヴェレストではないと判定を下した。測量局としては感情論を一切捨てて、科学的手段によってこう結論付けたとした。これに反論を唱え

るとなると、議論は決して嘖み合わない。そこでいま一つ問題を提起するとすると、チベット人は山峰に名を付けることはなかつたとする説を容認できるか、ということになる。

マウント・エヴェレストと命名された際、チベット側には名がないとされた。ところが二十世紀に入つて英国側からエヴェレスト登山許可を申請すると、チベット側の書類にはちゃんと山名が記されてきた。これが本当に信じられるか否かはまったく分らない。古くからあつた名かも不明である。ここで興味深い報告がある。一九二五年、エヴェレスト遠征にも参加したこともある地質学者の N・E・オーデルによるもので、エヴェレストの原名ではないかと評判になつた *Chounou Lanema* は、すでに二〇〇年もの昔、フランス公文書館で埋没していた資料によると、これはすでにラマ僧によつて山脈名と呼ばれていたという。するとチヨモ・ランマの名は決してきのう今日付けられたものでなく、相当古いことになる。

ともかくエヴェレストの歴史的・科学的判定はここまでで、あとはこの山を領有する国の判断にゆだねられるであらう。いわゆる領有権と民族問題である。これにわれわれがどう対応し、理解するかである。うっかりすると、政治的な紛争に巻き込まれかねない。

## 天山山脈ムザルト河流域の山々

小川 務

モンゴル語でテングリオーラ、中国音でテイエンシャンと呼ばれる天山山脈は延長二四〇〇キロ、幅四〇〇キロ、幾つもの山脈が併走し、パミール高原の北から始まり、新疆ウイグル自治区を東西に横切り、モンゴル高原の西に至って終わる。

その険しい山中には、未登の山々と、昔のままのシルクロードが息づいている。

### ムザルト峠を越えた人々

カザフスタン・キルギスタンとの国境に接する中国領天山山脈には、南北ムザルト河を結びつける、古くは凌山とも呼ばれたムザルト峠（三六〇〇<sup>①</sup>）がある。このムザルト峠は、カラコラム山脈のカラコラム峠と同様に、中央アジアの戦略上の重要な古道で、踏査した探検家の記録が今も残されている。

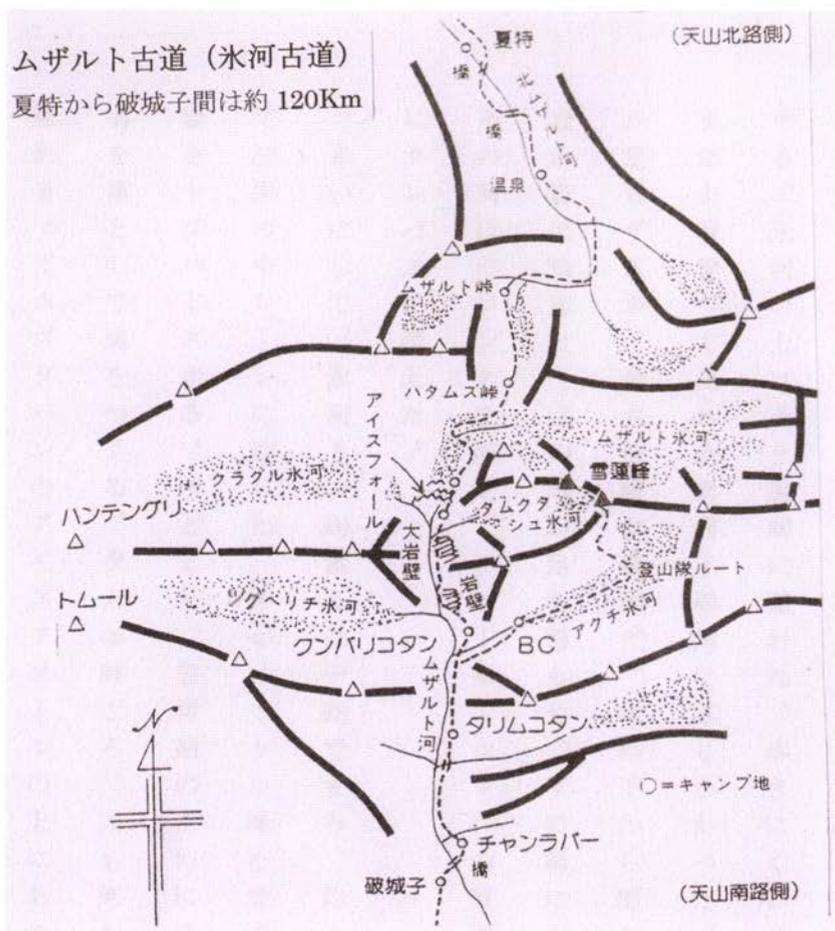
① 六三〇年五月・玄奘三蔵・南から北に・クチャ↓凌山（ムザルト峠又はベデル峠？定説はない）↓イシク湖・「大唐西域記」

② 一九〇七年二月・マンネルヘイム大佐（フィンランド人）・南から北に・カシユガル↓アクス↓ムザルト峠↓イリ・冬季ムザルト峠越えの偉業

③ 一九一三年九月・第三次大谷探検隊・吉川小一郎・南から北へ・アクス↓ムザルト峠↓イリ・ムザルト氷河越えや雪蓮峰の写真を撮影・『大谷探検隊シルクロード探検』長沢和俊編

④ 一九二七年六月・エリノア・ラテイモア・北から南へ・中央アジアの探検家である夫君のオウエン・ラテイモアとともに・イリ↓ムザルト峠↓アクス↓カシユガル↓カラコラム峠

ムザルト古道 (氷河古道)  
 夏特から破城子間は約 120Km



↓レー・(ムザルト峠越えの記録は正確で、現在も十分参考に  
なる)・『トルキスタンの再会』 エリノア・ラティモア著

⑤ 一九四五年七月・東トルキスタン人民共和国軍 モラノフ  
隊長の率いる軍隊がムザルト峠を越えて南のクチャに進軍し  
た。(北ムザルト河、夏特の石碑に刻まれている文字より)

⑥ 一九八九年七月・第三次東海支部雪蓮峰登山学術隊・北か  
ら南へ・イリ↓ムザルト峠↓アクス↓カシユガル

### ムザルト峠越えの概要(第三次東海支部雪蓮峰登山学術隊)

一九八九年七月一日、三十二頭の馬を連ねて夏特(シヤタ)  
温泉を出発。しばらくは雲杉と呼ぶ形の良いトウヒ林と色とり  
どりの草花が咲き誇る美しい景色が続く。

七月二日、岩のゴロゴロした急斜面を馬達は喘ぎながら登る。  
突然目の前が開け、前方に巨大な岩峰(雪蓮西峰)が見えてき  
た。ムザルト峠(三六〇〇呎)である。峠からは緩やかに下る  
斜面を騎馬隊は行く。馬の背から見下ろすと、牛や馬の白骨が  
バラバラとあり、ときおり人間の頭蓋骨もあった。やがて、眼  
前に雪を被った雪連山塊の山々が姿を現した。その景色は大谷  
探検隊吉川小一郎氏の写真と一致した。

七月三日、氷河越えの日である。ムザルト氷河が西から南へ  
と方向を変える屈曲点付近を右岸から左岸のモレーンへと横断  
する。氷河の上は土と岩屑に覆われ、歩きにくい。やがて、中

央部を堀割って流れる氷河上の川にさしかかった。幅七メート  
ル足らずだが、最も危険な場所だ。氷の下から聞こえる不気味  
な水音に怯えた一頭の馬が足を滑らせ、下の馬にぶつかった。  
その馬はバランスを崩し、スローモーションの映像を見るよう  
にクレバスに消えた。

幸いにして、氷河上の川渡りは一回ですみ、約四時間かかっ  
て左岸のモレーンに達した。四八〇〇メートル峰を巻くように  
ガラ場をトラバースする。所どころ、岩雪崩のために道がなく、  
浮石を落として道をつくる。夕方九時ごろ、人も馬もくたくた  
に疲れきってムズダバンのアイスフォールの上にあるキャンプ  
地についた。ここは三方を岩山が囲み、氷河に面した西側だけ  
が開けた天然の要塞で三区革命の時には民族独立軍のトーチカ  
として使われたらしい。

一九二七年六月にこの氷河を越えたエリノア・ラティモアに  
よると「断崖に寄り添って、ごく小さな小屋が建っていて、二  
人のチャント人(ウイグル族)が道の番をしたり、氷に足場を  
切ったり、もともとも険しい氷の斜面を馬が降りるのに手を貸し  
たりするために、そこに住んでいた。」とあり、この場所が最大  
の難所であることがわかる。

七月四日 氷河舌端の偵察に出る。急なガラ場をジグザクに  
下り、アイスフォールの頭から下を見て息を呑んだ。かすかな  
踏み跡は深さ二十メートルほどのクレバスですっぱりと切り取



E1 雪連西峰(白玉峰)

E2 雪連主峰

E3 雪連北峰

ムザルト氷河

ハタムズの台地から撮影した雪連山塊北面



ムザルト氷河を右岸から左岸へと横断中の東海支部隊



横断点を目指してムザルト氷河の右岸を行く東海支部隊

られ、その先は迷路のようなセラックが続いていた。これでは人間が通るのがやっとで馬はとでも無理、これ以上馬を殺すわけにはいかない、日本人とリエゾン、通訳は徒歩で南を目指し、馬方と馬達は氷河を再度渡り、北の草原に帰す事を決断する。

一人三十キロ近い荷物を背負い、アイスフォールは懸垂で降りた。標高はぐんぐん下がりが三〇〇〇メートルになった。

七月五日、水温六度、白濁したタムクタシユ川の急流を渡り、河原を歩き続ける。かねて心配していたタムクタシユとクンバリコタン<sup>1</sup>の岩壁は本流の水量が少なく、河原伝いに越えることができた。

その後三日間を要して、ウイグル族の最奥の村（チヤンラバー）を経て、この年の一月に完成したコンクリート製の橋を渡り、第一次、第二次隊の体験した恐怖のムザルト本流渡河を免れて、破城子の村に到着した。

### 中国領天山山脈の登山史

ムザルト河西側の山岳地帯における最初の登山は、一九七七年の中国隊によるトムール峰（七四三五<sup>1</sup>）登頂で、その後、一九八六年に日本隊も挑戦したが雪崩にあつて下山している。また、南端にあるカシカール峰（六四三五<sup>1</sup>）にはフランス及び日本隊が登頂した。さらに、二〇〇六年八月に強力なロシア隊により、ポエンヌイ・トボグラファイ峰（別名 Army

Topographers、六八七三<sup>1</sup>）の南壁が南凌から七回のピバークの後、初登攀された。

これらの山々は全てトムール山稜及びそれ以南にあり、アプローチはアクスから天山南面の氷河を経るルートである。

一方、ムザルト河東側の雪連山塊での登山は、日本山岳会東海支部の一九八六年から、八八年、八九年、九〇年の四次にわたる挑戦が最初であつた。各隊は、いずれもムザルト河からカラクメ氷河を経て雪連南峰の南稜から雪連主峰を目指し、第三次隊が南峰（E4）に初登頂、さらに、第四次隊が雪連主峰（E2）を初登頂した。また、第三次隊の学術班がムザルト古道を北から南に踏査した。

二〇〇九年八月には、スコットランド人、アメリカ人からなるパーティが、道路が整備されて格段にアプローチが楽になつた北ムザルト河を経て入山し、ムザルト氷河を見下ろすハタムズの台地にベースキャンプを設け、雪連山塊の西峰（E1）、東峰（E5）、北峰（E3）に初登頂、北東峰（E6）とヤナマシ峰（E7）は途中まで試登した。特に、同パーティのアルパインスタイルによる雪連西峰北壁からの初登頂は高く評価され、第十八回ピオレドールを受賞した。[Japanese alpine News vol. 11 July 2010]



朝日に輝く雪蓮主峰 6627 m



雪蓮南峰南稜から望む未踏の山城  
右：ハンテングリ山脈 左：トムール山脈

## 天山・未踏の山域

最近、脚光を浴びている雪連山塊の山々とは対照的に、いまだ探検的な登山家を寄せ付けない山域がムザルト河の西方にある。

カザフスタン・キルギスタンとの国境線でもあるハンテングリ峰とトムール峰を結ぶ南北の山脈とムザルト河の間には、北からハラヂェリハ山脈、ハンテングリ山脈、トムール山脈の東西に併走する山脈があり、それらの山脈の間には、クラグル氷河とツグベルチ氷河と呼ばれる、ともに長さ三十キロメートルもの長大な氷河があり、無数のクレバスが登山家達を拒み続けている。

ここで紹介する未踏の六〇〇メートル峰は、この三本の山脈の内、ハンテングリ山脈とトムール山脈にある。これまで、山容すら明らかでなかった未登の山々のボエンヌイ・トボグラフイ峰頂上からの写真が、*American Alpine Journal* Vol.49, 2007 に Otto Chkheiani 氏により掲載された。以下の説明は同氏の写真に基づく。(日本山岳会東海支部隊による雪連山塊からの写真は、山脈を正面から見ることになり、重なり合った山を同定することは困難である。)

### 未登の山々 (図及び表中の W1~W6 峰について)

(W1) チョンクグバイ・チョンカ峰 (六一三五メートル)、

写真は無いが、周辺を五〇〇〇メートル級の岩山に囲まれた未踏峰で、アブローチはムザルト河の右岸より、比較的短いコクチ氷河を登る事になる。

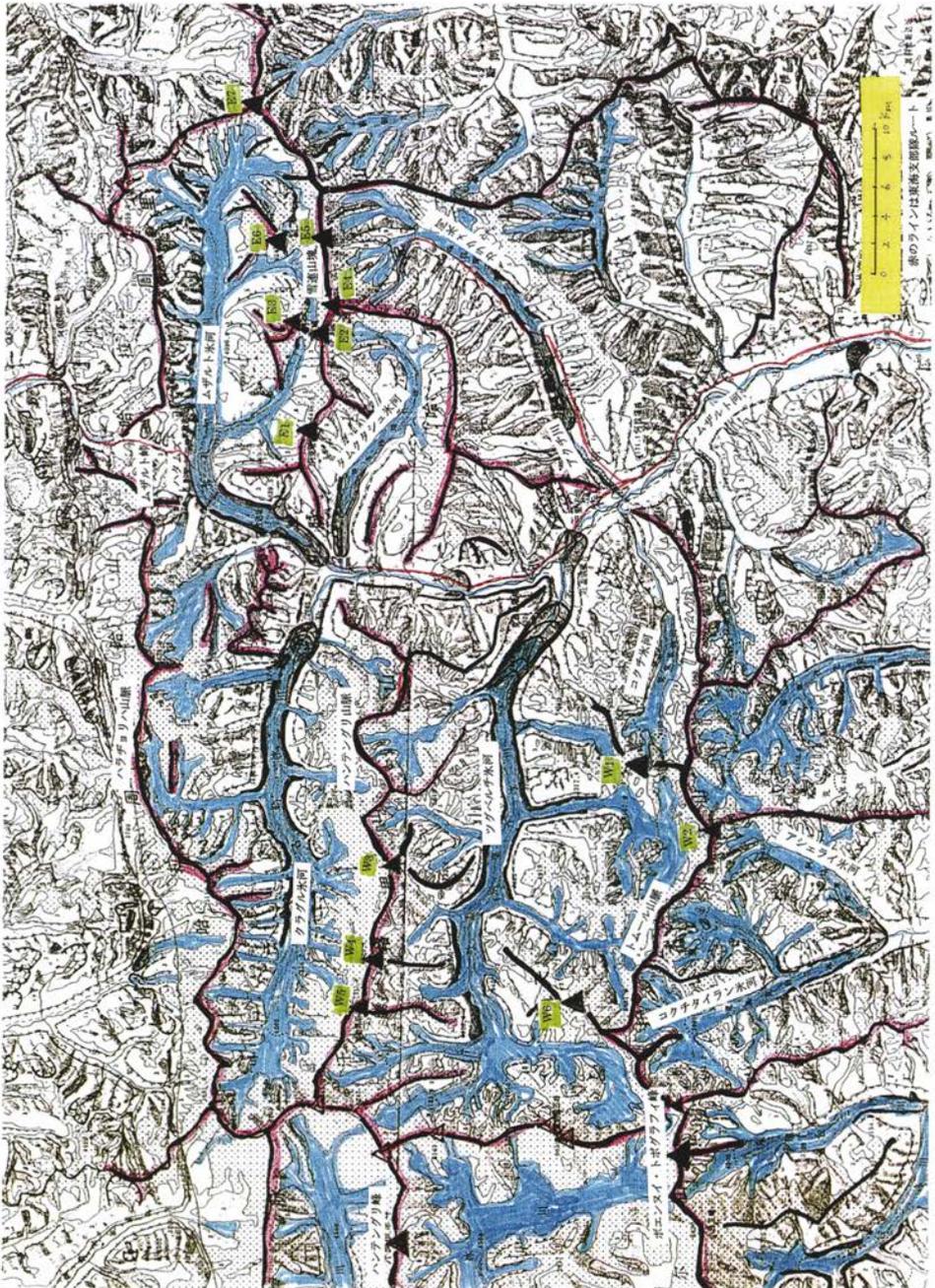
(W2) チョンクグバイ峰、六五七一メートルの未登峰で、ボエンヌイ・トボグラフイ峰頂上から見た南西面の写真のように、ごつごつとした険しい五〇〇〇メートル級の岩山に囲まれた岩峰である。アブローチは、ムザルト河・ツグベルチ氷河經由は長すぎ、南面のアシエライ氷河からとなる。

(W3) ハンテングリ山脈東端にある六四九七メートルの無名峰、写真の中央の雪山と考えられる。アブローチとしては、ムザルト河からツグベルチ氷河を登り、南面から取り付くことになろう。

(W4) 中国名で科学 (コーシユエ) 峰と「トムール峰区氷河地貌図」上で名づけられた六六二〇メートル峰は、写真では前山のために頂上部のみが見えていると山であると思われる。

(W5) チュエロフス (Chuelhos Fag) 六七六九メートル、写真で見るとおり、クラグル氷河とツグベルチ氷河から聳える二〇〇〇メートルの大理石の岩壁で囲まれたどっしりとした未登峰で、科学峰と同様に、アブローチはムザルト河右岸からツグベルチ氷河となるが、距離も長く、かなり困難な登山になるだろう。

(W6) 六三四二メートルの無名峰はトムール山脈からツグ



ムザルト河流域の氷河と山

ムザルト河東方 雪連山塊の6000メートル峰

番号	山名	標高(m)	登頂の有無	登頂年、隊名等
E1	雪連西峰 (白玉峰)	6422	北壁より初登	2009年8月・スコットランド・アメリカ隊 第18回ピオレドール受賞
E2	雪連主峰	6627	南峰を経て初登	1990年8月・日本山岳会東海支部第4次隊
E3	雪連北峰	6472	北峰西稜より初登	2009年8月・スコットランド・アメリカ隊
E4	雪連南峰	6450	南峰南稜より初登	1989年7月・日本山岳会東海支部第3次隊
E5	雪連東峰	6380	東峰東稜北面より初登	2009年8月・スコットランド・アメリカ隊
E6	雪連北東峰	6231	未登・5400mまで試登	2009年8月・スコットランド・アメリカ隊
E7	ヤナマシ峰	6332	未登・北面より6180mまで試登	2009年8月・スコットランド・アメリカ隊

ムザルト河西方山塊 未登の6000メートル峰

番号	山名	標高(m)	登頂有無	山の位置	ルートと 考えられる氷河	写真有無
W1	チョンクグ バイ・チョンカ	6135	未登	トムール山脈支稜	ムザルト河から コクチ氷河	無
W2	チョンクグ バイ	6571	未登	トムール山脈	南面よりアシェ ライ氷河	有
W3	無名峰	6497	未登	ハンテングリ山脈	ムザルト河から ツグベルチ氷河	有
W4	科学峰 (コーシュ エ峰)	6620	未登	ハンテングリ山脈	ムザルト河から ツグベルチ氷河	有
W5	チュエロフス (chuelebos Feng)	6769	未登	ハンテングリ山脈	ムザルト河から ツグベルチ氷河	有
W6	無名峰	6342	未登	トムール山脈支稜	南面よりコクチ タイラン氷河	有

西方山塊の写真は全て、American Alpine Journal Vol.49,2007 Otto Chkhetiani氏による掲載写真である。

W5 チュエロフス峰 (chuelebos Feng) 6769m  
W4 科学峰 (コーシュエ峰) 6620m  
W3 無名峰 6497m



Otto Chkhetiani

W2 チョンクグバイ峰 6571m



Otto Chkhetiani

W6 無名峰 6342m



Otto Chkhetiani

ベルチ氷河に伸びる支稜上のピークで南西面の写真で見るとおり、どっしりとした雪山である。アプローチとしては南面のコクチタイラン氷河や北面のツグベルチ氷河からが考えられるが、それぞれ、距離が長く、相当な困難を伴うだろう。

### 探検登山を目指す登山家へ

多くの魅力的な未登の山々があるムザルト河西方の中国領天山には、登山者の接近を拒む多くの理由がある。まず、この山域には入山者のためのインフラが無い。人家は無く、ポーターもいない。かろうじて細い馬の道があるだけである。事故があってもレスキューサービスは無く、全て自分で解決しなければならぬ。

登山の適期である六月、七月は、氷河の雪解けの季節でもあり、アプローチとなるムザルト河や流入する氷河の水量は増え、濁流と化す。慣れない乗馬での渡河は恐怖であり、事故も多い。さらに、登山者の前には、ツグベルチ氷河などの長大な氷河の無数のクレバス、聳える大理石の岩壁、雪庇の発達した不安定な山稜が待ち構えている。

まさに、ムザルト河西方の中国領天山は、探検登山のパラダイスと言えるが、同時に地球上に残された、手強い山域の一つでもあるのだ。

## 秩父宮記念山岳賞を受賞して

山 森 欣 一

【はじめに】

二〇一〇年十二月四日、日本山岳会から皇太子殿下ご臨席の晩餐会席上にて「第十二回秩父宮記念山岳賞」の盾と副賞を授与された

十一月十一日付けで届いた通知書には、「人間に焦点を合わせた、ヒマラヤ登山の実態把握と遭難状況（ヒマラヤ＋国内）の調査研究」の業績に対する授賞と記されていた。

具体的には、ヒマラヤ登山隊の記録集成も、国内の登山死亡事故事例集も共に、「人名に力点を置いて記録した」ことが評価されたということである。このことは、私にとっては嬉しいことであった。

「人間に焦点を合わせた」という視点を評価して戴いた「審査委員会」並びに日本山岳会に対して、この誌面をお借りして

厚く御礼申し上げたい。

【ヒマラヤ関係】

私の初めてのヒマラヤ登山は、五年間の挫折を経た一九七五年のインド、ヌン峰であった。当時としては遅い三十一歳になっていた。

一九七七年には、東京都山岳連盟の海外委員長に就任し、三年間でヒマラヤ登山愛好者の立場にたった委員会に衣替えした。同時に日本山岳協会の海外登山常任委員となり、研究会運営・悪評だった「推薦状審査」に携わり、ヒマラヤ登山の多くの問題に直面した。

カンチエンジュンガ大縦走の夢を実現するために、日本ヒマラヤ協会（H A J）に専従したのは、一九七九年である。多く

の登山隊派遣実務を行い、研究会を開き、機関誌・手引きを発行し、私自身も二〇〇二年まで二十五回登山隊に参加した。

私は幸運にも、日本のヒマラヤ登山全盛期ともいえる時期の三十有余年を、日山協・都岳連・H A Jを縦横に繋ぎながらヒマラヤ登山の前線を経験した。

私がまとめたのは、そのヒマラヤである。八千<sup>メートル</sup>、七千<sup>メートル</sup>、六千<sup>メートル</sup>と標高別に分けて記録整理した三冊である。それぞれの内容の基本は、山別・年度順に入山隊の「隊員名簿」を収録することに重点を置いた。そのため、登山記録は簡単にした。

多くの登山者は、その登山隊の行動記録・参考文献に興味がある。登頂を目指し計画する段階では当然のことであろう。

私は、百年後の世界に、その山に挑んだ人々の名前を残しておきたいと思った。初登頂・初登攀したり遭難死亡した人たちの名前は、何らかの形で残る。

しかし、事故もなく登頂にも失敗した多くの登山隊のメンバーの名は、ほとんど埋もれてしまう。だが、そのような登山隊の人たちの中には、たった一度、渾身の想いでヒマラヤに向かった人たちが数多くいることが知った。

そのきっかけは、一九八〇年から日山協が新規事業として始めた「海外登山遭難対策研修会」であった。当時私は海外常任委員として、その研修会の準備を広島三朗委員長から任された。

その資料として纏めたのが、「日本人のヒマラヤ登山と死亡事故について」である。死亡事故を纏めるためには、入山者を知る必要があり、多くの報告書を読んだ。

それまでも登山者の間では、なんとなく、「ヒマラヤ登山は怖い！」と思われていたが、「俺（隊）は大丈夫！」と、遭難事故に対して漠然とした認識（対岸の火事）しかなかった。

しかし、死者を分子にし、入山者を分母にしてはじき出された「死亡率二・五％」は反響を呼んだ。今、研修を受けているメンバーのうち三名が死ぬのである。（その頃の研修会の参加者は百名前後が多かった）当然のことながら研修を受ける態度が変わった。

記録の集成にあたっては、各登山隊報告書、山岳雑誌を中心に作成した。まずは報告書を刊行された登山隊の皆様にご敬意を表したい。「山岳年鑑」となった「岩と雪」の存在は抜群であった。（本来登山団体が纏めるべき記録を収録）その山岳年鑑も一九九四年で終刊となった。

H A Jには、各隊から数多くの貴重な報告書が送られて来ていたが、二〇〇六年夏、H A J事務所を私の自宅に移転する際に、登山隊報告書の全てを日本勤労者山岳連盟に寄贈したため、現物が無く目録に頼ることもあった。

私は、氏名と同時に「年齢」にもこだわった。分かるだけ年

## 日本隊のヒマラヤ入山者の内訳

### 1. 年代別・国別入山者

年代	人数	%	国 別 内 訳	N	P	I	C	S	B
1960	706	5.2		402	272	28	0	4	0
1970	2770	20.4		1265	937	520	9	39	0
1980	4761	35.0		1680	674	971	1020	353	63
1990	4031	29.7		1092	626	574	1429	300	10
2000	1317	9.7		478	184	134	497	24	0
合計	13585名			4917	2693	2227	2955	720	73

国別占有率＝ 36.2% 19.8% 16.4% 21.8% 5.3% 0.5%

N＝ネパール P＝パキスタン／アフガニスタン  
I＝インド C＝中国 S＝旧ソ連（カザフスタン、  
キルギス、タジキスタン） B＝ブータン

### 2. 目標山岳高度別入山者

年代	人数	%	国 別 内 訳	N	P	C	I	S	B
8000m峰	3188	23.5		1398	795	981	14	0	0
7000m峰	4829	35.5		1465	1135	1024	478	711	16
6000m峰	5568	41.0		2054	763	950	1735	9	57
合計	13585名			4917	2693	2955	2227	720	73

(注) 国の名称：N＝ネパール P＝パキスタン／アフガニスタン C＝中国  
I＝インド S＝旧ソ連 B＝ブータン



ヒマラヤ三部作

## 日本隊のヒマラヤ登山と死亡事故調査

(6,000m以上の峰を目指した登山隊を対象とした。1952年～2004年・53年間)

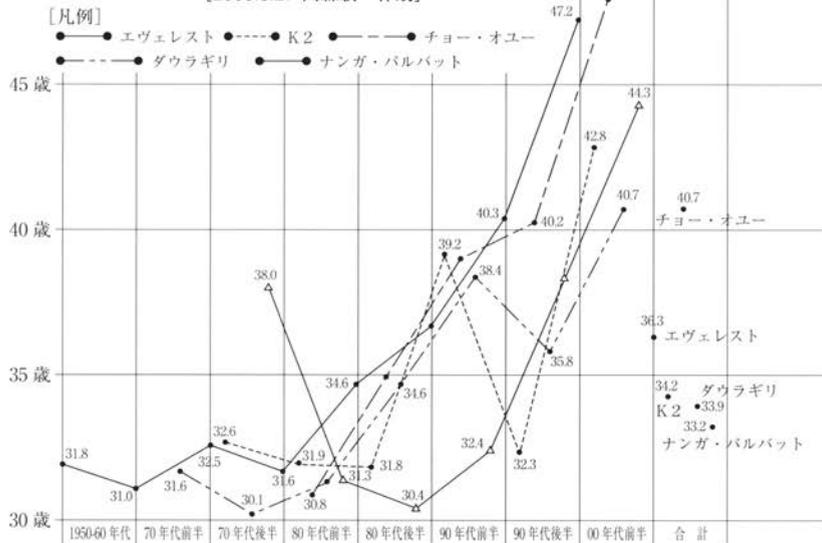
(上段：入山者、下段：死亡者。左欄：隊数、右欄：人数、%=入山者に対する死亡率)

2010年1月17日・山森欣一調<

年度 目標高度	1952～1969 (18年間)		1970～1979 (10年間)		1980～1989 (10年間)		1990～1999 (10年間)		2000～2004 (5年間)		合計(53年間)	
	隊数	人数	隊数	人数	隊数	人数	隊数	人数	隊数	人数	隊数	人数
8000m峰	10	83	32	460	110	1,103	169	1,102	101	440	422	3,188
	0	0	9	18	19	31	13	18	4	7	45	74
	0.0%		3.9%		2.8%		1.6%		1.6%		2.3%	
7000m峰	44	310	152	1,294	239	1,596	234	1,373	65	256	734	4,829
	4	5	17	27	27	44	15	30	5	5	68	111
	1.6%		2.1%		2.8%		2.2%		2.0%		2.3%	
6000m峰	64	313	159	1,016	342	2,062	254	1,556	121	621	940	5,568
	2	2	12	20	18	32	7	23	3	3	42	80
	0.6%		2.0%		1.6%		1.5%		0.5%		1.4%	
合計	118	706	343	2,770	691	4,761	657	4,031	287	1,317	2,096	13,585
	6	7	38	65	64	107	35	71	12	15	155	265
	1.0%		2.3%		2.2%		1.8%		1.1%		2.0%	

8000m 峰入山者平均年齢時代別比較表

[2005.3.27 山森欣一作成]



齢を入れたかった。日本山岳会の「山岳」には、数多くの登山隊報告が掲載されており貴重な資料であるのだが、大学の卒業年度だけの記載も多く収録出来なかったこともあった。複数回登山している人は、どこかで確認出来ることもあるが、前述した様に渾身の想いで一回きりの登山を行った人を最後まで調べることが、私の能力を越えていた。

こうして『神々の座 八〇〇〇m峰挑戦の記録』〔二〇〇四年版〕A4版・二二六頁〕を二〇〇五年春に刊行した。十八座・三二八八名（全体の九九%）収録。清水の舞台から飛び降りる覚悟で二百部刷った。幸運にもこれは絶版となった。

次いで『神々の座 七〇〇〇m峰挑戦の記録』〔二〇〇四年版〕A4版・二四二頁〕をH A J理事長退任直前の二〇〇九年冬に刊行した。一五五座・四八二九名（全体の九七%）収録。悩んだ末に百部刷った。しかし、理事長を退任した同年四月の時点で、危惧した通り二十部が売れ残ってしまった。

六〇〇〇m峰は、人名を略して「登山隊名」のみの纏めを考えていた。しかし、三十年間に及ぶH A J専従から離れ月日が経つに連れ、私の胸の内に言い知れぬ虚しさが溜っていることに気がついた。これはもう従来同様隊員名を入れなければ気が晴れることは無いだろうと思い、入れることを決意した。

一年間ワープロを叩きFDに収録した。難関はネパールの

「トレッキング許可ビーク」であった。人気のあるビークを中心に、どれだけの愛好者たちが、無許可（違法）でヒマラヤ登山を楽しんだのか。もうこの段階になると報告書は無い。分母が不正確なまま死亡率を出さざるを得ない。

加えてこの時代になると、明確だった筈の「分子」も怪しくなってきた。それは主に営業会社による「個人情報保護法」を盾にとった死亡事故の隠蔽である。

分子も分母も総量が不明確な中で、死亡率を算出しなければならぬことは、私が最も嫌いな作業である。このことが、記録の整理を「二〇〇四年」で止めた理由である。（個人情報保護法の施行は、二〇〇五年四月からであった。）

「ヒマラヤ三部作」の仕上げとなった『神々の座 六〇〇〇m峰挑戦の記録』〔二〇〇四年版〕〔A4版・二八四頁〕は、二〇〇

一〇年十一月に六百部発行。三二二座・五五六八名（全体の九〇%）収録。H A J会員全員に無料配布された。

こうして一九五二年から二〇〇四年までの五十三年間にヒマラヤの六〇〇m以上の峰（約五百座）に挑んだ日本人約一万三千六百人を集約することができた。（複数入山者を含む）

ちなみに私の記録整理が六〇〇〇m以上の峰を対象にしているのは、分母を確定するためである。勿論五〇〇〇m峰にも魅力的な山々はあるが、それ以上に数多くの山が存在し、入山者

を確認出来ないため、分子は100%確定出来るのに、分母があいまいになるのである。このためあえて六千m以上にした。

私の「人」に焦点を合わせた「神々の座 挑戦の記録」と対照的に、「記録と文献」に焦点を合わせ「ヒマラヤ登山記録集成」(全二巻)を纏めたのが馬場勝嘉さん(秩父宮記念山岳賞受賞)である。多分、馬場さん(二冊)と私(三冊)の纏めた資料で、「日本のヒマラヤ登山(五十三年間)」の概要が纏められたと思われる。

\* ヒマラヤ登山記録集成については、『山岳』第百三年pp200-203(松田雄一)、「山」七七六p6(水野勉)を参照。

#### 【国内】

私が山岳会に入り本格的に登山を始めたのは、一九六五年、当時としては年齢的には二十一歳と遅いスタートだった。岩登り中心の小さな「山嶺登高会」が、幸運にも一九六七年夏に全く無名の未踏の唐沢岳幕岩の初登攀に成功し、私もその一員として美酒を飲んだ。以後唐沢岳の資料を集め、この壁を紹介する『岩と雪』四二号・日本登山体系)ことで登山界に恩返ししたつもりで、ヒマラヤ登山にのめり込んでいった。

二〇〇三年春に創立された「日本山岳文化学会(会長・斉藤

一男)に発起人として参加し、常務理事として大会・分科会関係を担当。遭難分科会が立ち上がったので参加したが、「ヒマラヤ遭難は纏めた」との自負があり、国内遭難に対しては傍観者であった。

しかし、国内遭難事故の実態が放置されている現状を詳しく知る立場になって、それを放置したままにすることは、「ヒマラヤ」を金科玉条にとした私の「免罪符」になりえないという思いが心の中に広がってきた

せめても「戦後の登山死亡遭難事故」について、すべてを網羅したものを個人的に纏めて残すことが、多少なりとも国内登山界への恩返しになるのではないかと、一念発起することにした。二〇〇八年正月のことである。



戦後 [日本国内・日本人]

登山死亡遭難事故内訳

2010年11月20日：山森欣一作成

年代/原因	雪崩	疲労凍死	転滑落	病死	行方不明	その他	合計
1940	2	43	32	2	6	13	98(6)
1950	136	203	252	6	76	61	734(47)
1960	218	346	596	25	116	151	1452(90)
1970	175	173	593	55	106	154	1256(122)
1980	136	105	383	61	120	121	926(113)
1990	76	68	293	63	77	62	639(96)
2000	79	120	530	180	96	162	1167(207)
合計	822	1058	2679	392	597	724	6272(681)
	13.1%	16.9%	42.7%	6.3%	9.5%	11.5%	女性 11%

その他の内訳

年代/原因	原因不明	落石	水死	谷川岳	雷	道迷い	その他	合計
1940	7	1	1	0	0	0	4	13
1950	20	10	20	6	3	1	1	61
1960	35	42	17	29	15	1	12	151
1970	38	34	13	49	8	4	8	154
1980	26	38	34	13	5	4	1	121
1990	14	15	11	11	4	4	3	62
2000	77	22	16	0	10	29	8	162
合計	217	162	112	108	45	43	37	724

全体に占める% 3.5% 2.6% 1.8% 1.7%

\* 原因不明=原因が分からないもの、遺体で発見されたものなど。

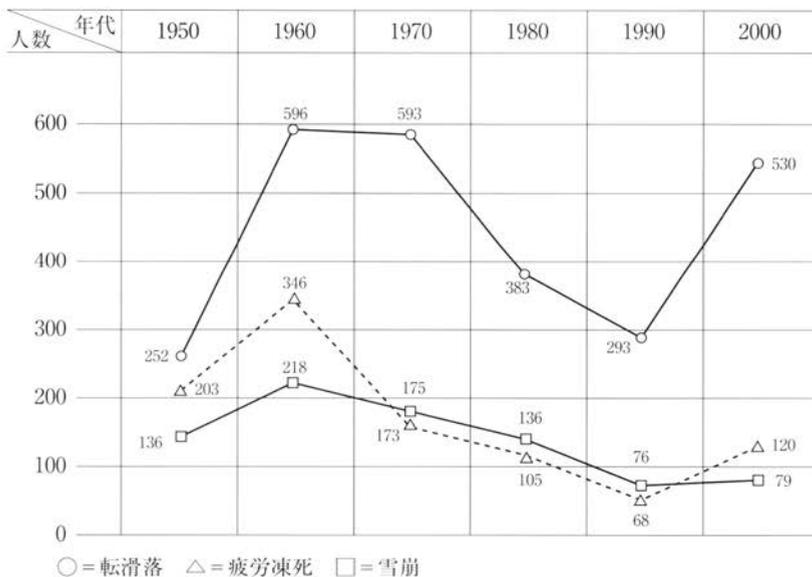
\* 水死=渡渉失敗、鉄砲水、溺死など。

\* 谷川岳=原因不明で発見されたもの、土合慰霊碑に氏名が刻まれているものなど。

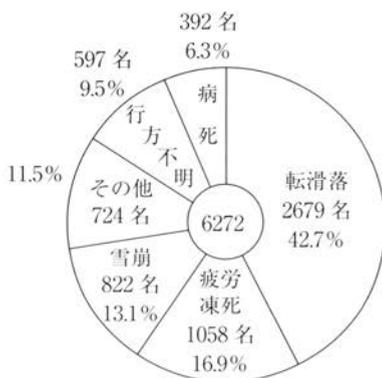
\* その他=土砂崩れ、熊、しごき、殺人など。

[注] 数字は、2010年7月8日発行の「登山死亡遭難事故事例集」の数字に追加・訂正したもの。

登山死亡遭難事故の内訳  
原因別・時代別推移（1950年～2009年＝60年間）



(1945年～2009年＝65年間)



その他の内訳

原因不明	217名
落石	162名
水死	112名
谷川岳	108名
雷	45名
道迷い	43名
その他	37名
土砂崩れ	ガス
風	酸欠
	熊
	殺
	人
	しごき

日本国内の日本人の「登山死亡遭難事故事例」の集積である。この対象は、戦後の一九四五年から二〇〇九年までの六十五年間である。

日本山書の会の上田茂春さんの資料を核として新聞・事故報告書などから、登山に焦点を合わせて集積した。

警察庁の「警察白書」は、山岳の中の事故を纏めており、山菜取り、観光、建設作業飯場まで含まれており参考程度にした。

事例集には、発生年月日、遭難者氏名、山岳名・場所、遭難原因、山岳会名、上田資料番号に、出典として「新聞・報告書・単行本」など、分かる範囲で基本的には一つだけ掲示した。また、女性も分かればf表示した。

図書館に通い「縮刷版」をめくり、全国の有志に協力を仰いだ。仕上げの最後の頼みは、日山協傘下の各岳連であった。私の依頼に回答のあった数に失望した。それがまた、この種の資料が岳連に系統的に集積されていないことの証左ともなった。

それ以上に失望したのが、事例集刊行後である。四十七都道府県の岳連幹部（日山協名簿）各個人宛（約四〇〇名）に購入依頼を送ったが、購入者は、二十一名である。寄ると触ると「遭難対策を！」と声高に叫んでいる岳連幹部が……。それは私にはボーズにしか見えな。

ともあれ、私が集積した六二七二名が、全体の何%になるの

かも不明である。こちらは、ヒマラヤと異なり、分母を求めることは不可能なことなので死亡率は出ない。

日本の登山界でこのような数字が纏められたのは多分初めてである。これを土台にさらに全国の事例が纏められる踏み台になればと思う。

### 「おわりに」

ここまで書けばもう皆さんも気がつかれたように、私の二つの仕事は、本来、登山団体が、集積し記録として残すべき事柄である。何故こうなってしまったのか。ここに興味深い文章があるので抜粋して紹介したい。

「昨今、中高年の登山志向がますます盛んである。と、同時に老舗といわれる既存の山岳会の活動は、周りの実態を見ても眼を覆うばかりの低調さにある。恐らく全国的なものであろう。

思うに、こうした原因は登山界が「初登頂・初登攀」という目標だけを歩み、数に限りのある対象が全世界の山岳から無くなるのが当然にもかかわらず、漫然と「その日暮らしの楽しみ」に甘んじて、登山の目的を追求してこなかった報いだとも思える。」（ひとつの試みと展望） 田村宣紀 『山岳文化』第1号 p33 山岳文化学会 2003.10.1 1000頁

私も二つの仕事をこなす課程で同様な思いを持った。表現は

むづかしいが、日本の登山界は、なにか片肺飛行のような進み方をしてきたのかも知れない。

今こそ「山は所詮遊びさ！」と嘯くのではなく、G山想十周年記念号 pp.136-138で、鹿野暉さんが提案されておられるように、日山協、労山の連合を基本に登山界が一致団結して、「登山の素晴らしさ、楽しさ」を社会の中に啓蒙し、登山技術指導・遭難対策・海外登山・共済・図書・記録整理の分野で協調し、登山者が自立し能動的に活動すべき時ではないかと思う。

最後に私の纏めた四冊の収録内容については、私の考えで纏めたものであり、その内容についても未収録・脱落・誤謬などもあり、完全なものではないことをお断りしておきたい。

(日本ヒマラヤ協会顧問／日本山岳文化学会副会長)

## 熊野修験「大峰奥駈道」を歩く

石岡 慎介

近代登山を拓いた日本山岳会は平成十七年で創立百周年を迎えました。が、古来日本の登山は高僧の山開きに始まり、お山で修行する山岳信仰にあったことは論を俟ちません。

古書探して偶然にも昭和一七年発刊の『山岳』第二号に出会ってから久しくなります。その中で第三代木暮理太郎会長のお話には深い感銘を覚えました。老躯に鞭打った山岳重鎮が、戦雲たなびく昭和一五年十二月、現在の蚕糸会館で演題「登山五十年」のお話をされています。折りしも紀元二六〇〇年、四百人の聴衆の喝采を浴びたようです。この四年後黄泉路に入られませんが、日本人の根っこにある自然観、宗教登山の源流に触れ、無軌道な近世登山に警鐘を鳴らしています。「山に寄す」七〇八世紀の万葉人と響き合う造詣の深み、山岳愛の平易な語り口は七一年も前ですがとても新鮮な論考です。

さて登山の大衆化は江戸期の富士講を通して隆盛を極めた山岳信仰が最初かもしれません。太古には精霊信仰として大自然と同化し、厳しい修行で蘇魂を願う山岳信仰のメッカといえは、大峰山塊を貫く古代への道でしょうか、その歴史は千数百年くらい前に遡るようです。

記念碑的な木暮翁の講演に加え、集會委員会企画の熊野古道全踏破は奥駈道跋涉がフィナーレでしたが、組み込まれていたこの国の登山遺伝子が疼き甦るような体験でした。自分の身の丈に合う山行記録か随想・紀行文の類で心象を綴りたい気になりました。

『山岳』誌には学究アカデミズムと馥郁たる近代アルピニズ

ムを謳歌する著作が溢れていますので、少々伝統外れの筆遣いで想いの丈を表すのも一興かもしれません。日本山岳会は、個性が平等に集う共同体ですので、会員個人が思い描くどんな《留り木》でも絆は熱く時空を超えて分かち合えるかもしれません。「私は目をあげて山を見る。私の助けは一体何処から来るのか!」と宣教師ウエストンが支えた山と信仰の聖句を想いプロローグと致します。

## I 吉野蔵王堂から太古の辻まで

平成二十二年、九州・東海で梅雨入り宣言が出た翌日から、世界自然遺産認定の紀伊熊野国立公園の古道に踏み込む。四泊五日の山旅には少し不安も過ぎるが、梅雨の晴れ間を縫うように全行程を無事駆け抜いた。

正に天の時、人の和のお陰である。

六月十日、吉野終点駅から荒行の基点「金峯山寺蔵王堂」に参拝し、山旅の安寧を祈る。修験道の総本山だが、威風堂々たる建物で、大海人皇子の陣営という表記にも気付いてタイムスリップする。秀吉が茲で長子誕生を祈願した甲斐あって秀頼を授かったと案内がある。

吉野上千本にある『櫻本坊』山下に参集する。天武、持統天皇の御世からの由緒ある勅願所と知ったが、根本道場は清涼感

に溢れていた。精進料理を頂きながら自己紹介になると、お互いに奥駈道に一方ならぬ期待感であった。歩程は二大霊地の吉野と熊野を結ぶ全長一七〇キロを半分弱だが、今回縦走する大峰山塊は次の十二峰である。

六月一日 宿坊発五時↓奥千本口↓吉野水分神社↓「青根ヶ峰」↓「四寸岩山」↓「大天井ヶ岳」↓  
女人結界五番関↓「山上ヶ岳」↓

一七時 山上宿坊櫻本坊着

六月二日 本坊発五時↓「大普賢岳」↓「七曜岳」↓「行者還岳」↓一五時 弥山小屋着

六月三日 小屋発六時半↓「弥山」↓「八経ヶ岳」↓「仏生ヶ岳」↓「明星ヶ岳」↓「孔雀ヶ岳」↓「釈迦ヶ岳」↓太古の辻↓一六時 前鬼小仲坊着

六月四日 小仲坊五時半発↓大滝前↓前鬼口↓杉の湯↓  
一一時半 大和上市駅着

宿坊玄関先の「一如」の揮毫に見送られ、踏査口まで車で移動する。一如とは「生死一体 生きていく己は死んでいく自分です」と宿坊のお話を頂く。二一名の岳人は北海道、首都圏から参集していたが、それぞれ人生の懊惱を秘めながらも、自分に向き合い巡り来る長丁場に勇氣凜々としていた。

とりわけ数年前、十勝連峰でJACの四岳徒が遭難された時、会友として慰霊祭と実地調査で二度参上したが、雪崩埋没から救出され九死に一生を得た岳人も参加されていた。奥山に己を駆り立て、祈り求める山薬は、平安鎌倉期の熊野詣とどこか通じるのだろうか？

奥山のおどろが下も踏み分けて

道ある世々と人に知らせん

(後鳥羽院)

昭和七年に制定された国立公園内で、平成十六年、世界遺産に認定された奥駈山稜は吉野町からはじまり、黒滝村、川上村、天川村、上北山村と広域山林道として整備されている。最初の探勝ピークとなる吉野の南限「青根ヶ峰」までは、白く半化粧したマタタビを遠目に平坦な植林帯で足を慣らす。地元案内書によれば、万葉の御世に吉野宮の宮廷歌人がこの峰辺りまで遠出して詠んでいるとあるので犬養万葉館の友に指導仰ぐ。今は標高八五八びでも無味乾燥な人口杉林だが、万葉人は、織物のように苔むした深山の景観に感嘆していた。

み吉野の青根が峰のこけむしろ

誰れか織りけむ経緯なしに

(詠人未詳)

ヒメウツギが満開な辺りに来てはじめて心見茶屋の跡に往時を偲ぶ。川上村に入ると四百餘ほどの登りで「四寸岩山」や「大天井ヶ岳」は標高千二百から千四百餘の山嶺となる。昔の休憩所跡の足摺宿とか百丁茶屋も出て当時の賑わいを想う。

一〇時くらいになって急に梅雨空に光が射し明日以降の好天を予感できた。「求めも、追いもしない。人も妬まず、恨まず」と茶屋木柱に修験の境涯のような碑文が眼に入る。頂上ではドウダンツツジやサンザシの花が淡く彩っていた。黙々と歩み、時として賑やかな吾が一団は蟻の熊野詣である。

蟻の道 雲の峰より つづきけり

(小林一茶)

昭和十八年の遭難碑を過ぎて、吉野からすでに二十四<sup>キ</sup>地点の洞辻茶屋に到達。高度を稼ぐと鍋冠行者からコマツガの林に変わる。大峰の山中には百二十の霊場があったそうで、国立公園制定を示唆する看板の横に、平成二年皇太子殿下も行啓しておられた。この一帯は何か靈気が漂っているが、昭和十五年は日本が絶頂期にあったとか皇紀二千六百年にあたり、大正から昭和初期にかけては国威発揚の参詣道でもあったらしく願掛け石柱が多い。三十三回も挑んだ難行苦行や敵国降伏祈願の国体ご加護まで祈る往時が満ちていた。足元にはコイワカガミが群生し、優美なおオイタヤメイゲツ、屈曲したネズコの巨木に覆

われ神祕を醸し出していた。

今でも女人禁制を守り続ける信仰の霊峰「山上ヶ岳」の登山口結界五番関に至る。ここで二班に別れ女性は洞川温泉へ向い宿を取る。結界門をくぐると岩峰の巻き道となり、薄暗い参道をゆつたり登る。櫻本坊主人から頂上散策と懇切丁寧なお堂内部の説明を頂く。撰氏十二度と濡れた下着が冷えるが、頂上では湧出岩の聖蹟が待っていた。

二時頃、深田百名山の標高一九一五<sup>五</sup>の別称「大峰山」の一等三角点に手を置く。大峰山寺に案内されると、蠟燭だけの闇の世界で呪文の如く響く読経である。山岳信仰では古来お山は祖霊が棲む世界だと学ぶが、人は死ぬとその魂は山中に還るようである。どんな意味か不明だが、山上百道と扁額が目に入る。

十二日、日の出四時半、快晴。山上櫻本坊を出発。昭和四年の里程標の説明があったが、熊野までは四三里の道標地点にいる。六四、六五、六六行所など小笹宿、脇宿の遺跡が満開なシロヤシオの美林の中に次から次へ現われる。静寂な阿弥陀ヶ森を過ぎると六三行所「大普賢岳」標高一七七九<sup>九</sup>に辿り着く。普賢菩薩を調べるとお釈迦様を護る脇侍で行・徳を司り、白像に乗る長寿の御仏とある。

六〇行所の稚子宿の敷石跡は全山ブナ林である。昼食を取りながら辺りを見渡すと、朽ち果てる巨木と澆刺としたブナ若木

の生死の環がまざまざと眼前に拡がっていた。昔人にとつては命をかけた野垂れの跋涉だったのだろう。奥深い大自然に抱かれてどんな功德があるのだろうかと思うが、執着や未練を引きずる閑もなく、唯無心に溶け込む山楽魂が今様修験道かもしれない。

続いて五八行所という行者還岳に至る。標高一五四六<sup>六</sup>あり、昭和七年頃まで行者還の宿があったらしい。湧出する水場ではじめて美味に浸る。詩篇の「谷川の水を求めてあえぎさまよう鹿のよう」な心象だったか、樹魂に護られた水の精に人も、鹿も生けるものすべてが渴きを癒す。辺りには丸い鹿糞がたくさん散らばっていた。

汲めば掌を 躍りこぼるる 山清水 (大野林火)

渾身の 力授かり 山清水 (木崎秀治)

弥山小屋を出発して、深緑の自然遺産の跋涉も佳境に入り、西方に向って長丁場が控えている。縮状になっている立ち枯れ木に圧倒されながら、浄土にある山「須弥山」から名付けられたのか「弥山」にかかる。標高一八九五<sup>五</sup>まで一本の果てしない道程は、先人が絶え間なく踏み跡を残してきたのだろう。まだ蕾であったが、純白なモクレン科オオヤマレンゲは、開花

すれば「天女」にたとえられ芳香を醸すだろう。木道を登って  
いけば禪語の「山上さらに山あり」と悟る神威の頂「八経ヶ岳」  
である。近畿の最高峰は一九一四<sup>メートル</sup>もある。ウラジロモミヤト  
ウヒの針葉樹林で覆われている。奈良天理大ワングル部の学生  
さんの楽園らしく随所にアピールが見える。朝の陽射に照らさ  
れた高原地帯ではカッコウが響き渡り時折ホトトギスの声が  
長閑である。仲間が声を聞き分けたが、どうして不如帰はテッ  
ペンカケタカ<sup>の</sup>の擬音になるのだろうか。平穩そのものの自然界に  
抱かれ誰かが「神の楽園だ！」と叫んだ。

足腰の疲労は半端ではなく、よろめき横転して眼鏡を飛ばす  
岳徒もいた。平均六五歳、懸命に堪えているうちに楊子ヶ宿避  
難小屋で休息しホッとする。「仏生ヶ岳」標高一八〇五<sup>メートル</sup>に至  
る。途中稜線から見下ろすと鎮座する奇岩の群れがあたかも羅  
漢さんのように見え歎呼の声をあげる！・・・

この日最後のピークに向けてシロヤシオ花街道のくぐりぬけ  
である。張り出し枝に頭がぶつかるとしんがりから「頭が高い」  
の聲が飛ぶ。憧れの「釈迦ヶ岳」である。仏教では極楽浄土へ  
導くと信仰される「十三仏」があると聞くが、太古には名無し  
に違いないお山がこれだけ仏が住む浄土として呼称され、岳徒  
の祈る姿は魂の光芒<sup>こうぼう</sup>そのものである。人を悟りの境地に導いて  
くれるというお釈迦様の巨大石造に仲間が魅せられたのか「い

いお顔だな」と感慨深げの聲が飛んでいた。

三日目の二時半、下山行程に入る。第四十行所深仙の宿辺り  
で一人旅に出会うと、懐かしげに声がかかる。時間的に大日岳  
はムリだと助言される。別れ際奇特にも「山を楽しんで下さ  
い！」と何度も叫んで見送ってくれた。太古の辻から前鬼林道  
を二時間足を棒にしながら下山一路。

やがて石積み<sup>の</sup>の廃墟跡にぶつかると、隠れ里に佇むような宿  
坊に着く。今は、「小仲坊」のみ営業中で、その夜は感謝の打ち  
上げとなる。前鬼山由緒によると、奥駈道の始祖、役小角<sup>えんのおとぐさ</sup>の末  
裔五鬼の縁者が千三百年の法灯を守っておられる。北の大地の  
仲間から東大雪の最高峰ニベソスのお誘いもあり記憶に留め  
た。

かくて奥駈道は標高八百<sup>メートル</sup>から千九百<sup>メートル</sup>の大峰山塊をたどり  
十数回アップダウンを繰り返すが、歩く自信か歩き抜く覚悟が  
皆にあった。時に喘ぎながらも落後者は誰もいない。目に観え  
ない大きな力に頼みながら、信仰にも近い遊行<sup>ゆぎょう</sup>は、岳人がそれ  
ぞれ深めた数十年の山歴の集大成にも観えた。

千三百年前からの山岳信仰の文化を今に伝える修験道の奥義  
とは一体何なのだろうか？と帰郷後思量していたら、三田誠広  
氏の著の中で、六十歳の導師賢覚が北面の武士佐藤義清、後の  
西行法師に説いている。

「修験道とは幻影から逃れることではなく、幻影と一体となり、幻影を支配する技をみごとくじや。修行によって己を鍛え、己が守るべきものをまもるがよい……世間とは無明の闇に浮かんた幻想にすぎぬが、それこそがおぬしの故郷じや」と。

二三歳にして俗界を捨て山に入り、大自然と生きながら時に吉野櫻を愛で、晩年には鎌倉將軍に拝謁した西行に授ける。頼朝から褒美に銀杯を貰つても道端の貧しき童わらわに与えたという。「無明の闇」とは妖しい響きだが、昔人は奥駈道の靡なみの門に心開き額くと、神仏の音ない（訪れ）が顕れ、ご利益に預かるのだとも何かで読んだ。闇に落ち、闇に洗われて人は甦よみがるらしい。櫻本坊の主から「命は一つ」と励まされ出発した山旅だった。「死を想え！」とは中世ヨーロッパの死生観。メモメント・モーリだが、対極にある生の輝き、有難さを感じながらひたすら歩む、そんな恵みの力だろうか。山菜の思い出と共に歳を重ねるアクティブシニアの仲間にとつて、残りの南部歩程が来年度に引き継がれたら……と新たな願いが芽生えていた。

「人は先へ先へと進まねばならない。さらなる結びと深まる霊の交わりのために……私の終わりに、私の始まりがあ

ると」

十六世紀スコットランドのメアリー女王の人生訓を基に、詩人エリオットが「四重奏」で引用していますが、帰郷後学んだ果実でした。

## Ⅱ 古代への道 熊野大社へ

前年吉野から前鬼まで歩いた大峰山脈北面の旅に続き、今年平成二二年は前鬼に再度戻り、熊野本宮へ奥駈道南半を辿る。岳友が「人生の縮図だった……」と回顧したが、身も心も磁石に引かれるように、再び熊野宇宙を目指す。五月晴れに青葉若葉は輝き、最終日は清めの雨に濡れながら、峠や鞍部のアツブダウンを繰り返すが、七十代に体力負荷は想像を超えた。

「苦しみて後の楽こそ知らるなり 苦勞知らずに楽に味なし」と古歌にいう。目一杯の苦しさで喜びはさて置き、信仰の山稜のゆるぎなきに感動し、光顔巍巍こうげんきぎの紀州岳人が示されたご好意には感謝の言葉もない。無事帰郷して心地よい疲労に身を横たえ、浮腫んだ大腿筋を伸ばすと、心拍未だに膝頭まで脈打ち、不朽の寿を味わう至福の時である。

奥遍路 山また山に いのち受け (石 讚岳)

大峰奥駈道は、熊野本宮証誠殿一番から吉野川河岸柳宿まで七五箇所の行場から成っている。吉野仁王門から備崎経塚までの水平距離なら八四キロ、歩程なら全長一七〇キロはあると聞く。今回十五人岳徒の行程は次の通りであった。

五月一日 近鉄吉野線大和上市駅集合→奈良県大北山村  
前鬼 「小仲坊」泊

五月二日 前鬼→太古ノ辻→奥森山→嫁越峠→地藏岳→

涅槃岳→持経の宿泊 九時間行程

五月三日 持経の宿→転法輪岳→行仙宿泊 四時間行程

五月四日 行仙宿→笠捨山→地藏岳→香精岳→奈良県土

津川村玉置神社社務所泊 八時間行程

五月五日 玉置神社→大森岳→五大尊岳→吹越山→

七越峰→備崎→和歌山県田辺市熊野本宮大社

→湯の峰温泉 民宿やまね泊 十時間行程

アユ、アマゴが解禁を迎え、フジ、キリの花を遠望しながら国道一六九号線を走り宿坊小仲坊を再訪する。千三百年前修験道の開祖となった役小角の五鬼系譜六十代目のご主人が、ここにやかに再び迎えてくれた。お屋敷はキリシマ、アケボノ、シロヤシオのつつじ類が満開である。

翌早朝、廃墟となっている四鬼の宿坊石垣を垣間見ながら太古ノ辻をめざす。淡紅色のヤシオツツジも満開でヒメシヤラの

樹皮が鮮やかである。何億年かの深山の営みの中に再会した両童子の巨岩が強烈な印象を残す。二時間半かけ主稜線に立つてホット一息、熊野本宮、備崎まで二四時間四五キロとある。

三億年前よりあった岩山も尾根行く人も風景である

(香川 ヒサ)

天狗山(標高一五三六メートル)の辺りだったか、大陸からの酸性雨か代替フロンガスが流れ込んだのか倒壊したり、表皮が黒苔に覆われたブナ林には死相があった。

やがて、第九次刈峰行とある道普請を表示した「新宮山彦グループ」の板看板が歩行路に置いてあった。修験道の復活整備に多大の貢献をされている活動は出発前の説明にあった。「衆縁和合」を実践された岳人ボランティアは、標識によれば第一回の千日刈峰行は、昭和五九年に遡り三十年有余持続されている。比叡山の千日行に肖ったと後日拝聴した。「山道は人が歩けば道になるが、人が歩かなくや雑草にふさがれる」と孟子の言とか、人を植える道を信じて響き合い、修験歩行に役立てた活動なのだろう。

般若岳に差し掛かった頃か、錫杖(しよくじょう)を突き、先導する行者と十数人のザック姿とすれちがう。山中に轟く法螺貝が感性に響いた。熊野の一番修行所(磨)から出立したのだろうか。手を

合わせお迎えする岳人もいた。涅槃岳（標高一三三五）を過ぎた頃からシヤクナゲを楽しむ。証誠無漏岳とか阿須賀利岳とか仏典から名付けられたような嶺峰も通過する。

四時近くには無人の自炊小屋「持経の宿」に入る。外気は摂氏二〇度、八重櫻の植樹がある。標高一〇八〇に於ける二二行所跡を復旧したようである。先人のお陰で五分とかならない水場は有り難く、内部には修験道の根本「山是神」の額が掲げられている。集会委員のご尽力の賜物だが、夜食の中村屋カレ、朝食のモチラーメンは絶品である。八百年以上前に奥駆道に入ったという西行の歌が壁に掲示されていた。

#### 篠の宿にて

身にそむる言葉の罪のあらわれて心すみぬる

みかさねの滝

わけてゆく色のみならず情さへ千種の岳は心そむけり

リョウブ、ネジキ、アセビが林立する尾根伝いの縦走路には平治の宿、第二十行所の怒田の宿跡などが続く。三十年前、日本山岳会十二代会長の今西錦司博士が植えた吉野櫻がひっそり息づいていた。転法輪岳や、俱利伽羅岳を通過する頃、清浄な大氣に守られたブナ、ミズナラ、ヒメシヤラ美林となる。妙な山岳庭園である。十二時半、第十九行所の「行仙岳」に至る。

頂上には道中安全、天下泰平如意祈願などお札が置いてあった。願掛けの登山もあるが、山に入って元気をもらう人は、山を下りれば楽しみが湧くが、山想遊行の旅の味は格別だ。山に入った仏陀は山から下りてきて悟りを開き説法したというが……。休息中の頂上で女性岳徒がコシアブラの太木に気付いた。新芽はテンプラもよし、出発前に賞味した味噌汁の具は旬である。

一七日、いよいよ行仙宿山小屋に入る。新宮山彦グループによつて平成二年完成とか、山上皓一郎さん、戸石さん、松木さん、川島さん、前田さん、横山さんの六岳人に迎えられた。奥駆道再興に心血を注がれたグループの代表は下山途中でお会いする玉岡憲明さんである。早々に急峻な梯子を下って、皆で湧水を採取する。先の第一回千日刈峰行から五年後とか、当時六十代の玉岡会長を中心に探索し得た水源は、峻しい岩盤を滴る崖清水を堰き止めてある。

のど仏 うなづきたまひ 岩清水 (山上和秀)

湧き水にもろ手浸せば指先ゆ身にひびきくる山の初夏 (美原凍子)

飲み物類、豪華な宴会弁当が担ぎ上げられていた。「行者堂」

前には電源開発から寄贈された実生育成のアズマヒガンの二世「莊川櫻」が育っていた。室内には和歌山出身の塩川正十郎前財務大臣が、「山林斗擲」と揮毫した扁額がある。山中の必死の修行を意味するそうだ。山林斗擲とは梵語の頭陀から来て衣食住貪欲を払いのける修行の心得だとも帰郷後学んだ。当時の奈良新聞を見ると、塩爺は「人は自然とどう付き合うかではなく、自然に同化しないといけないな・・・」と話したとある。

和氣諷々と自己紹介しながら宴もたけなわだが、全行程を一日間で往復し百日行された方や全国の烏帽子岳二百山を踏破された山岳猛者もおられた。古道復活に情熱を燃やす日本山岳会員を誇りに想い、過去、京都や広島支部との交流も知った。齋藤惇生第十九代会長も来訪されていた。地元の「ムシ」や「トリ」の替え歌は興を盛り上げたが、仲間の三女性も離席され翌日の弁当作りに精出してくれた。歩行中も型崩れしない折り詰めノウハウは地元ご指導だったようだ。

十八日六時、新宮山彦さんとお別れである。頂いた望外のお心遣い、おもてなしは、古来の熊野信仰の根っこであろうか、ご縁曼荼羅の真髓にちがいない。一期一会に感謝し近い将来どうお返しすべきか脳裏を過ぎる。富岳南面に復活した静岡県裾野市を基点とする「須山古道」も千三百年の歴史を有する修験道である。

山彦となりて青嶺をめぐりたし (半田かほる)

後半の跋涉開始だが、ひっそり佇む巨大杉の近くには、先人が担ぎ上げた石洞の金剛童子が睨みをきかせていた。山林は広葉樹、針葉樹の混交林の宇宙となる。ケヤキ、ブナ、ナラ、ミズメ、ヒバ、モミ、ツガなど渾然一体となつて、これこそ共生の林床であろう。大昔は名高い北山杉の原生林が繁茂していたことだろう。自然への畏敬から童心に還つて数人で巨大杉を抱きかかえ胴回りを測つてみる。

笠捨山(標高二三三二)を過ぎると巨大送電線が見え始め、槍ヶ岳から地蔵の森に入る。昔は近寄りたいたい岩稜の難所だったようだが、新しく設置されたロープに助けられ無事通過する。同所で遭難されたとか山彦グループの米沢医博の追悼碑があった。この鎖場は高野山の銘木コウヤマキの宝庫である。十二時近く香精山くらいになると、足腰も次第に膨張してくる。鉄の心で成し遂げるしかない歩行だが、岳徒の中には己を鼓舞する気合が飛ぶ。間伐林に眼をやると、次代に己を譲りながら成長するとか、縁起良いユズリハが精気に満ち溢れていた。

玉置山頂から八〇直下にある熊野三山の奥の院玉置神社(標高一〇〇〇)にたどりつく。古色蒼然とした気配が漂う熊野曼荼羅第一三番とあり、本宮まで十七キロ地点である。山彦グループのお陰で宿泊が可能となった社務所だが、神妙な一

夜であった。女性信徒が登ってきて食事準備が終れば下山するので片付けと洗浄は分担する。お酒は厳禁、最終日の一〇時間行程に備え早寝しかない。翌朝満開の石楠花が霧雨に煙るお社を後に、幽玄境から暗い人口杉林へ突っ込む。一帯は下北山、十津川両村にまたがり人里に近い。雨脚も次第にきつくなり、間隔を狭めて休止しないと濡れザツクがズツシンと肩に食い込む。

「ホーホケキヨ」。里から山へ戻った鶯が頭上で導く。雨の中天使の声と思えば、両足は勝手に動いて歩みを止めない。「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」とローマ書の一節を思い浮かべる遊行である。

うぐいすや 遊行の使者か 雨の中 (石 讚岳)

時折古道は舗装路に隣り合わせに走るが、五大尊岳、吹越岳、七峰峠、大黒天神岳とドンドン高度を下げる。四番行所吹越山に一時過ぎに到着して大休止となり、神社ご準備の「めはりずし」を頂く。山仕事や筏師の携帯食となると聞く。三時頃、七越峠に差し掛かると何と！本年八五歳の玉岡翁のお出迎えを受けた。さぞお待ち頂いた事だろう。お神酒まで拝領した。

たちのぼる月の辺りに雲消えて光重ぬる七越の峯

(西行法師)

熊野川が視野に入るにつれて、杉林、河川敷には廃棄物が散乱し、世界遺産指定が泣く。後日二市へ届けたら返信頂いた。本宮は「神を父、仏を母にいたさむて、熊野より興さむ旅立ちの時」の幟で迎えてくれた。健脚は神のお恵み、いのちの緒は天につながり、全岳徒は見えない力で守られていた。

山岳修験の吉野・大峯、神道の熊野三山、真言密教を奉ずる高野山と三大パワースポットは異宗教でもどこかで寛くつながり、山霊樹魂がみなぎって人を耀い包む霊場である。

全員熊野本宮に感謝の祈りを捧げ、打ち上げのために湯垢離場<sup>は</sup>で名高い「湯の峰温泉」へ向う。

千年有余脈々と受け継がれた道の生力で全員が解き放たれていた。大峯山塊をうねり喘いだ大蛇は、二年を翔けて少しはウロコを脱ぎ捨て、魂に光を、命に輝きを取り戻したのだろうか？ 果てない修羅を抱えながら、本年吉野山中で穏やかに生死を遂げた詠人を想う。

なべてみな捨てよと言ひて捨てざりしわが煩惱の

ぬかるみ深き

(前登志夫)

翌朝帰路新宮駅で山姿の外国青年二人と出逢う。どちらからと問うと、フランス岳人である。ピレネー越えの全長八百キロの

サンテイヤゴ巡礼路は、熊野古道と姉妹道だった。完

こうして二年を要した奥駈跋涉は無事終りました。長年修験道の南部再興に翔ける「新宮やまびこ」さんのお蔭で宿願成就となりました。思い出日記を辿れば二度目の旅が駆け巡ります。振り返ると平成二年七月の大峰山脈の北面は山霊樹魂に抱かれたような山旅であり、二度目の翌年五月の南半では巡礼蘇魂に感謝し、歩き続ければ祈りにも通じるようでした。奥駈道の歩みは、日本人の死生観の源流に遡り、その時代の命へ永遠回帰するような想いです。また本宮ゴールにあつた「神は父、仏は母」の幟のぼりは、来し方を立ち止まって考えよ。心の世界を耕し歩みなさい。という宮司さんの啓示かもしれません。

天折した慶応山岳部の大島亮吉岳徒の山岳愛「山はわが心を占む、あだかも信仰のように」と共鳴共振して、これからも実りある精神文化を求めて歩むアクティブシニアは数多でしょう。最後になりましたが、長く心象に留り、恵みあふれる詩歌の引用や山仲間のご芳名に触れさせて頂き感謝に堪えません。

《独座大雄峯》とは、禅僧の気概ですが、愛する山々の感興を一言でまとめました。山歩きを生甲斐に、山岳文化を楽しむ仲間と、分かち合いながら筆を擱きます。

《奥駈道へ新たな命求めて》

感謝します 山の恵みのお力を  
平安の日を 仲間と吾らの山旅に  
神さま仏さんの慈愛に生かされて  
導く光の日々を 祈りつつ  
新たな命を求め 歩みます

## 二〇一〇 ヨーロッパ紀行〈ポーランド・スペイン・ドイツ〉

中村 保

### ポーランドから二つの榮譽

#### 探検家フェスティバル“The 12th Explorers Festival”

ポーランドは私にとっては初めての国である。親日的で親切な人々であることは聞いていたが、探検家フェスティバルに招待されてこの地を訪れポーランドが大好きな国の一つになった。心からの歓待、もてなしを受け、親身になってお世話して頂いた。優しさ、気配り、最上のホスピタリティに感銘した。

二〇一〇年十一月十九日、ワルシャワの東南に位置するポーランド第二の都会、ウツツ市の大学の講堂で七〇〇人の若い聴衆を前に気分は高揚した。イベントのテーマの一つとして、高

校生・大学生に地理の勉強されるためのプログラムに私の「東ヒマラヤの氷河―温暖化の影響」が組み入れられた。素人ながら足で集めた写真、地図を使って東チベットの氷河後退の状況をパワーポイントで紹介した。興味を示してもらってほっとした。

ウツツ市は人口六五万人、社会主義体制時代に繊維産業（ソ連に輸出）で栄えたが、第二次大戦中にドイツにより徹底的に破壊された。空爆をされなかった古都、クラクフとは対照的である。破壊による荒廃は後遺症として町の建物や雰囲気に残っている。探検家フェスティバルは町興しの企画としてウツツ・トレッキングクラブが主宰し実行しているウツツ市のプロジェクトであるが、ポーランド山岳協会も積極的にサポートしている。

翌十一月二十日がメイン・イベントある。八〇〇人はきているという若い観客が溢れるコンサートホールで「最後の辺境―チベットのアルプス」をパワーポイントで一六〇枚のスライドを使って講演をした。巨大なスクリーンなので見栄えがする。



ウッツ市大学での講演

終わって国際探険家賞受賞、名誉会員の認証と、思い出に残る素晴らしい体験だった。かくも大勢の若者が講演を聞いてくれたのは初めてなので感動した。日本では想像もつかないことである。若者だけでなく、ポーランド最強のクライマーの一人、クシストフ・ヴィエリツキやスロバキアのクライマーたちも来



大学講堂 700人の学生

てくれた。

プレゼンターの顔ぶれは多彩であった。オーストラリアの冒険家カメラマン、エベレスト初登頂のテンジンの息子、エベレスト・ヘリコプター飛行のフランス人、オーストラリアの砂漠をバイクで横断したポーランド人、二〇一〇年八〇〇〇峰十四座完登のポルトガル人、モーターバイクで世界一周のアメリカ女性、気球でアルプス越えの英国人などである。異色はポーランド青年三人のシベリアからチベット横断の旅だった。第二次大戦直後、二人のポーランド人がシベリアに流刑になるが、彼らは脱出をしてシベリアからチベットを横断して遂にインドに到達し亡命する。荒唐無稽と思われるほど信じがたい過酷で厳しい逃避行だった。作り話であろうという風聞は後をたたない。この話は日本語にも翻訳されている。その足跡を辿る旅をしたのはポーランドの若い三人組である。テンジンの息子のジャムリン・テンジン・ノルゲイはアメリカに留学、ダージリンに住みアイマックス（IMAX）で山岳映画を企画し作製している。映画撮影のプロで、父親の歴史を映像化した部分も入れたエベレストの映画を撮っている。彼は二〇〇一年に *Touching My Father's Soul* という本を出版している。

国際探検家賞“Explorer International Award 2010”。対象は登山、探検、アドベンチャー、研究の広範な分野にわたる。今



ポーランド山岳協会の名誉会員認証

までの受賞者はクリス・ボニントン、エドモンド・ヒラリー、ダグ・スコット、クルト・ディーンベルガー、リン・ヒル、マルコ・プレレジ、日本人の舟津さんなどである。二〇一〇年の受賞者は私を含め四人。スイスの人力飛行士、カラコラム・ヒンズークシユの地図作成のポーランドのイェルジー・ワラさん

も受賞した。舟津圭三さんは、アラスカ在住のマツシャー(犬糧使い)である。探検家と呼ばれることもある。一九八九年十二月から一九九〇年三月にかけて行われた国際隊の史上初の犬糧による南極大陸横断に日本人メンバーとして参加、その功績でその年の朝日スポーツ賞を受賞している。犬ゾリレーサーとしても知られ、現在アラスカのアババンクスに在住し、北極アドベンチャー・ツアーの仕事もしていると聞く。

ポーランド山岳会の名誉会員。認証書授与は探検家賞受賞と同時にされた。存命中の外国人名誉会員は、クリス・ポニントン、ヘルガ・エッガー、ハリツシユ・カバディア、クラパチェル・ワルテル、ナジル・サビル、シユールベルト・ピットである。故人ではアダムス・カーター、グンター・ディーレンフルト、リカルド・カシン、ジャン・フランコ、エドモンド・ヒラリー、ジョン・ハントなどがある。

二回の講演にあたり、たいへん優秀な女性の通訳(英語・ポーランド語)に恵まれたことは幸いだった。

## ポーランド登山界

ポーランドの登山界は長い歴史があり、ヒマラヤでは一九八〇年二月にエベレスト冬季初登頂(隊長はザヴァダ)を果たし

てその存在を世界にアピールした。山岳会の母体となるトタラ・クラブが一八七一年に創立され、一九〇三年にポーランド山岳協会の前身となる山岳会ができあがった。しかし第二次世界大戦後社会主義体制になって解体され、一九五六年に自由化とともに復活した。さらに幾度か名称・組織を変え、分散しているクラブを統合する形で一九七四年に現在のポーランド山岳協会(Polskie Związki Alpinizmu = Polish Mountaineering Association or Federation)に集約、今日に至っている。現在の会長はヤヌス・オニシユキエビツツ氏、政治家である。社会主義時代には政府のスポーツクスマン、国防大臣も歴任した。

世界のアルパインクラブ誕生の歴史からいうと、本家の英国についてイタリア、ニュージーランドともいたいへん古い。社会主義体制の時代は組織の維持に苦労したと聞いた。二〇一〇年現在、傘下で四十五のクライミング・クラブ(メンバーは三四〇〇人)と二十二のケーピング・クラブ(メンバーは一〇四〇人)が活動している。V・クルティカ、K・ヴィエリツキ、故A・ザヴァダ、J・クルチャツプなど著名なクライマーを輩出し、二〇一〇年までに三人がヒマラヤ八〇〇〇峰十四座を完登している。登山文化の伝統はしっかり根付いている。協会はタテルニク(TATERNIK)ポーランド語でアルピニストの意)という立派な機関誌発行している。

ポーランドが目標としてきた「冬季初登頂と新ルート開拓」は着実に成果を挙げてきた。ネパールの八〇〇〇<sup>1</sup>冬季初登頂はポーランド隊が大半を占めている。

- 1979 / 80 エベレスト(8848)、1983 / 84 マナスル(8156)、1984・85 ダウラギリ(8167)、1984 / 85 チョー・オユー(8201新ルート)、1985 / 86 カンチェンジュンガ(8586)、1986 / 87 アンナプルナ(8091)、1988 / 90 ローツェ(8501m)である。
- 1990年にアルパインスタイルで登ったクシストフ・ヴィエリツキのダウラギリI峰東壁など、八〇〇〇<sup>1</sup>峰の新ルート開拓も数多い。初登頂も少なくない。注目されるべき記録は、
- 1939年 ガルワル・ヒマラヤ ナンダ・デビ 東峰(7434)
- 1971年 カラコラム クンヤン・チツシュ(7852 m)
- 1974年 ネパール・ヒマラヤ カンパチエン(7902 m)
- 1974年 カラコラム ヒスパー・サール(7611 m)
- 1975年 カラコラム ガツシャールムⅢ(7952)

- 1983年 カラコラム バツラ サール V(7531 m)、IV(7462 m)

この時代のポーランドからの遠征は協会が強力なメンバーを選抜して送る官製プロジェクト的な色彩が強かった。が、自由意志で出かける本来のアルピニズムの登り方をするグループもあった。

伝統を踏襲して、近年は新たな挑戦としてカラコラム八〇〇〇<sup>1</sup>峰の冬季初登頂を目指している。カラコラム八〇〇〇<sup>1</sup>峰は冬季にはまだ登られていない。世界の八〇〇〇<sup>1</sup>峰十四座のうち九座が冬季に登頂されているが、それら九座は全てネパールかチベット(シシャバンマ)にある。冬季未登の八〇〇〇<sup>1</sup>峰は全てカラコラムにある。二〇一〇 / 二〇一一の冬はヨーロッパから下記の三隊が冬のカラコラム八〇〇〇<sup>1</sup>峰に挑む。

- (1) ガツシャールムI峰(8080 m)・・・オーストリア・カナダ・スペインの混生チーム(新ルート)
- (2) ガツシャールムII峰(8034 m)・・・カザフスタンのD・ウルブコとイタリアのS・モロ
- (3) プロード・ピーク(8051 m)・・・ポーランド隊

「ポーランド・冬のヒマラヤ Himalayas2010-2015 計画」

の一環として実行

カラコラムはネパール・ヒマラヤと比べると気象条件がより厳しい。気温が約一〇℃低いし秒速一五〇―一八〇<sup>km/h</sup>の烈風が吹く。登頂に成功するには七〇〇<sup>m</sup>前後のところを待機し、風が少し収まる合間をみて一気に頂上を往復する以外にチャンスはなからうとポーランドの先鋭クライマーは考えている。上記の三隊の他にロシアのクライマーが単独でナンガ・パルバットの冬季初登頂を目指したが、十二月末に体調不良でC1で敗退した。

平地が九五%以上を占めるポーランドでクライマーは何処で訓練したのだろうかと疑問があったが、直ぐ氷解した。スロバキアとの国境にある二五〇〇<sup>m</sup>前後のタトラ山脈は格好なゲレンデである。五〇〇―六〇〇<sup>m</sup>の岩壁の冬の登攀は厳しい。無数のルートが開拓されている。英国のスコットランドの山と同様に、ポーランドのクライマーはタトラで鍛えヒマラヤに向かう。日本アルプスや谷川岳と同じである。

### ポーランドへ招待された背景

大国ロシアとドイツの狭間で悲劇の歴史を背負ってきたその国から探検家フェスティバルへの招待が届いたのは二〇〇九年の夏だった。しかし東チベット踏査が決まっていたので辞退したところ、二〇一〇年のイベント「The 12th Explorers Festival」

に来てくれということになり今回の訪欧が実現した。併せて、三年に一度十一月に開催されるポーランド山岳協会の総会において名誉会員への推挙が決議された。私に声がかかってきたのは、自己宣伝になるが次のような背景がある。

重機メーカーHIIの企業戦士として長く海外(パキスタン、メキシコ、ニュージーランド、香港)に駐在し、登山の実践から離れていた「キセル登山家」が復帰して始めたのが、一九九〇年からの雲南・四川・東チベット踏査であり既に三十二回におよぶ。二〇〇一年にシングル・ハンドで立ち上げた日本山岳会の海外向け英文ジャーナル「Japanese Alpine News」の編集は特集をいれて十四冊になる。英国のアルパイン・ジャーナルとインドのヒマラヤン・ジャーナルには指定席をもらい毎年投稿してきた。海外への発信と探査の実践は車の両輪で「最後の辺境―チベットのアルプス」が広く欧米に知られるようになった。

王立地理学協会(英国)のバスク・メダルを受賞し、アメリカ山岳会、アルパインクラブ(英国)、ヒマラヤンクラブ(インド)そして日本山岳会の名誉会員にしていた。二〇一一年五月にはニュージーランド山岳会から五人目の名誉会員の認証を受けた。またUIAAからは東チベット探査と地図作成と英文ジャーナルと評価してする賞が授与された。二〇〇三年からアメリカン・アルパイン・ジャーナルの編集長をしてジョン・

ハーリンⅢ（父親はジョン・ハーリンⅡ、注記①参照）は私の「ヒマラヤの東チベットのアルプス」を三〇頁のカラー特集で世界の登山界に大々的に発信してくれ起爆剤を提供してくれた。

注記①…アメリカからスイスに移り住んでアイガー北壁直登（ディレットイシマ）に賭けた。何度かの挑戦の後、一九六六年三月、速攻アルパインスタイルの英米合同隊（リーダー…ジョン・ハーリンⅡ）と物量作戦のドイツ隊との競合になり、最後は英米合同隊からドウガル・ハストンだけがドイツ隊に合流して完登した。途中でジョン・ハーリンⅡは墜落、非業の死をとげる。英米合同隊にはサポーターとしてクリス・ポニントンも参加、ドウガル・ハストンは一九七五年にポニントン率いる英国隊に加わりダグ・スコットとともにエベレスト南西壁を初登攀して頂上になった。

海外への浸透はバブリシティーに止まらず海外からの講演に招聘された。アルパインクラブ（英国）、アメリカ山岳会、ヒマラヤンクラブ、アイルランド山岳会と英語圏はほぼ一巡し、デนมาร์ク、韓国も終え、二〇一〇年は非英語圏のイタリア、ポランド、スペインである。四月にはリカルド・カシンの根拠地、湖水地方のレコとトリノのイタリア山岳会で、五月にはトレン

ト・フルム・フェスティバルで講演をした。二〇一一年五月にはニュージールランドのクライストチャーチで講演した。こうして業績は広く認知されることとなった。

ポーランドへの招聘を推進してくれたヤヌス・マイヤーさん（64歳、アウトドア・登山用具の製造販売会社の共同経営者）もヒマラヤに実績の多い知名度の高い登山家である。ヤヌスさんはクラクフの工科大学冶金科を卒業、一九七六年ノシヤック、一九八六年K2、一九八八年アンナプルナ南壁、一九八九年エベレストへ遠征している。一九九〇年に登山・アウトドア用品事業を始めるがブームに乗れず破産するが、友人に助けられて再出発し小規模ながら手堅い経営を続けている。ベトナムに製造工場を持っており、中国進出も計画している。一九九〇年以降は厳しいクライミングから離れてトレッキングや未踏の地の探査を楽しんでいる。ピアフォー氷河からヒスパール氷河への旅をし、チベットへも出かけている。私を招聘した直接のきっかけはマイヤーさんの中央チベット・チャンタン高原踏査行の記録を英文ジャーナルに掲載したことによる。

## 日本の登山界との交流

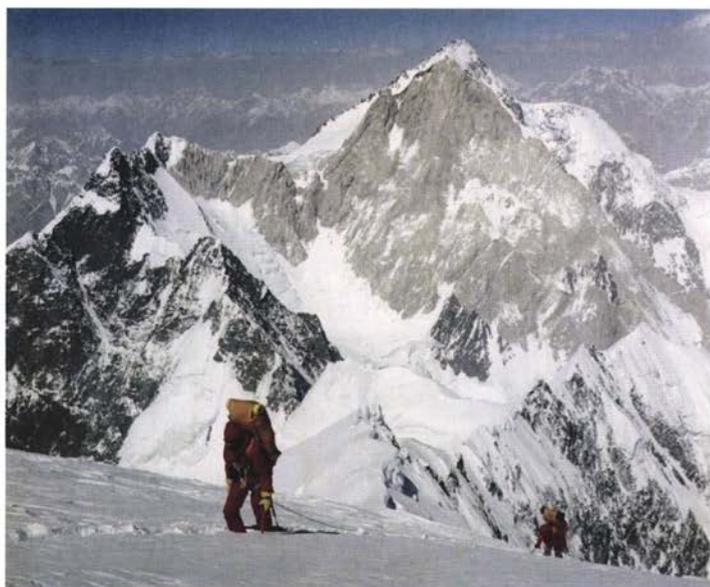
ここ二十年の海外での経験で、世界の山は広い、しかし登山界はどこかで繋がっていること実感してきた。ポーランドと日本

の登山界との交流は深かった。過去形で表現したのは、一九八六にポーランド山岳協会のミッションが日本山岳会と交歓するために来日して以来積極的な交流は途絶え四半世紀もの空白が続いていたからである。一九六〇年の京都大学学士山岳会（AACK）がヒンズークシユ、ノシヤック七四九二メートルを初登頂したとき十二名のポーランド隊（第二登）と遭遇したのが最初であろう。二〇一〇年九月に初登頂50周年を記念して登頂者の岩坪五郎さんと酒井敏明さん他十四名がポーランドを訪問し交歓した。学習院の芳賀孝郎さん、贄田統亜さんも参加し、日本山岳会の「山」（2010・11月）に芳賀さんが寄稿している。

両国の登山家同士の出会、接点はあった。沖允人さんはワルシャワ工科大学に半年ほどポーランド政府から奨学金を得て研究のために滞在し、その間にザヴァダさんと親交を深め、タトラ山群へはザヴァダさんの仲間と一緒に登っている。

一九七六年、カラコラムのスキヤン・カンリ七五四メートルを初登頂（永田秀樹、藤大路美興）した学習院隊とポーランドのクルチャップ指揮するK2登山隊とベースキャンプで交歓する。そして三十四年の歳月を経て登攀隊長だった贄田さんとクルチャップさんはポーランドで再会する。

一九七六年には別の接点もあった。衰退を続ける日本の登山界で現役クライマーとして頑張っている坂下直枝さんから届い



K2 7,600m 地点からクルチャップさんが撮ったスキヤン・カンリ

たメールを以下引用させて頂く。

「中村さんのご報告のなかに懐かしい名前が大勢登場しまし

たが、ヤヌス・マイヤーさんの名前がでてきて驚きました。一九七六年の夏、ジャヌー北壁を初登攀した余勢を駆って三人でアフガニスタン・ワハン谷のノシヤック峰を含めた七〇〇〇峰をアルパインスタイルで登ろうとネパールから転進しました。ベース入りした翌々日六七〇〇峰を登攀中のビバークで高山病にかかり、ベースキャンプで急激に悪化し、ポーランド隊のヤヌス・マイヤーさんとドクター、メンバーの介抱で助かりました。命の恩人です。

お札にソニーの小形レコーダーでモーツァルトとバッハのテープを流してクラシック・コンサートをした後、レコーダーなどポーランド隊に寄贈しました。ヤヌスさんから友好の印として大振りのナイフを頂戴しました。小柄で黒いひげ、顔のふっくらした人で話は魅力的で優しい男でした。当時はクラクフの工場に勤めていりと聞きましたが、登山スポーツ用品の会社を経営しているとは知りませんでした。あれから三十五年経ちます。お会いしたいものです。連絡先を教えて頂ければ幸いです。

ザヴァダさんには、小生が一九八〇年に冬のアンナプルナー峰に単独で挑戦したときにいろいろなアドバイスを頂きました。当時は瘦身に大学教授のような風貌でした。訃報は残念です。

世界は広いはずですが、登山界はどこかで世界中のいろいろな登山家と繋がっていますね。リポートを読んで改めて感じま

した」

坂下さんの印象どおり、ヤヌスさんは親切で気配り、そして知性豊かな人である。

私がニュージーランドの製鉄所建設プロジェクトで悪戦苦闘していた頃、ポーランド大使館の好意で一九八六年夏に日本山岳会とポーランドの交歓登山が実現し、アンジェイ・ザヴァダ（当時57歳）を団長とする七名の選りすぐりの登山家が来日した。エベレスト冬季初登頂のレシエック・チヒ、クリストフ・ヴィエリツキもメンバーだった。日本山岳会は今西会長以下総力で迎え入れ、読売新聞の協力、産業界の支援も受けて交流の成果を挙げた。登山は富士山と上高地で行われた。ザヴァダさんとチヒさんは永田秀樹さんと穂高に登り、残りは屏風岩でフリークライミングを楽しんだ。

シンポジウムの席ではザヴァダさんは一五〇年におよんだ国の分割と第二次大戦後の困難な再建の歴史とポーランドのアルピニズムについて説明し、自分たちのコンプレックスとしてポーランド人は八〇〇〇峰を初登頂していない事実をあげた。「それで、なるべく国際的に効果のある登頂を狙おうと決めました。必ず新しいことをやること、他の国が辿ったルートには行かない」と語りポーランドの目指すべき道筋を示唆した。彼の発想はその後のポーランド隊の記録で実証されている。が、悲しいことにザヴァダさんは十年前に膀胱癌で他界した。

松田雄一さんによると、ポーランド側はお世話になった返礼に次はポーランドで交流登山をしたいから是非きて欲しいと日本山岳会に要望したが実現しなかった。ポーランドのクライマーの実力に太刀打ちできるメンバーは集まらないだとうと尻込みしてしまっただけ。

その後の交流は個人ベースの登攀で二〇〇一年に山野井泰史とクルテイカがカラコラムのピアチェラヒ・タワー（標高六〇〇〇m弱）をベアーで登った記録がある他は寡聞にして知らない。

## イエルジー・ワラとジョセフ・ニカ

ポーランドの登山文化は海外遠征という光の当たる面だけでなく、文献や地図作成の分野でも他国の追従を許さない業績が地道に蓄積されている。日本でも知られているイエルジー・ワラさんのカラコラム・ヒンズークシユのクロニクルおよび地図作成とヤン・キェウコフスキさんの山岳百科大事典 (WIELKA ENCYKLOPEIA GOR I ALPINIZMU 17×25cm、全七巻) がその代表である。大事典の第二巻目はアジア編の山名事典で800頁におよぶ大書である。日本山岳会、日本山岳協会、山溪の「岩と雪」の紹介もあり、驚いたことに東チベット・雲南・四川のパートでは私が英文ジャーナル「Japanese Alpine News 2003 特集号「チベットのアルプス」」に掲載した地

図十七枚がクレディット入りでそのまま使われる。ここにも英文ジャーナルの価値がうかがえ、事典編集者の幅広い見識と意欲がみてとれる。これほどの大事典が出版されている国は他に無いだろう。惜しむらくはポーランド語で書かれているので、他の国では利用されないだろうとある。資料作成という面では旧東欧圏の国の登山家の方が熱心である。(本号「図書紹介」参照)

私のポーランド滞在中ワラさんに親しくアテンドしていただいた。一緒に探検家フェスティバルに参加し、タトラ山を案内して頂きスロバキア側にも入った。彼が住む京都と姉妹都市、古都クラクフを奥さんと一緒に案内してくれた。奥さんは芸術家で絵画に造詣が深く日本の浮世絵にたいへん興味をもっている。ワラさんは八十歳になるがかくしゃくとしていて、地図に関する探究心は衰えを知らない。今でもタトラ山でアイス・クライミングを楽しんでいる。ヤヌス・マイヤーさんの家に一緒に泊まり地図談義に花を咲かせた。ヤヌスさんの山仲間が集まってきた。話題は山に限らない。いきなり「日本の島の問題をどうかんがえるか」と質問が飛ぶ。てっきり尖閣列島のことだと思ひ話し出すと違っていた。中国ではなく、千鳥のことでロシアの大統領が国後島を訪れたことだった。ポーランドの関心はロシアであることが分った。ポーランドのスーパー・マーケットでは一万キロ離れた千鳥産の鮭のスモーク・サーモンが



ワルシャワにて、ニカさん(左) クルチャップさん(中央)

売られている。味はノルウエー産とおなじで値段は半額である。  
 四十年以上前からワラさんが改訂に改訂を重ねてアップデイトしながら作り続けてるカラコラムとヒンズークシユの地図は欧米で最も権威があり信頼されている。客観性を持たせるた



クラコフにて、ヤヌスさん(左)  
 ワラさん夫婦(右)

め、絶えず外国の登山家、地図作成者からニュースを取り入れ精度を上げる努力を続けている。私の先輩、故吉沢一郎さんとは早くから情報交換をいていた。日本のカラコラム・ヒンズークシユ会議座長でカラコラム・ヒンズークシユの大部の登山地図集を出版した宮森常雄さんとの交流は深く、お二人の連絡を私の中継している。最近ではスペイン・パルセロナ郊外の山岳図書館とも連携を始めて、テイリチ・ミール1:70,000の詳しい地図を作成した。私はスペインの山岳図書館とワラさんに四川省ミニヤ・コンカ山塊の地図を作成してもらうため、中国の1:50,000、100,000の地形図、パノラマ写真など手元にあるすべての資料を送っている。ワラさんはもともと機械技師で冷凍圧縮機の製造工場での仕事の本職だが、地図の世界にのめり込み、四

季を通じてタトラ山を訪れ新ルートの開拓をし、アルプス、コーカサス、ヒンズークシユ、イランの山、天山山脈にも出かけている。

マイヤーさんに案内してもらいワルシャワでジョセフ・ニカさんにお会いすることができた。費田さんへ送る自書『ポーランド人のヒマラヤ・偉大なる登山』を持参してクルチャブさんもきてくれた。ニカさんのお宅を訪ねるなり、いきなり尾形好雄さん、池田常道はどうしているかと尋ねられた。尾形さんは日本ヒマラヤ協会の月刊『ヒマラヤ』、池田さんは山溪の『岩と雪』を通じての緊密な情報交換があった。『Japanese Alpine News』に丹念に目を通してあげられていることを知り嬉しかった。

ニカさんは二〇一〇年十一月現在86歳、数ヶ国語に通じ三十五年間『ATERNIKA』の編集長を務めた。アメリカン・アルパイン・ジャーナルの名編集長、アダムス・カーターのポーランド版である。吉沢一郎さんのこともよく知っていた。お願いしたしポーランド山岳協会の歴史と組織を手早くまとめて提供してくれるところはまだまだ現役である。ポーランドの困難な歴史の中でニカさんも厳しさに耐えて生き抜いてきた。第二次大戦中はタトラ山中の地下政府でドイツ軍に抵抗してきたという。ニカさん、クルチャブさん、マイヤーさんとの会話のなかで自由と人生の大切さを聞き、探検や登山の哲学について語るとき

ユーモアを忘れない感覚と心暖かさに強い印象をうけた。

初冬のポーランドは陰鬱で底冷えがする。翌朝十一月二十五日、小雪舞うワルシャワ空港を飛び立って次の目的地スペインのバルセロナに飛んだ。直行便で三時間、太陽の国は快晴だった。

## スペインにて

### スペイン山岳図書館

十一月二十五日、雲が低く垂れ込め、小雪まじり寒いワルシャ



ワから地中海のバルセロナまで直行便で三時間である。北ヨーロッパの陰鬱な天気が嘘のように青空で太陽が眩しい。山岳図書館のジョセブ・バイティユビさんとカルロス・カベラさんが空港で出迎えてくれた。山岳図書館と書いたが、正式名称はカタルニア語で *Servei general d'informació de muntanya - centre de documentació alpina* (以下SGIM)で山岳情報を提供するサービス・センターの意味で実質は山岳情報サービスを兼ねた山岳図書館である。バルセロナから車で四十分ほどの人口二〇万人のサバデル市にある。

SGIMとのコンタクトのきっかけをつくってくれたのは葉師義美さんである。葉師さんはSGIMが日本語文献を収集するにあたり協力し、十年前に葉師ヒマラヤ文献目録の講演のためSGIMから招待された。葉師文献インデックスは欧米では有名で広く援用されている。その頃私も文献収集に若干お手伝いをいしており、折しも英文ジャーナル *Japanese Alpine News* 立上の準備をしていた。英国、アメリカ、ニュージーランド、カナダの英語圏への配布先については拠り所があったが、ヨーロッパ大陸は雲を掴むような状況だったので、思案余ってSGIMにお願いし、フランス、ドイツ、イタリア、オーストリアなど非英語圏の情報を提供してもらった。そんな経緯があり、今回のポーランドでの探検家フェスティバルに出かけることを

SGIM代表のジョセブ・バイティユビさんに伝えたところ、バルセロナに招待するのでカタルニア山岳会でも講演をしてもらいたい、併せてサバデルの山岳図書館を是非見て欲しいとの連絡を受けた。

SGIMは一九七四年にサバデル市の有志により産声を上げた。目的はスペインで唯一の山岳図書館をつくることで、世界の山岳文献・資料を収集して一般に公開するためである。山岳雑誌を含む文献、地図、写真、フィルムを網羅する。現在は一五〇〇冊の蔵書があり、日本語の文献も七七〇冊ある。日本山岳会の『山岳』と山溪の『岩と雪』は完本で揃っており、日本ヒマラヤ協会の『ヒマラヤ』は大きな号はある。京都大学、同志社大学、神戸大学、北海道大学などのジャーナルも可なり整備されている。中国文献も積極的に集めている。しかし蔵書の充実ぶりとしては道半ばであろう。

図書館の建物自体と内部の広いスペースと配列は立派である。コロラド・ゴルドンにあるアメリカ山岳会本部やイタリア山岳会トリノの図書館に匹敵する。現在の建物は一九九三年に整備されたもので、サバデル市が古い教会を無償で貸与し、電気、空調、ガス、水も無償で賄っている。レイアウトは書架、映写室、集会和作業場所がゆつたりととられ、写真、地図、登山用具も展示されている。

S G I M を支援しているのは次の五団体と個人である。

- (1) Federacion Espanora de Deportes de Montanya y Escalada スペイン山岳連盟
- (2) Federacio d'Entitats Excursionistes de Catalunya カタルニア山岳連盟
- (3) Generalitat de Catalunya カタルニア自治政府
- (4) Diputacio de Barcelona バルセロナ州政府
- (5) Auntement de Sabadell サバデル市(建物提供)
- (6) 個人のサポーター 約80名、年会費1人50ユーロ

これら支援団体の中で重要なものは(1)と(3)で、運営費を出してくれている。しかし、最近の経済不況、国家財政の危機で運営費の拠出が減らされているのが問題であると聞いた。バルセロナの不動産市場は低迷、マンションの売れの残りが目立っていた。これからは内外のサポーターを増やし財政基盤をすこしでも強化したいという。

成人会員		ジュニア会員		総計		合計
男子	女子	男子	女子	男子	女子	
57,586	19,189	2,754	1,692	60,350	20,877	81,227

スペイン山岳連盟 F E D M E = Federacion Espanora de Deportes de Montanya y Escalada は大きな組織である。二〇〇九年の年次報告書によると傘下に二十三の州の山岳連盟があり、会員総数は八一二七人である。

州単位の二十三の連盟の中で最大はカタルニア山岳連盟である。会員総数は男子一二四七一、女子五四五二人、計一七五一人で傘下には二五〇のクラブが所属する。バルセロナ市だけで傘下のクラブは一五〇を数え一〇九八〇人の会員を擁する。スペインの登山界はカタルニアのバルセロナが中心であり、そこに山岳図書館がつくられたことが頷けた。ちなみに別の州の首都マドリッドの会員は約七〇〇〇人である。スペイン山岳連盟の組織、構成は日本山岳協会に類似している。傘下に都・県岳連がありその下部組織として多数の山岳会がある日本に近いといえよう。

S G I M の運営は4人のボランティアが行っている。代表のジョセブ・バイティユビさん(67歳)、タクシー・ドライバーのカルロス・カベラさん(57歳)、写真家で F E D M E 山岳ガイドのサビ・ロンゲレスさん(47歳、ジョセブさんの奥さんの弟)、アンナ・ロンゲレスさん(49歳、ジョセブさんの奥さん)で、言ってみれば家族と近くの友人だけで毎週月火の二日間だけやってきて図書館を維持している。報酬は貰っていない。ジョセブさんはカタルニア山岳連盟の重鎮でヒマラヤの経験もあ

り、一九八二年にカラコラムのデイスタギル・サール七八八五の第二登をしている。落ちついた風格を感じさせる人物である。

S G I M が一般に公開されるのは四人のボランテイアのがくる月火の夕方だけである。人を有給で雇う資金がないので、公開する日数を増やせないという。スペインの中心、マドリッドから遠い場所に、週に二日しか公開されないスペインで唯一の山岳図書館があることに違和感をいだく向きもあろう。しかし、上記のようにカタルニアは登山人口が一番多い州でヒマラヤ遠征の実績も数多い。スペインの登山文化がここに立派な図書館を持つことに意義を認めるスペインの登山文化の背景があると見えよう。日本山岳会のライブラリーと協力関係を持ちたいと提案された。できるだけの対応をしたいと思う。地図作りのために S G I M はホーランドのヤヌス・マイヤーさん、イエルジー・ワラさんと緊密に連携している。ワールド・マウンテンニアリング・コミュニティという言葉で欧米の登山家からよく聞く。世界の登山家はどこかのコミュニティで繋がっていることの一例であろう。私は彼らにできる限りの資料を提供し中国四川省ミヤ・コンカの図作成を依頼している。

### カタルニア講演とモンセラート

地中海に面した人口三〇〇万人カタルニアの州都バルセロナ



はオリンピックで知られ、ガウディで有名だがカタルニアはスペインのなかでは登山が盛んな土地で、ヒマラヤでの実績は少なくない。ピレネーの南側に位置し規模は小さいが、いい山がたくさんある。カタルニア山岳連盟の本拠地がバルセロナである。私の講演はサパデルに隣接する人口二〇万人の繊維産業で町、テラッサの山岳センター一〇〇



周年行事の一つに組み入れられた。テラツサに住むジョセブさんの計らいである。テラツサに限らず他の山岳クラブの活動もそれぞれ歴史があり活発のようだ。

こじんまりしたセンターの会場に一一〇名ほど集まってくれ、ポーランドとは違った打ち解けた和やかな雰囲気ですらいドショウと話ができた。質問も活発で張り合いのあるやり取りを楽しんだ。ポーランド同様、いい通訳（英語→カタルニア語）の女性がついてくれたので流れはスムーズにいったことも幸いした。一九七四年にスペイン隊を指揮してアンナプルナ東峰八〇二〇峰を初登頂したジョセブ・アンゲラータさんが奥さんとバルセロナからきてくれた。彼はクリス・ポニントンと親しい。メコン源流への踏査にも出かけているので話が弾んだ。

三十年前に仕事で六年間メキシコに滞在していたので、忘れてしまっているとはいえ、スペイン語を使うことを楽しみにしていたが、カタルニア語はスペイン語とはだいぶ違うのであてが外れてしまった。フランス語が混じっているような、ポルトガル語にも近いような感じを受けた。カタルニヤは中世ヨーロッパの影響を受けながら勢力を地中海に拡大し、四世紀には巨り黄金時代を謳歌したが、一七一四年スペイン継承戦争で敗北、自治権を失う。しかし、十九世紀半ばには再び発展が始まり、カタルニア・ルネッサンスが起りガウディなど建築家を輩出する。独裁者フランコの死後、自治権を獲得し、カタルニ

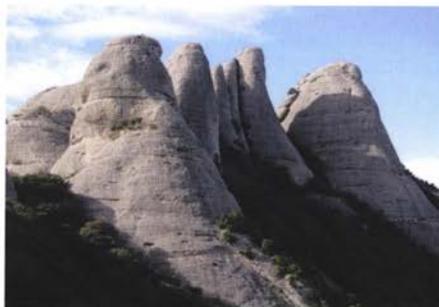
ア語をスペイン語同様に公用語として復活させた。私がスペイン語で話かけても返事は英語で返ってくるので、学習効果はなかった。

講演は午後九時に終わったがスペインの夜は遅い。テラツサの市長さんが二十名ほどを豪華なレストランで歓待してくれた。私の隣には一九八五年テラツサ登山隊のメンバーでネパール北西部のサイバル七〇三一峰の西稜經由第二登、南西壁經由第三登をしたジョアキン・ブルネスさんが座り、同志社隊の初登の記録にたいへん興味を持って話してくれた。ブルネスさんはジョセブさんとデイスタギル・サールを登ったパートナーである。他にも意欲的なヒマラヤにストが数名いて熱気が溢れ、美味しいスペイン料理とワインに時間の経つのを忘れた。市長さんはカタルニアの山の本を進呈してくれた。お聞きになったのは午前になってからだ。スペイン流である。

嬉しかったことは、南米のペルー・アンデスの登攀クロニクルを整備発信している「アンデス登山情報センター」代表のセビ・ボホルケスさんがバルセロナから六〇〇<sup>キロ</sup>離れているところから来てくれたことである。セビさんはいへん奇特なアンデス研究者である。日本人のペルー・アンデス、コルディエラ・ブランカ山群における初登頂の記録を丹念に拾い、リストと解説を書き、地図に展開してくれた。労作である。本来日本人がやって当然のことをスペイン人が自発的にしてくれたのであ

る。その英訳と日本語訳を「Japanese Alpine News 2010 号と『山岳』二〇一〇年に掲載した。

山岳図書館訪問と講演が終わって、ジョセブさん一家と十一月二十七日はバルセロナ市内観光、二十八日はモンセラート僧院と岩峰群へ遠足に出かける。モンセラートはテラッサから見えるユニークな岩の城砦である。テラッサから車で一時間、ゴンドラで僧院まで上り、一九三二年につくられてケーブルカーで標高一二〇〇mの岩峰群の一角に着く。そこから岩峰の裾をめぐる軽いトレッキングを楽しんだ。休日のせいも、多くの



クライマーが岩に取り付いている。

モンセラートの岩峰群には四五〇の奇岩のピナクルがあり、高さは見たところ五〇―二五〇m、それぞれに形を模した名前がつき、四千のクライミング・ルートが開かれている。カタルニアのクライマーにとって岩登りの良いゲレンデである。モンセラートの岩は海底に堆積した各種の岩のセグメントが集塊（コングロメレーション）して出来上がったもので、世界でここにだけしか存在しないという。岩は硬くホールド、スタンスに富んでいる。ピレネー山脈との間には小規模ながら美しい山塊が存在しクライミングの場所を提供している。

### ハンブルクへ、『アルプスのチベット』英語版

余談だが、訪問先の方々へのお土産には、先方の好みや趣味が分らないときはいつも頭を悩ます。日本的なものに絞ってもありきたりになってしまふ。ハンブルクの出版社、ベドロさんへ家族へのお土産もそうだ。今回は可愛い小学生低学年のお嬢さん二人には日本製のハロキティの腕時計を、奥さんにはバルセロナのモダンなベンダントを、肉製品に目がないベドロさんには趣向を変えてスペイン特産のハモン・セラ（生ハム）にした。これが好評だった。バルセロナの中央市場で極上のイ



ペドロさん一家

ペリコ豚のハモン・セラーノを買った。値段、品質（味）はピンからキリまでである。極上品は最高級の霜降り和牛と同じくらいの値段である。ペドロさんはたいへん喜んでくれた。今までに食べたことがない、とろけるような美味しいハモン・セラーノだった。

十一月二十九日、好天が続きの日も快晴、最後の目的地、ドイツへ移動する。ジョセブさんとカルロスさんが見送りにきてくれる。バルセロナからハンブルクへは格安のベルリン航空

のシュツツガルト乗換便である。待合室にいたらシュツツガルトは雪なので遅れるとのアナウンスがあったが、一時間遅れで離陸した。群青の地中海をひと飛び、イタリアのトリノ上空を過ぎアルプスにさしかかる。純白の眩しく輝くアルプスを越えると機は一気に厚い雲の中に入り二十分ほどで雪降りしき

るシュツツガルト空港に着陸する。

ハンブルク空港ではペドロさんが迎えてくれる。彼との出会いは幸運であった。二〇〇六年に一通のEメールがドイツから届いた。四川省ミニヤ・コンカの本の出版を進めており、私の写真も使いたいの条件をオッファーしてくれという内容だった。知らない相手であったが快く引き受け三十枚のカラー・スライドを送っておいたら、半年ほどしてできあがった本 *Minya Konka, Schneeberge im Osten Tibet* (Michael Brandner) が届き、十七枚の写真使用料一七〇〇ドルが送金されてきた。あわせて、私の「チベットのアルプス」出版したい、費用はすべて負担するからドイツにきてくれなにかと言ってきた。まったく予期しないことだったが、カラー・スライド三〇〇枚、ネガフィルム、*Japanese Alpine News* 掲載の英文三〇〇頁、多くの地図など材料をかき集めてハンブルクに飛んだ。ドイツ語版豪華本 *Die Alpen Tibets* の始まりで、二〇〇八年の六月に出版された。

ペドロ・デチエンさんはケルン大学医学部出身の心精神科医で現在は50歳、奥さんも同業でハンブルクの目抜き通りにそれぞれが心療クリニックを営業している。Minya Konkaのマイケルとは高校、大学の同期生である。マイケルは工学博士のエンジニアで、シーメンズの火力発電機部門の調達部門責任者として世界各国を飛び回ってて。二人は竹馬の友で、四川、

青海に数度トレッキングに出かけている。ペドロは頭脳明晰の秀才で、明るく温厚な気質、世話好き、料理好きで何よりも家族思いである。家内は、彼のような素晴らしい外国人に会ったのは初めてと手放して褒める。

本業の精神科医の仕事で、毎日患者とだけ向き合っているのでは飽きるので出版業を始めたという。プロなみのコンピューターの使い手で、いろいろなソフト・ウエアを駆使してパソコン画面上で本の原稿を編集する。写真のスキャン、画質調整は言うに及ばず、地図の作成はプロの領域に達している。アメリカ、中国の衛星画像をくしして高度な等高線いりの地図をつくる。

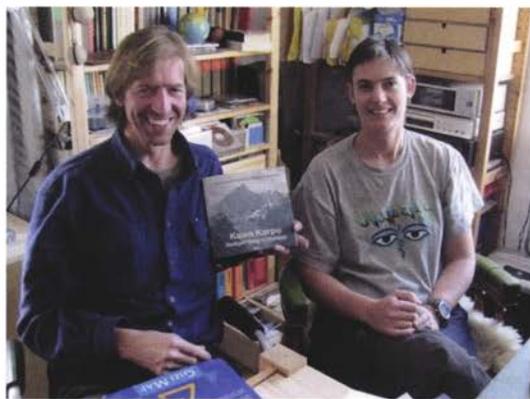
*Die Alpen Tibets* の打ち合わせを始めるにあたり、「こういう豪華本の出版は日本では売れないし、引き受けうる出版社はない。ドイツではどうか。売れる見通しは」と質したところ、ドイツには二〇〇年に亘る出版文化の伝統がある。心配しないでよとの返事であった。ドイツ語版の次は英語版である。ドイツ語圏はドイツ、オーストリア、スイスと旧東欧圏の一部を入れて1億人、英語圏に比べるとマーケットははるかに小さい。ドイツ語圏以外の登山家は英語版を待っている。クリス・ボニントンやケンブリッジ大学山岳会の重鎮らからは半世紀は役に立つ本になるだろうと期待を寄せてられている。

今回は六日間ペドロさんの家にお世話になり打ち合わせを

し、全体の構想と第1巻の内容を固めた。4巻の構成は次の通りである。しかし作業は遅々として進まないことが気にかかっている。

第1巻 東チベット探査―念青唐古拉山東部と崗日嘎布の未踏

第2巻 深い浸食の国―東南チベット、メコン・サルウィン・揚子江大峽谷



ドイツ生態学者と植物学者(右)

第3巻 四川省西部高地―東チベット東端のアルパイン・パラ

ダイス

第4巻 チベットのアルプスの彼方―青海省、アジアの大河の源流

ハンブルク滞在中にドイツ人学者男女二人が私に会いに訪ねてきてペドロさんの家に二晩泊まった。彼らは梅里雪山巡礼路を二回訪れ深い浸食の国の植物生態を出版した学者であり、マウンテン・バイクでアドベンチャー・ツアーを楽しむ驚くべきタフな冒険家でもある。冬季バイカル湖横断、カシユガルから中央チベットのシャンタン高原へ走り六〇〇〇峰の初登頂など、クライミングより忍耐力を求められる冒険をつづけてしている。女性（37歳）はポツダムに住む気鋭の植物学者で若くして賞をとり、男性（45歳）はワグナーの故郷の町に住む生態学者である。お互いの専門分野を補完するいいパートナーにみえた。

私に会いにきた目的は、二〇〇九年九月の梅里雪山主峰カワゲボ（カワカルボ）六七四〇m西面の未踏のシエグ氷河探査を紹介するためだった。私の知る限り、この氷河に入った記録は他にない。彼らは巡礼路から氷河末端に達し、デブリの上に繁茂する植物と樹木の観察を行った。カワゲボ西面の荒々しい障

壁の写真は印象的である。貴重な記録なので、彼らの希望もあり Japanese Alpine News 2011号に掲載することにした。二〇一一年の一月半ばに厳冬のシベリアをマウンテン・バイクで走破した。ペドロさんに進呈した吉田外司夫さんの『ヒマラヤ植物大図鑑（山と溪谷社）』を見てどうしても買いたいというので、帰国後すぐ購入して送付した。意義ある出会いで繋がり輪が広がってゆくのが嬉しい。

最後の夜はペドロさん一家と学者二人のために私が板前になり天婦羅パーティーで締め括った。いつも天麩羅粉と醬油、箸は持参する。ポーランドのヤヌス・マイヤーさんの家でも天婦羅を揚げて喜ばれた。ニュージールランドに滞在していたとき、お客さんの家で天婦羅パーティーの出張サービスをよくした経験のお陰である。旅の終わりに相應しい和やかな締めくくりだった。

角幡唯介 著

『空白の五マイル』

集英社 二〇一〇年十一月刊

四六判 三一二ページ 一六八〇円＋税

角幡唯介さんとは二〇〇三年に彼がツアンポー峡谷の単独探検を敢行した直後に知りあい、当時私が代表をつとめていた日本山岳会青年部の会合に招いて、話をしていたことがあった。今思えばわずかな人数で贅沢な体験をさせてもらったわけだが、当時の私たちが彼の成し遂げた探検の価値をどれほど理解していたかと考えると、冷や汗のにじむ思いがする。

ツアンポー（ブラマプトラ）川はチベット高原を横断しインドへと流れ込む、アジア有数の大河である。ヒマラヤ山脈の東端に位置するナムチャバルワ（七七八二メートル）とギヤラペリ（七二九四メートル）という二つの高峰にはさまれた大峡谷地帯で円弧を描き、その流れを大きく南に転回させる。ツアンポー川大屈曲

部と呼ばれる有名な場所である。

正確な地図など存在しなかった一九世紀頃まで、チベット高原を流れてきたこの川がヒマラヤ山中に姿を消した後、どこに流れるのかは大きな謎とされていた。その謎を解くために、多くの探検家たちが険しいヒマラヤ山中を目指したのだった。

あのジョージ・マロリーがエベレストに消えた年である一九二四年には、マロリーと同じ英国人探検家キングドン・ウオードにより、ツアンポー峡谷はほぼ全容を解明される。彼が確認できなかった範囲はわずか五マイル（約八キロ）だけであった。けれどもその未知の五マイルは、二一世紀を間近にひかえた私たちの時代を迎えてなお、未知のままに残されたのであった……。

一九世紀にはじまり現代へとつながる、ツアンポー川をめぐる探検家たちの波乱万丈の歴史を、本書はまず丹念に描いている。一〇〇年前の探検家たちの話、一九九〇年代に入ってから繰り上げられる現代の探検家たちの話、その一つ一つにドラマがある。ツアンポー峡谷で亡くなった若い日本人カヌーイストの話には、中でもとりわけ胸を打たれた。一九九三年に起きたその悲劇を私は記憶の片隅にとどめてはいたけれど、角幡の筆によって始めて、痛ましくも輝いていたその生きざまを知ることになった。

はじめにこの本を読んだ時、前半部を占める過去の探検家た

ちの物語は、角幡の探検というメインストーリーに至る前段だと考えていた。けれども、改めてじっくりページを繰っていくと、探検家たちのそれぞれの人生は、それ自身が本書の重要な構成要素となっていることに気づかされた。ダージリンの仕立屋キントウプも、辺境地への植物採集旅行を繰り返しロンドンのバブで死んだキングドン・ウォードも、冒険カヌー野郎から弁護士へと転身した只野靖も、伝説の理想郷を求めて巡礼を続けるイアン・ペイカーも、まされもない本書のメインキャストたちなのであった。

そして、連綿とつながれてきた探検家たちの歴史をしっかりと頭に入れたことにより、一〇〇年に及ぶ探検史の最後のピースをうめた角幡の、その探検の意味するところを、私は今にして存分に理解することができた。

——二一世紀というこの時代に、(地理的)探検という行為は成立するのだろうか？

——探検すべき場所はあるのだろうか？

——どうすれば意味のある探検ができるのだろうか？

探検に興味を持つものなら一度は抱くであろうそれらの問いに対する答えを、角幡は命を削るような二度の旅を通じて、私たちにはつきりと示してくれた、と私には思える。

「世界でもっとも謎の場所のひとつ」と言われ、名だたる探検

家たちが挑戦して跳ね返されてきた難攻不落のツアンポー峡谷に、この日本の若者はたった一人で乗り込んだ。そればかりか衛星携帯電話などの通信手段を携行せず、孤立無援というやり方をあえて選んだのである。しかも無許可であった。それにより行動は困難をきわめ、ほとんど無謀とも言えるほど薄氷を踏み続けることになるのだが、組織に頼らず、装備を制限し、自力にこだわったがゆえに、彼の探検はいっそうの輝きを放つものになった。もつと言うなら、徒手空拳とも言えるスタイルをあえて選んだからこそ、彼の探検は探検として成立したのである。

自分の目指す対象に誰にも負けないくらいの強い思い入れを抱き、歴史や記録を徹底的に調べ、探検にのぞむ自らのスタイルについて高い意識を持つ……。そのような角幡のあり方に習うことよって、私たちはいついかなる時代においても価値のある探検を成すことは可能である——。本書はそれを教えてくれた。「探検」という言葉は、「登山」や他の言葉に置き換えることもできるだろう。ただしその探検の価値は、社会的なものではないかもしれない。

「ひとりで旅をして、そこにそれを見つけた。それが何を意味するかは私自身の問題であり、脚色したり、意味づけしたり、社会性をもたせたりする必要などまったくなかった。たしかなのは、私にとつてホクドロンというところが特別な場所になっ

ただということだけだった」

最初の探検から歳月を経ることで、角幡は自分の探検を客観的に眺められるようになる。私たちもまた、探検という行為の持つ意味を改めて考えさせられる。

探検する意味は自分自身の中にある——。

まずそれを自覚することから、これからの時代の探検ははじまるのかもしれない。

こののち地理的な探検を志すものにとつて、本書はおそらく最良の教科書になるにちがいない。その意味で『空白の五マイル』は、冒険ノンフィクションのまがうことなき傑作であると同時に、二一世紀の探検に一つの指針を提示した歴史に残る一冊となった。

角幡は二〇〇八年に朝日新聞社を退社して二度目のツアンポー峽谷の探検を行ない、現在は探検家・ノンフィクション作家として、新たな冒険の地平を歩きはじめている。二〇一一年の春からは、極地探検史上最大の謎とされる、一九世紀半ばに一二人全員が行方不明になったフランクリン隊の消息をたどるため、徒歩による北極圏一六〇〇kmの踏査に挑んでいる。

冒険家としての実力とライターとしての能力をあわせ持ったこの稀有な才能が、長く生き延び、さらに高い次元で輝きを放つことを願ってやまない。

(松原 尚之)

西本武志 著

## 『十五年戦争下の登山——研究ノート』

本の泉社 二〇一〇年八月刊

A5判 二九五ページ 一八〇〇円＋税

ほくにとつて、生活と思想の面で、根底にあるのは戦争である。歴史上、戦争は珍しいことではなく、いつの時代でも、人間は戦争を経験して生きてきた。日本の歴史を見ても、江戸時代はむしろ珍しいのである。だから、ほくが戦争を体験したかからといって、別に珍しいことではない。戦争を体験した世代が少なくなつたと言われるが、それもまた、珍しいことではなく、戦争と平和が交代にあつて歴史は出来ているのである。したがつて、ほくが戦争に影響を受けたとしても、歴史上は取り立てて言うことではないであろうが、個人的には、どうすることもできない影響を受けている。

そんなわけで、ほくは第二次大戦下の知識人たちが何を考え、どういう生活をしたかが気になっていた。同時に、登山界がどういう動きをしたかが、気になっていた。しかし、生来の怠け者のせいで、詳細に事実を調べる努力をしないでいた。それで、『登山家素描』をまとめるときには、今西錦司や松方三郎や

浦松佐美太郎やテイルマンなど、自分が影響を受けた登山家について考えた。主として思想的な面であったけれども。また、登山家というより、知識人としての尾崎喜八について批判的な文章を書いた。

そして、最近になって、日本山岳会の百年史の通史を書く機会があり、事実を調べざるを得なくなつた。「機会」というより、日本山岳会の歴史をまとめるには不適任なことが分かつているのに、書かざるを得ない立場になつたので、戦時における登山界や日本山岳会の動きを思想的な面ばかりでなく、事実に調べる必要があつた。それで、資料として選んだのは、西本氏が『登山時報』に連載した「戦時下の登山の実相」であつた。ほくは、この論文によって多くの事実を教えられた。そして、百年史の中に「戦争と登山」という一章を設けて、登山史としては、初めて戦争を取り上げることができた。それまで、山崎安治『日本登山史』では全く触れなかつたし、安川茂雄『近代日本登山史』では、「戦時体制下の山と人」という一節及び、「戦争と山と岳人たち」という一章を設けているが、戦時下の登山がいかに苦勞して行われたかを述べているだけで、登山界あるいは登山者が戦争をどう捉えていたかについては、全く触れなかつた。ぼくとしては、どうしても、一章を設けて戦争と登山とについて論じたかつた。戦時下の登山については、個人的にも避けて通れないと思つていたし、織内信彦からも厳しく指示

されていたが、西本氏の論文がなかつたら、殆ど書くことができなかつたであろう。

それで、今度、この本が発行されたことを、ぼくは感慨深く受け取つた。第一章「戦時下の登山の実相と敗戦後の登山」の最初に述べているように、これまでの登山史の中で、戦時下の登山について検証したものは見当たらない。戦時下に登山が思うように出来なくなつたという視点からのコメントはあるけれども、登山界が戦争をどう捉えたかを論じたものは、殆どなかつた。それは敗戦後間もなくの時期ばかりでなく、現在にいたるまで、触れてこなかつた。結局、極端に言えば、戦時も戦後も、登山界は戦争について何も考えなかつたし、影響も受けなかつたのである。だからこそ、すぐ立ち直り、何もなかつたように登山を続けられたのである。思想的には断絶がなかつたのである。

ぼくは、そのことが氣になつて、いささか発言してきたが、前述したように、怠け者のために、詳細に事実を調べる氣力がなかつたから、簡単に入手できる文献から、思想や態度を論じたのであつた。かほそい声ではあつても、戦争という実態を考えずに生きられなかつたのである。自我の目覚めの時期に、それまで信じていた価値が否定され、新しい価値を信じよと強制された。町には占領軍が入つてきて、星条旗が正義を標榜して翻つた。ぼくは、それまでの権威をすべて否定せざるを得な

かった。信ずべき権威がないので、何を頼りに生きるべきか分からなかった。占領軍の民主主義をそのまま信じることはできなかった。自我だけは残ったが、自我もまた頼りにはならなかった。大変な価値転換を経験したので、それを検証しないでは、生きる力が生まれなかったのである。

そんなわけで、こういう内容の本が出るべきだと長い間思っていた。著者は副題を「研究ノート」としたが、たしかに読み物としてまとまった形でまとめたのではなく、殆どは、これまでに雑誌などに発表してきた文章をまとめたものである。けれども、こうしてまとまった形になると、一つの研究論文のよう感じられる。たぶん、テーマが明確だからであろう。著者の強い意志と気力が感じられる本で、これからは、戦時下の登山を考える場合の基礎的な資料として存在すると思う。

ただ、多くの立場とはいささか違う。どこの点というわけではないが、戦争を感じる立場が違うのである。ほくは、十四歳から十五歳の間ではあったけれども、すでに陸軍軍人として自ら戦争に参加していた。天皇のために一身を捧げる努力をした者である。他の戦争はいざ知らず、第二次大戦では傍観者ではなく、当事者であり、戦時下に生活者として生きてきた。客観的に、あるいは論理的に戦争を捉えるだけでは、自分の感性、思想、方法が成り立たない立場にいる。ほくは挫折し、傷ついていた。単純に、第二次大戦において、日本とドイツを悪とし

て否定し、戦勝国を正義とすることがむつかしかった。戦後にあって、朝鮮戦争が勃発し、中国によるチベット進入があり、ベトナム戦争があり、ソ連によるアフガニスタン侵攻があった。パレスチナ問題は六十年も続いている。そして、政治的には共產主義政権が崩壊した。特に指導的立場にあったソ連が崩壊したのは象徴的であった。

自分を脇に置いて、客観的に批判することは、ほくにはできない。被害者と考えている側が加害者でもある場合が多い。戦時下にあつて、日本人の多くが加害者でもあった。どうして、日本人は戦争を始めたのであろうかという問いが、いつも、ほくの頭から離れない。少数の抵抗者がいても、大多数の声に無力となり、戦争へと向かうのは、日本人ばかりでなく、世界の多くの国に見られる現象である。また、いつの時代にも見られることである。

登山界のことから離れて言及してしまつたが、登山界でも同様であろう。人間は誤りを冒す。しかし、反省もする。歴史はそういう繰り返してできていく。ただ、登山界で醜いのは、加害者であるにもかかわらず、被害者のように思い込み、反省をしない人たちがいたことである。それらの名前は、この著書の中にも出てくる。ほくが批判した尾崎喜八は、その象徴的な例である。この本の中では尾崎の名が出てこないのは、彼が登山界の中で組織的な行動や言動をしなかったからだだが、彼は詩人として、あるいは

知識人として広く当時の日本人に影響を与えた。ほくもまた、強い影響を受け、軍人になることを目指したのである。

第五章の最後に、「数奇な過去を背負わされた『たった一人の山』』という文章の中で、「あまりにも流麗な文体であるために、かえって、その『もろさ』や『つくられた』匂い、あるいは戦争という非常事態と無関係な『浮世ばなれした透明』さ指摘する向きもなくはないが」と書いているが、これはほくの『登山家素描』の中の『たった一人の山』の『もろさ』という文章を指していることは明らかである。たしかに、「不満を鳴らす前に、浦松氏にそなわった文才のゆたかさに感嘆」するという著者の方が正しいであろう。しかし、あれを書いた頃は、ほくも若かった。浦松も『たった一人の山』の文章を書いた時は若かったが、それを批判したほくも若かった。八十歳になったほくは、ああは書かないであろう。それでも、ほくは、今でも浦松は恵まれた環境にあったのだと思う。発禁くらいでは傷つかなかつたであろう。そして、戦後になっても、傷つかないままで、文人として登場できた。しかし、多くの知識人は戦時下に傷つき、それを戦後に引きずったまま生きざるを得なかった。ほくもまた、挫折をしたまま、戦後に生きた。それで羨望の気持ちもあって、ああいう批判をしたのであろう。あれでいいたいのは、論理ではなかった。挫折した若者の感情なのであった。

(水野 勉)

岩田修一著

## 『氷河地形学』

東京大学出版会 二〇一一年三月刊

A4変形判 三八八ページ 八二〇〇円＋税

書名の「氷河地形学」という分野はあまりなじみがない。氷河地形という言葉ならばしばしば使われて多くの人が想像をつけられそうだが、そこに学が付くとその定義から始めねばならなくなる。日本では「〇〇〇学」となると大学の講義の中くらいにしかないであろう。「はしがき」には教科書として纏めたと記されており、氷河地形を研究しようという学生のための講義ノートを骨格にしたとある。

この『氷河地形学』は特別な感慨がわく書物である。私が氷河に関心を抱いた一九七〇年代の日本では、氷河地形研究といえば日本アルプスと日高山脈のカールとその周囲に見られるモレーン、あるいは氷河性堆積物に関する時代区分や、カール、モレーンが残る谷を下流部まで追いかけて河岸段丘堆積物の編年と結びつけるというようなことが行われていた。カール、モレーンという明瞭な地形の存在は、日本にも部分的にはあるが氷河が形成された地質時代があり、全地球規模の気候変動の

一端である寒冷期、氷期を日本においても復元することが出来る手掛かりになった。寒冷化を示す地形、作用は日本でも特に北海道や高い山地に広く見られ、より一般的な地形として研究が進められたが、それは氷河地形、寒冷地形研究の範囲を超え、やがて「第四紀学」という最も新しい地質時代を広範囲に扱う分野の中に吸収されていったように見える。

戦前期はもとより、一九七〇年代でも日本から氷河のある地域に行くことの出来た研究者はごく少なかった。親しく氷河に接した経験を持ったのは、欧米での学会出席の途上に氷河巡検を経験した人たちか、日本においては果せない氷河水の物性をアラスカなどで研究した氷雪学研究者だけといっても良いほどだった。氷河地形研究は過去の氷河が残っていた跡を究明する分野であるから、日本でもそれは可能であった。しかし世界には現在も氷河に覆われた大地や氷河を戴く山岳があり、そこには氷河地形、それも大規模で多種多様な氷河地形が未調査の状態に残っている。

一九七〇年代の日本の登山界はヒマラヤ登山ブームで、ネパール登山の再開や、カラコラムでの本格的登山が始まった。この少し前には、ネパールヒマラヤの代替になる氷河のある高い山を求めてアラスカやアンデス、ニュージーランド、ヒンズークシユ、赤道の山、アルプス、グリーンランドにまで登山隊が繰り出して一気に氷河に接した日本人が増えた時代でもあっ

た。これら氷河を戴く世界の高峰は登山者ばかりでなく研究者も大いに刺激した。北大、名大などで主に雪氷学を専攻する大学院生―その多くが大学山岳部の出身者―が、憧れのヒマラヤの氷河研究に乗り出した。海外でのフィールドワークはまだ困難が伴う時代であった。岩田さんはこのグループに加わり地形学の観点からネパールヒマラヤの氷河に取り組みはじめた。

氷河研究が魅力的なテーマであるのは、目前の氷河そのものの魅力もさることながら、もっと壮大な自然史の解明、地球史の解明につながってゆく領域だからである。十九世紀のはじめ、アルプス地方で氷河の科学的研究が始まった。流動や氷の物性などを氷河の傍らで観測、測定する一方で、構想力を働かせて遠い過去に巨大な氷河が地表を広く覆っていた時代(氷期)のあったことを導き出した先人たちの発見は、ダーウインの進化論にも匹敵する学問上の一大転換である。厚い大陸氷河に覆われた大地が北アメリカ北部から北極海沿海岸部一帯、スカンジナビア半島にあり、ヨーロッパのうちブリテン島やアルプス地方などを氷河が覆っていた。その新たな目を持って見直してみると、次々に別の世界が見えてくるようになる。現在はその巨大氷河がおおむね解け去った後の時代にあたり、特異な地形(いわゆる氷河地形)が残っていたり、大陸氷河が解けたことによる海面の上昇が地球規模で陸地の分布や配置を大きく変え、気候条件を変えて人間を含む生物の分布を動かしたことが

次々に解明されてきた。

\*

現在も氷床の広がる南極やグリーンランドを除くと、大きな氷河域が残るのは北極周辺部の標高の高い山岳地帯ということになる。ヨーロッパとアメリカで発展した氷河研究の対象はグリーンランドを含む北ヨーロッパとアルプス、北アメリカ北部の氷河と氷河地形にはほぼ限られていた。地球上に分布する氷河のうちアジア大陸の高山地帯ヒマラヤやカラコラム、パミールヤンシャンそしてチベット高原にある氷河はこれまでに欧米の研究者もほとんど及んでいない。このために後発のソ連や日本や中国の研究者にとっては貴重なフィールドとなった。地域的な特徴や違いもあるのだが、教科書に載るには少し時間が必要だった。岩田さんが推薦する D. Sugden と B. John の *Glaciers and Landscape* (1976) を見てもまだヒマラヤ氷河のことは何も書かれていない。「はしがき」の中に、「ヒマラヤ山脈をはじめとするアジアの氷河地形を中心に据えた教科書があってもよいと考えた」とあり、後発の新世界による氷河の本が日本語で書かれることになった。

冒頭に記した「氷河地形学」(Glacial Geomorphology) にいての定義は、「現在の氷河の周縁部の地形と、氷河が融解したあとと大気底に露出した過去の氷底地形」が氷河地形であるから、氷河地形学とは、「現在もしくは過去に氷河に覆われた場所、さ

らには氷河によって影響を受けた氷河の縁の、地形と堆積物の研究」ということである。しかしページを繰ってゆくと「氷河地形学」よりもはるかに広く氷河に関する研究分野が扱われていて、「氷河学」と呼ぶほうがふさわしく思えた。ところが総合的分野としてのそれではなく、地球物理学の一分野としての「氷河学」(study of glaciers) というものが既に定義されていて、「氷河そのものの研究」をするところである。この辺り、日本語に訳された当時の、まだ学問的展開前の定義がそのまま使われている感じである。

岩田さんは「氷河地形」をさらに定義して、「狭義の氷河地形」と「広義の氷河地形」をたてている。すなわち上述の氷河地形とともに、「固体地球表面を構成している氷(氷床と氷河)の形も地形であり、氷床と氷河の形態も地形学の対象である。氷河は、現在は大陸表面の10%を占め、更新世の氷期には30%を占めていたから、地球上では無視できない重要な地形であるといえる」として、従来充分とらえ切れていなかった「氷河そのものの形態」も氷河地形として扱うとしている。これは上記の「氷河学」をも含むということになるであろう。

雪水学者の若浜五郎氏が一九七八年に書いた「氷河の科学」の目次は、「氷の世界」、「氷河水の形成」、「氷河の構造」、「氷河の流動」と並び、最後のところに「氷河の消長と気候の変動」があり、この章には歴史・時間や氷期の問題が書かれているが、

この本で扱われているのはおおむね「氷河そのもの」であり、日本では氷河は地形を含めた全体という認識がまだない時代のものである。

上述の *Glaciers and Landscape* の目次のうち第1章と第2章は「氷河そのもの」が扱われているが、第3章は氷河による侵食地形、第4章は氷河による堆積地形、そして最後の第5章は氷河融水による各地形となっている。この章立ては、一世代前の氷河地形の教科書 C. Embleton and C. King の *Glacial and Periglacial Geomorphology* (1967) でもほぼ同じである。

『氷河地形学』は全体を4部に分け、第1部は、用語の定義などを含む「序章」。

第2部は、雪氷学的分野である氷河の性質、運動の解説と、それに続けて氷河の形態、すなわち「広義の氷河地形」が解説される。たとえば氷河のタイプ分類は、氷床・アイスキャップ、谷氷河、山麓氷河という古典的分类に対して、形態や規模や流域などによるより合理的な分類方法がいくつか紹介されている。次に氷河が氷体だけではなく多量の岩屑を含むことを、「氷河岩屑システムと氷河表面岩屑」という別章をたてて詳しく解説している。

第3部は、上記の氷河地形の英文教科書と同様で、「狭義の氷河地形」を解説する。各項目の説明は一九九〇年代二〇〇〇年代の岩田さん自身による新しい成果も盛り込まれている。「ま

ず氷河底でおこっている岩屑生産・排出プロセス、次にその結果形成される侵食地形と堆積地形を説明し、最後に氷河下流の地形と氷河湖について述べ」られる。

第4部は、「氷河と環境」という括りで、先に述べた氷河に関する広い分野の解説である。項目としては『氷河の科学』の最後の章に類似し、氷河変動とは何か、最終氷期極相期とその後の氷河縮小、更新世の氷期-間氷期の繰り返し、などでさらに「氷河時代の形成」、「氷河と人間活動」と続く。ここでは氷河による災害の事例や、最近の地球温暖化にも触れている。

章の書き出しにエピソードを載せ、理解の助けになるようにとは各ページ毎に説明付きの図や地図や写真が選ばれて付けられている。より詳しい用語解説や関連項目がコラムとして各章の最後にあるが、その幾つかに著休め的な話題も含まれる。カバールの写真には鋭く尖ったヌブツエが使われているが、その手前に広がる厚く岩屑を載せた氷河に視点を置かねばならない。がっしりとして堂々たる学術書であるが、砕けた表現を使つて解りやすく書かれていると思う。ヒマラヤ氷河を出発点とした新しい氷河学の教科書として、ヒマラヤを指す登山者にも一読を薦めたい。

(見玉 茂)

## 東京農業大学農友会山岳部編纂委員会

### 『DAS NEBELMEER 報告第4号』

二〇一一年一月刊

A4変形判 五五七ページ

東京農大の報告書紹介を引き受け、ページをめくっていくうちに、先に進まなくなり、内容の重さに改めて気を引き締めた。書き渋り、先に進まなかった。ひとつの山岳部の流れを概観してよく使うことはがいくつもある。「山あり谷あり」「成功と失敗」「試行錯誤」「苦闘・波乱・浮沈」などなど。そのどれもが当てはまる。波乱や浮沈という言い方は興味本位と隣り合わせだから避けるべきかもしれないが、農大山岳部の足取りは、終始、大学山岳部共通のテーマを突きつけられているようで、いさゝか重くて、身につまされる。扉の写真、雨の滴をとどめるエーデルワイスに「亡き仲間たちに捧ぐ」と献詞が付いている。本書には、一九七七年から二〇〇八年まで、三十年余におよぶ記録が圧縮して収めてある。年度ごとの活動報告、歴代の監督所感、海外登山隊報告、OB会員の海外登山報告、六つの事故報告、戦前・戦中の山登り回顧、以上が主な項目である。項目分けはいいが、現役部員とOB主体の海外登山、それに事故

などがどう関連し連動しているかわかりにくい。全体の流れがわかる年表を付けてほしかった。

全ページの五分の三を占めるのが現役たちの活動報告である。報告は(1)部員構成(2)在部者名(3)合宿内容(4)総括の三部門に分かれている。報告書収載の初年度に当たる一九七七年、部員数は十六人(うち女子一人)である。それが五年後には六人になり、十年後の八七年は三人に減り、翌年にはたった二人になる。部の存続に関わる危機をかううじて支えたのは監督、OBだったようで、部員よりOBのほうが多い山行がいくつもある。九七年は五人、二〇〇〇年は冬山登山中の三人が亡くなって部員ゼロ。痛恨極まりない非常事態だったと思う。二〇〇七年には八人の名前があり、二〇一〇年に部室で撮った写真には九人の部員(うち二人は女子)が顔をそろえているから伝統ある農大山岳部は健在とわかる。

四年間と限られた大学山岳部では、人数と学年構成の双方でバランスが取れていないと部の運営はうまくいかない。そういう意味で、合宿内容と照らし合わせて百パーセント充実したといえる年度は少ないように見受けられる。問題は、そういった状態を現役部員たちがどう受け止めて山登りに取り組んでいたかである。この間、伸び盛りの若いOBたちの目は海外登山に向けられ、部活動へのフォロワーが手薄になったという面があったようだ。

各年度の報告に必ずついている(3)「総括」は、それを通覧するだけで三十年の歩みを辿れる内容になっている。総括で特に興味深く読んだのは、一九八七年の二年生当時から卒業年までをまとめた谷川太郎さんの回顧である。

「前年にコンロン山脈七一六七峰の遠征を成功させ、すでに自分の中に「山岳部とはなにか」という点で疑問の余地のない形を持っていた佐藤(正倫Ⅱ主将)の断固たる意識と、実力と経験が伴わず理想だけが先行しがちな谷川との心理的なギャップは特別に深く……モヤモヤした状態であったが……忍耐づよくもあつた佐藤のもと……次々と用意される課題にあれこれ考える暇もなく取り付き、気づかぬうちに経験を積み増していった(要旨)。

早坂敬二郎監督(故人)には不満が向けられる。「トコロテン式にリーダーになった三年生の谷川であるが、厳しい早坂監督は谷川の実力不足を案じ、合宿には常にコーチが同行してリーダーを務めさせるといふ変則的な運営方針を採った。ありがたしい親心と受け止めるべきか、大きなお世話だと迷惑がるか。いまなら親心と受け止められるが、「当時の学生気分は限りなく後者に近い」と続け、自由な発想での山登りなど微塵も許さなかつた監督を、「所詮は骨の髄まで農大山岳部的」と切り捨て、ささやかな反抗を試みてその年の夏山合宿後半は、パターン化した縦走をやめて黒部の上ノ廊下を廻行し、それなりの充実感

を味わつたと書いている。

この谷川さんの総括は卒業から二十年后、本書の編纂委員の要請を受けて書かれたものだ、と断り書きがある。その頃、部員数は二人、三人にまで減つており、当時は、整理して記録に残そうなんて余裕はなかつたようだ。

一方の早坂さん。歴代監督の所感を集めたページのなかで、谷川さんの受けとめ方とは全く異なつた見解と展望を書いている。「いまこそ大学山岳部は自由な発想と柔軟な頭脳で、創造性を駆使した山登りを展開してほしい」「自分のアイデンティティーを確立し、スタンスを明確にすることによって透明な視野が広がり、おのずと進むべき道が見えてくるはずだ」(『山と溪谷』88年4月号)。その一方で、「農大の山登りとは、団体生活の中で自己を鍛錬しながら、黙々と長大な尾根を登るチーム登山のことである。……チーム目的遂行の過程でそれぞれの創造性がどのように発揮されたかを最も重要視する」と書いている(『山と溪谷』89年11月号)。

その頃、強い指導力で農大を引っ張っていた早坂さんのなかで、相克や葛藤がないはずがなく、それは想定内の、乗り越えるべきものとしてあつたに違いない。谷川さんの毒づきに、どこかで苦笑しているかもしれない。九二年三月、北アルプスでの合宿を、監督みずから先頭に立つてリードしていて、雪崩に流された。その存在は亡くなつたあとも大きく、後輩たちが早

坂さんを超えて海外の高峰を目指した。

海外登山のページをざっと紹介しよう。もともとヒマラヤへの取り組みは早く、一九六三年、ヒマラヤのトゥインズ試登に始まっている。しばらく時間を置いて八〇年代の半ば、農大で育った若手たちは、積極的に海外の高峰登山を推進しようとグループを形づくった。この二十年間で、農大単独、合同、隊員参加合わせて十五を超える。

主なもので

- 一九八六年 崑崙山脈7167m峰登山隊
  - 一九八九年 ナンガ・パルバット(落雷死亡事故)
  - 一九九一年 ブロードピーク(8047m)
  - 一九九三年 ガツシヤブルムII峰(8035m)
  - 一九九五年 キヴィゲラ峰(トゥインズII7350m)
  - 一九九六年 日本山岳会青年部K2(8611m)
  - 一九九八年 ヶ カンチエンジュンガ(8568m)
  - 一九九九年 チョ・オユー(8201m)
  - 二〇〇二年 シシヤパンマ(8027m)
  - 二〇〇三年 エベレスト・ローツェ環境登山
- 他にアコンカグア(一九九一年)、日本・中国合同のナムチャバルワ(一九九二年)、日本山岳会のマカルー(一九九五年)中国四川省の雪宝頂(二〇〇四年)などがある。
- 二〇〇三年三月からのエベレスト・ローツェ環境登山は創部

八〇周年記念で、まずはローツェに五人、二十日ほど間を置いてエベレストに四人が登頂、加えてエベレスト周辺の環境調査などを行った。「高地を汚すまい」と環境保全に配慮した登山の実践でもあった。一連の海外登山では前述の早坂、佐藤、谷川さんのほか長久保浩司、廣瀬健太さんといった強者が常連として参加している。農大隊の特徴は一部の登頂要員だけでなく参加者全員での登頂を目指すことにあるという。いくつかの登山で詳しい報告書が出ており、本書ではサワリの部分を抜き出した。当誌「山岳」に発表した記録に加筆するなどして多様な海外登山を110ページに収めている。

大学山岳部の存在意義が問われて久しい。多くの大学でパワー不足、衰退は否めない。学生たちの気質が変わった。取り巻く社会環境も変化し、野外でからだを動かす喜びと疎遠になり、若者たちが山登りに注ぐ目線から挑戦とかアドベンチャーの要素が希薄になった。それでも大学山岳部の扉をたくものを、たとえ小数でも、山岳部はどう迎えるのか。魅力ある場所を提供できるのか。仲間を増やす手立てはあるか。

何をやってもいいというわけではないし、それぞれが「らしさ」を求めるのも当然である。とはいえ、課外教育という枠から基本的には抜け出すことのできないのが大学山岳部であり、活動には何よりも安全が求められる。基本をしっかりと伝承するという原則、基盤は変わるまい。問題はその先だ。きついこと

や押し付けはイヤな世代である。目標、手段、環境づくりと考えると悩ましい。

農大OB会の辻田代史雄会長は『発刊に寄せて』のなかで「当会には若手に優秀なクライマーが多く、それが数ある大学山岳部OBのなかで、ひとつの誇りでもある。若い会員が農大の名のもとに登山隊を結成し、活動してゆくことも、山岳会として重要な活動と思う」。「三〇年の山岳部、山岳会の活動の記録が、われわれの活動や流れを示すモニュメントとして、また、これから続く人たちの今後の山登りの方向を考えるよすがともなれば」と書いている。

数年前、山から雪の便りが聞かれるころ、筆者は所用があった学生会館内の部屋にお邪魔したことがある。大きな声で応対する、礼儀ただししい部員たちに好感を持った。部員ゼロから立ち直り、成功に終わったエベレスト・ローツェ登山の余勢を駆って積雪期の山の準備に入っている頃だった。彼ら、彼女らのイメージのなかにどんな山登りが描かれているか、詳しく尋ねる時間もなかったが、若さと元気に圧倒されそうな、そんな雰囲気だった。《強い農大》のイメージだけでなく《楽しい農大》志向が部報のなかにも読み取れる。

大学の山岳部とはなにか。どうあるべきか。いかに鍛え、どう楽しむか。考えるのに格好の三十年史を農大は手にした。一冊の本にまとめるというのは、自らをさらけ出し、他の大学山

岳部に、試行錯誤の軌跡を共有してもらうことに他ならない。いまは数少なくなつた大学山岳部員と、部員の減少を嘆く関係者に精読をお勧めしたい。

なお、本書の題名、横文字の「DAS NEBELMEER」はドイツ語で「霧の海」または「雲海」の意味。「報告第4号」だけでは味気なからうと創刊時に使われた「DAS NEBELMEER」を冠して名付けたという。風格ある装丁で装紙はハードカバー、箱入り。編集委員長は小笠原岩雄さん。五年がかりの作業が実つた。

(成川 隆顕)

向 むこう 一陽 いちよう 著

## 『ヒマラヤ世界』

中公新書 二〇〇九年一〇月二五日程  
文庫判 二九〇ページ 八八〇円＋税

『山岳』第六十七年（一九七二年）。この号が妙にポロポロになつているのは、僕らにとつて記念する号だからである。先輩の阿部和行、吉永定雄、水谷弘治らがネパールのカンジロバ・ヒマール第二の高峰に挑んだ記録と、当時の精鋭たちによるマナスル西壁バリエーションからの第二登の報告（東京都岳連

隊・隊長 高橋照)があつたり、また、当時の記録としてはかなりマニアックな少数人数の若い人たちによるバタゴニア中央部縦断、アフガニスタン中央高地単独縦断、パウダ登頂、ティリチ・ミール、ピアーズなどに加えて、向さんのコルデイエラ・レアルとアタカマ高地(一九七〇—七二年)の記録があつた。「南米とアマゾン」となれば向さん、という想いが僕にはあつて記録にはいつも付箋が付いていた。

それらから数十年もつづいた僕のヒマラヤ登山へは大きな影響を与えたのであつた。その第六十七年の付箋を紐解いてみると……

「大学や会などの『名譽』にこだわらないエクスペディションが出来ないものか、と考えた。こんなに狭くなった地球に、国内のセクシヨナリズムを拡散するのはばかっている。遠征といえ、とかくセクト的『全体』が先に立つが、本来山登りの原点は『個人』である。異なるカマのメシを食つたいろんな経験、考え方の人間があちこちにいる。そのような自由な『個人』が、義理や附和雷同ではなく個人の意志で共通の目的のもとに集まれば、より強力な『全体』ができるであろう。個人の人生も豊になるだろう。そんな意味で、エクスペディションの出发点を全体ではなく個人に置いてみた。アタカマ高地(ブリーナ・デ・アタカマ)という存在のために、そんなチームを思い

立つたともいえる。……(略)

ふもとも『乾燥度世界一』の塩原と砂ばくである。そんなところへはいつてみようというのは、あちこちばらばらの物好きしかいなかった。アンデス経験という共通の広場を通じて「一緒に行つてみようじゃないか」というヨコのつながりができ、「アタカマ高地探検隊」の原型が誕生した。……(略)。

正にこの言葉通り、僕ら弱小山岳会の登山隊はいつも細々とした計画だった。そして言葉どおり山岳会という組織を越えて他会のメンバーや友人たちも参加するようになってゆき、数年後には未踏峰を、やがて七千<sup>メートル</sup>登山をめざすようになって、さらに発展してカトマンズで知り合った岳友たちと八千<sup>メートル</sup>に挑む目的のクラブへ参画して、数座に挑んだりするようになった。それからも歳月はどんどん経つて、以前と同様に殺風景で不便、高い山もない西ネパールへも毎年出かけるようになり、あつという間にネパール通い四十年となつてしまつた。

向さんはバイタリテイがあつてますますお元気なご様子で、最近の著書を拝読すると、日本国内の河川と山間地をくまなく探り、離島へも出かけて、自然破壊が進む現実をマスコミという分野の鋭い眼だけでなくて、ナチュラリストとしての眼を持って歩みつけられ、その地道な活動の端々に見られるところが素敵だ。著作の中にすぐれた自然観と問題提起が配されて

おりいつも共感を覚えていた。

最近の国内の旅や若い時代の南米の旅みならず、行動力の基  
本となった共同通信社在職中においても特有の世界観を持った  
旅が続けられていて、前述の南アメリカ、中でもアマゾン探検  
は自然破壊の惨状を徹底的にリポートし、提言するばかりでな  
く、行動をも起こされてその数々の業績は岳人だけに留まらず、  
知る人は多いのである。

本書は、僕も数十年現場で実感していたヒマラヤ諸国の現代  
に悩める問題点を、エベレストのトレッキングコースから、クー  
ンブ地方、さらにはヒマラヤを源とする大河の下流に至るまで  
の「ヒマラヤ世界」を丁寧に辿り、その現在の姿を描きつつ一  
つひとつ発生と原因と方策を探り、さらには提言などを実態と  
現実を踏まえて究明されたルポルタージュである。

ヒマラヤを取り巻く国々を訪れる観光客やトレッカー、登山  
者も目的の山ばかりに気をとられるのではなく、その土地の現  
実の姿にもっと眼を向ける必要があるだろう。世界人口のおよ  
そ半数以上が住んでいるこの「ヒマラヤ世界」に加えて、より  
広く中国から南アジア全域の地域と環境への問いかけも行われ  
ている。近代ヒマラヤ登山は技術や装備・食糧などの新製品の  
改良、開発は飛躍的に進んでいる。同様に環境問題だってそう  
だ。それは誰にでも取組めることであり、その方法を解り易く  
親切に説いている。これから海外登山を目指す若者にはぜひ読

んで考えて欲しいものだ。

たぶん温暖化と、急激に高まっている人間活動がもたらし  
ているストレスで、この地の変貌が著しい。源流域には膨大な  
量の水が氷河という形で閉じ込められています。この氷河の  
衰退に始まって、氷河湖決壊洪水の恐れ、氷河湖汚染、山村崩  
壊……。峡谷部では、闇雲な森林伐採や数万人の家を湖底  
に沈める巨大ダム問題、麓ではさまざまの「水危機」です。

たとへば、一九六〇年代から、食糧大增産を目指す「緑の革  
命」が展開されました。「革命遂行」のために過剰に水を汲み上  
げた結果、かつて豊かだったヒマラヤ始発の地下水が枯渇して  
いる。デルタ地帯では、NGO活動などで良かれと思つて掘つ  
た井戸の水から恐ろしい砒素が検出されています。

いまブラジルがアマゾンで、巨大機器を酷使する大規模開発  
をしゃにむに展開している。そんなものと違って、「ヒマラヤ  
世界」は五〇〇〇年がかりで試行錯誤しながら進めてきた開  
発の積み重ねでしょう。だがその果てで、……(略)、おびただ  
しい数の人たちが、これ直截な表現をすれば、たぶん五〇〇〇  
年前とそれほど変わらない仮小屋みたいな家に住み、着の身着  
のまま同然の生活をしている(略)。

五〇〇〇年かけても、みんなで手を取り合つて豊になること  
はできなかつた。「ヒマラヤ世界」を歩いていると翻つて、「共

生」というスローガンの対極で日本を含めて世界中で進展している「格差」を考えます。資源枯渇で、分かち合える絶対量が減ってくると、ともすればそちらへ傾いていく。その傾きはとめなければならぬ。

ここで評者の経験を述べさせていただくことを許していただきたい。辺疆や秘境といわれた西ネパール全域も信じられないだろうけど激変している。アクセスは最悪で食糧事情が悪くて食物がない、あったとしても少量しか得れない。相変わらずマオバティ（マオイスト）が暗躍していて治安は悪い。地図の空白地で案内書が殆どなく、ロッジやバツティのたぐいはゼロ。トレッキングには不向きというよりできないし、入域料が一日なんドルとやたら高額で観光客やトレッカー、登山隊にとってものはマイナス要因があまりにも大きかった。ところが昨今のモーターゼーションの発達とアクセス開発にネパール政府はやつと重い腰をあげて、世界からも援助の手が差し伸べられて驚く速さで工事や計画が進んでいる。

西北ネパール探検隊（一九五八年川喜田二郎隊長）に参加した西岡治さんが『ほろびゆく村ポエ』を記したトルボ最西奥の村へ一昨年十年ぶりに訪ねる機会があった。十年前に訪問した時よりも小川には水が流れ、さらに灌漑用水と貯水池が大きくなって、中国製の肥料のおかげで大麥やジャガイモは自作で

きるようになったと村のエリート知人は中国の白酒（パオヤウ）を呑みながら胸を張った。

電気はソーラーシステムで、玄関脇にすえられた大型バッテリーは新品に換えられて蛍光灯は灯り、DVD映画を中国製パソコンで観ながら、横ではメイド・イン・チャイナの鉄製ストーブに根っ子のままの灌木が赤々と燃え、お湯は沸き温かいヌン茶と共にアルコール臭い中国酒のお湯割りを勧めてくれる。幼子（オウチ）は可口可楽（コココーラ）で喉を潤していた。

家族はヤチャクンバ（冬虫夏草）景気と、主人や子供たちの出稼ぎ（カトマンズやミヤンマー、バングラデッシュ、ドバイなどへ）で現金収入が確かに増えた。でも、あらゆる中国製品を買うためには現金が必要となった。食生活も主食だった粉類から米、それも中国製の飼料用の米や日本の援助米が無償、或いは安価で手に入るので出稼ぎ衆の留守を守る老人、主婦、子供たちは肥満になり成人病と老人病が蔓延する。ジュバルへ騎馬で出かけ、ローカルフライトで「ちよつとカトマンズへ治療に行て来る」とひとたちが稼いだお金で出かける。そこで、また新しい商品や文化を知る。だから「現金がどうしても必要なの」という「いたちごっこ」が始まり、まるで日本の縮図を見るようになった。

どんどん奥地へは海外から「善意の押売り」が潜入し、「ヒマラヤの世界」は向さんの危惧するとおり、益々僻地の山間部へ

とインフラとマスメディアは留まることを知らない。奥地の僻地まで無作為自然破壊のダイナマイト工法とでもいう大自然抹殺、破壊工法で壊して道路はあつという速さで出来る。あとはユンボ（パワーショベル）が一気に岩クズや大岩を谷底へ押しやる。秘境トルボと言われたところでもバイクが走り、耕運機が唸る。チベット側の大量輸送化で大型トラックに満載されたが物資はチベット側のバザールからネパール側へと大量輸送されるようになった。古来からの手造り石積階段や路があり、移動は何百頭というヤクやゾッキョの背に結わえ付けられて運ばれたが、今や荷重で壊され、ヤクたち動物は骨折して抹殺される。チベットやムスタンで不要になったヤクや馬は安価にトルボへ売られ、今度は飼料の草がなくなった。また、もつとひどいのはヤチャクンバ景気は採取権で村人と他所からの侵入者や近隣の村とのいがみ合いで殺人事件も発生した。また、昨夏のある日、チベット側から韓国製の大型ユンボ・パワーシャベルが一台、ゴトゴト音を立ててトルボの国境峠を越えて道路を作り出した。さすがに村びとはこれには驚いた。もちろん両国政府、お役人が決めたのだろうか、施設工事されることや目的は全く知らされていない。数年内に全西ネパールもムスタンやカリガンダキ沿いのように道路網が完備されされている意味の近代化へのスピードアップが進むだろう。

そんな訳で、やがて秘境はなくなる。人々は衛星携帯電話や

衛星公衆電話を手にしてこれで先進国なみの生活に近づいた。その魔法の道具で遠くの家族と昔のように話せて、支え合う生活が戻ったと笑顔で話した。お金があれば幸せは買える．．．とも言ったトルボの友人のことはが耳に残る。東日本大震災で被災された多くの日本人は、何とかみんな力で出合って乗り越えるだろう。でも、世の中にこの本『ヒマラヤ世界』で向さんが提言されているように同じように天災や人災で何十億人という僕らと同じアジア人の被災者がいることを知らせてくれた。われわれは今この現状を「何とかせねばあかんです」と筆者の叫びが聞こえてくる。

（大西 保）

## 根深 誠著

### 『ヒマラヤのドン・キホーテ ネパール人になった日本人・宮原巍の挑戦』

中央公論新社 二〇一〇年十一月一〇日刊

B 6判 三〇九ページ 一八〇〇円＋税

この本の著者は明治大学山岳部のOBで、ノンフィクション作家として山に関係のある本を十数冊も出版している。いずれもユニークなタッチで判りやすく山への思いを著している。

題名の「ドン・キホーテ」とはスペインの作家ミゲル・デ・セルバンテスが十七世紀初頭出版した小説であり、内容はあつた村の郷土が騎士道物語を読みすぎて現実と物語の区別がつかなくなり騎士として夢や希望、正義を胸に世の中の不正を正すべ旅をした小説である。

ネパールを良く知る著者は、一九七六年秋に「ヒマラヤのドン・キホーテ」と山を通じて知り合った。著者がモデルとした人は日本大学山岳部OB宮原巍氏である。氏がいかにネパールに思い入れ、そして行動に移したか、人柄への興味を含め「ドン・キホーテ」に準えてルポルタージュ風に書かれている。

#### 概要

宮原氏は一九六二年日本大学山岳部並びに同OB会（桜門山岳会）が初のヒマラヤ登山隊（ムクト・ヒマール）を派遣したときのメンバーである。

当時は海外渡航が自由化されておらず、外貨割当制限の厳しい時代であつた。この遠征のときネパール国の貧しい生活をかいまみ、それを改善するために人々の役立ちたい。そのような生き方をするためにネパールに帰ってくることを心に誓つただ。（七三頁）

一九六六年三十一歳で再びネパールに向かった。

当初はネパール政府の案内工業局に勤めたが、ネパールには

鉱物資源がない、技術がない、資本もない。加えて農耕民族、こうした状況を踏まえて、宮原が行き着いたのは「ネパールは工業より観光だ」との結論だつた。（二一〇頁）

案内工業局は、通商産業省の一局であり、同じ省内に観光局と工業局あつた。そして観光局と工業局で後年宮原の夢が一つずつ結実することになる。一つはホテル・エベレスト・ビューの建設、一つはネパールが一九七〇年の大阪万博に参加したことである。（二二一頁）

その後独立し、企業家として観光業を中心にネパール発展に寄与するため、シヤンボジ空港を建設、「トランス・ヒマラヤ・ツアー」会社を設立してヒマラヤ・トレッキングを企画。三井不動産の協力を得てホテル・ヒマラヤ・カトマンズを三年かけて建設した。

又、ロイヤルネパール航空の直行便の日本乗り入れにも尽力した。登山部門ではネパール山岳救助隊の設立。ネパール山岳協会設立にも関与した。そして、それらの事業はいずれもネパール人の雇用に大きく貢献している。

これらの事業推進を通じて、国連や大国の国際援助、国際協力のあり方にも一言を持ち合わせている。

過去半世紀を振りかえつて援助を受け続けている国々において、一部の国では経済的には向上したが、政治にしても、また国民一人一人の暮らし向きや、社会に対する意識の面で向上し

たといえる国の名前を挙げるのは難しい。そうした国々では年々歳々外国からの援助額をむしろ増額して要求するようになる。国連から派遣されてくる人たちの多くは、世界銀行やアジア銀行と組んで、ネパールにいろいろな開発計画を押し付け、カネを使わせるようにしている。そうやって無秩序な開発が進む、そのツケはいつか必ずネパールに跳ね返ってくる。(一六五、二八三頁)

四十年あまりネパールに住んでネパールに関わってきた体験から、ネパールの政治に関心を持つようになったのはここ十年ほど前からである。(二〇二頁)

九十年の民主化運動が起きた時は、長老会議制が崩壊し、国民主権、そして政党政治に移行するが、社会そのものが変革されたわけではなく、不安定な政治が続く政治家が私利私欲を満たすためのものだった。そして国民に無力感がひろがり、社会は閉塞し、追従腐敗がひろがった。

宮原が考えたのは政治の面でも役立ちたいというものだった。そして国籍取得には四年半の月日を要した。

組織なし、資金なし、地盤なしで政党を立ち上げ、「ネパール発党」と命名して改革の理想を掲げ、ネパール初のマニフェストを作成して制憲議会選挙に立候補し、選挙戦を戦うのだが完敗してしまう。

しかし人生は結果ではない、やれるところまでやればいいと考

えている。当面は自然保護、環境保全である。今度はネパール全国を自転車で行脚し、辻説法をする。(あとがき)。七六歳の今もまだまだ意気軒昂だ。

日本を離れ、日本の国籍まで捨て自分の愛したヒマラヤと、そこに住むネパールの人々の生活上発展を願い、ついには政治の世界にまで踏み込み、自分を信じ、正義を重んじ夢と理想に生涯かけて立ち向かう姿勢たるや現代に生きる「ヒマラヤのドンキホーテ」だとは言いえて妙である。

## 内容

### 第一章 ネパール制憲議会補欠選挙

カトマンズ盆地／制憲議会補欠選挙／自然環境を活かした国

土開発を／選挙戦に出陣／村の選挙活動

### 第二章 回想の山々

山旅の果て／衝撃のカル Катタ／登頂とキャラバン／決意

／グリーンランド探検

### 第三章 ネパールに生きる

再びネパールへ／カトマンズの生活／観光産業を育成しよう

／エヴェレストが見えるホテル／

大阪万博ネパール・バビリオン／自然公園法と森林保護マラ

ヤ救助隊とネパール山岳盛會設立

### 第四章 企業家としての闘い

ヒラリ―卿との対論／ホテル建設／世界最高所のホテル  
レッキングを企画／ホテルヒマラヤ・カトマンズ建設民間人  
から見た国際援助／ロイヤル・ネパール航空を日本へ

第五章 生と死の狭間で

エヴェレストを目指す／働哭の谷／大学山岳部の青春

第六章 改革の理想を掲げて

変転するネパールの政治／民主化の実態／権力闘争を憂える

／ネパール国籍を取得／政党結成の理由／国土解放覚のミニ

フェスト

第七章 見果てぬ夢

制憲議会選挙に臨む／絆／波瀾の選挙戦／山を越え、谷を渡

り／開発の理想を説く／完敗／人生を懸けるに値するもの

第八章 終わりなき挑戦

ヒマラヤからの提言／国連と外国政府への苛立ち／革命の

光と闇

終章

巻末にネパール近代政治略年表が掲載されている。

(石田 要久)

## WIELKA ENCYKLOPEDIA GÓR I ALPINIZMU

POD REDAKCJĄ, MAŁGORZATY I JANA  
KIELKOWSKICH. WYDAWNISTWO STAPIS,  
KATOWICE

[TOM I WPROWADZENIE] 2003, 534 + XI

[TOM II GÓRY AZJI] 2005, 805 + XIX

[TOM III GÓRY EUROPY] 2007, 847 + XII

[TOM IV GÓRY AMERYKI] 2009, 804 + XX

[TOM V GÓRY AFRYKI, ANTARKTYDY, AUSTRALII I

OCEANII] 2010, 420 + XX

[TOM VI LUDZIE GÓR]

[TOM VII SUPLEMENT, SŁOWNIK, INDEKS]

『山岳・アルピニズム大百科事典』（ポーランド語）編集 マ

ウゴジャタ・キエウコウスカ、ヤン・キエウコウスキ。出版社

スタピス。カトヴィツェ 17 cm × 25 cm 二〇〇三年

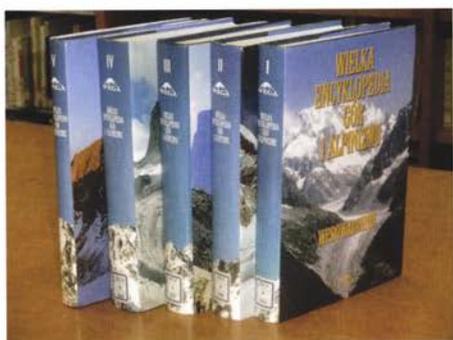
【第I巻 総論】五三四頁 + Ⅺ頁

この巻では、登山全般にわたる項目が取り上げられている。  
山岳の地理、地質、登山史、山岳団体、山岳関係書、登山用具、

登山技術、グレーディング、動植物、写真、絵画などである。

アルピニズムの歴史は十三頁にわたり、女性のアルピニズムも五頁あり、冬期アルピニズムの項目もある。南極の項にはスコット隊の写真、北極の項にはピアリーの写真がつけられている。登山及びロッククライミング・シユーズやピッケルの歴史、カラビナの一頁をしめるイラストもある。山岳出版物のカラー写真の中には「岩と雪」もあり、別項目でその説明もある。「日本山岳会」は会員章の写真入りで、「日本山岳協会」も同じページに記載がある。年報の「山岳」は写真入りで別項立て。テレホンカードのカラー写真にはエヴェレストやアイガーと共に槍ヶ岳がある。切手のカラー写真は四頁ある。山岳映画、ポーランドの山岳映画、山岳映画祭の項目がある。山岳グラフィック・アートの項目には白黒の絵図があり、別頁にカラー写真が四頁ある。山岳絵画、イラスト、カラー地図、パノラマ絵画・写真が十六頁あり、セガンチーニやレーリッヒの素晴らしい絵もある。山岳・アルピニズムの文献は四頁あるが、日本人の書いたものはない。

ポーランドのアルピニズムの歴史は十四頁、スポーツ・クライミングの歴史は八頁ある。ポーランドの女性アルピニズムは六頁あり、これらは和訳が欲しいところだ。登山、ロッククライミング案内書は五頁あるが、ナウモフの「中央カフカス」などが写真入りで入っている。



史など合わせて十九頁、カラー写真も四頁ある。

見出語は約二四〇〇項目ある。

【第II巻 アジアの山】二〇〇五年、八〇五頁＋ⅩⅩ頁

アジアの山域は西はオビ川、カスピ海、カフカス山脈(含む)、黒海、地中海、紅海で区切られ、北は北極海、東はカムチャツカ半島、日本列島、フィリピンで区切られ、南は小スタン列島、ジャワ、スマトラ、インド、アラビア半島で区切られている。ヒマラヤはこの山域の中央南部に横たわっている。

この巻では数多くの日本人登山家が写真や地図の提供をしている。また「アジア、山の認識と登頂史」の項目にはなぜか広

ボルダーリングの困難度表、雪氷壁登攀困難度、各国の岩壁登攀困難度比較表など詳しい説明がある。

カラー写真が三頁入った高山植物の項目と、カラー写真三頁入った山に住む動物の項目もある。

ロック・クライミング、スポーツ・クライミング、冬期クライミング、クライミング競技会とこれらの歴

重の富士山の浮世絵ものせてある。

勿論、第二巻ではヒンズークシユ、カラコルム、ヒマラヤの項目が最も多い。ヒンズークシユ関係は個々の山々は別項で立ててあるので、それらを除いて、(以下同様)九頁、カラコルムは七頁、ヒマラヤは十六頁が当てられている。この三つの山城のカラー写真は十六頁に及ぶ。

意外に多いのは、かつて同じ社会主義国で結ばれ、同じスラブ語族であるロシアが君臨していたソ連邦の中にあつたパミールと天山、カフカスの山の項目である。

パミール項目関係は八頁、地図はファン山群を加えると十八頁、天山は八頁、地図は九頁、カフカスは八頁、地図は十五頁入っている。カラー写真はこの三つの山群で十五頁である。

あまり知られていない極東沿海地方のシホテ・アリニ山脈も、その最高峰のタルドキ・ヤンギ(二、〇七七<sup>頁</sup>)ものつていた。筆者(田村)は「タイガを通して——シホテ・アリニ山脈横断記」(アルセーニエフ著)を訳したばかりだったので、極東の僻遠まで俯瞰している編者や著者の遠目には驚かされた。

ヒマラヤの八千<sup>頁</sup>峰や七千<sup>頁</sup>峰の項目は、ポーランド人の自家薬籠中のものであることは言はずもがなであろう。

見出し語は約四三〇〇、地図は二三五葉である。

【第三巻 ヨーロッパの山】二〇〇七年、八四七頁+Ⅷ頁

ヨーロッパの範囲は、西は大西洋、北はバレンツ海、東はウ

ラル山脈(含む)及びアゾフ海、南は地中海となつている。カフカス山脈は「アジアの山」に入っている。従つて、ヨーロッパの最高峰はエリブルースではなく、モンブランになる。ただし別の説もある。

アルプス登頂史には十二頁の記述がある。

ポーランドとスロヴァキアの国境をなすタトラ山地に関する記述は十八頁にもわたる。地図も高タトラ(タトリ・ヴィソケ)、低タトラ(タトリ・ニズネ)、西タトラ(タトリ・ザホドニエ)の三葉が入っている。タトラの最高峰はゲルラホ(ゲルラホフカ、二、六六三<sup>頁</sup>)である。タトラのカラー写真十葉が入っている。

何と言つても、多い項目立ては、アルプスの山々で、カラー写真も、東アルプス九頁、西アルプス七頁が載せられていて、白黒写真はモンブラン、マッターホルン、アイガーなど名だたる山名の項目につけられている。

珍らしい島山として、バレンツ海のフランツ・ヨセフ島、スビツベルゲン島や北海のヤン・マイエン島などの項目と地図もある。要するにヨーロッパの隅から隅までの山の項目があり、地図と写真が掲載されている。

見出し語は約三九〇〇、地図は二二四葉ある。

【第四巻 アメリカの山】二〇〇九年、八〇四頁+Ⅹ頁

この山城はグリーンランド北部よりケープ・ホーンまでが入

る。最南端のダーウイン山脈の地図もついているし、ケーブ・ホーンの見出語もある。又、この巻は大項目がある一方、小項目も多数あり、かなり骨の折れる作業だっただろう。

カラー写真にしても、大枠で分けて、アラスカの山、グリーンランドの山、バフィン島の山（この岩壁群の写真は凄い）、カナディアン・ロッキーズ、カナダの山、合衆国の山、アンデスといった具合である。

アラスカ関係項目はアリユーシャン列島も入れ、個別の山は除いて八頁、地図は二八頁ほどある。北アメリカの項目は十二頁、地図は三四頁ほど入っている（アラスカは除く）。アンデス項目は十六頁。アルゼンチン・アンデス、チリ・アンデスの項目もある。バフィン島の地図は七頁ついている。グリーンランド関係の項目は遠征の歴史を含め六頁で、地図も六頁ついている。合衆国のカラー写真ではグランド・ティトン、セント・ヘレンズ、デビルズ・タワー、ヨセミテ峡谷、ハーフ・ドーム、モニユメント・バレー等が紹介されている。

カナディアン・ロッキーズには十四枚の地図がある。コロンビア・アンデスの遠征史にもふれられている。

ワディントン山が最高峰の海岸山脈の項目は四頁の記載がある。シェラ・ネバタ山脈関係の項目は遠征史を含め五頁をしめるが、ここにアラスカを除く合衆国本土の最高峰ホイットニー（四四一八<sup>ト</sup>）がある。

バイネ山群は筆者も見に行つたが優美といふのか奇怪といふのか五頁の説明があり、二葉のカラー写真がついている。このバイネを含むパタゴニア関係には遠征史を含め四頁の説明と、十九頁の地図がある。

ペルー・アンデス関係は遠征史を含め二頁だが、地図は三九枚もついている。

レアル山脈の項目は説明は簡単だが、イヤンプ、アンコウマ、イリマニも入る地図が三頁にわたる。見出し語は約三七〇〇、地図は二二六枚ある。

『第五卷 アフリカ、両極地、オーストラリアとオセアニアの山』二〇一〇年、四二〇頁+ⅩⅩ頁

この巻は原稿完成後に届いたので、割愛する。

『第六卷 登山家人名録』

『第七卷 補遺、山岳用語、索引』

\*

この『山岳・アルピニズム大百科事典』は、山岳分野の事典としては、多分ビッグゲスト・エンサイクロペディアであろう。一冊約一・六<sup>キ</sup>、八〇〇頁を越す巻が、三巻も含まれ出版されているのである。

ポーランドには充実した内容の山岳事典を執筆できる裏付けがある。この国には、桁外れの凄い登山家や関係者がいるからである。

イェジ・ワラ（八〇歳）は健在で、ヒンズークシユ、カラコルムの多くの地図を作っている。吉沢一郎さんとも昵懇であった。イェジ・ククチカはメスナーに次ぐ八千<sup>弱</sup>峰十四座登頂者で、七九年秋にローツェ南壁で頂上稜から墜落死した。ワンダー・ルトケヴィッチは九二年カンチで、当時の女性最高となる八千<sup>弱</sup>峰九座目に挑戦中に遭難死した。クストフ・ヴィエツキはエヴェレストを仲間と冬期初登頂し、続いてカンチ、ローツェも冬季初登頂し、冬季八千<sup>弱</sup>峰三座の初登頂を果たした。ピョートル・ペテルニクは昨年アンナブルナで八千<sup>弱</sup>峰十四座を完登した。残念な死亡事故もあるが、世界のトップ・クライマーを擁するポーランドの登山界は先鋭登山家の層が随分厚いのである。

この様な登山家がいるからこそ、それを支援する人もいて、立派な山岳事典を出版できる基盤があったのだろう。

この稿を書くにあたり、池田常道さん、中村保さん、芳賀孝郎さん、賛田統亜さん、鈴木覚さん（ポーランド語）にアドバイス頂いた。お礼申し上げます。

（田村俊介）

Damien Gildea

MOUNTAINERING IN ANTARCTICA  
Climbing in the Frozen South

Editions Nevicata, Brussels 2010  
192 pp. 277 × 245 \$35

日本で市販されている世界地図を見る限り殆どの地図が南極を白一色に塗りつぶしている。そんなことで南極は全てが氷雪に覆われているような印象を受けていた。

ところがこの書物で、登山者の立場から南極を見た場合、沢山の四〇〇〇<sup>弱</sup>を超える高峰が極地のあちこちに散在し活火山もある。しかもアイスクライミング、ロッククライミング、ミックスクライミングなどの対象になる岬々たる山々や針峰、大岩壁、海上に突き出た尖塔が沢山あることを知った。南極のイメージが大きく変わった。まだまだ未開発の地域や未踏峰の宝庫である。

昨今、七大陸最高峰登山ブームの煽りで最高峰がピンソン（四八九二<sup>弱</sup>）峰であることをご存知の方が多い。しかし、ピンソン山塊は南極の山並みの一つに過ぎない。

この一世紀の間にシャクルトン、ティルマン、ヒラリー、ボ

ナッティー、メスナーなども南極の魅力に惹かれて出かけた。南極の個々の探検や登山、科学者達の極地研究報告書などは沢山出版されたが、南極全域の登山を対象とした書物はなかったようだ。

著者は一八一七年から一九九八年に至る一八〇年間の南極における初登頂史を一九九八年 *The Antarctic Mountaineering Chronology* として纏め刊行した。また著者は二〇〇〇年から二〇〇八年にかけて南極を十回訪問。最高峰ビンソンに登るなど、幅広く登山し、ガイドとしてスキーで極点訪問をするなどオールマイティの登山家の視点から南極全域を紹介した希に見る書籍だ。南極遠征ツアーのガイド・ブックではない。

目次は大きく六章に分け解説している。

各章に関連の探検や登山史、エピソードなどを記している。大陸の位置関係については日本で発売されている世界地図の南極地図と同様に、グリニッチを通る経線を0度線として南極の昭和基地が右上になるよう捉えて以下説明する。

#### ① ELLSWORTH MOUNTAINS (エルズワース山脈)

南極大陸上の西、南極半島の付け根に近い部分にある。

Sentinel Range : は二一〇〇<sub>キ</sub>は二〇〇<sub>キ</sub>の長さがあり鋸の歯、針峰、岩のリップジ、雪原に突き出る大きな岩壁などが多い。Vinson

Massif は Sentinel Range のほぼ中程にあり、南極大陸の最高峰 Mt. Vinson (四八九二<sub>メ</sub>) がある。縦横十五<sub>ロ</sub>の大きな領域で周辺には沢山のピークがある。アイス・クライミングから岩登りまでできる山々が横たわっている。信じられないことだが一九五九年まで南極の最高峰は確認されていなかった。一九六六年十二月アメリカ隊の四人が初登頂した。二十五ページの Vinson Massif の写真の上に二十五本のルートが朱色で描かれている。四〇〇〇<sub>メ</sub>峰は全て登頂されているが三〇〇〇<sub>メ</sub>峰には未踏も残っている。

Heritage Range : Sentinel Range より少し低い幅は広い山脈だ。ブルー・アイスの地域が多いが、最高峰 Mt. Bursik (約二五〇〇<sub>メ</sub>) など岩山も多いので岩登りが盛んだ。

#### ② ANTARCTIC PENINSULA (南極半島)

大陸の西から西北に延びる長大な半島。南極で最も人氣があり、アクセスし易く最も美しいと言われる地域だ。氷山、ペンギン、アザラシ、鯨、氷雪のピーク、海に落ち込む氷河など現在はツーリスト、探検家、登山者の注目的だ。アザラシや捕鯨業者が先行していたが、一八九七〜九九年ノルウエーの地質調査隊の船が氷に閉じ込められ南極で初めて越冬した。この中に後年、南極点に初名乗りした若きアムンゼンがいた。

South Orkney Islands (サウス・オーク二諸島) : 南極半島の先端から北東七五〇<sub>キ</sub>にあり、殆んど氷に覆われた小さな島々

から成っている。主な島は Coronation、Laurie、Sigry、Powell Island である。Coronation Island は一九五六年 Mt. Nivea (二六五<sup>メートル</sup>) が初登頂されるなど多くの登山隊が訪問している。

South Shetland Islands (サウス・シエトランド諸島)：南極半島の北西一〇〇<sup>キロメートル</sup>にある小さな島々の広大な群島で長さは五〇〇<sup>キロメートル</sup>に及んでいる。孤島の独立峰や山脈をなす山塊もあり未踏峰が沢山残され、登攀向きには Clarence Island、King George Island、Livingston Island などがある。

Clarence Island はシヤクルトンの有名な South Georgia への航海の出発点となった。King George Island は九カ国の南極基地があり「南極の首都」と呼ばれている。コマーシャル・フライトの基地もある。水原、氷河もありスキーや登攀もできる。Livingston Island、長さが七〇<sup>キロメートル</sup>あり South Shetland では最大の島である。西半分は平坦で各国科学班が沢山入っている。南東には一九九一年十二月スペイン隊によって初登頂された最高峰 Mt. Friesland (二七〇〇<sup>メートル</sup>) がある。Smith Island の周辺は非常に急峻な山が多く、登山者には魅力的だ。一九九六年一月、最高峰の Mt. Foster (二二〇五<sup>メートル</sup>) が初登頂された。

Graham Land (グレアム・ランド)：半島の先端部分には三〇〇<sup>メートル</sup>を越す高峰も沢山あるが海上に突き出る尖塔や海岸から岩壁に取り付く登攀の写真など目を引く。

Trinity Peninsula の山々極めて低く。Gerlach Strait Region

には Mt. Johnson (二二三九<sup>メートル</sup>)、Mt. Walker (二三五〇<sup>メートル</sup>) などがある。強風が吹くことが多く天候は悪いが近年沢山の登山者が入っている。Brabant Island は山岳地が多く氷河に覆われた島で、荒海から突き出た針峰や岩壁は凄まじい景観を呈している。

Mount Francis and Anvers Island の最高峰 Mt. Francis (二二八〇<sup>メートル</sup>) は一九五五年十一月初登頂され、一九八七年には頂上からスキーで下降している。近年登頂目的で入る登山者が多い。Wiencke Island はヨットでアプローチする登山者に人気がある。一〇〇〇<sup>メートル</sup>前後の山が沢山ある。Cape Renard には海上から盛り上がるような急峻な岩と氷の Cape Renard Tower (七四七<sup>メートル</sup>) などある。何度かの挑戦の後、一九九九年ドイツ隊が九〇〇<sup>メートル</sup>のフィックス・ロープを使用して初登頂した。Booth Island and The Lemaire Channel は海上に突き出た山、岩峰など写真の対象としても興味をひく。一〇〇〇<sup>メートル</sup>峰が沢山あり、登山者にとっても魅力的である。Arrowsmith Peninsula はかろうじて南極大陸につながり、南北に横たわる一〇〇〇<sup>メートル</sup>峰が多い大きな半島である。最高峰が Mt. Verne (一六二〇<sup>メートル</sup>) の Pourquoi Pas Island は小さい島だが山岳的な魅力のある山が多い。Adelaide Island は一五〇<sup>キロメートル</sup>×三〇<sup>キロメートル</sup>の大きさで、五十年前から登攀の対象になっている。最高峰 Mt. Gaudry (二五六五<sup>メートル</sup>) は一九六二―三年のシーズンに登られた。Mt. Liotard (二二三五<sup>メートル</sup>)、Mt. Bouvier (二二三〇<sup>メートル</sup>) など二〇〇〇<sup>メートル</sup>級の

山が多い。沢山の登山者が入っている Marguerite Bay 周辺の最高峰は Neny Mutterhorn (一五〇〇<sup>ト</sup>)だが Little Thumb (八二五<sup>ト</sup>)や海上に突き出た The Spire (三三〇<sup>ト</sup>)も見事だ。

Alexander Island (アレクサンダー島)は半島の付け根の南部にあり、南北八〇<sup>キ</sup>、東西二四〇<sup>キ</sup>の高。Mt. Stephenson (二九八五<sup>ト</sup>)、Mt. Huckul (二五〇〇<sup>ト</sup>)など登頂記録はない。二〇〇<sup>ト</sup>を越える山が沢山あり、まだまだ未開の地域である。

Palmer Land (パーマー・ランド)は半島の付け根部分にある。一九三五年頃から登山者に注目され、一九六四年十一月南極半島最高峰 Mt. Jackson (三二八四<sup>ト</sup>)は登頂された。ここには Mt. Hope (二九六二<sup>ト</sup>)、Mt. Faith (二六五〇<sup>ト</sup>)、Mt. Charity (二六八〇<sup>ト</sup>)など、二〇〇<sup>ト</sup>以上の峰も豊富だ。

### ③ QUEEN MAUD LAND (クイーン・モート・ランド)

一九二八年ノルウエー隊によって探検が開始され、二十世紀に最も探検された地域だ。南極で最も広大な面積を有し、雪原に突き出る岩壁や岩峰は凄まじい景観だ。最高峰 Jokulkyrkja (三二四八<sup>ト</sup>)ははじめ登攀の対象になる山、岩壁、尖塔など無数に有ると言っても良さそう。まるでバルトロカヨセミテの壁を登攀しているかのような錯覚を覚える写真が何枚もあり強烈だ。登攀者天国と言わしめた理由が判る。日本人に馴染みのやまと山脈も含まれ、一九六〇年日本南極観測隊が最高峰 Mt. Fukushima (二四九二<sup>ト</sup>)など幾つかの峰に登頂している。

### ④ TRANS-ANTARCTIC MOUNTAINS (南極横断山脈)

南極点の西上から弓なりに反って南に走る三五〇<sup>キ</sup>に及ぶ長大な山脈であり、南極を東西に分かっている。一九〇二年スコットやシヤクルトンが南極点を目指し、その後も数隊が南極点に出かけたが登山目的の人たちは見かけなかった。一九〇八年シヤクルトン隊が初登頂した大きな火山 Mt. Erebus (三七九四<sup>ト</sup>)はこの地にある。二十世紀は沢山の登山隊を迎えた。四〇〇<sup>ト</sup>を越える峰も沢山あり、まだまだ未踏峰の宝庫だ。

大きく四つの山域に分類される。Royal Society Range には Mt. Lister (四〇二五<sup>ト</sup>)などの高峰が沢山あり、Queen Maud Mountains は南極点の南にあり Crown Mountain (三三三〇<sup>ト</sup>)など三〇〇<sup>ト</sup>級の山が沢山あり。Queen Alexandra Range には Mt. Kirkpatrick (四五二八<sup>ト</sup>)ははじめ四〇〇<sup>ト</sup>を越す山も多数あり、Admiralty Mountains にも Mt. Minto (四一六五<sup>ト</sup>)など四〇〇<sup>ト</sup>の峰が数峰ある。

### ⑤ SOUTH GEORGIA (サウス・ジョージヤ島)

大陸の北北西の海上に浮かぶ島、一七〇<sup>キ</sup>・三〇<sup>キ</sup>の山域は暴風が吹きまくり大荒れの天気が多い。一九一六年五月シヤクルトンが Elephant Island から一三〇<sup>キ</sup>の航海の後、この島を横切っている。島は極端に山が多く氷河も多い。島の中心に Allardce Range があり、島の南東はやや低く、岩の多い

Salvesen Range がある。一九五〇年代から本格的な登山が始まった。最高峰 Mt. Paget (二九三四メートル) を含む二〇〇〇メートル峰が十峰ある。風雪に磨かれた山が多く未踏の山も沢山残され、スキー登山も見かける。未踏の山々の写真も数点掲載されており、近年登山者の注目を集めている山域である。

#### ⑨ OTHER AREAS

三つの離島と大陸の二箇所を取り上げている

Kerguelen Islands (ケルゲレン諸島) : 大陸東海上上の三〇〇ほどの島から成る。最大の島は幅が一五〇キロ、長さが一二〇キロだ。Mt. Ross (一八四九メートル) は急峻な黒い岩と氷からできており頂上は氷雪がキノコ状に被さっている。ゴシック建築の城郭の様で登攀には手強い。天候は地球上の最悪の類に入る。

Heard Island (ハード島) : 大陸の北東海上にある。活火山の Big Ben があり、二〇〇四年にも噴火している。最高峰の Mawson Peak (二七四五メートル) へのアプローチは斜面がなだらかに登り易い。

Erannes Mountains : 南極大陸北東部にある。一〇〇〇メートル前後の魅力ある岩峰が沢山あり一九五〇年頃からしばしば登頂されている。

Marie Byrd Land (マリー・バード・ランド) : 大陸西部にあり、氷原が多い。その氷原から突き出た死火山 Mt. Sidley (四二八五メートル) の火口壁など、大きな登攀対象になる岩峰や岩壁も

ある。

Remote Antarctic Islands (遠隔地諸島) : 大陸の西海上に浮かぶ Peter I Island の最高峰 Lars Christensen Peak (一七七五メートル) は何度か登頂を試みられたが未踏のままだ。The Balleny Island は南極大陸の西海上にある。全体が氷と岩の壁に囲まれた赤茶色の盆を伏せたような山谷の Brown Peak (一五二四メートル) を写真で見ることが出来る。

巻末に四〇〇〇メートル峰と四十八の衛星峰の一覧表があり、その内八峰が未踏峰となっている。山名と人名索引は読者に便利だ。特に山名に至っては九〇〇余峰の山名が掲載されており、南極に如何に沢山のピークが存在するかを物語っている。

四十五人から提供を受けた写真を含め一六〇余枚の魅力的で綺麗な写真を眺めるだけでも楽しく極地の山々を知ることが出来る。

(南井 英弘)

Harish Kapadia

SIACHEN GLACIER  
The Battle of Roses

Rupa Publications India Pvt. Ltd 2010

230 pp. 236 × 152 \$40

インドとパキスタンの間で、カラコルム山脈のシアチェン氷河領有をめぐる、一九八四年以来、「コールド ウォー」「世界最高所の戦い」と呼ばれる紛争が続いている。書名の「バラの戦い」は、氷河名の野生のバラ(シア)に由来し、表紙カバーの「雪原に脱いだ軍靴」に、著者の祈りが込められている。

本書は、冒頭から戦場の緊迫感が漂う。著者が八五年夏、リモーン峰英印合同隊に参加した際、シアチェン氷河舌端近くのインド軍ベースキャンプで、深夜、隊員が銃撃されそうになる。西側のサルトロ山系の氷河から侵入したパキスタン兵九人が三日前に射殺されたばかりだった。目標のリモーン山群は、戦前にテロン谷からオランダのフイツサー夫妻が探検し、合同隊はこの谷からアイベックス・コルを越えてリモーン峰に初登頂。アッパ・テラムシャールの広大なアイスキューブを望見する。シ

アチェン氷河は極地を除き山岳氷河としては世界第二位の七六キロの長さを誇り、著者はその壮麗さに畏敬の念を覚える。

次に歴史を探る。インドのレーからカラコルム峠を越える中央アジアへの伝統的な交易ルートとは別に、シアチェン氷河からシヤクスガム渓谷に抜ける道があったのではないか？その伝説や地名の由来が興味深い。さらに、英国とロシアが中央アジアに覇権を争った「グレートゲーム」の時代、ヤングハズバンドは一八八九年に、K2北面のシヤクスガム渓谷からシアチェン氷河源頭部のインディラ・コルの麓に立つ。一九〇九年、ロングスタッフはビラフォンド・ラ、ギオン・ラなどを訪れ、シアチェン氷河の存在とカラコルム峠から西へK2に続く大陸の分水嶺を確定する。さらに一九一一年から翌年にかけて、米国のワークマン夫妻の野心的な踏査がある。インディラ・コルとイタリアン・コルに立ち、氷河上に人の痕跡を見出し、テラムシャール氷河との合流点近くに、氷河湖とアイベックスが遊び花々が咲く緑地を発見する。妻ファニーは、シアチェンを「私のローズ」と呼び、五四歳の夏を過ごした。探検家たちの記述を交えながら、簡潔だが濃密な読み物になっている。

続いて政治的な経過と戦争を追う。インド、パキスタンが分離独立後、カシミール紛争が勃発。シヨーク谷、ヌブラ谷の知られざる攻防戦などを詳述する。一九四九年に国連の介入で、シヨーク谷右岸のNJ9842地点からカラコルム峠へのびる

停戦ラインが確定。バングラデシユ独立に伴う第三次印パ紛争後、七二年に当時のパキスタンのZ・A・ブット首相とインドのインディラ・ガンジー首相が「シムラ合意」を結ぶ。捕虜八万人の返還と引き替えに、ブット首相は「平和のライン」と称し、停戦ライン変更を同意したという。インドは実効支配するヌブラ谷上流右岸、分水嶺のサルトロク山系が国境と考え、シアチェン氷河はインド領と解釈。新たな紛争の遠因となる。

七〇年代は、「シムラ合意」により両国の緊張が緩和。パキスタン政府は、K2はじめカラコルム山脈の東西にわたる峰々を解禁し、多くの初登頂が生まれた。七五年には禁断の地と思われていたシアチェン氷河北側、大陸の分水嶺上のテラムカンリが静岡大学隊に許可されて、初登頂。翌年から周辺の七千メートル級のアプサラスI峰、テラムカンリIII峰、シンギカンリ、シエルピカンリなどが日本隊によって初登頂された。当初、インドの反応は鈍く、停戦ラインは有効で、パキスタン側に位置するシアチェン氷河周辺は入域可能であると考えられた。

七八年、私も鶴城山岳会隊でリモ山群を計画。六千メートル峰を許可され、サルトロク山系のギオン・ラを越えてシアチェン氷河舌端に到達したが、テロング谷の濁流に前進を阻まれた。こうした登山がインド側を強く刺激したのは言うまでもない。同年十月、インド陸軍はヌブラ谷から遡り、テラムカンリII峰に登頂し、記録は八一年に発表された。

一九六二年の中印紛争で、アクサイチンが中国支配下におかれ、シヤクスガム渓谷の所屬は印パ間で未確定だったが、パキスタンは中国と六五年に国境協定を結び、現在、中国領となっている。登山者側は、単純に「第三の極地」と呼ぶにふさわしいシアチェンの大氷原、未踏峰群に憧れての活動に過ぎないが、領土的に後退を続けるインドにとつて、シアチェンの登山許可を外国隊に出すパキスタンへの疑念は次第に膨らんだ。

一九八四年四月十三日、インド軍はパキスタン側からのシアチェン氷河への関門となるピラフオンド・ラ、シア・ラに進駐し、紛争が始まった。日本隊へのリモI峰の登山許可（直前に取り消し）が契機になったという。最も激しい戦闘は、ピラフオンド・ラ周辺のいくつかの駐屯地の攻防戦であり、ギオン・ラの争奪戦、シヨーク谷だった。流血に染まる白兵戦の悲惨な戦いだ。高山病で倒れる兵士も数多い。モンブランやマツキンリー山頂を越す高所の希薄な酸素、冬季は零下四〇度Cの極寒といった過酷な環境で重い装備で戦う兵士たち。本書によれば、二六年間でインド側だけでも二千人の死者と一万二千人が負傷し、その戦費は、一日邦貨約九千百万円と見積もっている。累積戦費は天文学的で、残酷で無益な戦いである。

こうした戦いが続く中、著者は九六年に、二〇歳の次男ナワンを伴い、市民だけのムンバイ山岳会隊でシアチェンを目指す。苦勞して政府の正式許可を得たが、氷河上から突然退去を命じ

られ、「民主国家インド」での不合理なやりかたに激しく抗議した。九八年に再び許可を得て、シアチェン源頭まで踏破してインディラ・コルに立ち、テラムシヤール氷河の六千メートル峰に初登頂する。この遠征中、士官や兵士たちから数々の戦闘について聞き取る。過酷な環境の中で兵士たちが何を恐れ、何を信じて生きているのか、彼らに寄りそうように描写する。ヒンズー教徒もイスラム教徒も他の宗派も、それぞれの神に祈りながら長期の軍務につく。そして、環境汚染の実態も目にする。駐屯地に残る膨大なゴミ、氷河上に引かれた長大なパイプライン。漏れるガソリンや石油類。常時二〇〇〇人の駐屯兵のし尿も膨大だ。ゴミを撤去し環境保全には紛争終結が前提となる。

筆者は両国の外交交渉をつぶさに検証するが、最終的にはカシミール問題がネックとなり常に破綻。二〇〇三年から休戦したが、氷河上の駐屯は今も続いている。

二〇〇〇年、次男ナワンがカシミール戦線で仲間を助けようとしてテロリストに射殺される。次男は九六年にシアチェン氷河で出会った若い士官たちの深い見識に感動して軍人を志し、士官として赴任したばかりだった。著者は、平和のために献身したナワンの遺志を継ぐために、以後、シアチェン氷河周辺の平和活動「シアチェン・ピースパーク」の実現と環境保護問題に力を注ぐ。

両国の軍隊がシアチェン氷河周辺から撤退し、貴重な自然環

境を保全する構想で、世界各地にある国境を超えた「ピースパーク」の例を挙げて訴える。国連の「国際山岳年」の二〇〇二年には、印パの登山家、著者やナジール・サビルら六人がアルプスのメンヒ山頂に一緒に立ち、両国国旗を掲げた。筆者は「インドとパキスタンは、長い歴史を共有し、文化も言語もほぼ共通している。シアチェンの壮麗な山脈を、子孫のために保全することに両国が協力できないのか？この偉大で壮大な計画への、自分たちの役割を理解できないのか？」と、切々と記す。本書の白眉の部分である。

著者のハリシユ・カバデアは、長くヒマラヤン・ジャーナル編集長を務めたインドの登山家であり、*High Himalaya Unknown Valleys* など一五冊の著作がある。ヒマラヤの辺境の地で数々の初登頂や踏査を行い、その厳格な視点は定評があり、英国王立地理学協会の Paton's Medal を受章している。日本に友人も多く、二〇〇二年には日印合同隊（坂井広志隊長）のインド側隊長を務め、カラコルム峠からイタリアン・コルを越えるなど、シアチェン氷河に数多くの足跡を残している。

本書は、シアチェン氷河の自然環境、探検・登山史、戦争の経緯と実態、環境汚染、外交交渉の変遷、未来への提言など、体系的かつ総合的にまとめ、他に類がない著作になっている。登山と戦争、国境問題など普遍的な問いも含まれ、シアチェンを訪れた登山者が最も多い日本に著者を招き、講演会などを開

いてピースパーク構想の一助とできないものか……。読後強く思った。

巻末の年表、氷河地域の解説、紛争の人的・物的コスト、参考文献、索引も充実している。

(永田 秀樹)

## 追悼

### 堀田 弥一さん



(1909~2011)

会員番号 1231  
名誉会員

一九三六年、日本で初めてのヒマラヤ遠征となった「立教大学ヒマラヤ踏査隊」の隊長として、インドヒマラヤの未踏峰ナンド・コート（六八八七メートル）に初登頂した堀田弥一氏が二月二十三日ご逝去された。一〇二歳だった。

堀田弥一氏は一九二七年立教大学の山岳部とスキー部に入部

した。富山県黒部市の出身であり、当初はスキーをやるつもりだったという。しかし雪の山に通ううちにスキー登山ではなくアイゼンとピッケルが主役である、ということとで冬の北アルプス、特に立山から剣、鹿島槍などの後立山へと通いつめていった。一九三〇年十二月には鹿島槍ヶ岳の冬季初登頂。当時は雪崩の恐れからほとんど誰も入らない積雪期の黒部や後立山連峰、槍・穂高連峰で初登頂や初縦走などの活躍を行った。堀田氏は山での経験は学生時代に熱中して山に登った三年間の冬山生活だった。という。

当時の登山界はイギリスやドイツ、フランスなどが国の威信をかけてヒマラヤへ大遠征隊を派遣する時代であり、堀田氏も一九二九年のドイツ隊の「カンチエンジュンガの記録」を参考にヒマラヤへの夢を実現すべく活動する。一九三五年の冬には鹿島槍ヶ岳の天狗尾根で外国隊が採用していたポーラーメゾッド、極地法の登山を始めて実施。荒沢のベースキャンプからキャンプ3までの荷物、人の動きを確認し頂上アタック。また強風に強く居住性の良いカマボコ型のテントも考案したうえピッケル、アイゼンなどの登山道具も改良し国内の山内、門田に依頼。ゴボウやニンジン、ホウレンソウなどの乾燥野菜もテストするなど、日本人初のヒマラヤ遠征に向けて準備を始めた。しかし現地の情報収集や地図の入手など全てが初めてのことで

あり苦勞の連続であった。堀田氏は「日本の冬の雪山で育った僕は日本の山でこれだけ出来るのだからヒマラヤでも登れると思っていた。しかしヨーロッパの山の経験も無いものがヒマラヤに行つてうまくいくものかと妨害もされ、準備は内輪で進めた。当時はヒマラヤという地域自体がよく理解されておらず、まるで唐天竺へ行くかのように思われ反対されたものだ」と苦勞を語っていた。

一九三六年秋、日本初のヒマラヤ遠征隊となる立教大学ナンダ・コート遠征隊の隊長として六八六七の未踏峰に全員登頂という偉業を成し遂げた。これは戦前唯一のヒマラヤ遠征・登頂であり、日本の登山界に新志位時代をもたらす画期的なものであった。

初登頂の記録は堀田氏が一九四一年発行の『立教大学山岳部報』9号に「ヒマラヤの追想(上)」として登頂直前までを書いている。その後第二次世界戦争が激しくなり、学徒動員など登山どころでなく、山岳部も休部、追想の(下)が部報に掲載されないまま終戦を迎えた。ナンダ・コートと一緒に登頂した後輩からも戦死者が出、しばらくは山から離れた生活を送つたようだ。一九四八年から一九四九年にかけて日本山岳会の「山」(当時は会報でなく月刊誌的な発行だったようだ)に「ヒマラヤ追想」の後半を書いて完結させた。その後日本山岳会の活動を

手伝い、一九五四年には日本山岳会の第二次マナスル登山隊の隊長を務めた。

一九八六年十一月ナンダ・コート登頂五十周年を記念して「ヒマラヤ初登頂」を発刊、堀田氏の長い登山活動の総括を行い、以降山岳会活動にはほとんど姿を見せなくなった。そして二〇〇三年山岳会の資料・映像委員会主催の講演会「語り継ぐ黎明期の登山・・・それぞれの山」堀田弥一氏「山に生きて九十四年・立山からヒマラヤへ」で登山家の先駆者としての発言をされている。

堀田先輩と筆者とは親子以上の年齢差もあり、同じクラブの先輩としても雲の上のような存在であり、山行なども一緒にすることはない。しかし様々な会合でお会いし、挨拶をするとしつかりと覚えていただいていた。クラブのOBがヒマラヤに行く時、寄付のお願いに何うと「気をつけて楽しんでいらつしやい。人のお金なんか当てにしないで」などと怒られたり、創部80周年の記念の会で挨拶と乾杯の音頭を短めにとお願いしたものの、三十分以上も素晴らしい演説をしていただいたりした。二〇〇九年の三月二十一日、堀田氏の「一〇〇歳をお祝いする会」を開催し大学の総長や日本山岳会の宮下会長(当時)など多数の関係者の方にご参加頂いた。堀田氏はお礼の挨拶では背筋をピンと延ばし、マイクを片手に学生時代の思い出、ヒマラ

ヤへの話などを熱く語られた。その後、参加者との歓談の輪が延々と続けられ、最後は会場前の芝生で堀田さんを中心に様々なグループの記念撮影が行われたのがつい昨日のように思い出される。

(今村千秋)

#### 略歴

明治42年 富山県に生まれる。

昭和2年 立教大学入学 山岳部、陸上競技部入部

針ノ木岳、立山、銀岳縦走

昭和4年 積雪期 北アルプス 黒部川源頭の山々

冬季 五龍岳、唐松岳初登頂

昭和5年 日本山岳会に入会 会員番号1231

冬季 鹿島槍ヶ岳初登頂

昭和6年 積雪期 黒部側より鹿島槍 五龍岳

冬季 槍ヶ岳、穂高、ジヤンダルム初縦走

昭和7年 立教大学卒業 安田生命保険に入社

昭和11年 ナンダコート初登頂 (日本人初のヒマラヤ遠征)

昭和29年 マナスル第二次登山隊長を務める

昭和55年 日本山岳会名誉会員に推挙される

著書 『ヒマラヤ初登頂』

## 梅棹 忠夫さん



(1920~2010)

会員番号 3963

名誉会員

まさに巨星墜つという感じである。私にとって兄貴分的存在であり、知り合って六十年間、陰に陽にいろいろとお世話になった梅棹さんが亡くなった。生き字引のように何でも昔のことを教えてもらい、また鋭い切り口の論説、批評などで刺激を与えてもらった、梅棹さんの警咳にもう接することができないと思うと寂しい限りである。

限られた紙数では書ききれないが、梅棹さんの登山家、探検家としての足跡を追懐してみる。

登山家としての歩み

梅棹さんの登山は京都一中から始まる。自ら選んだ山城三十山を山岳部の目標にした。そして36年に入学した第三高等学校では一年生からみっちり登山をたたきこまれた。実は三高に入學した前年、三高山岳部は鹿島槍や御岳などで遭難があいつぎ、壊滅状態であった。その再建の責を負ったリーダー鈴木信さんのもと、梅棹さんは夏には、まず南アルプス遠山川から赤石岳など縦走、下山後すぐ北アルプスへ転じ、槍ヶ岳から薬師岳へ縦走した。北アルプスと南アルプスを一夏で登ったわけで、装備や食料の軽い現在でもきびしい山行である。まして梅棹さんは小学5年から中学へ、中学四年から三高に入っているの、このときわずか十六歳であり、まだ初々しさの残る少年であった。ちなみに何年も浪人して三高に入った猛者が、あんな子供と一緒に勉強するのかと嘆いたほどであった。背丈ほどある大きな荷物をかつぐときは、行き交う人は皆目を見張ったという話が残っている。

夏に続いて冬はスキーとアイゼン練習をし、そして翌年38年春には、スキーを駆使して黒部源流に入り、薬師岳、鷲羽岳、黒部五郎岳など周辺の山々を登った。これは当時としては画期的な山行であり、現在でも注目される記録である。さらに年末には八ヶ岳赤岳西面の氷壁登攀をしている。まさにオールラウンドな活躍である。梅棹さんはこれらの山行で大きな自信を

もった。壊滅状態にあった三高山岳部も梅棹さんらの活躍でようやく勢いをとりもどし、38年には自身プレジデントになって山岳部をリードした。しかし川流れ（兎洞）、転落（八つ岳）、雪崩（天狗原）、滑落（水晶岳）など、危険な目にもあっている。三高には五年間在籍した。梅棹さんの登山家としての原点は、こうした京都一中、三高時代の登山にある。

探検家としての歩み

梅棹さんは三高三年のとき（40年）、同期の藤田和夫、伴豊さんなどとともに朝鮮半島北部の白頭山に登頂し、それから、匪賊が跋扈する北部の森林地帯をくだり、第二松花江源流が地図と異なることを発見した。藤田さんは「白頭山はわれわれの探検の出発点であった」と書いているが、梅棹さんにとってもこの白頭山は探検家としての大きな分岐点になった。

梅棹さんを取りまく環境は、梅棹さんを探検家に仕上げるべく整っていた。すでに31年には京都大学学士山岳会（AACK）が設立され、ヒマラヤ初登頂の計画が生まれている。しかし戦局が激しくなるとともに、ヒマラヤ登山はむづかしくなり、AACKは開店休業となり、それにかわるものとして、探検を目的とした京都探検地理学会が39年に発足した。梅棹さんはそのどちらにも入会している。

そして40年冬、梅棹さんは探検地理学会が派遣した東北樺太

調査隊に今西寿雄さんらと加わり、我が国はじめての犬ぞりの研究をする。そして41年には今西錦司隊長のボナベ島調査隊に参加し、フィールド研究者として訓練をつみ、さらに翌42年には同じく今西隊長のもと北部大興安嶺探検隊隊員として、地球上最後の地図の白色地域の探検に成功している。これらの経験を通して、梅棹さんは未知の世界の探求にますますのめりこんでいった。そして大学を卒業した44年5月から張家口の西北研究所で遊牧民の研究をしている。新婚まもない夫人も同行したが、現地で敗戦をむかえ、戦後の混乱期の引き上げに苦勞して、京都に帰ったのは46年であった。

#### 登山家としての熱い血

敗戦とともに京都探検地理学会は解散し、その流れをくむものとして51年京大に生物誌研究会（略称F F）が誕生する。そしてF Fから申請したマナスル登山がネパール政府から許可されたが、その規模から日本山岳会に移譲された。（A A C Kが再建されたのは52年である）。登山家と自負していた梅棹さんは、当然このマナスル計画に参加するつもりで、準備をはじめたが、肺結核を患い療養生活を余儀なくされ、マナスル登山はあきらめざるを得なかった。

登山はあきらめたが、病から回復した梅棹さんは55年の京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊に参加したのを皮切

りに、東南アジア、アフリカ、サハラ砂漠など多くの学術探検を行った。

梅棹さんは三高時代から、未知にあこがれる探検家と同様登山家としての熱い心を持っていた。たとえばタイの学術調査でも最高峰ドイインタノン（二五九五<sup>メートル</sup>）に登るなど、山があれば登ろうとする登山家でもあった。健康を取り戻した梅棹さんが再び登山に心を動かすのは当然の流れであり、61年にビルマの未踏の最高峰カカポ・ラジ（五八六六<sup>メートル</sup>）をめざす学術登山隊を計画し準備をすすめた。四十歳であった。カラコルム、東南アジアとつづく、登山家として、また探検家としての梅棹さんらしい大きな計画であった。しかし残念ながら許可がおりず、計画はつぶれた。これは先頭に立って走ってきた梅棄さんにとって、大きな痛手となった。そしてこの年の年末に東南アジアの学術調査の後、単独でビルマ、東パキスタン、インド、ネパールを旅して傷心の痛手を癒した。

#### 知の巨人

86年、順風満帆であった梅棄さんに突然不幸がおそった。球後視神経炎の発病で突然視力を失われた。私はちようどクローラカニリの登頂を終えて帰国したばかりで、報告がてらお見舞いに行つたが、赤ん坊のように泣き叫びたいと言われたことを思い出す。しかし梅棄さんは見事にこの困難を乗り切られた。約

一〇〇冊の全著書のうち、七十冊は失明後に出版されておられる。また文化勲章やフランスのバラム・アカデミック勲章コマンドゥール章など、栄誉ある賞を六回も授章されておられるが、そのすべては失明されてからである。まさに知の巨人にふさわしい立ち直りで、余人にその真似はできない。

梅棹さんは語る、「山を知らなければ今日のわたしはなかった。山はわたしの人生のルーツであり、すべての出発点なのである」と。それだけに探検の実績、登山文化に対する功績で、95年に日本山岳会の名誉会員に推薦されたときは、「それまでに文化勲章をはじめいろいろな賞を頂いたが、この賞が何よりも嬉しい」と、たいへん喜ばれた。また02年国際山岳年では、山と文明、登山と観光開発などについて、各地の山岳関係者に請われて多くの講演をした。

人の偉さはその人が与えた影響力の大きさによる。その意味で梅棹さんは、登山家としても探検家としても、民族学者としても、またそのほか多くの専門分野でも、常に時代の先を見通し、実践した偉大な存在であり、はかりしれないほど多くの人に影響を与えた。そうした多くの知的領域における業績は、その根元に登山と探検があり、常に未知を求めて活躍した梅棹さんの足跡は、ひとりの人間がなした最大級のものではなからうか。

最後にお目にかかったのは亡くなられる一年前、梅棹さんの

最後の著作になった「山をたのしむ」（山と溪谷社）のなかの「AACKの山登り」と題した座談会の収録のために、民族学博物館を訪問したときであった。因みに膨大な著作の最初は34年にガリ版刷りで出版した「山城三十山」で、最後が09年のこの本である。どちらも山に関する本であり、登山家として自負しておられる梅棹さんの面目躍如たるものがある。

梅棹さんのご冥福を心からお祈りする。

（平井 一正）

## 大森 薫雄さん



(1933~2010)

会員番号 5136

大森薫雄先生は、病氣療養中のところ、平成二十二年四月二

十四日にお亡くなりになった。筆者が昭和三十九年慈恵医大入學時には、先生は卒後四年目であった。当時、慈恵医大山の会（山岳部OB会）総会時には、総会に先立って、山岳部部員総会があった。この会には、山岳部の先輩が参加する。部員総会では先輩達に、新人の紹介、年間山行計画の概要、年度役割（リーダー、サブリーダー、会計、装備、食糧、気象係等）を報告する。山岳部監督、若手の先輩が適切なアドバイスをしてくれた。その中の一人に、小柄だが声が大きく、がっちりした体格の大森先生がいた。先生は大学の整形外科教室で研鑽をしていたので、大学に居る時には山岳部部室にしばしば顔を出され、季節に応じた御自身の部活生活を語ってくれた。

五月の連休、北安曇郡白馬村の北アルプス小日向山（一九〇七㍎）をベースに新人合宿を行った時には、スキー訓練も合宿中の目的の一つで、「俺は、神岡時代はインターハイの選手で、スキーはこの様に滑るんだ」と、極端な後傾姿勢で深ユキの滑り方を教えてくれた。白馬岳アタックの時には、あの大雪渓を滑り降り、あつという間に姿が小さくなったのを思い出す。筆者は斜滑降キックターンの繰り返しで、スキーを着けなかった組より下山が遅くなった苦い思い出がある。

槍ヶ岳診療所は山の会の行事の一つで、二十年以上にわたって、診療所運営にご尽力下さり、山のお仲間とご一緒に毎年開所日に入所されておられた。先生の入所の方法は、羽田空港朝

一番の富山行きの飛行機で富山に出て、ご親戚の方が空港に出迎え、そのまま白出沢の出合いまで車で入り、槍平へ飛驒沢に登って診療所に到るコースである。先生曰く、「時間的に忙しい自分にとっては、これが一番速く入所できる」という事を申されていた。或年、筆者がマイカーで、先生は飛行機利用のコースで、白出沢で合流して入所したことがある。この時の下山時は、栃尾温泉で一泊し、先生が過ごした学生時代の山岳部生活から、医者として、病理学を志す筆者に対し、日付が変わるまで話し込んだことが思い出される。

先生は、一九七〇年の日本山岳会エベレスト登山隊に参加され、中島道郎、住吉仙也、広谷光一郎先生等と、生化学的・生理学的データを幅広く収集して帰り、その成果は翌年にオランダで開催された国際生気象学会で発表された。これらの共同研究の内容は、一九七一年第八回秩父宮記念学術賞の榮譽に浴した（対象業績は「一九七〇年エベレスト登山隊の業績」、受賞者は「一九七〇年エベレスト登山隊」隊長 日本山岳会会長 松方三郎）。

その後、京大の中島道郎先生、斎藤淳生先生、慈恵から長尾梯夫先生、日本山岳会医療委員会の中心人物の山本良三さん等が会合を重ね、「登山医学の知識の発展と普及を通じて、医学的な面から見て、登山の安全に寄与する医学研究組織を作ろうではないか」ということになり、「日本登山医学研究会」が組織さ

れた。一九八一年七月五日、慈恵会医科大学高木講堂に約五十人が集まり、会長大森薫雄で第一回日本登山医学研究会が開催された。一九九〇年には第十回日本登山医学研究会の会長も務めた。二回目のお務めである。研究会はその後発展し、第二十五回（二〇〇五年）は日本登山医学会に成長した。日本登山医学会の礎を創られた先生である。

先生はまた、二〇〇三年三月、山岳文化に関する調査、研究、保護、保存と振興及び普及を目的とする、山岳化学会を立ち上げた。二〇〇九年には日本山岳文化学会長に就任された。この間、学会を主催する大会長も務められた。

大森先生が大事にしていた山行の一つとして触れておかねばならない事に丹水会がある。先生から、何回かお誘いを受けたが残念ながら一度も参加する機会がなかった。丹水会とはどのような会であるか、存じ上げていない。しかし、丹水会の会誌を読ませて頂くと、以下のような事であつたらしい。先生が県立厚木病院に勤務するようになって、当時の日本山岳会副会長であつた折井健一さんが、「小田急沿線には山岳会の会員が結構いるので、一度集まって丹沢懇親山行でもやろうではないか」という提案があつたようだ。そして、昭和五十六年七月十六日、厚木に緑のある有志九人が市内の中華飯店「謝謝」に集まり、春秋の年二回位の予定で、「皆さんを誘いあつて丹沢へ登ろう」と決めたのが、「丹水会の発端」の様である。丹沢懇親山行の前

日には温泉に浸かりながら、丹沢にゆかりのある方々を招いて、丹沢回顧といった勉強会を開いている。先生がいつも口にして、「仕事をする時は一所懸命に、山に行く時も一所懸命に」の実践がここでも活かされている。遊びだけでなく、勉強もしよう、と言う趣旨であつたと窺われる。

しかし、この丹水会は創立以来、会の企画、準備、運営にあつてこられた古谷聖司さんを中心とする幹事役のサポートが読み取れる。先生はいつも、「人に対する感謝」を申されていた。今となつては喋ることの出来ない先生のお気持ちを忖度すると、「丹水会幹事役の皆さん有り難う」と、言いたいに違いない。

#### 山岳会関係の主な役職

(社)日本山岳会…慈恵医大を一九六〇年三月に卒業するや、直ちに加治甚吾、田村扇一先輩の推薦で(社)日本山岳会の会員となつた。日本山岳会の医療委員会に所属し、「山の医学」に関する情報発信で、会員サービスとしての登山医学の啓蒙活動を行った。

一九九七年には、日本山岳会会長に斎藤淳生先生が就任し、先生は山岳会副会長になられ、会長を補佐した。

(社)日本山岳協会…二〇〇三年五月から三期六年間の二〇〇九年五月まで協会の副会長を務めた。その間、医科学委員長（一九九六年から医科学委員）、アンチ・ドーピング委員長として活躍された。

山岳の「追悼」であるから、山関係が主体となったが、先生の学問的な事象を一つ書かねばならない。先生の専門診療科は、整形外科領域である。中でも膝関節領域である。今でこそR1検査（放射線同位元素を使用する検査）がルチンに行われているが、先生はこの検査の整形外科領域のバイオニアで、日常臨床から得られた裏付けのあるデータを基本とする数々の論文が残されている。その経験から得られた知識で、先生は膝に悩みを有する多くの岳人に対して、診断・治療・助言を与えられた。お世話になった会員が多数おられることは衆知の事である。

「山登りの魅力と学問への真摯な姿勢」を教えてくれた大森薫雄先生に対して、後輩として謹んでご冥福をお祈り致します。

合掌

(浜口 欣二)

主な年譜

- 1933年 岐阜県吉城郡神岡町（現飛騨市）に生まれる
- 1960年 東京慈恵会医科大学卒業
- 1960年 日本山岳会入会
- 1970年 日本山岳会エベレスト登山隊参加
- 1981年 丹水会発足（発足メンバー）
- 1997年 (社)日本山岳会副会長に就任
- 2003年 (社)日本山岳協会副会長に就任
- 2009年 日本山岳文化学会会長に就任

## 大森 薫雄さん

久しぶりに穏やかな春日和の土曜日であった。

今年は遅れて桜が満開した。玄関前に出ようとしたその日の朝、広谷光一郎兄よりの電話は大森薫雄兄の悲報であった。

桜見どころの土曜ではなかった。またすぐ、長尾悌夫ドクターから、訃報がファックスであった。

大森兄もかと嘆息したのは、朋友竹田寛次さんの悲報に次ぐ長年の友をまた失ったからである。

思えば、丁度、四十年前一九七〇年、JACがエベレストに目出度く登頂したあとの九月、広谷兄と大森兄と関口周也兄と一緒に、韓国山岳会の式典にJACの公式訪韓使節として来られた。

これより五年前、筆者は、韓国山岳會としてJAC六十周年記念の椿山荘式典に招かれてからのことである。その後から両国の岳人の交流は深まるばかりであった。

その後、半世紀に亘る交友親善の岳人交流は、この五人組を囲んで、枚挙に暇が無い程、いろいろな行事の中に実っていたのである。大森兄がJACの副会長であった頃まで、六回に亘る高所医学セミナーには必ずニコニコの笑顔の大森ドクターで

あった。思い出尽きぬ厚いアルバムとなった両国岳人交流の演  
出は、日本山岳文化学会の会長に至る数多くの印影の中に兄が、  
鮮やかに浮かんで来るのである。九十三年度の松本で開かれた  
UIAA総会では逢えなかったが、出席されておれば必ず筆者  
と共にアジア山岳連盟創立の表舞台に立つておられた事と思  
うのであった。

東京で、ソウルで、逢へば一献傾ける夕暮れの燈の下が、今  
は肩を組んで寫った思ひ出になるとは。

この春には隅田川の屋型船で楽しみませうといった年賀状の  
筆跡が書架の上に残った。酔えば得意の「愛染かつら」の誦踊  
りにおどけた笑ひもこの世では見られなくなった。その人なつ  
こい笑顔がああ世で一人旅しているのであらうと思うと、悲し  
みがひとしお胸をうつつのみである。

この土曜の早朝、桜の花片の一片が庭前で落ちる春のうらら  
かが友の訃報にかすんでしまったのである。

兄の冥福を祈るのみ、分厚いアルバムを残した大森兄の面影  
をなつかしく偲びつつ。

四月二十四日朝

日本岳会 名誉会員  
韓国山岳會 元老會會長  
（孫慶錫）

## 中世古 隆司さん



(1935~2010)  
会員番号 5178

一月五日、私は支部50周年事業の打ち合わせの後、ルームに  
残り調べ物をしていた。とそこに先ほど帰ったはずの中世古直  
子さんが戻ってきて、「実は、隆司が暮れに亡くなった」と知ら  
された。

突然で、何のことか、理解ができなかった。確かに、隆司さ  
んは、数年前に脳梗塞を患い歩くのは支障があるが、十二月四  
日に開催された年次晩餐会では東京に行き、永年会員表彰を受  
け、二次会まで楽しまれた。十六日には、ボランティア委員会  
の忘年会に出席、母校南山大学の後輩たちとも話しを弾ませ、

最後に、「皆さん俺のボランティアも頼むよ」と挨拶されたりして、場を和ませていた。

さらに、翌週の二十二日には、支部及び支部友会の委員志年会に出席、中華料理店での二次会でも、最後まで実に楽しく歓談し、飲まれていたからである。

直子さんの話によると、隆司さんは十二月二十九日、朝から眠り続け、夜十時四十五分に、そのまま脳梗塞により、鈴木デカさんや大山山岳部の後輩であった稲葉さんの待つ天国へと旅立っていった。

また、隆司さんは晩年キリスト教に興味を持っておられたことから、三十日に前夜祭、三十一日に告別式が、親族により、東区の金城教会でしめやかに執り行われたとの事であった。

中世古隆司さん、享年七十五歳、南山大学山岳部OB、日本山岳会員番号五一七八番、東海支部第八代支部長、一九八五年から八八年本部評議委員、今は支部常任評議員として、東海支部のご意見番的な存在であった。

東海支部は一九六一年（昭和三十六年）四月に設立され、今年で五十周年をむかえるが、この支部について設立時から今日に至る五十年の紆余曲折の歴史を語ることでできるのは、隆司さんだけであろう。一九六七年『東海支部報第2号』では、「東海支部設立に至るまで」として、当時の精鋭登攀集団（G・H・

M グループ・ド・オート・モンターニュ）の結成、石岡繁雄氏、石原国利氏を加えたヒマラヤ研究会の発足、ビッグ・ホワイト・ピーク遠征、日本山岳会への入会、支部設立までの、経緯などを書き残している。

東海支部は設立当初、中世古さんの家を事務所としてスタートし、その後、原病院地下のルームに移り、マカルー遠征後、「東海支部解散論」などの意見が出たときに、設立以来支部の運営に関わってきた隆司さんは、再度、支部を預かって、自宅を事務所として、東海支部を存続させた。このときに、中世古隆司さんと湯浅道男さん、尾上昇さんがいなかったら、今日の東海支部はなかったと言っても過言ではないだろう。

隆司さんは数多くの支部行事を実践したが、その中でも支部設立20周年記念の「悠久の大地に生きるヒマラヤの王国 ネパール展」1981年5月15〜18日」を思い出す。隆司さんは、総責任者として数ヶ月準備に明け暮れ、開催当日にはネパール大使夫妻、仲谷愛知県知事夫妻らの出席を得、三日間の開催日も大入り満員の大成功に導いた。

また、隆司さんは音楽全般にうるさく（特にアルゼンチン・タンゴなどのラテン音楽やヨーデルに詳しい）、一九七四年十月に来日したソプラノ歌手マリヤカラス日本公演を高いチケットを買って聞きに行ったほどで、今年十月に開催する50周年記念式典ではアトラクションの音楽監督をする予定だった。

さらに、登山の情報通でもあり、最近では、二〇〇五年の東海支部報から「東海地方の登山史と東海支部」のテーマで連載を開始、二〇一一年の最新号で二十一回となった。奇しくもその内容は、「マカールの登頂成功」「成果に続きやってきた大きな危機」で、これまで快調に進んできた筆が、遅々として進まなくなると書かれている。次の号で、どんな事実を語ってくれるのか、心待ちしていたのに突然のご逝去が残念でならない。これは、きつと支部設立以来の大物会員が次々に移籍している「山岳会天国支部」で「支部解散論」などが始め、名調整役の隆司さんに、お呼びがかかったに違いないと思ひ、今は心からご冥福をお祈りいたします。

(小川 務)

略 歴

- 1935年3月3日。名古屋生まれ
- 1950年 名古屋市立菊里高校山岳部に入部
- 1955年 南山大学山岳部に入部
- 1961年 日本山岳会に入会。会員番号5178
- 東海支部設立に参加、支部常務委員
- 1966年 アンデス・アコンカゲア南壁登攀隊に参加
- 1980年 ガウリサンカール登山隊に参加
- 1988年 日・中・ネ 三国エベレスト登山隊に参加

- 1991年 ヒマラヤ気象環境調査登山隊に隊長として参加
- 1998～2002年 第8代東海支部長
- 2003年より常任評議委員
- 2010年12月29日 永眠 享年75歳

柳澤 昭夫さん



(1940～2010)  
会員番号 8687

柳澤氏は二〇〇九年の夏、体調不良を覚えて検査入院をした結果、肺癌と診断された。自宅近くの入院先である安曇総合病院にお見舞いに行くと、その時はまずまずの体調らしく談話室にて一時間ほど歓談が出来た。登山研修所の行く末が心底案じ

られる様子で、同行の山仲間であるM先生に

「俺は後どの位生きられるかなあ・・・」

と、ふと漏らす言葉に思わず目頭が熱くなるのを押さえ切れなかった。

入院中の抗癌剤治療が功を奏してか、合間に一時退院をされていたが、やはり気になるのは登山研修所等のことで、その時にはたまたま意見の相違からすれ違いのままになっていた二人を心配し、早く仲直りして欲しいなあとつぶやいておられた。自身が病と闘っている最中でも登山界や仲間のことをずっと気遣い案じられていたようだ。

医療や夫人の手厚い看護の甲斐なく半年後、二〇一〇年三月二十三日早晩永眠、近年ではまだまだの七十歳という若さであった。

柳澤氏は一九四〇年正月、長野県北安曇郡池田町に生まれた。

自宅からは五竜岳、鹿島槍ヶ岳や有明山が望める素晴らしい環境で育った。一九六四年に信州大学文理学部を卒業後、高校教師となった。そして一九七三年四月富山県立山町千寿が原の文部省登山研修所（通称、文・登・研、後に文部科学省登山研修所に名称変更し現在の国立登山研修所のこと）の専門職員として赴任した。一九九八年より二〇〇二年の退職まで所長として勤務し、その後は故郷の大町博物館館長に就任した。

在任中、登山関係の役職としては、長野県山岳協会会長、日本山岳協合理事、長野県山岳センター顧問、同運営懇談会委員、文部科学省登山研修所友の会会長、日本体育協会公認山岳上級コーチ、日本山岳ガイド協会評議員を歴任した。

信大卒業後、大町山の会に入会し、後立山を中心に登り詰め、特に唐沢岳幕岩に魅せられて新ルートの開拓に汗を流し、何十本ものルートをトレースした。冬期初登攀として左岩後や大町ルートがあり、幕岩を訪れるクライマーなら一度はお世話になるピバークサイト「大町の宿」の名を高めらしたものだ。一九八〇年と一九八四年には、日本山岳会東海支部隊からガウリサンカール峰に遠征し、八四年隊では隊長として東稜の初登攀に成功した。一九九四年、インドバギラティール峰・Ⅲ峰に、文登研講師仲間と遠征し、Ⅲ峰西稜の第二登に成功した。

柳澤氏が一九七三年四月に文・登・研の専門職員として赴任した同時期に私も講師の委嘱状を手にし、彼とはそれからは最も多くの時間を山で過ごすことになり、最も多くの喧嘩をすることになった。喧嘩と言っても研修会のあり方等で、議論が一時間二時間と続くうちに熱くなり物別れとなるのが常であったが、そんな時に限り彼は職宅へ戻る途中にS氏宅に立ち寄り、「山本はこのように言っているがお前さんはどう思う？」

と、意見を求め、S氏もその都度よく付き合っていたようだが、

その後は必ず論理的に反撃をしてきたものだった。この様な二人だけの「遊び」は、延々と三十数年も続いたのだ。

柳澤氏が出した結論は、研修会では「防御」を伝えようと言うものであった。また、スキー技術にも優れておりこれを生かして山スキーの普及にも熱心に努め、研修会に科学的なメスを入れるべく各分野での専門に長けた講師を一本釣りして、研修会のあり方を構築していった。

その内容の一例として、雪崩学、凍傷や低体温症学、確保理論、体力と登山技術等を論理的に纏め上げ、枝葉的な研修会で終らないよう、山という自然界で身体に沁み込ませるための研修の場となるように構成した。

文部省（現在の文部科学省）で発行した技術書、『高みへのステップ』は山行記録や研究論文の書で、年刊では『登山研修』、『山岳遭難技術書』、『楽しい登山』等の執筆、編集に当った。

彼には、万人を惹き付けて止まない不思議な魅力があった。百戦錬磨の研修会講師達とのやり取りで、彼等の従順さを見てみると其のことが良く分かった。立山周辺の山小屋の方々、研修所所在地の芦畔寺の住民までもが研修所の事業に協力を惜しまなかつた。

二〇〇〇年三月五日、大雪山山岳部リーダー冬山研修会中に北アルプス大日岳に於いて雪庇の崩壊により大学生二人が犠牲と

なる大事故が起き、日本中の山岳界を震撼とさせた。

柳澤氏にとっては、その年の三月末日を以って研修所を勇退する矢先の出来事で、それは本当に晴天の霹靂であったことであらう。この研修会に私は主任講師として参加していたが、その責任の重大さは言わずもがななこと、後の裁判沙汰に発展した事は広く知られている。登山研修所開設以来、四十年近い歴史の中で死亡者の出た事故は初めての事であり、大変な汚点を残すことになってしまった。

事故後、行方不明となった二人の大学生捜索の陣頭に立ち、来る日も来る日も四ヶ月以上に渡り大日山谷に通う姿が目に見え付いている。それは関係者全員の切なる願いとして、一日も早くご家族の元に帰りたいと、ただひたすらに現場付近の捜索に専念するその一人としての思いの何ものでもなかった。大雨の日は除き、落石や雪のブロック崩壊に出遭いながらも毎日毎日、谷に入った。多くは語らないが、文部科学省と二人のご家族との間に立っての苦勞は、如何ばかりであつたらうと推し量られる。

『岳人』二〇〇九年備忘録の中に、「大日岳事故裁判で私が一番残念だと思ふのは、大日頭から中大日まで何百メートルにも渡って一気に崩れた大崩落という特異な現象が見逃されて、頂上付近の雪庇の構造ばかりが問題になっていたこと、リスクを排除することの難しさを実感しました」と記述している。

頼れる岳兄、岳界の大親分と言つても過言ではなく先輩や後輩からも「柳さん」と慕われていた。そんな彼との数々の山行にはこんな武勇伝もあった。

唐沢岳幕岩大町ルートの冬期初登攀でのこと。最終ピッチの一メートルハングにアプミでぶら下がっている時、アプミの掛かったハーケンがじりじりと抜けるのが下からでも見て取れた。彼は、やおらハンマーを取り出し自分の全体重が掛かったそのハーケンを叩き込み乗っ越しにかかるが、もう一步の所でまた元のアプミに下りて来てしまった。そしてハーケンが再び抜けかかってくるとハンマーで叩くこと二回繰り返してオーバーハングを抜けて行ったのだ。下から大笑いをしながら彼が上部に消えて行くのを見上げていたものだが、このような磊落な一面は彼が愛されるべき所以を良く現している。

また彼は優秀な山岳画家でもあった。その多くは後立山と剣岳であったが、我が家にも彼の力強い筆跡が飾つてある。きつと今頃は天上でもキャンパスに向かい合っているのではないだろうか。

「別れの歌」

しだれる柳の枝

葉は緑に 地を掠めてそよぎ

花は白く軽やかに 風のまま飛び去る

いつか枝はすべて形見に折られ

花はすべて尽きる日に

旅人よ 旅人よ 君は帰るか

随筆集 別れの歌（福永武彦著より）

中国詞華集の訳書本 隋時代無名詩人の「別れの歌」

（山本一夫）

木名瀬 巨さん



(1926~2010)  
会員番号 7389

かつて、連峰スカイライン計画というのがあったことをご存知だろうか。昭和四十年代も末の頃、山梨県が企画した河口湖から始まって笹子峠・大菩薩連峰・柳沢峠・雁峠から奥秩父連峰の山梨県側を貫通して、金山高原から八ヶ岳へ抜ける総延長百六十二キロと言う空前の規模の自動車山岳道路。しかもこの間に三ツ峠、滝子山、小金沢山、大菩薩峠、広瀬、金山、瑞牆山等に「緑の空間」と称する拠点開発地域を設定。本線建設費五百億、四十九年度着工、六十年全線開通を目指すというものであった。秩父多摩の山々をこよなく愛していた木名瀬さん

としてはじつとしてはいられなかった筈である。一九七二（昭四十七）年四月一五日、発足したばかりの環境庁に大石長官を訪ね計画を中止させるべく直訴したとのこと。この時、長官が完全に理解されたかどうか不安が残ったが多くの林道やスカイライン計画は開発の名に隠れた利権がらみが多いな、と話を聞いてくれたという。

この頃、田中角栄の「日本列島改造論」がベストセラーになり、富士スバルライン、北沢峠スーパー林道、立山スカイライン、石槌スカイライン等の開設による自然破壊の爪痕が各地に見られるようになってきた。自然保護運動をするなら日本山岳会でやれ、といわれた木名瀬さんは奉職していた早稲田大学の先輩教授でもある関根吉郎、吉阪隆正両氏の紹介により、この年昭和四十七年六月山岳会に入会した。そして早速、会報「山」三二八号に「山梨県連峰スカイライン」と題して、「わが国でも最も日本的な自然美を伝えている地帯が破壊されることを憂え真実を訴えたい」と長文を寄稿している。翌年彼は当然の如くに自然保護委員となった。当時の委員会は担当理事板倉勝正、委員に後に名誉会員になられた御三方の村井米子、島田巽、織内信彦と渡辺公平、武田満子そして山本良三という濟々たる顔ぶれであった。

他方、県はこの時期に連峰計画の手直しを表明、自然保護運動の高まりの中で計画の完全遂行は得策ではないと判断したよ

うでその名称が「自然公園道路計画」に変更された。しかしこの修正案は反対する自然保護運動の予先をかわそうとするまやかしに過ぎぬと見る人々も多かったようである。一九七三（昭四十八）年九月の衆議院本会議は「山梨県山岳地帯の自然保護に関する請願」を採択することを議決。これは山梨県から計画の許可申請が出された場合、環境庁の許可行政が拘束されるものとみられ山梨日々新聞は「自然公園道路に赤信号」と大々的に報じた。この年の十月、第四次中東戦争が勃発、世に云うオイルショックが世の中を襲った。当然、自然公園道路建設などの公共事業は繰り延べ、生活関連を最優先せざるを得なくなつた。

翌年の二月「山」三四四号で再び木名瀬さんは「山梨県における連峰スカイライン（自然山岳道路）計画に反対する」の一文を寄稿している。そして五月、山岳会は総会の議決を経て当時の織内副会長と山本自然保護担当理事が山梨県庁で記者会見、計画反対の意向を表明。七月十六日付で城西会長名による要望書と委員会の意見書を県知事宛に提出した。これに対し即、県より回答があり、経済状況の変化に伴い福祉優先に方針転換せざるを得ず生活関連道路を除き当面建設計画着工を見送るとの意向を伝えてきた。政治問題化しつつある時でもあり山岳会が中立的な立場から反対表明したのが県にとってはいい切っ掛けともなったようである。

木名瀬さんはその後、一九七七（昭五十二）年六月、奈良県大台ヶ原で開催された自然保護全国集會に参加されたが、現地で保護問題に取り組んでおられた田村義彦さん達との大台ヶ原教会で過ごした一夜が最も忘れられない出来事だったと回想されている。一九九五（平七）年九月、自然保護委員会から分かれたメンバーで結成された同好会緑爽会に移られてからも種々の会合には熱心に参加されていた。

物性物理学者でもある木名瀬さんは「原子力発電と未来のエネルギーの展望」、「自然と人間の共存という哲学的問題」というような難しい話から、酒場での二次会になると飲むほどに酔うほどに冗舌になり、自然保護問題からやがて話題は日本歴史に及び聖徳太子や仁徳天皇、明治天皇から五日市憲法と顔を紅潮させて話込まれるのでした。

十年も後輩の私をよく引き立ててください、二人だけの山行も瑞牆山に始まり丹波大菩薩道、餓鬼岳、飛龍山、七ツ石山、大菩薩牛の寝、秩父一ノ瀬とご一緒したのが今となっては忘れ難い思い出となっている。最後の山行は緑爽会メンバーと歩いた平成十九年六月の陣馬山が最後となった。また、「新ハイキング」誌も古くからの愛読者で昭和三十五年十一月号の「越上沢と岡房入」を始め度々投稿されていた。特に平成十年十二月号の「大菩薩小菅村の歴史と旅情」には、終戦の前年「だんだん山には行けなくなるだろうという切迫感と情熱にかられて実

現したのが小菅からの大菩薩行であった。(中略) 当時は氷川と言った終点から歩く旧青梅街道は長かったが、言い知れぬ情緒がある。」とあり、いかにも秩父多摩好きの木名瀬さんらしい一面が伺える。

奥様によるとご家族でよく多摩丘陵、奥武蔵等を歩きご息子が高校、大学の頃は北ア、南ア、奥秩父に冬はスキーと楽しまれたそうでやさしい父親ぶりが眼に浮かぶようだ。

木名瀬さんは一九二六(大十五)年十二月一日の東京生れ。都立一中、一高理科甲類、東京大学理学部物理学科を出られ日本放送協会に就職、技術研究所極超短波研究室に勤務されたが三年後、東大旧制大学院に入学され卒業後は早稲田大学理工学部で教鞭をとられ昭和三十七年三月にはチタン酸バリウムの誘電率の理論で東大から理学博士の学位を授与された。昭和四十二年四月早大教授平成九年名誉教授に就任。この間、日本物理学会誌編集委員長、Journal of the Physical Society of Japan 編集委員長を歴任。平成十九年、秋の叙勲では瑞宝中綬賞を受賞された。

東日本震災を経験した我々には、かつて木名瀬さんが緑爽会の会合で今後の原発につき「大型炉を小型炉に切り換える。原子炉の増設をやめ、その分は風力、バイオマス、太陽光、効率増進、電力節約の発展をはかる。電力会社の家庭向き電灯部門は太陽光による自家発電に切り替えていくべき」等の提案を

されたことが思い返される。

二〇一〇(平二十二)年二月二十三日、胸部大動脈破裂により逝去された。享年八十五歳。同年三月 従四位に叙せられる。心からご冥福を祈ります。

(松本 恒廣)

## 田辺 治さん



(1961~2010)

会員番号 11805

田辺治は、私の目の前に忽然と現れて、疾風のように駆け抜けて去っていった。一体なぜ、そんなにまでして田辺は、急がねばならなかったのでしょうか。その答えは、田辺の凄まじいヒマラヤの登攀経歴を見れば窺い知ることができる。田辺にとつ

ての万物の根源は、山であったからであつて、その山に召された必然性ともいえる宿命だったのであろう。

私は、田辺という男におよそ煩惱という概念はないのではなにかと常日頃思い続けていた。田辺は、営みのすべての基軸を山に据え、山と縁のない存在は、無視し続けていたといつてもよい。私生活ですらそうであつたと思う。田辺の結婚披露パーティーに招かれた時の挨拶は、いまだに鮮明に記憶に残っている。田辺は、本当は、結婚はしたくなかつたと言いつつた。なぜなら相手を悲しませる時が来るからであると。それに応じたともみ夫人も、いつかそうなる日の来ることを覚悟していると述べている。華やいだパーティーの席上だったので、参加者は軽いジョークと受け流したのかも知れないが、私には、そこ迄言い切る田辺の強烈な山に賭ける執念の凄まじさを思い知つたのである。

結婚後の田辺の生活も以前と変わらず、すべてが山を基盤であつた。生活の糧は、ガイド業で得ていた。生活の糧というよりヒマラヤへ行くための資金稼ぎといつた方が正しい。従つて、日々の生活は実にシンプルであつた。ガイドで稼いだ資金で毎年のようにヒマラヤに出掛け、年によつては二度、三度という時もしばしばであつた。

私のような煩惱の固まりのような男から見ると、田辺は、まさに求道者でありセイントなのである。だからといつて田辺

は、決して奇人、変人の類ではない。ガイドとしても一流の評価を受けていて、田辺ファンも一杯いて、ガイド業も多忙であつた。講演の依頼も多く、聴衆の反応も、もつとこつとい男かと思つたとか、本当にあの人だ田辺さん。などとの声が届く。誰とも気軽に接し、笑みを浮かべて話す態度からは微塵もヒマラヤに命を賭している男の姿は想像できない。今年の一月二十九日、名古屋で開かれたお別れ会と偲ぶ会には、全国から六〇〇名余りの参列者を得た。田辺の手柄を如実に示していよう。

そのセイント田辺と俗界の私との唯一の接点は、酒であつた。田辺は、かなりの飲兵衛で酔いが回るとすつかりご機嫌になりこの時ばかりは俗人と化す。一緒にしばしば痛飲した。でも話題は、山ばかりで俗世間の話しに転じた記憶はない。

田辺は、愛知県立刈谷高校を卒業して信州大学へ進学する。田辺の山登りは、この高校時代から始まる。信大志望の動機は、言うまでもなく山岳部に入部して山に登りたかつたからであつた。

一九八二年大学四年生の秋、信大のガネツシユヒマール山峰隊に参加。これがヒマラヤ初見参である。信大卒業後、一旦地元の商品メーカーの研究開発部門に就職する。次いで一九八七年のチベット・ラブチエカン隊に参加。これを契機に食品会社を退社。以後は、一瀉千里にヒマラヤ登山に走る。その華々しい田辺のヒマラヤ登攀歴は、ここでくどくどと披瀝するまでも

なく別表のごとく凄まじい。年を追う毎にエスカレートしてゆく様子が窺える。そして昨年のポストモンズーンのダウラギリI峰が、田辺の最後の山として墓碑銘に名前が刻まれることになった。

ジャイアンツも九座であと五座を残していた。このことも田辺と飲んでいた折によく話題にした。十四座を目指すなら全面的にバックアップするとの私の申し出に対し、自分は、十四座登頂は目的としない。結果としてそれが付いてくるならそれはそれでいい。つまりその為だけではやらないというのである。

私は、東海支部を通して田辺の計画を四度支援した。K2のニュールートからの登頂と冬のローツェ南壁の初完登である。この四度の登山隊は、すべてが大遠征隊であった。莫大な物量と資金を要した。特に冬のローツェ南壁は、日本最後の大遠征隊とも称された。その是非が問われたのも事実である。田辺の登山は、いかに成功に導くかに主眼が置かれ、登るスタイルにこだわりがなかった。特に安全には、万全の策を講じていた。その為ならシエルパの手助けも、酸素やフィクスト・ロープの使用もいとわなかった。一方でアルパインスタイルも実践していて、対象の山への臨機応変に対応するタクティクスを展開していた。

私は、前述のように田辺とのコンビで四度ヒマラヤに登山隊を送ったが、その都度ときどき、はらはらさせられることがあつ

た。それは、出発直前の隊員会議である。田辺は、必ず肉親の同席を求める。その席でヒマラヤ登山には危険はつきものである。死亡事故が起きることを覚悟して欲しいこと。併せてそのことについての同意書を書いてもらうのである。その替わり、保険をしっかりと担保することを強調するのである。

立场上同席している私は、目のやり場に困まる。ところがこのことに異を唱える者は、誰一人現れない。そこに田辺のリーダーとしての強い意志、つまり絶対安全に全員が帰ってくるのだとのコンセンサスを隊員に浸透させていたのである。田辺が隊長を務めた隊では、一件の死亡事故も起きていない。

私自身は登らない。それなのに田辺を支援し続けたのには、訳がある。それは、私にかすかに残っているヒマラヤへの憧憬と、血の滾りなのである。その思いを田辺に託しているからに外ならない。私としても、田辺には、もつともつとやってもらわなければならぬことが、それこそ山ほどあった。

昏迷と怠情を極める現代の日本社会の中にあつて、自分のアルケーこそ山と定め求道者の生き様を晒す田辺のような男は、二度と現れないだろう。貴重な存在を失ってしまった。残念の極みである。享年四十九才。余りにも若過ぎる。

(尾上昇)

## 田辺治のヒマラヤ登山の足跡

1961年1月4日生まれ

1982年 秋 ガネッシュヒマールⅢ峰（現Ⅱ峰）（7111 mネパール）

1987年 秋 ラプチェカン（7367 mチベット）初登頂

1989年 秋 チョモランマ（8848 mチベット）北壁

1990年 夏 ガッシャーブルムⅡ峰（8035 mパキスタン）登頂

1991年 春 カンチェンジュンガ（8586 mインド）北東稜

1991年 夏 コルジェネフスカヤ（7105 m）、レーニン（7134 m）、コムニズム（7495 m）隊長、3座登頂

1991～2年冬 エベレスト（8848 mネパール）南西稜

1993年 夏 ブロードピーク（8047 mパキスタン）隊長、登頂

1993年 秋 チョーオユー（8201 mチベット）登頂

1993年 冬 エベレスト（8848 mネパール）南西壁、冬季初登攀 ハットトリック

1994年 秋 ギャジカン（7038 mネパール）登攀隊長、初登頂

1995年 春 マカルー（8463 mチベット）東稜から北西稜、初登攀

1996年 秋 ラトナチュリ（7035 mネパール）登攀隊長、初登頂

1997年 夏 K2（8611 mパキスタン）西稜から西壁、隊長、初登攀

1998年 春 カンチェンジュンガ（8586 mネパール）北壁

1999年 夏 アッシニポイン（3618 mカナダ）北壁、副隊長、登頂

2000年 春 ガネッシュヒマール峰（7111 mネパール）登攀隊長

2001年 秋 チョーオユー（8201 mチベット）隊長、登頂

2001年 冬 ローツェ（8516 mネパール）南壁、隊長

2002年 夏 ガッシャーブルムⅠ峰（8068 mパキスタン）登頂

2003年 秋 シシャバンマ中央峰（8008 mチベット）隊長、登頂

2003年 冬 ローツェ（8516 mネパール）南壁、隊長

2005年 夏 ナンガルバット（8126 mパキスタン）登頂

2006年 秋 シシャバンマ主峰（8027 mチベット）隊長、登頂

2006年 冬 ローツェ（8516 mネパール）南壁、隊長、冬季初完登西峰登頂

2009年 秋 ネムジュン（7139 mネパール）北西壁初登攀

2010年9月28日 ダウラギリⅠ峰（8167 mネパール）の登山中雪崩で死亡

## 熊谷 義信さん



(1934~2010)

会員番号 5123

山に熱中し、良く後輩の指導にあたられた。戦後の混沌とした時代であった。

高校を卒業して間もなく、若い卒業生を集め、一九六三年万座に山岳部の山小屋を作り、この小屋を中心に辺りの山で、山登りやスキーを楽しんでいたようである。この山小屋こそ、熊谷君の登山の原点であり、建築家としての第1作に、将来の萌芽を見ることが出来る。

高校卒業と共に、日本大学工学部建築学科に進み、ここで更なる研鑽を重ねると共に、山登りに精進されたのである。私とは建築学科でも山岳部でも一年後輩でありながら、一緒に山に登ったり、建築についての難しい話をしたことはあまりなかった。それは建築については専攻する分野が違ったからであり、山岳部では部員が七十名以上もいたからである。

《山の足跡》  
最も親しい山仲間の人、熊谷義信君が、病のため平成二十三年六月、黄泉の国へと旅立ってしまった。私は彼を含めて何人の山の仲間を失ったことか、老いてますます淋しくも悲しいことであった。

熊谷君は、一九三四年八月、横浜で生まれ、横浜で育った。俗に言う浜っ子である。一九五〇年、地元の神奈川県立神奈川工業高等学校建築学科に入学すると、ここで山岳部を作り、登

この頃の日大山岳部の規律は厳しく、五大厳守事項というのがあって、山行は勿論、日常生活でも厳しい規律があった。当然のことながら、熊谷君の山登りは厳しく妥協を許さなかった。このため、後輩からは鬼軍曹と言われていた。この姿勢は彼の生涯を通じて揺るぐことなく、このためかどうか、多くの仲間から信頼され、彼を慕う仲間は多かった。

学生時代、熊谷君との山行で思い出されるのは、剣での春山合宿を終えての帰り、弥陀ヶ原の雪洞の中から、君と石坂さんが出てきたときの驚きは、前後のことは忘れたが、今でも強い印象として思い出すことが出来る。同じような思い出は、冬の五竜の合宿でもあった。この時も君は石坂さんと一緒だった。この頃の日大山岳部は、富士山で多くの仲間を失い、いかにして山岳部を再建するのか、五里霧中だった。

こんな中で、マナスルから帰り、油の乗りきった石坂さんは、山岳部再建のために、忙しい仕事の合間をぬって学生の合宿に参加され、だらしのない山岳部の再建を君に託し、個人的な教育をしていたのかもしれない。

この他、富士山の遭難では、その後始末のため、ずっと一緒に山に入り、亡き友を探したときのこと、強く印象に残っている。

そして卒業してからは、君と宮原君と三人で、ヒマラヤに行こうと相談し、石坂さんに隊長をお願いしたヒマラヤの旅も忘れることは出来ない。今のように誰でもが簡単に外国に行けるという時代ではなく、日本を出国出来たら五〇%以上成功とい

う時代だった。大変な苦勞をさせられたが、今となつては楽しい思い出である。

この時、何事に対しても雑草のように強靱な君が、食器はシエルバの出されたものを必ず自分でもう一度拭いてから使用すること、加えてシエルバの作った食事には極端な好き嫌いがあり、まったく手をつけないなど、その徹底した潔癖性を見たとき、私達と違った山登りをする君を発見し、驚いたものである。

#### 《建築家として》

先に触れたように、私達は同じ大学の建築学科に席を置き、ここでも熊谷君とは、先輩と後輩だった。但し君は建築の本流であるデザインを学び、いつも陽の当たるところに居たのに対し、私はその裏方の構造力学を専攻した。

このため、学問上の交流はほとんどなかったが、仕事の行き帰り、君はよく私の研究室に顔を出し、お茶の水辺りで酒を飲んだことが思い出される。このとき君はいつもオンザロックで、私は泥臭い日本酒だった。

この頃東京はオリンピック施設の建設ラッシュで、君は丹下健三先生に請われて、先生のお仕事を手伝っていたとうかがっ

ている。

このあと君が国建築事務所に勤めていたとき、仲間の宮原君が、エベレストの展望台ともいふべきシャンボチエに、世界で最も高い所にホテル・エベレスト・ビューを建てるというので、その建設にかかり、一九七〇年、建設開始と同時にネパールに入り、一年以上現地に滞在し、あの立派なホテルを完成させたのである。ホテルのデザインは勿論、構法、施工技術などを含めて、この作品が君の業績として高く評価されたことは、我々の誇りでもあり、嬉しい限りである。

そして、この仕事が一段落して帰国すると、渋谷の東急百貨店の移転計画の他、各地のイトー・ヨーカ堂の出店計画にも携わったとも聞いている。

これらの仕事が縁で、君は世界の各地でいくつかの仕事を手掛けられた。この中で、デンマークのハンス・ドール建築事務所時代、ベオグラードのオペラハウスの設計をされたことは、特筆されよう。

このあと再び丹下先生に迎えられ、サウジアラビアの都市計画に携わるなど、多くの仕事に関係されたが、互いに自分達の

仕事について語ることなく今日に至ってしまったことはただ残念でならない。

これらとは別に、君が情熱を傾けた仕事として、一九七〇年代中頃に、本会名誉会員川喜田二郎先生と一緒に設立した『ビマヤ技術協力会』は、ネパール山村の自立的開発事業として高く評価され、これを『アンナプルナ山域自然保護活動』として纏められたのである。又、これとは別に、一九七八年には、丹下先生と共に進めた、『ルンビニの釈尊生誕地聖域総合計画』では、仏教遺跡の保存を、ネパール側の立場で全日本仏教協会と協議されるなど、これ等は君の高い見識をかわれての仕事と思う。この他、カトマンズ随一の五ツ星ホテル、ドウワリカの設計を手掛けられた。このホテルは、ネパールの伝統文化を取り入れた、熊谷君独自の美学に基づくホテルとして、ネパール政府の迎賓館にも使用されるなど、ここにも立派な作品を残している。

#### 《還暦をむかえて》

熊谷君は、還暦をむかえた頃から再び山とスキーに熱中し、困難な山へと向かうようになった。スキーでは横浜の市民スキー大会に参加し、入賞して嬉しそうに電話をいただいたこともある。又、登山では毎年のように正月、大きな荷物を背負い、

一人で冬の山に登っていた。どのような心境の変化なのか、こんな山の中から、新しい境地に立った人生観などについて、幾度か手紙をいただいた。

この頃の手紙を読み返してみると、既に病魔と闘っていたのか、二〇〇二年一月、塩見岳に登ったときに戴いた『一つの終焉―山登りに終わりはないけれど―』という手紙では、自分の体が病に蝕まれているようなことが書かれていた。

一方熊谷君は、川喜田先生が初代会長を務められた社団法人日本山岳協会の理事として、周年事業としての創立30周年、同50周年事業では、これら事業を立派に成し遂げられただけではなく、これ等も含めて一九七〇年代から二〇〇八年まで、四十年近くも理事として、同協会発展に深く寄与されたのである。

又、日本大学山岳部では、関東の大学山岳部OBで作るメトロ会の幹事としても仕事をされていたが、持前の純粹さと高い理想から、ここでの仕事は決してうまくはいっていなかったようだが、山登りにおいては、彼のような情熱と純粹さこそが必要であると思う。

昨年の正月、医者から余命六ヶ月と言われても、日大山岳部

のこと、そして手掛けた仕事の事が頭から離れなかったのであろう、忙しく仕事をされていた。『熊谷、あんまりかつかするなよ』、『まず早く治せ』ということもあったが、これについては真剣に聞いてもらえなかった。

こんな中で、彼は最晩年の仕事として、横浜の都市計画コンベの第一次審査に入選した他、ユネスコの世界遺産として、タイとカンボジアの国境に立つクメール様式の寺院、『プレア・ピヘイア』の保存、修復計画では、この寺院を中心に周囲一〇〇キの遺跡公園を造るという壮大な計画を持っていた。これは、この遺跡が国境線上にあり、両国の紛争が絶えないため、熊谷案はここに緩衝地帯を作り、景観と環境を守りながら、両国住民の経済的自立を目指すというものであった。

そしてもう一つは、宮原君と進めているボカラのサランコットの丘に立つホテル計画である。これはホテルから北にマチャブチャリーを、南にボカラの街を見下ろす景勝地に立つリゾートホテルの計画である。カンボジアにしろネパールにしろ、これらは、熊谷君の建築家としての仕事であるが、後年の熊谷君の持論は、個々の建築というよりも、都市計画の領域に踏み込み、『自然景観の保全と伝統技術の継承』、更には自然に対する『畏敬と愛情』から、その先の環境保全に力をそそぐものだった。

どうしてもホテル建設の現地を見たいというので、「気をつけていけよ」という私に、「平山さん、まだ死ねませんよ」といった言葉が今でも耳に残っている。「熊谷元気だな」というだけで私にはそれ以外何も出来なかった。

昨年四月二十八日、現地へ飛び、帰口後病状は悪化し、六月十九日、横浜や、カンボジア、そして大好きなネパールの建築を夢み永眠されたのである。壮絶な死といえるだろう。―合掌

（平山 善吉）

## 吉川 尚郎さん



(1934~2010)

会員番号 5099

わたしにとって、かけがえない仲間ひとり、吉川尚郎が死んだ。マナスルの初登頂のころ大学山岳部に所属し、ともに夢を語り、競い合った仲である。享年七十五、余命を告げられながらの、間質性肺炎との闘いだった。

昭和二十八年、私は憧れの早稲田大学山岳部の門を叩いた、当時、ヒマラヤの八〇〇〇峰十四座は、アンナブルナのみがその頂上を明け渡していたが、残りの十三座が未踏峰であった。この年、百名を越える新人が大いなる夢と希望を抱いて入部した。大阪の高校を出て、いの一歩に入部手続きを済ませたわ

たしは、あとから入って来る同期の部員を興味深く見ていた。

数日後、小柄だが骨格のがっしりしたイケメンの新人が、挨拶もなしに部屋に入ってきて、慣れなれしく上級生と山の話をしてきた。「僕も入部希望者ノートに記入しなければいけないのですか」と言いながら氏名、住所、保護者名、出身高校、経験、所有する個人装備を記入していく。

日を経ずして分かったことだが、吉川は早稲田高等学院の出身者で、在学中ラグビー部と山岳部に所属、大学山岳部の合宿にも何回か参加の経験があった。わたしも同じように高校時代に山岳部とラグビー部の部生活を送ってきたので非常に親しみを覚えると同時に、よい意味でのライバル意識が湧いてきた。部誌でたしかめると、三年前の昭和二十五年の新人歓迎会に当時の新人である今村俊輔さん、鬼頭万太郎さん、八島康さんらの先輩に混じって吉川尚郎の名前が見られ、更に、夏の箱根仙石原の体力合宿にも参加している。

入部間もなくの六月、川崎市に在る東芝工場ラグビー部との試合に一年生ながら吉川とふたり、出場の機会を得る。前半は0対0と互角に戦う。後半、東芝にトライを許し3点を与える。試合終了間際、吉川がスクラムからのこぼれ球を拾い上げ十五メートルほど独走、相手の強烈なタックルを受けながらフォロースタートしていた私に正確なパスを出す。私はゴールに飛び込んだ。試合はそのまま3対3の引き分けに終わった。

試合後の懇親会で振舞われた濁酒で私は酩酊したが、吉川は平然と飲みながら、「あの時フェイントを掛ければ、相手を振り切って俺がトライ出来た」と悔しそうに言う。身体に似合わず、減法向こうつ気の強い、負けず嫌いの、しかし頼りになる仲間だ。

多すぎるほどいた新人も秋山合宿を迎える頃には七、八人に減っていた。地方からの出身者は私だけだった。週末になると決まって吉川は代官山の自宅に私を食事に誘ってくれた。卒業後も上京の際には必ず「松浦、今晚俺の家に泊まれよ」と誘ってくれ、夜遅くまで山の話をしたものだ。

新人の秋の十月、学院のグラウンドで体育会の運動会が行われ山岳部もこれに参加した。グラウンドをスタートして護国寺・池袋―学習院下―早稲田の5マイル競争だ。新人は全員参加。内田泰男先輩の後をわれわれが追いかける。わたしは靴の調子が悪く遅れをとる。護国寺辺りで思い切つて靴を脱ぎ捨て、裸足で走り出し、学習院下でやっと追いつく。内田先輩と吉川とわたしの三人の競り合いがゴールまで続く。一―三位はスキー部のノルディックの選手で四―六位を三人で分ける。監督だった関根吉郎先生の満面の笑みと対照的に、六位になった負けず嫌いの吉川の悔しそうな顔が忘れられない。

昭和三十一年二月―三月。吉川をリーダーに威冬の壘岩尾

根より滝谷の登攀へとキャンプを進めた。当時、「ヒマラヤ」を合言葉に、より困難な登山を求めている山岳部にとって最高の計画であった。C3を瀧沢岳のコルに建設。第一次アタック隊として宇田川允敏、菅塚が第四尾根に向かうもCカンテで時間切れ。翌日、第二次アタックを吉川とわたしで行うことに決まる。わたしにとっては第四尾根を一日で登りきることは大きな目標であった。BC建設以来、ザイルのトップに立つのは初めてで、それまでのモヤモヤした気分は嘘のように消え登攀意欲が湧いてくる。ザイルのトップという言葉に強い魅力を感じていた。

一次隊が引き返したコル2まではなんら問題もなくかなり早いペースで登る。問題のCカンテに取り付くも八本爪のアイゼンではスタンスが思うように取れない。ハーケンを打ってスタンス替わりにし強引に吊り上げを試みるが一向に身体は上がらない。振り向くと驚いたことに吉川は写真を撮るのに夢中でザイル捌きなどお構いなしだ。やつとこのことで登りきる。後に内田先輩がCカンテにへばり付く此の時の写真を見て盛んに褒め称えた。写したのは確かに吉川だ。でも、手足に筋肉の硬直を感じながら岩壁に張り付いているのはわたしだ。

午後になって天気はどんどん悪くなって来た。残念だがDカンテの登攀を諦め、巻くことにする。しかし、第四尾根もあとわずかというところ、ガリーの出口で完全に行き詰まってしま

う。思案の末、身軽な吉川がわたしの背中、肩、頭を足場にしてオーバングを乗り越越える。いくらサブ・ザックをクッション替わりにしていてもアイゼンで頭を踏まれては堪らず悲鳴をあげた。五時三十分ついに稜線に飛び出す。Dカンテこそ登れなかったが第四尾根をスノー・コルから一日で登りきることが出来た。その年のWACの積雪期登山は、計画通り滝谷の第二、第三、第四、第五とドーム中央稜を無事登り終え、君はチーフリーダーの責任を見事に果たした。

一九五三年五月二十九日、エベレストはイギリス隊によって登られた。ニユースは世界を駆け巡り、わたしは目標を失った思いだった。高さにこだわるわたしは、エベレスト抜きの登山は考えられない、と吉川に言うのと、彼は「エベレストだけが山ではない。他にもっと困難で、魅力のある、本当に登りたいと思う山は幾らでもある」と応じた。

卒業して数年、ペルー・アンデスの遠征が持ち上がった時、吉川から参加の誘いを受けた。しかしわたしは依然として高さへのこだわりを持ち続けていたので断った。後日、ネバド・アルパマヨの写真を見て、彼の言っていた困難で魅力のある本当に登りたいと思う山があることが理解出来、あの時遠征隊に参加しなかったことが悔やまれた。吉川たち六人の仲間は、世界一美しく鋭いといわれたアルパマヨのほか三つの未登峰に登

り、自信をつけて戻ってきた。

ヒマラヤ初見参のローツェ・シャール登山は一九六五年に実現した。早稲田の十一人が険しい南西稜から未踏の八三八三メートルに挑んだ。七〇〇メートルを超える急斜面で事故が起きた。雪崩とともに落ち意識を失った成川は、しかし、ザイルの先で生きていた。救出作業は困難を極めた。急峻なルンゼから引き上げたものの、下のキャンプへの収容は捗らず、作業二日目も難航して夜を迎え、ビバークを強いられる事態となった。現場の井口昌彦はこのさいアタック用に用意したテントを使おうと考え、下のキャンプにいた吉川隊長にお伺いを立てた。

「駄目だ。アタック・テントを使っちゃ絶対駄目だ」。無線機から返ってくる吉川の返事は「ノー」だった。意思の固さが伝わる強い言葉だった。アタック・テントを使ったら、もうこの登山は終わりだ、撤退するまでだという。吉川はこのような状況にあってもなお、頂上アタックの強い意思を持っていることを隊員に伝え、ともすれば弱気になりがちな皆の心を奮い立たせようとした。

成川の遭難事故発生から十一日目にしてやっとC2に収容、ほっとしたのも束の間、今度は村井の意識が突然無くなり昏睡状態に陥る。わたしは、傷ついた成川と村井の二人を一刻も早くBCに下ろして万全の治療を施し、改めて頂上を目指そうと

考えた。これに対し隊長である吉川は、成川の凍傷はこれ以上悪くはならないだろうと診断したドクターの意見や、成川自身が発頂計画続行を懇願したこと、二人をBCへ収容するのに必要な日数、隊員の更なる疲労、残りの食料、燃料等を熟慮のうえ決断した。

「我々はローツェ・シャールを下りに来たのではなく、登りに来ているのだ、まだ登攀を中止する時ではない。少なくとも七三〇メートルの東南稜上に出て頂上までのルートを確かめるのだ。これは隊の義務、責任だと思う」。私は、この時ほど吉川の意思の強さを感じたことはなかった。もしも二人の救助作業を優先させていけば、再び態勢を立て直してアタック態勢に入るとは、時間的にも体力的にも出来なかっただろう。矢印は再び頂上に向けられた。しかし頂上への道は、険しくも遠かった。

登山が終わり二人で入ったカルカッタの酒場で、吉川は一言「ありがとう」と手を差し出した。私は頂上を目の前にしながらアタック隊の責任を果たせなかったことを詫言じた。

二人で杯を合わせた。一方に苦い思いがあり、一方で、やれるところまでやったという充実感があった。結果として成川と村井のふたりをいのちの世界に繋ぎとめ、登頂への執念を燃やすことができたのは、ひとえに、吉川の果敢にしてすぐれたリーダーシップによるものだった。

ローツェ・シャル登山の翌年一月、吉川は朝日新聞の後援で実現した深田久弥氏の「シルクロード学術踏査隊」に隊員（ムービー・カメラマン）として加わりヨーロッパを横断、トルコとソ連領トルキスタンを巡った。深田氏は、「小柄ながら精力的で、行動は敏捷果敢、決断力に富み融和力があつて、なるほど二度の大役を果たしたのもゆえあるかなと感心した」と評している。

日本山岳会は一九七〇年、エベレストに登山隊を派遣することを決め、隊員を募っていた。私は是非とも参加したいと思つた。その意向を伝えた時、吉川は「俺も行きたいがローツェ・シャルの登山許可は多分、七一年には取れると思う。二年続けて会社に迷惑を掛ける（休む）訳にはいかない」と、少しの迷いもなく再度のローツェ・シャル挑戦を選択した。

エベレスト登山隊でわたしは、さいわい第一次アタック隊員に選ばれ植村直己君と頂上に立つことが出来た。手が届きそうな距離に、ローツェからローツェ・シャルに連なる鋭い稜線が見えた。次の目標として、登れなかった山を、目に焼き付けた。

残念なことに帰りのキャラバンでローツェ・シャルが登られたことを知る。わたしたちと同じころ、初登頂に成功したのはオーストリア隊だった。ルートは早稲田隊と全く同じで、わ

れわれの残した、というより撤収し切れなかったザイルに随分と助けられたと言っていた。

彼とのヒマラヤ登山から四十五年も経った。ローツェ・シャルをともした十一人の仲間のうち、吉川が、いちばん先に旅立ってしまった。さびしい。

（松浦輝夫）

## 寺本 滉さん



(1937~2010)  
会員番号 4603

二〇一〇年一〇月二十九日早朝、寺本滉さんが肺がんのため逝去されたとの連絡が入りました。たまたまその日は、兵庫県

立神戸商科大学山岳部OB会（稜線山岳会）の有志九人で小川集大先輩（学部六回）の関西棋院八段昇段のお祝いの昼食会を予定していました。寺本滉さんは二年前からの闘病の杞憂からか、たつての希望で豪華な料理を準備させておりました。あまりにも早い（享年七十三才）訃報に、稜線山岳会にとつて偉大なブレインを亡くした悲しみで全員が言葉を無くしました。

寺本さん（学部九回）は、県立神戸高校山岳部時代から活躍していました。一九五五年、神戸商科大学に入學と同時に、好日山荘の島田眞之助氏を介して知り合った前田浩氏（神戸山岳会当時会長）や津田周二氏（日本山岳会当時関西支部長）のすすめで、小川集大さん（神戸山岳会にも所属）を頼つて山岳部に入部されました。戦後、停滞さみであった山岳部で年間一〇日以上での山行を行い、ほとんど素人ばかりの部員にから登山技術を指導し、総数二十四名の大所帯に発展させました。学生時代から日本山岳会に入会し、夢はヒマラヤ初登攀を目指し、冬季山行は主に北アルプスの縦走か、極地法による登山を実践されました。一九五八年三月、北アルプス全縦走を計画して、リーダーとして本隊四名で槍から剣岳へ二十四日間で踏破しました。その山行に一年後輩として私も同行させて頂き、寺本さんから、自然に対する謙虚さ、卓越した企画力、行動力、実行力、登山技術の総てを教えてもらったのです。

一九五九年三月、寺本さんは神戸商科大学を卒業し、家業を

引継ぐため神戸駅の駅弁棚淡路屋に入社。駅弁から仕出し弁当へ事業を發展させながら、一九六二年ブータン・ヒマラヤ遠征計画を立ち上げました。しかし、この計画は時期尚早で実現しませんでした。

一九六九年、寺本さんは藤林佐太郎（神戸高商二回）先輩と川喜田二郎氏を交えて、二回目のお忍び訪日中で、京都の都ホテルに滞在されていたブータン王妃（当時）と謁見、ブータン・ヒマラヤ入山許可を願ひ出しました。この謁見がブータンにのめりこむ端緒になったようです。

一九六九年八月～一〇月、寺本さんは実行委員長として初の神戸商大山岳部遠征隊を西部ネパールのパトラシ・ヒマールに派遣しました。伊藤稔助教を隊長に、隊員（山岳部OB一名、現役三名）はカンデ・ヒウンチュリ南峰（6500m）に登頂を果たしました。その時の登頂隊員に兵庫県山岳連盟元副理事長の井上二郎君（学部二〇回）がいました。

一九七四年八月～一〇月寺本さんは、インド北西部ヒマチャル・ブラデツシユ州チャンバ地方の未踏峰、テントピークに遠征隊の隊長として挑みました。ベイスキャンプから指揮をとり、六名の隊員（山岳部OB二名、現役四名）により北峰（6020m）登頂を成功させました。これらの遠征を通じて多くの後輩を岳人に育てました。

一九七六年、寺本さんはシルクロード踏査隊の実行委員長と

して、神戸商科大学山岳部OBに、少し無理をすれば参加できるヒマラヤ・トレッキングのようなプランを提供する目的で、現役は前後の時間と労力を要する手続きなどを分担し、ロング・ランにより耐久力に挑戦、見聞をひろめ、涉外能力の開発をさせる。OBは、各中継点（二週間ごとに各国首府の一流ホテルを指定）で交代し、自分のヒマと体力に合せて参加する。普通の海外旅行では通らないところを通り、時間も気ままに、遠征気分も味わえるプランを立案されたのです。トルコのイスタンブールからインドのボンベイまで兵庫トヨタ（株）滝川博司社長からクラウン二台の提供を受け、総数一六名が一〇六日間かけて走破を成功させました。私も寺本さんとアフガニスタンのカブールからカイバル峠を越え、パキスタンを経由してインドのデリーまで二〇日間行動を共にさせて頂きました。

一九九〇年は、神戸商科大学創立六十周年、新キャンパスへの移転というおめでたい年であると同時に、神戸、天津友好港提携十周年。この記念すべき年にあたりますので、寺本さんを実行委員長としてシルクロード走破パートⅡが実行されました。貝原俊民兵庫県知事を総隊長に、当時、神戸商科大学淡水会会長で榎ダイエー会長兼社長の中内功氏を名誉隊長に、陳舜臣氏を実行委員会顧問に迎え、再び兵庫トヨタ（株）からランドクルーザー二台の提供を受けました。協力頂いたこれらの方々

航海に合せてランドクルーザーを搬送させ、天津から北京、西安を経由してタクラマカン砂漠の天山南路を通り、クンジュラブ峠を越えてパキスタンのラウルピンディまで一七日間、参加総数三十一名でした。私は、酒泉↓敦煌↓トルファン↓ウルムチの間を寺本さんと共に、中内功さんに随行されていた、田邊壽氏（日本山岳会元副会長）とも一緒に過ごさせて頂きました。

一九八〇年一〇月に寺本さんは、長島隆氏、前田浩氏、片山英一氏（ブナを植える会元会長）、権藤眞禎氏（神戸市立王子動物園元園長）、小川集大先輩ら九名のパーティと共にブータンに入国しました。ツェルカンの麓までトレッキングし、そのとき接見した政府高官と友好協会設立を合意しました。

一九八一年一月、神戸ブータン友好協会を設立し、長島隆氏が会長に寺本さんが事務局長に就任されました。その後、毎年のようにブータンへ旅行して、ブータンとの交流を深めました。

一九八七年二月、浩宮皇太子殿下のブータン訪問に先立ち、ブータンの資料を作成して献上しました。寺本さんの、神戸ブータン友好協会の功績については、稜線山岳会のホームページの寺本さんの寄稿から抜粋させていただきます。

「余命幾ばくもない小生も、十何回にふんふんとするブータン訪問旅行の最後の締めくくりとして、二〇一〇年の春、極秘裏に行っていました。中略。

極秘とはいえ私が日本人初の会員であったRTGC（ロイヤ

ル・テンプー・ゴルフクラブ)に一寸立ち寄ったところ、旧知の五人の現職大臣や王族と会い次々に挨拶していると、倶楽部の支配人に見つかり、彼の携帯電話で各所に情報が流れ、大騒ぎになりました。中略。

入国後にトライしたアポとしては、神戸と縁は深いが評価の分かれる故ダウ・テェリン外相の夫人との会食、元閣僚、侍従長レキ氏のチミー夫人との会食、先日、現総理の甥と結婚した現王様の又従姉チューキーらとは楽しい時間を持つことができました。中略。

このように多くの思い出を反芻しながらパロから機上の人となつたわけですが、思いがけず、出発間際に、先王の侍従長職を全うしたトリーが見送りに空港まで駆け付けてくれたのが嬉しかったです。実父に続いて二代にわたり王の側近として仕えた彼が今、先王の讓位と共に、重任を終えた達成感に安らぐ表情を見て、私のブータンも彼と同様に先王の時代で終わったのだと納得しています。稜線山岳会ブータン・ヒマラヤ遠征の真夏の夜の夢も幕となりました。

一九六四年、岐阜県新穂高温泉の再奥部に神戸商大山岳部奥飛驒ヒュッテが寺本さんの発起で建設されました。数年前に大改修を行い、山学部OB達の憩いの場として利用されていますが、一般にも公開に踏み切りました。しかし、寺本さんが改修後一度も利用されてなかつたのは心残りです。

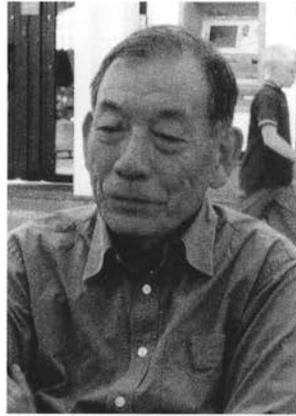
一九九七年には寺本さんから、「六十歳代でも毎年継続して続けられる年賀状の写真山行として、西暦年登山をやろう。」とさそわれました。栃木県の鋸山(1998m)を皮切りに、長野県の破風岳(1999m)、山梨県の行田山(2000m)、二〇〇〇年の秋には、群馬県の湯の丸山(2101m)に一緒に登りました。その後、膝を痛められたために、寺本さんはこれが最後の山行になりました。

寺本さんは、また大変多彩な趣味の持ち主でもありました。その中のひとつにスキューバダイビングがありました。毎月のように沖繩や海外の海に出かけ「これは山に通じるものがあり、膝が悪くても続けられる。」と楽しそうに語っていました。亡くなられる一週間前まで海外の海に行かれていました。

寺本さん、登山の指導と共に日本山岳会に推薦頂き、永い間、兄弟の様な濃密なお付き合いを頂きました。本当に有難うございました。安らかにやすみ下さい。さようなら。

(藤本 三樹雄)

## 廣瀬 幸治さん



(1930~2010)  
会員番号 4088

廣瀬幸治さんは大阪府立北野中学校を卒業、一九四八年第三高等学校に入学し、ただちに三高山岳部に入部した。学制改革により一年次終了で翌年新制京都大学に進学した。敗戦直後の物資窮乏の時代、三高山岳部一年間とひきつづく京大山岳部の期間を通じて山登りに精進した。

一九五〇年六月一日発行の三高山岳部時報（孔版刷り六ページ）は同部最後の刊行物と思われるが、四九年一月〜五〇年一月の山の神尾根からの白馬岳登山、二月下旬の信州蔵平のスキー合宿、そして三高山岳部最後の春山となった三月〜四月の

富山地鉄の藤橋から入山した剣御前小屋生活について、それぞれ短い記述を載せる。廣瀬さんはそのすべてに参加した。

別の大学ノートには「雪崩に関する断片的な知識を集めたもの」と但し書きのある一三ページほどの文章が残されている。これらの資料を私は三高記念館設置準備室において閲覧した。

厳冬の期の北海道知床半島の山々に注目した京大山岳部は京大学士山岳会（AACK）と合同して五二年一月〜五三年一月の期間知床で合宿した。伊藤洋平隊長以下一二名が参加、知床岬から知床岳までの未踏稜線を踏破する縦走隊と南の合泊から極地法でキャンプを進めてこれを受け入れる本隊の二隊に分かれた前半部、二つの別の基地から硫黄山と羅臼岳の登頂をねらう後半部と、多岐にわたった山行は京大山岳部草創期の一大イベントであった。マネジャーを務めた廣瀬さんは要を得たその記録を『京大山岳部報告』第三号と本誌『山岳』第四十八年に発表している。

大学院理学研究科修士課程（化学）を修了してから住友化学工業に勤務したが、ヒマラヤ行きを目指して山登りを続け貯金を続けた。AACKが一九六〇年ヒンドウクシユ山脈第二の高峰ノシャック（七四九二メートル）とワハーン回廊に遠征隊を送ることになったとき、彼は選ばれて隊員として参加した。

この山はアフガニスタン最高峰、パキスタンとの国境に位置するが当時情報がきわめてすくなく、AACKは登路偵察とワ

ハーン地域学術調査を目的とする科学班登山班各三人からなる踏査隊を派遣することになった。廣瀬さん、岩坪五郎さんと私は貨物船で神戸を出帆、パキスタンを経由してアフガニスタンに入り、同国に約一〇〇日滞在、帰途もカラチに戻るまでの期間いっしょに行動した。ここからは呼びなれた愛称エトさんを使わせていただく。

当時アフガニスタンは交通条件が悪く、私たちは自弁のクルマを用意する必要があった。酒戸弥二郎隊長がトヨタ製軍用大型ジープ（ウェボンキャリア）の売れ残り品一台を格安で購入したので、私たちは隊の荷物約一トンとともにこの車を神戸で船に積みこんだ。この通関と陸送が隊の若手三人からなる登山班の最初の任務であった。エトさんは自動車運転免許証所持者である。

私たちの大型ジープは車長五・八五メートル、車幅二・一七メートル、車高二・三二メートルあり、重量二・八五トンの頑丈な車であった。前席に三人座ることができ、荷台には左右に六人用木製ベンチがあるが折り畳んで荷物室としてつかう。食糧や装備その他機材を詰め込んだ木箱や麻袋がキャンパス地の幌の天井いっぱいまで積み上げられていた。

カラチに着いた三人はそれぞれ相当の荷物をかかえているので日本大使館のお世話で小型乗用車一台をチャーターし、運転手を二人やとった。大型ジープの助手席にエトさん、岩坪と私

は小型車に乗りこむ。

炎熱のタール砂漠を二日で縦断、パンジャブ平原はグレートトランクロードを西北に進んで私たち三人はペシヤワルまで進む。この町でカーブルまでゆく資格をもつ運転手を探したが見つからない。国境まで行く運転手さえいない。ついにペシヤワルからエトさんがハンドルを握らざるを得なくなった。カーブが連続するハイバル峠道をのぼり、トルハムのチェックポストを過ぎてアフガニスタンに入国したとたん右側通行に変わる。新米ドライヴァーに最初の試練であった。

カーブルでワハーン通廊の玄関口イシユカシムまでの契約でやとったアフガン人運転手はコクチャ河の名だたる悪路に音をあげ、州都ファイザバードに着いたところで職場放棄、カーブルに帰ってしまった。この先エトさんがいつでも大型ジープの運転手を務めることになる。六日間にわたる大奮闘のおかげでわが隊はついにイシユカシムに到着した。この先は馬群をつらねるキャラバン二日にして山登りのベースを建設した。

登路偵察が始まったころエトさんは風邪をひき、無理をして動いているうちにすっかり体調を崩してしまった。登山班のこの二人が登頂可能なルートを見つけてBCまで降りた時、突如一二名の大ボーランド登山隊があらわれた。その後の委細は省略する。八月一七日岩坪と私がノシヤックに初登頂、二十七日ボーランド隊七人が第二登した。エトさんは登攀のいちばん大

事な時期に存分の仕事をする事ができなかったことにひどく落胆しておられたが、そのことを口に出していうことはなかった。

ポーランドはこの後十数年のあいだワハーン側ヒンドウクシュ登山に力を注ぎ、七〇〇メートル峰をふくむ数座の初登頂、初縦走、冬季登頂などをおこない、さらに続けてヒマラヤとカラコルムに進出した。特に新ルート開拓、冬期登山または無酸素登頂など、目覚ましい登攀の数々を成功させている。

エトさんは会社勤めの時代ドイツに数年駐在したが、アルプスにはたびたび家族連れで遊びに出かけられたと聞く。しかし山に登る余裕はなかったようである。退職後はさすがにひまができたので、年に数回われわれ仲間たちと敷山に出かけることになった。二〇〇〇年には友人たちに誘われてモンブランとマッターホルンを見に行き、〇三年はに南チロールを周遊するなど、しばしば外国を訪ねている。

エトさんはスケッチが得意で、三高時代のノートにも作品が残っているが、ノシヤック遠征でも道中の町や人々のようす、泥レンガ作りの家、露天商などにはじまり、山の姿、モレインにおおわれた氷河など、さかんに筆を走らせていた。朝日新聞社から出版された報告書『ノシヤック登頂』にも数点のカットが載っている。三高山岳部最後の新生活として毎年のようにOBたちが集まる会の世話をしていた。絵の方も同じく三高会館

の絵画展に出品するのを例としていたようである。晩年には、先輩梅棹忠夫民博名誉館長の依頼で断れないのだといながら、日本ローマ字会の雑誌発行など手伝っていたという。

去年の夏ノシヤック登頂五〇周年を記念して、岩坪と私は友人たちとともに首都ワルシャワと古都クラクフとを訪ね、六〇年ポーランド隊の隊員二人をはじめ大勢の登山家に会い、半世紀ぶりに交歓できたのはうれしかった。この訪問にエトさんももちろん誘ったのだが、スケジュールが合わなかったのか参加しなかったのはさびしい。

昨二〇一〇年一月一八日むかしの学友たちと出かけた旅先の伊豆で急死されたとの知らせ、聞いて私は言葉を失った。

伝統ある三高山岳部を最後まで背負って生きた廣瀬幸治さんのご冥福をこころからお祈りする。

(酒井敏明)

## 川 善市さん



(1937~2010)

会員番号 10014

川さんが怪我で入院して今日は欠席すると聞いたのは四月七日、ある仲間内の飲み会の席だった。古希を僅かに越えたとはいえ元氣一杯で、つい先日もお会いして今後の予定なども相談したばかりだったから、じきに回復されるだろうと、その時は大して心配はしなかった。しかしすぐ追いかけるように四月十三日逝去されたとの連絡があり呆然となってしまった。何でも県人会の催しに出席した四月三日、二次会にも付き合った後の帰宅途中、駅の階段で転倒し頭を強打したのが原因であったという。打ち所が悪かったのであろうか、まったく思いもよらな

い成り行きの事故が残念でならない。

私が川さんに初めてお会いしたのは一九九一年、集会委員会による若葉会山行（七時雨山）であった。その時の川さんは集会委員長として全体に目を配ると同時に、往復のバスの中の座持ちも担当していた。長時間のバスの旅を飽きさせない軽妙な語り口は今も鮮やかに思い出される。

川さんは富山県の生れで、金沢大学の出身、剣岳をはじめ富山の山々に大変な親しみを持っておられた。日本山岳会に入会したのは、一九八七年で、中川武、嶋原啓佑両会員の紹介であった。日本山岳会では集会委員会の他にもアルパインスキークラブでも活躍しているが、川さん自身の山はその範囲を越えて幅が広く多様であった。日本山岳会を通じて大いにクラブライフを楽しんでいた一人であるが、その中心に山登りの実践を据えたスタイルが特徴的である。

性格は洒脱であり、諧謔を解し、周囲にはいつも和やかな雰囲気か漂っていた。アルコールも人後に落ちなかったが、呑んでも乱れることのない酒であった。自然に交友の輪は多様に拡がり、変った趣向の山行も多かった。その様な中でも最高に洒落の効いているのがパスポート不要の海外遠征と銘打った「島の山巡り」であろう。発端は一九九二年で、当時の集会担当理事であった入澤郁夫会員と柳下棟生集会委員の合作による、集会委員慰労の行事としての伊豆諸島の山巡りが結局一般会員も

含めたシリーズとして定着したものである。集会委員長であった川さんも当然深く関わった筈である。島では各島の最高峰に登ることと温泉があれば必ず入浴することが基本で、酒も当然外さない。その上に「JAC 海外遠征」と大書した派手な幟を押し立て、その強烈な印象には初めて参加した時に度肝を抜かれた。しかし同時に「海外といえば即国外と判断し勝ちな日本人特有の固定観念」にも気付かされ、妙に感心してしまった。以来私も殆どの「遠征」に参加し、川さんとの交友の重要な場になっていった。

国内の島巡りでは当然低山ばかりで、気楽な登山の様であるが、登山道の整備されていない所も多く、離島の文化を考える機会ともなり、洒落とは裏腹に仲々野趣に富んだ山旅であった。伊豆七島は第六回まででは一通りカバー出来たが、その中には八丈島の一環で訪れた、山羊の支配する無人島の八丈小島が出色であった。また御蔵島の時は島のビールを飲み干したと言われたりもした。

比較的まとまりの良かった伊豆七島に一区切りついた後、対象の島をどう選ぶかは簡単でなかったと思うが、この頃から川さんの役割りは一段と大きくなっていった。第七回佐渡ヶ島、第八回隠岐島、第九回北海道は松前沖の渡島大島と継続したが、殆ど川さんが幹事を引き受けて実現できた事であった。

新シリーズに入って目立つ事の一つに一等三角点巡りがあ

る。伊豆諸島では伊豆大島に一点あるのみで、大して入れ込み甲斐のなかった一等三角点であるが、新しい島々では全ての回で複数の一等三角点を確認することができた。そうした中では様々な意味で最も手応えのあったのが渡島大島である。

渡島大島は国内最大の無人島であり、オオミズナギ鳥の北限繁殖地として天然記念物に指定されていて、上陸には文化庁(当時)の特別な許可が必要という大変な所であった。許可の申請に当たっては上陸視察の目的と参加者全員の氏名特定が必要であり、準備に半年はかかっている。更に事後も視察結果の報告書提出が義務づけられており、海外遠征という看板も洒落の域を越えた内容になった。そしてこれら面倒な一連の手続きは全て川さんの手で処理されている。

決行の日は二〇〇〇年六月下旬の三日間、ベースは松前西方の鄙びた漁港江良の民宿で、現地集合、現地解散の計画であった。集まった参加者は十二名、最遠方は北九州からの吉村健児会員であった。交通手段は地元漁船をチャーターするが、正式許可書が無ければ応ずる船はないと聞いた。因みに最近の一等三角点研究会の会報には、この島に渡る為の漁船を数年がかりで探したとの寄稿も見られる程である。それもこれも川さんは軽々とクリアしたのであるうか。

行動当日、出港は午前二時、少々荒れ模様であったが夜明けと共に無事島に到着し、上陸地点確認の為に島を一周してから

上陸した。島そのものは島全体が端正なピラミッド型の山であり、頂上には江良岳の名称と共に一等三角点が設置されている。踏み跡など全く無いが、厳しい気象条件の所為か邪魔な樹木などもなく、幸い天気も上々で順調に全員登頂を果し、正午前に島を離れる事ができた。時間に余裕ができて、これも絶海の孤島で一等三角点のある松島小島にも立寄り事ができ、複数の三角点巡りも成立した。もともとは後日談として、報告書に小島のことにも触れた所、許可の範囲外として削除させられるというオマケもついたとのことだった。ともあれ渡島大島遠征は川さんにとっても格別であつたらしく「印象深い」と書き残している。

川さんは仲間への気配りを忘れない、面倒見のよい人でもあった。集委委員会でコンビを組んだ入澤集会担当理事がゴキョ手前のパンガで雪崩遭難した時は、三年後に仲間を集め独自に追悼トレッキングを主催している。また北九州の吉村会員が新しく「大島」と名の付く島々の山巡りを始めた時、まめに同行しサポートして来た。渡島大島はその一環の意味あいもあつた様である。そして暫く節目として目標が絞り切れないでいた第十回海外遠征が二〇〇八年、小笠原諸島で実現した。早くから話題には挙りながら、主として交通事情で見送られていた小笠原であるが、吉村会員の強い希望があり、常連達の年齢も考えて踏切つたもので、幹事は当然の様に川さんであつた。

参加者は十四名になり又々感銘深い海外遠征となつた。

思えば川さんはまだまだこれからの人であつた。最近では夏の様に奥様と北海道の長期の山旅を楽しんでおられたし、次の海外遠征も視野にあつた筈である。以前川さんは気心の知れ合つた先輩の一人に先立たれた時の追悼文に「彼岸での先輩はお元気でしようか、先立たれた諸先輩方と毎日の如く宴を催されていることでしょうか。メンバー不足だからといって此岸の連中を早々と誘わないでくださいね。いずれ、必ず参りますから……」と書いている。その諧謔のあまりに早い実現に心境は複雑である。今はせめて、その彼岸を心安らかに楽しまれんことをと祈念して筆をおく。

合掌。

(古市進)

## 松本 徧夫さん



(1929~2011)  
会員番号 4607

松本徧夫先生は近年、若き日に情熱を傾けた九重山に心が里帰りしたかのようであった。昨年は、学生時代「坊がつる賛歌」を作詞した両氏で『九重山法華院物語―山と人―』（松本徧夫・梅木秀徳編、弦書房）を出版。これからの余生は自分を育ててくれた九重に恩返しをするのだ、とおっしゃっていた。三月十八日も、「九重の花ごよみ」の著述を脱稿し、気持ち良く好きな酒を飲まれ、帰宅後倒れられた。そして意識が戻ることなく三十日、入院先の病院で亡くなられた。享年八十二歳。

親しくご指導を受けるようになってまだ十五年足らず、親子ほど年が離れた私が松本先生の追悼を執筆するなど、適任の諸先輩が多くいらつしやる中（JACにもヒンカラにも横断研にも）、借越ではあることは承知しているがお許しいただきたい。

一九九六年福岡市山岳協会がチヨモランマ登山隊を派遣した際、先生と壮大な夢を語ったのが親しく教えをいただくきっかけだった。それは支援隊として横断山脈を横断しヤルツァンポに沿ってチヨモランマBCまで走破しようという企画だった。結果的にはこの時は実現しなかったが、後に日本山岳会福岡支部のチベット踏査に引継がれ、先生とは八回の踏査行を共にさせていただいた。二〇〇一年春、雲南の横断山脈からチベットのラサを目指し走破中、未知で美しい山群と出会う。それが最後の地図の空白区と言われるカンリガルボ山群だった。

先生は「血湧き肉踊る」と得意の表現で興奮された。目を閉じると今でもその姿がありありと浮ぶ。私が一番好きな先生の姿だ。それからはご自宅に通い、酒を飲み、夢を語り、打合せをし、原稿を書き、時には意見のくい違いから、激論となることもあったが、そのバイタリティーはどこから来るのかと驚くばかりだった。とにかく良く飲んだ。今思うと、私は父と同年の先生に、そして先生は山で失ったご息に、お互いを重ね合わせるせていたのかもしれない。もしそうだとすればとても光栄なことだ。

「なべちゃんちよつと休憩しよう」と言われるときは、奥様に  
氣にされ蜜族として庭に出て煙草を吸う時だ。「血湧き肉踊る」  
という言葉とのギャップを面白く思ったものだ。実は、その庭  
の煙草休憩でカンリガルボ山群の本を出そうという話になっ  
た。この執筆において先生の妥協を許さない執念のような激し  
い思いを知る。八百頁を超える『ヒマラヤの東 岡日嘎布山群』  
は国内外で評価され、先生はカンリガリボ研究の先駆者として  
知られることになり、第九回秩父宮記念山岳賞受賞となった。

葬儀で弔辞を読ませていただいたとき、横断山脈研究会の中  
村保さんと、井上達男さんのメッセージを紹介させていただい  
た。端的に先生の業績を語られているので記したい。

「先生の青蔵高原の地質研究、揚子江源流・各拉丹冬の踏査と  
初登頂、可可西里探査、岡日嘎布踏査とピーク同定、横断山脈  
調査などと中国南西における幅広いご業績は後世に残され引  
継がれる金字塔です。」（一部省略）横断山脈研究会会長・中村  
保

「今年は自然保護全国集会在福岡で開催され、屋久島を心か  
ら愛された松本徂夫先生の基調講演『屋久島とわたし』が予定  
されていることを皆で話題にしたばかりでした。先生にはカン  
リガルボ山群に関する研究で多くのことを教えていただきまし  
た。私たちがロプチン峰（六八〇五m）に初登頂できたのも先

生の卓越した研究成果に助けられたことが大きな要因であつた  
と感謝しております。チベット情勢は安定せずその後のカンリ  
ガルボ山群への登山隊や踏査隊は活動が停滞しておりますが松  
本先生の名前は先駆者として末永く語られることと思ひます。」  
（一部省略）神戸大学山岳会会長・井上達男

また、松本先生は研究対象を次から次へと進転させ、今まで  
の研究分野は後継者をおだてて引継がせるのが絶妙でもあつ  
た。「屋久島の山岳研究」の太田五雄さん、「九重の自然保護活  
動」の船津武士さん、「中国登山研究」の倉智清司さん、「東ヒ  
マラヤ探検史研究」の辻和毅さんなど松本門下は皆、叱咤激励  
され在野でその道の第一人者になられたといつても良い。私は  
二〇〇三年頃、突然「山から見たチベット仏教」をやれといわ  
れた。うまく教唆扇動された私は、ダライラマ法王から「ミス  
ター入中論」と呼ばれているロサン・デレ先生の灌頂まで授か  
り、チベット仏教を勉強する羽目になってしまった。

最近先生は、肺気腫を患っていた。医者から煙草とチベット  
行のどちらを取るかといわれ、煙草をやめられた。しかし、酒  
かチベットかといわれると困るなど笑っておられた。そして私  
に、自分は執着や煩惱が断てないからチベット仏教を解りやす  
く教授しろと言われていた。私にはまだとても無理だとお断り  
していたが、今年は一緒にチベット仏教聖地巡礼をしようとい

束をしていた。実現できず無念である。通夜で先生の安らかなお顔を見てみると、笑顔は消えてしまったが、一切の執着から解き放たれ浄土に生まれて仏にならんとされているようであった。これからは心の中で、迷いの世の我々を教化していただけるのだと思う。

松本先生はチベット人の弟子からツェリン（チベット語で長寿の意）というチベット名を授かっていた。ツェリン先生ドジェチエ（チベット語でありがとうの意）、そしてカレベエ（去る人を送る言葉）。最後に、先生が常々好きだとおっしゃっていた「青いケシの花」を持つチベット仏教の尊格、チツタマニ・ターラー尊の真言を贈ります。

オンタレ・トウタレ・トゥレ・ソーハー

松本徂夫先生らしい、やるべき事をやり即効で結果を導く折りだと聞いています。

これまでのお導きに感謝し、安らかに眠られることをお祈りいたします。  
(渡部秀樹)

略歴

- 1929年 福岡県北九州市生まれ
  - 1952年 九州大学理学部地質学科卒業
  - 1955年 九州大学(旧制)大学院前期終了
- 福岡市立商業高等学校教諭、九州大学生産科学研

究所助手

- 1961年 理学博士、同助教、長崎大学教養部教授を経て
- 1979年 山口大学理学部教授
- 1983年 九州の火山地質構造「別府―島原地溝」と「沖縄トラフ」との関係で、朝日学術奨励賞受賞
- 1992年 山口大学定年退官、山口大学名誉教授
- 2007年 第9回秩父宮記念山岳賞受賞
- 2011年 従四位瑞宝中綬章

日本山岳会暦

- 1957年 日本山岳会入会(紹介者1375加藤数功)
- 1986～1992年 日本山岳会福岡支部自然保護担当委員
- 1992～1994年 日本山岳会福岡支部副支部長
- 1996～2000年 日本山岳会福岡支部長
- 2000年～ 日本山岳会福岡支部顧問
- 2002～2005年 新日本山岳誌編集委員

登山・探検暦

- 1945年 終戦直後の九重登山、以後四季の九重、九州各地の登山
- 1951年 九州山小屋の会(後に筑紫山岳会、しんつくし山岳会)に入会し、阿蘇鷲ヶ峰を主としてロックク

ライミングに励む

1952年 以後、祖母・大崩山群、屋久島の山岳と溪谷で探検的登山、中国・四国・紀伊の各地、北アルプス・南アルプス・東北・北海道などで四季の登山

1963～1979年 南西諸島西表島、無人島（横当島、硫黄島、尖閣諸島）の学術探検隊長として登山と調査

1969年 福岡県山岳連盟のヒンズークシユ山脈テイリチ・ミール遠征に学術隊員として参加

1973年 ガテマラ国のカバイヤ火山、他の火山調査

1974～1976年 第16次南極観測越冬隊員（やまと山脈旅行隊長として福島岳登頂、第3または第4登）

1976～1981年 韓国智異山、ウツリヨウ島聖人峰、済州島漢拏山

1983～1990年 中国横断山脈東南縁部（5度）調査隊長、光頭山（約3500m）、鳩足山（約3200m）他

1985年 中国青藏高原学術登山隊長、唐古拉山脈各拉丹冬雪山（6621m）、6293m峰初登頂と揚子江源流域の学術探検

1990～2004年 中国の崑崙、天山、アルタイ、シルクロード踏査（15度）

1992年 中国長白山（白頭山）

1994年 中国青藏高原可可西里山脈学術探検隊長、崗扎日（6305m）偵察、東崗扎日（6102m）試登、天台山（5530m）などに登頂

1995年 中国岷山踏査  
1997～1999年 中国横断山脈玉龍雪山、梅里雪山踏査（2度）

2001～2005年 日本山岳会福岡支部山行の中国崗日嘎布山群調査隊長（5度）

著書

松本氏の報告・論文等は多数あるため、山岳・探検に係した青藏高原・西域の著書・論文書の6冊について概要を記す。

（1）松本徂夫編著 辻和毅・渡部秀樹著『ヒマラヤの東 崗日嘎布山群―踏査と探検史』（2007年、權歌書房、818ページ）  
2001年から2005年にかけて、毎年5度に及ぶ日本山岳会福岡支部の崗日嘎布山群山行の隊長を務めた。この間、チベット族村民と交流しながら未踏の谷や周辺を探った。この5度の探検的踏査を上梓したのが本書である。818ページの大作で、「自然・人文編」「探検史編」の二部で構成されている。聞き取り調査による新山名を明らかにし、位置を同定して地図を製作した。それぞれの山峰は、チベット寺院や村の神山である

ことが多く、山名の由来はチベット仏教との関係が深いことなどを論証している。他にも多くの新事実を加え、自然、人文、探検史を総括した名著である。本山群の総合的な図書としては世界で初めてである。

(2) 松本僮夫・松原正毅編著『遙かなる揚子江源流―青蔵高原学術登山隊記録』(1987年、日本放送出版協会、249ページ)

1985年の青蔵高原唐古拉(タングラ)山脈学術登山隊(隊長・松本僮夫)の報告書である。この地域の登山と探検は外国人として初めて許可された。その成果の各拉丹冬(グラタンドン)雪山(6621m)と6293m峰初登頂、および揚子江(長江)源流域で調査した自然と人文について報告している。中国では、詳細な地図を国家機密にしているため、また一度も登山は試みられていなかったため、地図も写真もなしに登頂した。その記録を含めた世界初の単行本である。あわせて戦後いち早く青蔵高原を縦断した初めての記録も記述されている。

(3) 松本僮夫編著『遙かなり秘境可可西里―崑崙を越えて―日中可可西里学術探検隊記録』(1999年、日本放送出版協会、278ページ)

1994年の崑崙南支稜の可可西里学術探検隊(隊長・松本僮夫)の報告書である。この探検で東崗扎日峰(6102m)

の試登、天台山(5530m)登頂、ヘディングのオスカール峰が崗扎日峰(6305m)であることを実証した。その他多くの自然と人文観察を行い、新知見とともに世界で初めて総合的に報告した。なかでも、この地域の火山岩について「北部チベット高カリウムアルカリ岩石区」の発見は注目される。このことは万国地質学会でも報告された。

(4) 松本僮夫著『シルクロード探遊』(2001年、葦書房、357ページ)

主として1992年から2000年にかけて9回の旅からまとめている。その範囲は天山北路、天山南路、西域南道はもちろん、崑崙、パミール、天山、アルタイにおよぶ。探検的な旅行記録に合わせて、古代史、遺跡、自然、探検史について総合的に記述されている。最良的研究的な旅行記録ということができる。

(5) 松本僮夫著『幻の楼蘭 ロブ・ノールの謎』(2006年、権歌書房、461ページ)

2000年から2004年まで7回の旅を主にまとめている。楼蘭、ロブ・ノール、米蘭、ニヤをめぐる総合的な記述であり、探査旅行記、歴史、探検史、地理・地質的考察を記している。歴史、探検史は極めて詳細である。考察では中央アジア

大山脈（崑崙、パミール、ヒンズークシユ、天山）や青蔵高原と、シルクロード（オアシスルート）の地形形成は「第四紀の同時的な地殻変動としての上昇・隆起と沈降・陥没による」との新説を称え、「シルクロード陥没帯」の新名称を提唱している。また、楼蘭の滅亡とロブ・ノールの水の問題は、ヘディン説に對して地形変化もさることながら、さらに大規模な地形変動・氣候変動・人為的影響に起因する、と論述している。「シルクロード陥没帯説」等については国際会議でも発表されている。

〔6〕松本徭夫・加納隆編著『西南中国四川省攀西地域の地質（英文）』（1986年、山口大学、339ページ）

中国科学院との共同研究として、文部（科学）省の海外調査「中国大陸内陸部における古期島弧の地質構造発達史の研究―横断山脈（四川・雲南）における古期島弧の地質」（研究代表者松本徭夫、1983、1984）の成果報告書である。この研究は、新中国成立後の海外調査として文部省が採択した最初であった。内容として、地質、岩石、地質構造、リフト、山脈形成などについて明らかにした。

# 会 務 報 告

2010年(平成22年) 4月～2011年(平成23年) 3月

(◎総会 □理事会 ◇人事 ☆事業)

## ◇2010年度役員・評議員・支部長

会 長 \*尾上 昇

副 会 長 \*神崎忠男 \*宮崎紘一 \*藤本慶光

常務理事 \*成川隆顕 \*岡部 紘

理 事 太田晃介、堀井昌子、相馬 勉、山川陽一、野澤誠司、

中山茂樹、谷川太郎、永田弘太郎、萩原浩司、

監 事 深川安明、平井拓雄 \*印は常務理事会メンバー

委員会の担当理事

【総務】 宮崎、永田

【財務】 岡部、相馬

【山岳編集、会報編集、英文ジャーナル】 成川、萩原

【図書、図書管理】 岡部、中山

【学生部、青年部、指導】 相馬、野澤

【医療、科学、自然保護】 藤本、堀井

【資料・映像、海外】 神崎、谷川

【山研運営、集会】 太田、山川

評 議 員 \*近藤緑 \*酒井省二 \*森武昭、秦野一彦、阿部和行、

中野和郎、高遠 宏、新妻 徹、濱口欣一、山本聖二、

坂口三郎、小崎 尚、堂本暁子、羽田榮治、箕岡三徳、

塩澤 厚、渡邊玉枝

\*印は常任評議員

支 部 長

(北海道) 滝本幸夫・(青森) 下山 壽・(岩手) 内山達雄・

(秋田) 佐々木民秀・(山形) 佐藤敦志・(宮城) 高橋二義・

(福島) 大谷 司・(栃木) 日下田實・(茨城) 星埜由尚・

(東京多摩) 竹中 彰・(埼玉) 石橋正美・(千葉) 篠崎仁・

(越後) 山崎幸和・(信濃) 飯村富彦・(山梨) 古屋学而・

(静岡) 久保田保・(東海) 小川 務・(岐阜) 早田道治・

(京都) 塚本珪一・(富山) 山田信明・(石川) 中川博人・

(福井) 宮本教男・(関西) 重廣恒夫・(山陰) 白根 一・

(広島) 杉村 功・(福岡) 副島勝人・(北九州) 大庭常生・

(東九州) 梅木秀徳・(熊本) 工藤文昭・(宮崎) 末永重朗

☆注・いずれも2010年6月時点(〓年度内交代有り)

□平成22年度第1回(4月度) 理事会 4月28日 会議室

出席者 尾上会長、宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各常務理事、

太田・堀井・山川・野澤・永田・萩原各理事、深川・平井

各監事、酒井常任評議員

委任 神崎副会長、相馬・中山・谷川各理事、  
欠席 近藤・森各常任評議員

審議に先立ち4つのプロジェクトチームからそれぞれの活動進捗  
状況、課題・問題点等について対応状況の説明、報告とそれらに対  
する質疑、意見交換を行なった。

#### 【審議事項】

##### 1. 支部長就任 (宮崎)

東京多摩支部 竹中 彰会員 (会員番号12981) 支部新設  
埼玉支部 石橋正美会員 (会員番号 8091) 支部新設  
信濃支部\* 飯村富彦会員 (会員番号 8768)

\*前支部長・金子丞二さんの死去に伴う就任(3支部とも承認)  
2. 支部会費値上げについて (宮崎)

熊本支部から支部会費の値上げ案(現行月額2000円から  
3000円に値上げすること)の承認申請があった。(承認)

##### 3. 平成21年度事業報告(案)、会員動向(宮崎)

平成21年度事業報告(案)および会員動向について説明があり、  
平成22年度第1回通常総会議案として承認された。(承認)

##### 4. 平成21年度収支決算(案)、財産目録(案)(岡部)

平成21年度収支決算(案)および財産目録(案)について説明  
があり、平成22年度第1回通常総会議案として承認された。(承  
認)

##### 1. 大学山岳部所有の山小屋の調査への協力(野澤)

信州大学工学部建築学科土本研究室(土本俊和教授ほか)から  
同研究室が実施する全国の大学山岳部所有の山小屋調査につい  
て協力依頼があった。協力をしていきたい。

##### 2. 第12回同好会・同期会連絡会議(宮崎)

6月21日(月)に実施するのでご協力いただきたい。

##### 3. JACロゴマーク使用許可申請(宮崎)

山梨支部から同支部が行なう行事等で着用する支部作成の法被  
にJACロゴマークを使用したいとの申請があり承認した。

##### 4. 支部総会報告(宮崎)

秋田、山梨、岐阜、富山および宮崎の各支部から支部総会報告  
があった。

##### 5. ルーム201号室の返却と102号室の改装(宮崎)

201号室は返却方向で折衝中、201号室の資料等は102号室の改装後  
に移動したいので関係委員会の協力をお願いしたい。

6. 第4回日中韓交流学生登山とさよならパーティー案内(宮崎、野  
澤)

日中韓交流学生登山は5月13日(木)から上高地、穂高岳等で  
実施するが、登山終了後の5月17日(月)にさよならパーティー  
を開催する。関係者に案内を出した。

##### 7. 図書室蔵書の寄贈(岡部)

旧アラスカ会解散に伴いJACに寄贈のあった蔵書中、山岳に

#### 【報告事項】

無関係の図書44冊を国立極地研究所に引き受けていただいた。

また、図書室に所蔵中の昭文社の「山と高原地図1999年版」(全67巻)の情報が古くなっていたが、同社のご厚意により最新の2010年版を寄贈していただいた。(全59巻)

8. 山研開所予定(太田)

上高地山岳研究所は4月20日(火)から内野管理人が常駐している。

9. 第10回みやぎ市民活動フェスティバル報告(宮崎)

宮崎支部から3月7日(日)開催の表題フェスティバルに「パネル展示」で参加したとの報告があった。

10. 『山岳』61号の記事使用願い(宮崎)

『山岳』山の会(会長 山本久子氏)から、信濃大町山岳博物館から同会あてに『山岳』61号掲載の深田久弥氏の山川勇一郎氏に関する追悼文使用について依頼があり承認した。

11. 法人実地検査(宮崎)

文科省競技スポーツ課から法人実地検査を22年度中に行なうとの連絡があった。実施時期は調整中。

12. 全国支部懇談会(宮崎)

平成22年度の全国支部懇談会は新設の東京多摩支部が主幹で開催する。日程は支部長会議に合わせて、9月5日(日)～6日(月)で実施する方向で調整準備中。詳細については成案を得て別途報告をする。

13. 会報「山」5月号編集報告(神長)

□平成22年度第2回(5月度)理事会 5月19日 会議室

出席者 尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各常務

理事、太田・相馬・山川・野沢・中山・永田・萩原各理事、

平井監事、近藤・酒井・森各常任評議員

委 任 堀井・谷川各理事、深川監事

審議に先立ち4つのプロジェクトチームからそれぞれの活動進捗状況、課題・問題点等について対応状況の説明、報告とそれらに対する質疑、意見交換を行なった。

【審議事項】

1. (社)日本山岳会における「森づくり活動」に関する基本ルール(藤本)

懸案であった「森づくり活動」の基本ルールを提案する。多岐にわたる「森作り活動」を勘案し基本ルールとした。このルールの承認機関は理事会、管理は自然保護担当理事とする。(承認)

2. 基金および積立金等に関する規定(岡部)

前年度3月度理事会で「基金および積立金等に関する規定」を新たに制定することが決定され、その後財務委員会を中心に検討を重ね、成案を得たので提案する。

第1章 総則：目的および特定費用準備金、特定資産取得資金、

引当対象資金についての定義

- 第2章 特定費用準備金：保有、管理、取崩し等  
第3章 特定資産取得資金：保有、管理、取崩し等  
第4章 公表および経理処理：特定費用準備金等の公表・経理処理、引当対象資金の経理処理等

第5章 雑則：改廃、細則、附則

以上の5章13条、附則で構成し、承認機関は理事会、管理は財務担当理事とする。(承認)

3. 「高尾山子ども冒険学校」名義後援申請(神崎)

毎日新聞社から標記活動の名義後援依頼があった。(承認)

4. 岩橋崇至「山の世界展」名義後援申請(宮崎)

山岳写真家岩橋崇至会員(9374)から申請があった。(承認)

5. 山岳資料使用許可申請(宮崎)

秋田魁新報社から「山岳」第65号の成田安輝「進蔵日誌」掲載の肖像写真を秋田魁新報紙面に使用したいとの申請があった。(承認)

6. 新支部長就任(宮崎)

山陰支部 新支部長 白根 一会員(8228)

\*前支部長 高田允克会員(504)と交代(承認)

【報告事項】

1. 通常総会報告(宮崎)

北九州支部から第11回通常総会開催の報告があった。

2. 寄付金報告(2件)(岡部)

(1) 故河野之保会員(606)(606)のご遺族 金子恵子様から10万円  
の寄付があった。

(2) 故原 善会員(282)のご遺族 原 孜様から図書管理・維持費として5万円の寄付があった。

3. 支部ルーム取得の問題(宮崎)

広島支部から3年後に到来する支部創立15周年を機に支部ルームを取得したいが、それに伴う不動産登記等の諸問題についての相談があった。今後の問題として検討をしていきたい。

4. 日中韓交流学生登山報告(相馬)

第4回日中韓交流学生登山は5月12日～18日の間実施し成功裏に終了した。14～15日に3パーティーに分かれて(1)槍ヶ岳、

(2)蝶ヶ岳と常念岳、(3)西穂独標に登った。

5. 指導者賠償責任保険(宮崎)

6月に指導者賠償責任保険の契約更新があるので内容等について確認し更新する。

6. (社)日本山岳ガイド協会の総会(会長)

(社)日本山岳ガイド協会の総会及び懇親会が昨18日に開催され尾上会長、宮崎副会長が出席した。

7. 全国支部懇談会開催(神崎)

今年度の全国支部懇談会は東京多摩支部での開催が決まった。開催要領の詳細は成案を得て追って発表する。

8. 会報「山」6月号編集報告(神長)

□平成22年度第3回(6月度)理事会 7月8日 会議室

出席者 尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各常務理事、太田・相馬・山川・野沢・中山・永田・萩原各理事、深川・平井各監事、近藤・酒井各常任評議員  
委任 堀井・谷川各理事  
欠席 森常任評議員

審議に先立ち尾上会長から会長就任1年を振り返り所見・所信表明があった。その中で4つのプロジェクトを不断に推進してゆく決意を縷々述べ、とくに、新法人への移行・対応について年内にその方向付けを纏める考えを表明した。

続いて4つのプロジェクトチームからそれぞれの活動進捗状況についての説明、報告とそれらに対する質疑、意見交換を行なった。

【審議事項】

1. 支部長の交代(宮崎)

東海支部 新支部長 小川 務(6633)、前支部長 和田豊司(6797)(承認)

2. 日本山岳会ロゴマーク使用許可願(宮崎)

創立20周年を迎えるアルパインスケッチクラブから会旗にロゴマークを使用したい旨の使用許可願があった。(承認)

【報告事項】

1. 通常総会報告(宮崎)

関西支部から4月21日開催の通常総会報告があった。

2. 日本勤労者山岳連盟創立50周年記念レセプション(宮崎)

5月30日開催され、宮崎副会長および成川常務理事が出席した。

3. (社)東京都山岳連盟総会(宮崎、藤本)

5月25日開催され、藤本副会長が出席した。

4. 第64回ウエストン祭(会長)

信濃支部の献身的運営のもと好天に恵まれ盛会であった。恒例の碑前講演は成川常務理事が「穂高礼賛(山の日をつくるう)」の演題で行なった。

5. 上高地「山岳研究所」(以下、山研)地デジ化(共同受信機の撤去)

ほか(太田)

テレビの地デジ化に伴ない共同受信機を撤去する。また、山研の水源である善六沢の雪崩により崩壊し増水時には水質が濁って取水制限をしている。回復までにはかなりの日時を要する状況にある。

6. 同好会代表者交代(宮崎)

山遊会および山想倶楽部から代表者がそれぞれ山本憲一会員(2391)、石原達夫会員(6646)に交代したとの届け出があった。

7. 支部長会議開催(宮崎)

本年度第1回目の支部長会議を6月12日に10時からルームで開催する。

8. 分境嶺踏査の開始（酒井）

新生東京多摩支部ではかねて計画中の分境嶺踏査の第1回踏査を大垂水峠を出発点として6月13日に開始する。

9. 102号室改修工事（宮崎）

6月中には工事完了の見通しにある。

10. 事務局夏休み（宮崎）

事務局の夏季休暇は8月16日から21日の間の予定。

11. 会報「山」6月号編集報告（神長）

\*第2回（5月度）理事会議事録の一部訂正（宮崎）

審議事項2. 議事録記載に錯誤があったため左記の部分を訂正する。《基金及び積立金等に関する規定に関する説明部分「その後財務委員会を中心に検討を重ね」を「その後検討を重ね」と訂正する》

◎平成22年度第1回通常総会

6月12日（土）午後2時

東京都千代田区六番町 主婦会館「プラザエフ」

出席者 161名、委任状出席者28名（会員数292名）

議案 1. 平成21年度事業報告

2. 平成21年度収支決算・財産目録

3. 平成22年度除籍予定者

事業報告、収支決算・財産目録とも原案通り可決承認した。事業報告では新しい公益法人制度に対応させ、大きく公益目的事業と共

益目的事業に仕分けされ、新法人法の別表に列挙されている23の事業に沿って整理されているのが特徴。総会はこのあと、新法人への対応について協議事項という形で話し合い、「公益」「一般」双方のメリット、デメリットについて説明があったあと質疑を交わした。（詳細は会報「山」7月号で。）

尾上会長は冒頭のあいさつのなかで「山積している問題の原因は会員の減少とそれに伴う収入減にある」と指摘し、会の再生のため4つのプロジェクトを立ち上げ、いずれも順調に始動したと報告した。

□平成22年度第4回（7月度）理事会 7月14日 会議室

出席者 尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各常務

理事、太田・堀井・相馬・山川・野沢・中山・谷川・永田・

萩原各理事、深川・平井各監事、近藤・酒井・森各常任評議員

審議に先立ち尾上会長から会長就任1年間の総括および22年度第1回通常総会において所信表明した今年度の課題・取組みについてあらためて言及があった。とくに4つのプロジェクトを果敢に推進していく決意に加え、本部事務局体制の整備、充実・強化についての考えを述べた。

続いて4つのプロジェクトチームからそれぞれの活動進捗状況についての説明、報告とそれらに対する質疑、意見交換を行なった。

【審議事項】

1. 事務局長の募集（尾上、宮崎）

専任の事務局長をおき一部役員・委員会の負担軽減と事務円滑化をすすめ会員および外部機関等に対するサービスの充実、迅速的確な対応を図り、さらには新法人移行における主務省宛て申請書類作成事務やその窓口対応等を円滑に推進する。年内を目途に体制をスタートさせたい。（承認）

なお、会報およびホームページで応募者の募集をする。

2. 大学山岳部の持つ山小屋の研究（仮題）後援（中山）

信州大学（研究代表者：工学部建築学科教授 土本俊和氏）から調査への協力依頼があり、4月度理事会（報告事項）において協力の方向付けがなされたが、今回同大学の研究に対する日本山岳会の後援依頼があらためてあった。（承認）

3. 2010年度前期海外登山基金審査報告（萩原）

前期分として3隊から助成申請があり、7月8日に海外登山基金審査委員会を開催した。

審査の結果は次のとおり。（登山内容、登山隊名、登山時期、助成金の順）

- ① アマ・ダブラム（6856m）北東壁における新ルートまたは第2登、アマ・ダブラム北東壁遠征隊2010、9月24日～11月15日、10万円

- ② アウトライアー東峰（7035m）南西壁からの初登頂、2010 青山学院大学アウトライアー登山隊、8月25日～10月23日、20

万円

- ③ チャンラ峰（6623m）の初登頂、同志社大学西北ネパール登山隊2010、8月10日～10月下旬、30万円（承認）

4. 転載許可願（山岳・会報記事）（宮崎）

大町山岳博物館友の会から、大町山岳博物館依頼の「北アルプス登山史資料1鹿島槍ヶ岳登山史」の編集にあたり、当会の山岳および会報記事の一部を転載したい旨の許可願があった。（承認）

5. ログマーク使用願（宮崎）

東京多摩支部から涉外用名刺およびTシャツに当山岳会のログマーク使用願があった。（承認）

【報告事項】

1. 平成22年度通常総会報告・支部長会議報告（宮崎）

6月12日それぞれ開催され終了した。総会議事録、決算書類等は文部科学省に提出済。

2. 102号室改装終了（宮崎）

6月末に改装を終了した。今後2階の借室（201号室）に保管の資料等を各委員会等の協力を得て順次102号室等に移し、201号室の原状復旧工事を9月には着手したい。

3. 山岳トイレ整備補助金の廃止（山川）

6月9日のいわゆる事業仕分けで補助金の廃止が打ち出されたが、山岳団体自然環境連絡会から環境省に意見書を提出する。

4. サンビュールハイツ四番町総会報告(宮崎)

当会入居のサンビュールハイツ四番町の第32回通常総会が6月4日に雨除け通路を設置する事が承認された。

5. 責任賠償保険の契約更改(宮崎)

付保対象(事業および人)基準の見直しを行い、損保ジャパンと契約更改をした。(従前は役員、評議員および支部長が対象であったが、これを年間事業への参加者：前年度実績に基づく人員算定、国内に限る：に見直し変更した。)

6. 山岳4団体懇親会(宮崎)

7月9日に当会主催で開催し、16名が参加した。

7. 第6回山の博覧会報告(成川)

山梨支部の第6回山の博覧会が7月10日に甲府市(山梨学院大)で盛大に開催された。山の日制定についての主旨および現況について来場者に説明報告をし、山の日制定に向けての全国運動展開を呼び掛けた。

8. 自然保護全国集会開催報告(藤本)

6月12日～14日、当会ルーム、上智大学四谷キャンパス、霞ヶ浦湖畔の土浦で開催された。

9. 会員名簿(宮崎)

会員名簿は2年に1回の改訂を原則としているが、費用の観点から前回名簿作成以降の入会者については「新入会員補充版」を作成し配布するようになったらと総務委員会で検討をしている

…(理事会出席メンバー了解)。

10. 支部長会議(宮崎)

全国支部懇談会の日程に合わせ、9月4日～5日に開催する。

11. 全国支部懇談会(宮崎、酒井)

第26回全国支部懇談会は9月5日～6日に東京多摩支部主催で開催する。

12. 静岡支部創立60周年記念行事(宮崎)

9月25日～26日開催の案内があった。尾上会長出席の予定。

13. 新入会員オリエンテーションの開催(宮崎)

10月2日に開催する。

14. 東九州支部創立50周年記念行事(宮崎)

11月6日～7日開催の案内があった。神崎副会長出席の予定。

15. 上高地山岳研究所の状況(太田)

山研の水源である善六沢の大雪崩により土砂が取水区域に押し寄せ山研の水質が濁っていることは前月も報告したが、今回豪雨でさらに土石流が発生した。回復までにはかなりの日時を要する状況にある。

16. 会報「山」7月号編集報告(神長)

□平成22年度第5回(9月度)理事会 9月15日 会議室

出席者 尾上会長、神崎・宮崎各副会長、成川・岡部各常務理事、

太田・堀井・野沢・中山・谷川・永田各理事、深川・平井

各監事、近藤・酒井・森各常任評議員

委任 藤本副会長、相馬・山川・萩原各理事

審議に先立ち尾上会長から、去る9月4日～6日に開催された支部長会議および全国支部懇談会が盛大且つ充実した内容の会であったこと、とくにJACの課題等についての危機感・認識をあらためて共有することができたとの挨拶があった。

続いて4つのプロジェクトチームからそれぞれの活動進捗状況についての説明、報告とそれらに対する質疑、意見交換を行なった。

#### 【審議事項】

1. 事務局長候補の選任（尾上会長、宮崎）

応募者（複数）について慎重に検討・協議の結果、会員諏訪肇氏（会員No.12900）を事務局長候補とした。履歴等の紹介

説明があり10月から勤務する予定である。（承認）

2. 山岳遭難防止セミナーへの名義使用（野沢）

10月13日に東京体育館ホールで開く指導委員会主管の遭難防止セミナー「山岳救助現場の実際」を当会主催で開催したい。（承認）

3. 第18回日本山岳耐久レースの名義後援依頼

東京都山岳連盟から10月10日～11日実施の表題レースの名義後援依頼があった。（承認）

4. 写真貸出・転載願ひ（宮崎）

株アタックからUCカード会員向け機関誌10月号の「日本人と

山」記事内にウエストン氏の写真掲載申請願ひがあった。（承認）

#### 【報告事項】

1. 宮崎支部創立25周年記念式典開催報告（宮崎）

7月17日式典、祝賀会および記念登山（18日）を実施した旨の報告があった。

2. 「山はみんなの宝！全国集会」開催報告（宮崎）

「山はみんなの宝！全国集会」事務局およびNPO法人山のECHOから、7月22日に東京虎ノ門で開催し「山小屋トイレ整備補助事業」継続についての声明文を採択した。

3. 第2回支部長会議開催報告（宮崎）

理事会冒頭での会長挨拶の通り9月4日～5日に開催した。

4. 再放送連絡（宮崎）

株NHKエンタープライズから、番組NHKアーカイブス「ドキュメンタリー エベレスト」（1970年8月22日初回放送）を9月12日に再放送する旨の連絡が8月24日付であった。

5. 秩父宮記念山岳賞の応募状況（宮崎） 応募締め切りは8月31日で

1件の応募があった。

6. 『日本山岳会百年史』在庫対策（成川）

百年史編纂委員会事務局から在庫600セットについて適正在庫を300とし、残部を分譲する、未贈の地方公共図書館や報道機関等に寄贈するほか、編集協力者および各支部へ配布する。

7. 助自然公園財団平成22年度評議員選任結果報告(宮崎)

表題財団の評議員について、財団の新法人移行に伴い評議員定数が20名から6名に減員にともなう評議員会推薦候補6名の連絡があり、当会からは参加しないことになった。

8. 第14回ミセス・ウエストン祭案内(宮崎)

長野県戸隠観光協会から表題案内(8月7日開催)があった。

9. 会報「山」9月号編集報告(成川)

□平成22年度第6回(10月度)理事会 10月13日 会議室

出席者 尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川常務理事、太

田・堀井・相馬・山川・野沢・中山・永田・萩原各理事、

深川・平井各監事、近藤・酒井各常任評議員

委任 岡部常務理事、谷川理事

欠席者 森常任評議員

審議に先立ち尾上会長から、「新法人移行期限を考慮すると年内には公益が一般の選択を理事会としての合意形成を今年度第2回総会で議決することを目標にしたい。場合によっては臨時理事会開催も視野に入れた熱の入った議論を通じ万全を期していきたい」との挨拶があった。

続いて4つのプロジェクトチームからそれぞれの活動の進捗状況についての説明、報告が行なわれた。

【審議事項】

1. ハセツネモニュメント(石碑) 設立後援名義使用願い(神崎)

ハセツネ石碑設置委員会(委員長 佐藤 旺、事務局 長谷川昌美)から平成23年10月に開催予定の長谷川恒男の20年祭に同氏の石碑を造り青梅市の御嶽神社境内地、長尾平に設置する計画に対する後援名義使用願いがあった。(継続審議)

2. 日本登山医学会学術集会協賛依頼(堀井)

日本登山医学会から来年6月に開催予定の第31回日本登山医学会学術集会に対する協賛依頼があった。(承認)

3. 中村清太郎油絵「白馬岳」収載承認依頼(宮崎)

来年1月に創設75周年を迎える日本山岳画協会(代表幹事 武井 清)から、発刊計画中の「創立75周年記念画集」の巻頭に日本山岳会が所有する中村清太郎作の油絵「白馬岳」(大町山岳博物館に寄託中)を収載する事への承認依頼があった。(承認)

4. ログマーク使用許可願(宮崎)

埼玉支部から支部報、支部役員名刺、郵送用封筒および総会資料に、また、同好会三水会から同会創立35周年記念に発刊する記念誌にそれぞれログマークを使用する許可願があった。(承認)

5. 支部長交代(宮崎)

栃木支部(10月1日付) 新支部長・山野井武夫会員(4633)。(承認)

【報告事項】

1. 第42回新入会員オリエンテーション(宮崎)

10月2日当ルームで開催した。全国の会員が対象であるが、参加者は例年該当者の2割程度である。今後の開催時期、開催方法等を検討したい。

2. 名誉会員を囲む会(尾上、宮崎)

恒例の名誉会員を囲む会は名誉会員10名が出席して、10月6日に日比谷松本楼で行なわれた。

3. 2010年永年会員名簿(宮崎)

22年度の新永年会員該当者は30名である。12月4日の年次晚餐会に招待をする。

4. 第11回ライチョウ会議石川大会(宮崎)

今年のライチョウ会議は11月13、14日の両日石川県金沢市の石川県政記念しいのき迎賓館で開催される。

5. 会報「山」10月号編集報告(神長)

議事終了後、新法人移行に関し「公益」「一般」の選択についての質疑など真剣な意見交換が1時間以上にわたり行なわれ、次回理事会で引き続き意見交換をすることになった。

委 任 岡部常務理事、谷川理事

審議に先立ち尾上会長から、法人改革のタイムリミットが迫っている。皆さんの率直、活発な論議を経て意見を集約し、理事会としての合意形成をしていきたいとの挨拶があった。審議事項および報告事項終了後、新法人移行に関し「公益法人」「一般法人」の選択について熱の入った討議が活発に行なわれた。

【審議事項】

1. ハセツネモニュメント(石碑) 設立後援名義使用願い：継続審議(神崎)

10月度理事会では継続審議扱いとなっていた。その後の他の山岳団体の動向等を総合的に勘案して後援名義使用を認めたい。(承認)

2. 秩父宮記念山岳賞(宮崎)

10月22日に秩父宮記念山岳賞審査委員会が開催され、今年度の受賞は山森欣一会員(82歳)で、同会員の「人間に焦点を合わせた、ヒマラヤ登山の実態把握と遭難状況(ヒマラヤ+国内)の調査研究」に対して審査委員会から推薦された。(承認)

3. 商標権(ロゴマーク)の更新(宮崎)

当会の商標権(ロゴマーク)の更新時期(平成22年10月1日から半年間)が到来したので向う10年間(平成33年3月末日まで)の登録をする。(承認)

4. 「山はみんなの宝！全国大会」(藤本)

報告 □平成22年度第7回(11月度)理事会 11月10日 会議室  
出席者 尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川常務理事、太田・堀井・相馬・山川・野沢・中山・永田・萩原各理事、深川・平井各監事、近藤・酒井・森各常任評議員

「山はみんなの宝」全国大会」(実行委員会・前早稲田大学総長 奥島孝康、事務局長・NPO法人ECHO内 上幸雄)から参画願いがあった。11月30日に開催に限り参加をする。(承認)

5. 植村直己エベレスト登頂映像使用許可願 (宮崎)

㈱テレビ東京から1970年日本山岳会登山隊のエベレスト登頂の映像(NHKサービスセンターに管理委嘱)につき使用許可願があった。(承認)

6. 写真掲載願 (宮崎)

(有)楓工房(富山市問屋町1-1-16)から富山県教育委員会の委託で「ふるさととやまの人物ものがたり(仮称)」製作中で、宇治長次郎の写真2点について使用願があった。(承認)

7. 「山岳」所載記事の転載許可願 (宮崎)

(株)山梨日日新聞社から「山岳」92号所収の高室陽二郎会員執筆による大沢伊三郎氏追悼文を高室陽二郎氏のエッセイ集「山と人」に転載許可願があった。(承認)

### 【報告事項】

1. 新名誉会員推薦(酒井)

マナスル登頂者 日下田實会員(正会)を評議員全員一致で推薦することを承認した。

2. 森谷重二郎氏を偲ぶ会(藤本)

10月28日の都岳連前会長 森谷重二郎氏を偲ぶ会に出席した。

3. 北九州支部10周年記念行事(会長)

10月30日に支部創設10周年記念行事が開催され出席した。  
4. 東九州支部50周年記念行事(神崎)

11月6日に支部創設50周年記念式典が開催され出席した。

5. 神奈川大学山岳部創部80周年記念式典(宮崎)

11月3日に創部80周年記念式典が開催され出席した(会長代理)。

6. 早稲田大学山岳部創部90周年記念式典(藤本)

11月6日に創部90周年記念式典が開催され出席した(会長代理)。

7. 上高地山岳研究所利用要領の改正(太田)

山岳研究所運営委員会が利用要領を10月19日に改正した。実施は12月1日以降。改正内容についてはホームページや入会案内、名簿等に掲載して徹底を図る。

8. 寄付報告

①安藤治会員(正会)平成22年永年会員・晩餐会招待者)から、今年の年次晩餐会を欠席することと金1万円の寄付があった。

②(株)尾上機械(尾上会長が代表取締役)から同社創業100周年を記念し、金100万円の寄付があった。

9. 会報「山」11月号編集報告(神長)

☆平成22年度年次晩餐会

12月4日(土) 東京・品川プリンスホテルリアネックスタワー

出席者 467名

尾上会長挨拶、日下田實新名誉会員の紹介と挨拶のあと、新永年会員(30名のうち)16名が登壇、代表して松浦輝夫会員が挨拶、第10回秩父宮記念山岳賞を山森欣一会員が受賞し挨拶、新入会員(142名のうち)33名が登壇して船村徹会員が挨拶、皇太子殿下も参加しての鏡開き、乾杯、懇親と盛会だった。別会場での海外登山報告、アルパインスケッチクラブとアルパインスキークラブがそれぞれの創立20周年記念で展示会を開いた。詳しくは会報「山」12月号に。

□平成22年度第8回(12月度)理事会 12月8日 会議室

出席者 尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各常務理事、太田・堀井・相馬・山川・野沢・中山・永田・萩原各理事、深川・平井各監事、近藤・酒井・森各常任評議員  
委任 谷川理事

審議に先立ち尾上会長から、年次晩餐会が盛会に開催されたことについての労いと謝辞があった。法人改革について先月に引き続き率直、活発な論議を通じて、理事会としての合意形成をしていききたいとの挨拶があった。

報告 業務 について、4つのプロジェクトチームからそれぞれの活動進捗状況についての説明、報告とそれらに対する質疑、意見交換が行なわれ

た。そのあと新法人移行に関して、「公益法人」、「一般法人」の選択について熱の入った討議が活発に行なわれた。

【審議事項】

1. 山研の給水設備補修費用に関する陳情(太田)

一次取水タンク、浄水タンクともに設置後10年以上経過して老朽化がすすみ腐食が著しいので今後の取水の安定化を図るため新たに作成したい。作成設置費用の見積もりは73万円である。

(承認)

2. ログマーク使用許可願い(宮崎)

山形支部から、支部創立60周年にあたり発行する「記念誌」表紙にログマークを使用したい旨の申請が12月3日付であった。

(承認)

【報告事項】

1. 「生涯スポーツ・体力づくり全国会議2011案内」(宮崎)

11月29日付で文部科学省(スポーツ・青少年局)から来年2月

3日横浜市で開催する旨の案内があった。

2. 特殊切手等発行に資する照会(宮崎)

11月30日付で文部科学省(競技スポーツ課)経由、日本郵便(株)から平成24、25年度の記念事項・イベント等の照会があった。

3. 第10回日本真中五支部懇親山行案内・報告(神崎)

11月13日、14日石川県七尾市で開催(当番・石川支部)され出席した。懇親山行は「七尾城山(城跡)」であった(来年の当番

は岐阜支部)。

4. 「山はみんなの宝!全国大会」への参加報告(藤本)

「山はみんなの宝!全国大会」が11月30日、東京千駄ヶ谷の日本青年館で開催された。来年5月に予定している「国民会議」立ち上げに向けての大会のようだ。日本山岳会としては同会の将来的なビジョン検討状況などの推移を見極めた上でその対応について結論を出してゆくべきで、当分の間は限定的に参加をするのが好ましい。

5. 日本勤労者山岳連盟「望年会」(神崎)

12月3日開催され出席した。和気あいあいの懇親会であった。

6. 年次晩餐会(宮崎)

12月4日品川プリンスホテル(東京都港区)で皇太子殿下も出席して開催された。出席者は46名であった。

7. 会報「山」12月号編集報告(神長)

□平成22年度第9回(1月度)理事会 平成23年1月12日 会議室

出席者 尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各常務

理事、太田・堀井・相馬・山川・野沢・中山・谷川・永田・

萩原各理事、深川・平井各監事、近藤・酒井・森各常任評

議員

開会にあたり尾上会長から、法人改革の申請諸手続きの期限もあり本日で理事会としての合意、結論を出したい。先々月・先月に引

き続き率直、活発な論議をお願いしたいとの挨拶があった。

審議に先立ち、4つのプロジェクトチームからそれぞれの活動進捗状況についての説明、報告とそれらに対する質疑、意見交換が行なわれた。

【審議事項】

1. 新法人移行(公益・一般の選択)

11月理事会以降集中審議してきた新法人移行(公益法人・一般法人いずれかの選択)については引き続き審議し意見を交わした。多数の意見で「公益法人」を目指すことを承認し、評議員会に諮問の上、来る3月の平成22年度第2回総会に諮ることが決定した。なお、議論の内容は別途記録として保管する。

2. 後援承認申請(宮崎)

兵庫県豊岡市から「一歩踏み出す」こんな日本人がいた。そして今もいる。植村直己顕彰事業2011「日本冒険フォーラム」に対する後援申請があった。(承認)

3. 日本山岳会誌資料使用申請(宮崎)

丹沢・心のボランティアの会から同会が発行予定の「丹沢登山100年のあゆみとその背景」に日本山岳会誌第一年第一号、第八年第三号、第十一年第三号、第十三年第二号、第十四年第三号、第十八年第二号に掲載の丹沢に関する記述および表紙(山岳第一年第一号)、山岳第六十七年に掲載の武田久吉の肖像写真1枚を使用したい旨の申請があった。(承認)

4. 日本山岳遺産基金への協力願い(宮崎)

山と溪谷社から同社創業80周年記念事業としての「日本山岳遺産基金」創設に伴い、同基金への協力(特別会員への参加)依頼が口頭であった。(継続審議)

【報告事項】

1. 最初の評議員就任予定者の決定(宮崎)

財団法人自然公園財団から12月8日付で一般財団法人自然公園財団における最初の評議員就任予定者8名の連絡があった。

2. 2011年版TMFカードの案内(宮崎)

東京都山岳連盟から2011年版のTMFカード(都岳連加盟団体会員向け身分証明書)の発行案内があった。

3. 秩父宮記念山岳賞受賞祝賀会案内(宮崎)

同賞受賞祝賀会(発起人 伊東 満 No.0024 日本ヒマラヤ協会理事長、他3名)から2月5日開催する案内があった。

4. SSFスポーツエイド事業終了案内(宮崎)

笹川スポーツ財団から今年度を以って事業終了する旨の案内が12月17日付であった。

5. 最近の天下り・渡りの実態に関する予備調査(宮崎)

文部科学省競技スポーツ課から2009年9月19日~2010年10月1日間の実態調査依頼があり「該当者なし」と回答した。

6. 特例民法法人における無報酬役員に対する謝礼等の調査結果を踏

まえた対応 (宮崎)

文部科学省競技スポーツ課から定款、寄付行為等の根拠規定整備について一般的留意の文書があり、当会は該当・関係なしと回答した。

7. 会員名簿新入会員追加版の発行(宮崎)

現「会員名簿2008」の追加版として2008年9月~2010年11月間の新入会員の名簿を発行する。

8. 会報「山」1月号編集報告(神長)

□平成22年度第10回(2月度)理事会 2月9日 会議室

出席者 尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各常務

理事、太田・堀井・相馬・山川・野沢・永田・萩原各理事、

深川・平井各監事、近藤・酒井・森各常任評議員

委 任 谷川・中山各理事

開会にあたり尾上会長から、法人改革については1月度の理事会で理事会としての結論を得た。3月12日(予定)の総会に諮り承認をいただきたい、新しい定款(案)を6月の総会に諮り検討・協議をいただき、承認を得て移行手続きに入りたいとの挨拶があった。また、先週行なわれた全国事務局担当者会議については、会員の高齢化や新公益法人への対応等本部・各支部共通の問題について活発な意見交換ができたことの意味が述べられた。

審議に先立ち、4つのプロジェクトチームからそれぞれの活動進捗状況についての説明、報告とそれらに対する意見交換が行なわれ

た。

また、審議終了後、新法人移行PTが検討してきた定款、同施行細則、規程類及び財務管理等について今後審議・検討すべき問題点、留意点に関して藤本副会長から説明が行なわれた。今後理事会において鋭意議論、審議していくことが確認された。

【審議事項】

1. 平成23年度事業計画(案)(宮崎)  
平成23年度事業計画(案)について事業計画の主なる事項について説明があった。(承認)
2. 平成23年度予算(案)(岡部)  
平成23年度予算(案)について、会員減少に伴う厳しい予算案ではあるが効率的運行に努めたいとの説明があった。(承認)
3. 平成22年度後期海外登山助成(萩原)  
平成22年度後期海外登山助成については3隊の申請があり1月21日に海外登山基金審査委員会において、①Japan Denali Exp. 2011 隊(カヒルトナ・ピークからのカシシリッジ継続登攀ほか) ②Giri-Giri Boys Mt. Edgar Expedition 2011 (ユウ・トエドガー 6618 m 南東壁新ルート登攀)について審査し、後期助成対象登山隊として、両隊に25万円ずつ助成する。(承認)
4. 日本山岳遺産基金への協力(宮崎)  
継続審議となっていた山と溪谷社から同社創業80周年記念事業として「日本山岳遺産基金」創設に伴う協力依頼があった。(承

認)

5. NPO法人富士山測候所を活用する会団体加入願い(宮崎、堀井)  
NPO法人富士山測候所を活用する会から団体会員として、同会を支援したいとの依頼があった。(承認)

6. ログマーク使用願い(宮崎)

宮城支部から平成23年度全国支部懇談会開催の際、参加会員に對し配布予定の記念品にJACログマーク使用許可願いが2月4日付であった。(承認)

【報告事項】

1. 平成22年度第4回評議員会開催通知(宮崎)  
財団法人自然公園財団から2月2日付で2月22日に第4回評議員会開催通知があった。
2. 「白瀬轟中尉と西堀榮三郎の南極探検」企画展の案内(宮崎)  
一般法人「人生にロマンを求める会(代表理事・西堀峯夫)」から1月23日付で企画展とオープニングパーティ出席案内があった。(開催場所は東京大田区鶴の木 故西堀榮三郎邸)
3. 文部科学省の実地検査(宮崎)  
文部科学省スポーツ課から実地検査の事前調査作成提出依頼が1月24日付であった。
4. 日本山岳協会の創立50周年記念祝賀会(宮崎)  
1月15日開催され当会からは会長、各副会長および各常務理事が出席した。

5. 秩父宮記念山岳賞受賞祝賀会報告（宮崎）

2月5日開催され会長が出席した。

6. 冬山天気予報実施報告（野澤）

携帯メールで見ることが出来る冬山天気予報についての利用者（登録者）は2024名になった（昨年同期は約1000名）。従来からも好評であり今後も継続して実施していく。

7. 東京都山岳連盟の第9回総会招集通知（宮崎）

1月27日付で招集通知があった。

8. 平成23、24年度役員候補推薦依頼（宮崎）

東京都山岳連盟から1月27日付で役員（理事・監事）候補の推薦依頼があった。

9. 平成22年度スポーツコーチサミット開催連絡（宮崎）

文部科学省（スポーツ・青少年局長）から1月24日付で開催参加の案内があった。

10. 2010「植村直己冒険賞」の発表（宮崎）

2月16日に受賞者の発表がある。

11. 会報「山」2月号編集報告（神長）

## ◎平成22年度第2回通常総会

報 告

3月12日（土）午後2時

東京都千代田区六番町 主婦会館「プラザエフ」

出席者 86名、委任状出席に29名（会員数219名）

議 案 1. 平成23年度事業計画案承認の件

2. 平成23年度収支予算案承認の件

3. 新法人移行の選択（公益法人）承認の件

協議事項・新公益法人の定款について

報告事項・平成23年2月末の会員数（219名）について。

総会は東日本大震災が発生し（3月11日午後）、交通・通信が混乱するなか、147名の出席回答者中86名が出席して開かれた。

委任状提出は29名。平成23年度事業計画・収支予算案について原案どおり可決承認したが、予算は、事業活動収入が前年度を3.0%下回る4年連続の前年度比マイナス予算となった。新法人移行については、理事会提案どおり「公益社団法人」で申請することが賛成多数で承認された。（事業計画・収支予算の詳細は会報「山」4月号に、また法人移行については同3月号に速報として掲載された）

## □平成22年度第11回（3月度）理事会 3月23日 会議室

出席者 尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各常務

理事、太田・堀井・相馬・山川・野沢・中山・永田・萩原

各理事、深川・平井監事、近藤・森各常任評議員

委 任 谷川理事

欠 席 者 酒井常任評議員

開会にあたり尾上会長から、このたびの東日本大震災で罹災された方々に対してお見舞いのことばがあり、「各支部関係者について

は現時点では大きな被害がない模様であり安堵した。さる12日の総会大震災直後のことでもあり、開催するかどうか、苦渋の選択を迫られた。総会での審議事項はいずれも原案通り可決され、日本山岳会は「公益法人」へ向けて進むことになった。来る6月の総会に定款改定（案）を諮り、内閣府に申請すべく準備をすすめることとなる」との挨拶があった。

なお、定例の「審議事項」および「報告事項」の後に、新法人移行PTが検討してきた新定款、定款施行細則についての説明が同PT担当の藤本副会長からあり、意見が交わされた。引き続き4月度の理事会において鋭意議論、審議をして成案を得ていくことが確認された。

#### 【審議事項】

##### 1. 事務局局長退職（宮崎）

2月3日付で一身上の都合により、諏訪事務局長が退任した。事務局スペース・機の配置等々、今後改善解決すべき事柄についての意見が出された。（承認）

##### 2. 東日本大震災災害への募金活動（宮崎、成川）

先の総会直後検討に着手し、既に義援金募金用の口座を開設し会報へ折込チラシを入れた。後付けになるが「災害救援募金委員会」を承認願いたい。委員長は成川常務理事、委員は尾上会長、神崎・藤本・宮崎各副会長、岡部常務理事とし必要に応じ委員を増員する。義援金の用途については今後の救援状況等の

推移を勘案して別途理事会に諮ることとした。（承認）

##### 3. 登山道情報調査チームメンバー（宮崎）

かねて実施することになっている登山道情報調査チームを設け、メンバーとして北野忠彦（会員番号10126）、遠山元信（同12526）および宮崎紘一（同5751）各氏にお願いしたい。（承認）

##### 4. 掲載許可・原簿借用願い（宮崎）

（株）第一学習社から、同社が発行する高等学校用教科書（2種類）に小島鳥水氏の写真原簿（紙焼き）借用願いと同写真掲載許可願いが3月8日付であった。（承認）

##### 5. ログマーク使用願い（宮崎）

科学委員会（米倉久邦委員長）から同委員会主催のフォーラム「登山を楽しくする科学（Ⅲ）」で配布予定の予稿集にJACログマーク使用願いが2月14日付であった。（承認）

#### 【報告事項】

##### 1. 評議員会報告（宮崎）

総会に付議する議案について評議員会（2月11日）に諮り、承認を得た。

##### 2. 平成22年度第2回通常総会報告（宮崎）

12日開催の総会において付議した議案はすべて承認された。なお、恒例の総会終了後の懇親会は大震災の状況を勘案して中止した。

##### 3. 2011年度予算に関する資料請求（役員の経歴）（宮崎）

文部科学省スポーツ課から例年通り役員とその経歴についての資料請求が2月22日付であった。

4. 商標権更新登録申請完了(宮崎)

商標権更新登録申請が完了した旨の報告が依頼した菅原特許商標事務所から3月4日付であった。申請更新は向こう10年間である。

5. 財自然公園財団の評議員会(宮崎)

財自然公園財団から、評議員会が3月16日開催された旨の連絡があった。

6. 企画展の案内(宮崎)

田淵行男記念館開館20周年記念収蔵コレクション展の案内がきた。期間は3月9日から7月3日まで。

7. 類似名称団体の連絡(宮崎)

(社)日本山岳ガイド協会から最近、東京都の一般社団法人として登記された、「一般社団法人日本アルパイン・ガイド協会」は(社)日本山岳ガイド協会」とは別組織であり混同しないよう注意願いたいとの連絡があった。日本山岳会としてもかかる事態にならぬよう日頃から対策を講じておく必要があるが、今回商標権更新登録をしたこともその一環である。

8. 映画「岳」試写会とトークショーの名称使用願い(宮崎、神崎)

毎日新聞社から4月23日実施の予定で名称使用願いがあったが、大震災の状況を考慮し中止となった。

9. 「谷川岳の日」制定の記事について(宮崎)

みなかみ町で、7月2日を「谷川岳の日」と制定することになったとの連絡が群馬県山岳連盟副会長八木原聡明氏(89歳)からあった。1920年(大正9年)7月2日にJAC会員藤島敏雄氏と森喬氏による群馬・新潟県境を登山史上初縦走したことになったものである。

10. 図書貸出申請(宮崎)

国土地理院から同院の企画展「今西錦司 三角点を巡る——1500山 登頂の記録」(国土地理院「地図と測量の科学館：茨城県つくば市」)において展示したい図書11冊(今西錦司著「山岳省察」ほか)の貸出申請があった。なお、当企画展は地震により建物が損傷し、現在中止している。

11. 名誉会員の計報(宮崎)

名誉会員堀田弥一氏(23才)が逝去された。

12. 2011年度自然保護全国集会(藤本)

6月11日、12日に自然保護委員会と福岡支部の共催で、「エコツーリズムと屋久島」をテーマに開催される。

13. 東京都山岳連盟の総会(藤本)

東京都山岳連盟の第9回総会が2月22日開催され出席した。

14. 会報「山」3月号編集報告(神長)

報  
務  
会















# 支部の活動報告

## 北海道支部

北海道支部の活動は、定例山行、自然保護関係などの公益事業関係、全国支部との交流会、道民カレッジ講座を実施するほか創部四十五周年を記念する講演会を開催など積極的に事業展開を行った。

とりわけ、二〇〇七年(平成十九年)の十勝岳の上ホロカメック山雪崩事故以来休止していた「オホーツク分水嶺調査」については、二〇一〇年度に入り本格的に再開し、全長三五〇<sup>キ</sup>に及ぶコースの三分の一強の一三〇<sup>キ</sup>を踏査し、二〇一四年度までに完遂できる見込みがたった。

定例山行としては、増毛山系、大雪山系、日高の沢、オホーツク分水嶺の核心部である知床半島、初秋の快晴の夕張山系、楡山江差の日本海に面した紅葉が眩い山頂を踏破。レベルの高い道内の山々を踏みしめた一年。また、雪崩事故以来強化してきた雪崩講習は指導者の育成も順調に進み、札幌以外の道東・道南に地域・対象者を拡げ実施した。

自然保護関係では、北海道庁から委託を受けた高山植物盗掘

防止パトロールを大雪山系・十勝岳連峰で参加者三十二名、延べ百五十二回のパトロールを実施。

日高山脈ファンクラブ主催の幌尻山荘排泄物搬出事業にも参加した。

公益事業として北海道支部が大事に育ててきた自然児学校は、従来の日高の新冠町から移して登別ネイチャーセンターで開催。小中学生十四名が参加しテント設営、食事づくり、登山などを体験するなど有意義な時間を過ごした。支部からは二十三名参加。十年の節目を経て再出発したものの、場所選定やカリキュラムの内容に課題が残り、場所選定・事業内容の充実に向けて検討している。

また、〇六年から参加の「支笏湖周辺台風災害復興植樹事業」に引き続き参加し、春の観察、補植と植樹、下草刈り、生育調査、秋の観察等、一年を通じて調査観察し生育を見守った。

各種集会では、日本山岳会「山の日制定」プロジェクトを兼ねて「岩崎元郎セミナー」を札幌中心部の会場で、五百八十人参加による支部創設四十五周年記念事業として実施した。北海道山岳関係団体とともに「トムラウシ山岳事故を考える北海道

シンポジウム」の開催。夏・冬には百名を超える参加により、北海道支部会員で本部プロジェクトメンバーの渡辺北大教授による「山の日制定のルーツ」をテーマとした講演会の開催などを行った。

二年目を迎えた道民カレッジ講座では、北海道の山と自然保護のテーマについて二月のイグルーづくりを含め八回の講座を持ち、支部会員・会友ら百三十名が参加した。

自前の「ルウム白石」は、道民カレッジの開催、支部交流会、同好会の集まりの場として支部の絆の拠点ともなっている。

(西山 泰正)

## 青 森 支 部

二〇一〇年度(平成二十二年)の青森支部の活動は、白神山地ブナ林再生事業を始め、地域社会に直接貢献できる活動少年少女登山教室、八甲田山スキーコースポール立て等も行い、大きな事故もなく無事終了できたことを関係各位に感謝したい。また、六月には青森・秋田・岩手の三つの県境である四角岳に各支部から登るという初めての企画を成功させ、懇親を深めることが出来た。

(一〇年度青森支部事業報告)

支部春山山行(南北八甲田、ベース酸ヶ湯駐車場上テント)

五月一日(土)～三日(月) 十五名

支部総会(青森市)

五月二十二日(土) 十六名

日本山岳会総会

六月十二日(土) 一名

青森・秋田・岩手支部親睦登山(四角岳)

六月二十日(日) 二十五名(支部会員十名)

白神山地体験林業(春)

六月二十五日(金)～二十七日(日) 十四名

青森ウェストン祭(新郷村)

七月四日(日) 約三百五十名(支部会員七名)

高山植物盗掘防止パトロール(南北八甲田山)

七月四日(日) 参加出来ず

少年少女登山教室(新郷村林間教室、大駒ヶ岳)

七月三十一日(土)～八月一日(日) 二十二名

新入会員歓迎懇親会(青森市)

十月二十九日(金) 十六名

支部冬山山行(北八甲田仙人倍小屋ベース)

十二月三十日(金)～一月三日(月) 二名

山岳スキー研修会(竹越会員山荘)

一月十五日(土)～十六日(日) 十五名

八甲田山スキーコースポール立て

二月二十二日(火)～二十三日(水) 支部会員五名  
八甲田山スキーコースポール立て

三月下旬東日本大震災のため実施せず

平成二十三年度は新入会員三名が加わり、より一層支部活動の活性化に力を入れるとともに、引き続き地域社会に貢献できる活動にも取り組んでいきたい。  
(須々田 秀美)

## 岩手支部

二〇一〇年(平成二十二年)七月三日(土)山の公開講座第二回「登山とお天気」を実施した。「雷と観天望気」という題名で、小野寺訓氏(岩手県山岳協会副理事長・気象予報士)に講師をお願いし、盛会に終了した。

平成二十二年度下期

- ・十月例会山行 十月二日(土)「名久井岳」参加者十六名
- ・十一月例会山行「仙盤山」十一月十三日(土)参加者十三名
- ・日本山岳会年次晩餐会 十二月四日(土)参加者十名
- ・記念山行「鎌倉アルプス」十二月五日(日)参加者七名
- ・岩手支部晩餐会 十二月十二日(土)～十三日(日)参加者十九名
- ・忘年山行「堂ヶ沢山」十二月十二日(土)参加者十二名、「六郎山」十二月十三日(日)参加者十名

- ・一月例会山行「男助山」一月十五日(土)参加者五名
- ・事務局担当者会議(東京)二月五日(土)～六日(日)阿部事務局長出席
- ・一月例会山行「大深岳樹氷ツアー」二月二十日(日)参加者六名

- ・二月例会山行「七滝(県民の森)」三月十九日(土)東日本大震災のため中止
- ・「岩手支部通信三十一号」発行 三月三十一日(月)

- ・二〇一一年度(平成二十三年度)事業計画案
- ・岩手支部総会(盛岡上田公民館) 四月三日(日)

- ・四月例会山行「空雲山・送仙山」 四月二十三日(土)降雨のため中止
- ・五月例会山行「大森山・徳仙丈・室根山」五月二十八日(土)
- ・六月例会山行「崩れ山」六月十八日(土)
- ・七月例会山行「岩手山縦走」七月九日(土)～十日(日)
- ・夏の例会山行「剣山・石槌山」八月二十五日(木)～二十八日(日)

- ・九月例会山行「三ツ石山」九月二十三日(金・祝)
- ・「岩手支部通信」三十四号発行 九月三十日(金)
- ・十月例会山行「白地山」十月一日(土)
- ・全国支部懇談会(宮城)「栗駒山」十月十五日(土)～十六日(日)

・十一月例会山行「鷺合森・丸子峠」十一月十二日(土)

・日本山岳会年次晩餐会 十二月三日(土)～四日(日)

・岩手支部晩餐会(大船渡) 十二月十日(土)～十一日(日)

・忘年山行「鉄台山」十二月十日(土)

・一月例会山行「大野山」一月十四日(土)

・二月例会二月例会山行 スキー 二月十八日(土)～十九日(日)

・三月例会山行「八幡平周辺」三月一日(土)

・「岩手支部通信」三十五号発行 三月二十一日(金)

(内山 達雄)

## 秋 田 支 部

二〇一〇年度(平成二十二年)定例総会を四月二日に開催。委員会を含め五十六名出席。○九年度の決算および事業報告、一〇年度予算案、事業案を審議。

五月九日、里山山行として高根山、男亀森と女亀森の県南の低山を楽しんだ。会員外を含む十五名参加。

○九年度に実施される予定であった、秋田支部設立五十周年記念事業の一つとして計画されていた訪韓交流登山は、世界的に流行した新型インフルエンザのため延期されていたが、五月二十二日～二十七日に一年遅れで実施できた。韓国山岳会慶南

支部の会員とともに老姑壇、月出山、弥勒山を登山。ソウルでは韓国山岳会同友会の会員と交流。七名参加。

六月二十日、青森支部主管で、北東北三支部「青森・岩手・秋田」の県境にある四角岳登山が行われた。秋田支部からは九名参加。

六月十三日、太平山県立自然公園整備促進地域協議会の主催する「太平山山開き清掃登山」にサポーターとして十二名協力。秋田大学韓国留学生を含め、一般参加者は三十七名であった。

七月十一日、夏山支部山行、鳥海山・笹ヶ岳登山。残雪を踏み、鳥海山の勇姿を眺めながら、ニッコウキスゲ、ハクサンチドリ、コバイケイソウ等の咲き誇る、花の笹ヶ岳を楽しんだ。

十月二十四日、山行として、太平山中岳に二等三角点の標柱設置と周囲の刈り払いを行う。この三角点は上部が崩れていて、長い間位置がわからなかったが、ようやく確認できたものである。三角点ファンには朗報であった。会員外を含む十五名参加。

十一月十五日～二十三日、日本山岳会エベレスト登頂四十周年記念「ヒマラヤトレッキング」に参加。支部活性化プロジェクトチームも協力していたが参加者が少なく、現地での講演会等は中止となった(日本山岳会会員参加は僅か四名)。秋田支部三名参加。

十二月五日、年次晩餐会に五名出席。翌日の懇親山行・鎌倉

アルプスへ三名参加。

一月二十九日、有志新年会を実施。二十名参加。

支部会報「秋田山岳」を三回発行、通算八十三号となった。

日本山岳会は公益法人への移行申請することを三月総会で決定した。この後、支部の活動はどのようになるのか、何も変わりないと言われているが、会員の高齢化が進む秋田支部としては、以前のような事業には取り組むことはできず、その対応に苦慮している。

(鈴木 裕子)

## 山形支部

本年度の総会は、二〇一〇年(平成二十二年)四月十七日山形市ビッグウイングで開催。上程された前年度事業報告・収支決算報告・本年度事業計画(案)・収支予算書(案)が承認された。

また、本年度は山形支部創立六十周年にあたり、「記念誌」を発刊すべく「支部創立六十周年記念誌編纂委員会」を組織し、現況執行体制で今後支部運営に携わることが決定された。

主な事業(行事、山行等)

(一〇年)

・五月二十九日～三十日 「新緑の月山、六十里街道探訪」志津温泉宿泊(十一名参加)

・六月十二日 支部長会議、日本山岳会ルーム(支部長出席)

・六月十二日 本部総会、東京 プラザエフ(支部長出席)

・六月十三日 自然保護全国集会、東京 上智大学(支部長・自然保護担当出席)

・六月二十七日 公益一般公募登山「JAC会員と登ろう」鳥海山、HATJ共催(二十九名参加)

・八月二十日～二十六日 アルバインフォトクラブ、支部共催写真展、酒田市総合文化センター(開催期間中鑑賞者約千五百名)

・九月四日～六日 支部長会議、東京 多摩ニュータウン(支部長出席)

・十月十七日 公益一般公募登山「JAC会員と登ろう」HATJ共催 蔵王山(二十四名参加)

・十月十七日 公益一般公募登山「JAC会員と登ろう」HATJ共催 蔵王山(二十四名参加)

・九月十九日 峠の歴史探訪登山、山形・新潟県境(十六名参加)

・九月十九日 峠の歴史探訪登山、山形・新潟県境(十六名参加)

・十一月六日～七日「巨木探訪登山」「支部年次晩餐会」赤倉温泉(二十二名参加)

・十一月六日～七日「巨木探訪登山」「支部年次晩餐会」赤倉温泉(二十二名参加)

・十二月四日 支部長会議、日本山岳会ルーム(支部長出席)

・十二月四日 支部年次晩餐会、品川プリンスホテル(二名参加)

・十二月四日 支部年次晩餐会、品川プリンスホテル(二名参加)

(一一年)

・一月二十二日～二十三日 蔵王樹氷原を滑る会、蔵王国際高原ホテル（二十名参加）

・三月二十日～二十二日 鳥海山スキー登山（八名参加）

他に役員会（三回）、支部創立記念誌編纂委員会（七回）、監査会を実施。二〇一一年度支部総会を四月十六日に開催の予定。

支部の会員総数は過去十年來ほとんど変動なく、活動についても年齢層に応じた行事を消化しています。

近年の登山スタイル、社会人山岳団体、組織活動の変遷を踏まえ、まず組織の維持、継承を念頭に諸先輩の辿った六十年間の歩みを「社団法人日本山岳会山形支部六十周年記念誌」として纏め、次世代に引き継ぐことを重点としてきた。

法人改革はまもなく新法人移行に向けての新たな取り組みが望まれる。現況の支部会員構成や世代を考えたとき、今後は公益的な山岳の文化活動や、他団体との積極的な交流、また、隣接する各支部との密接な強調が強く望まれ時代になると考える。

（佐藤 淳志）

## 宮 城 支 部

二〇一〇年度（平成二十二年）の宮城支部の活動は、ほぼ毎月行われる支部会員の例月山行等の行事に加え、公益法人と

しての活動の一環として、一般登山者の方々を対象にした「公募登山」を船形山（一五〇〇・二丁）にて実施した。

周知活動に始まり、当日のマイクロバスの手配等全てが手探りの中での実施であったが、アンケートに寄せられた参加者からの意見は好評であったことから、次年度以降の事業の継続と、実施回数等を含め内容の充実を図っていくこととしている。

また、一年度は、当支部が全国支部懇談会の担当支部となっている。十月十五日（土）、岩手・宮城内陸地震から復興した栗原市の「ハイルザーム栗駒」を会場に、翌十六日（日）は栗駒山登山等を計画しているので、多くの会員に参加願えれば幸いです。

三月十一日、東北・関東を中心に、未曾有の大地震が到来し、体験は勿論、想像すらできないほどの大きな被害に見舞われた。当支部でも、自宅が津波に流されてしまった会員、建物に大きな損壊を受けた会員、津波による浸水で避難所生活を余儀なくされる会員など様々な影響を受けている。電気・ガス・水道といったライフラインが復旧せず、不自由な生活が続いているが、命を奪われた会員がいなかったことだけは不幸中の幸いであった。

こうした状況にはあるものの、郷土の復興のためにも「全国支部懇談会」をいつものように楽しく有意義な会にしたいと願っている。この秋集う会員諸兄との懇談を楽しみに、支部会

員一丸となって復興に努めていく所存である。(林田 健治)

## 福島支部

二〇一〇年度(平成二十二年)の支部総会は、五月八日に福島市において開催し、〇九年度の事業報告および収支決算報告、一〇年度の事業計画案および収支予算案などが承認された。

一〇年度の公益目的事業は〇八年度から実施している登山道の整備を東吾妻山において実施した。七月十二日、雨と強風の悪天ではあったが、姥ヶ原登山口から山頂を経て鳥子平登山口までの約三<sup>キ</sup>にわたり、ヤブの刈り払いや倒木の除去を行った。

共益事業としての登山は県内の山が中心となった。八月二十三日は吾妻連峰の中央にひろがる弥兵衛平を散策した。猛暑の続く夏だったが、二〇〇<sup>ミ</sup>の稜線の気温は二十度、一面に咲くキンコウカやエゾオヤマリンドウを観賞できた。九月十一、十二日は恒例の吾妻小舎納涼会を開催し、先輩会員や新人会員など十一名が参加して親睦を深めた。

秋山のシーズンに入った十月三、四日、十一名が参加して飯豊連峰の展望台として知られる鏡山に登ることにした。雨が強まったため途中から引き返したが、雨霧にかすむ薄紅葉のブナ林が印象に残る登山となった。二年連続の燕岳登山は、十一月二十二日に八名が合戦尾根を経由して登頂した。

納会登山は降雪が遅い阿武隈山地から選んで継続している。今年十二月七日に十一名が鎌倉岳の山頂から初冬の山並みの展望を楽しんだ。

他支部が主管した事業では、九月五、六日に東京多摩支部で主管した全国支部懇談会に四名が出席した。同時に開催された支部活性化会員集会で基調講演を行った兼森志郎氏(広島支部)と、福島支部四名のレポートは、活性化対策の参考にするため役員や吾妻小舎納涼会の参加者に配布した。そのほか、六月に開催された自然保護全国集会に一名、一月に山形支部が主管した「蔵王樹氷原を滑る会」に八名が参加している。

今年度は二名が入会し、支部事業や全国支部懇談会に参加した。

また、燕岳や鎌倉岳の登山に参加した非会員の入会も期待している。こうした状況を弾みのひとつとして、一層活発な支部を築くために多彩な事業を推進したい。(逸見 征勝)

## 栃木支部

栃木支部は設立して四年目を迎えた。設立当時三十四名で始まった本支部の会員は本年で五十名になり、公益事業・共益事業とも参加者が増え、クラブライフを楽しみながら、ますます充実した活動を行えるようになった。以下は二〇一〇年度(平

成二十二年度)の本支部の主な事業報告である。

四月十日(土)～十一日(日) 歴史探訪と春山登山。「足尾歴史館」を訪問し、館長の長井一雄氏から足尾の歴史の光と影の部分の講話をいただきながら展示資料を見学した。足尾銅山がわが国の近代国家創りに多大な貢献をしてきた反面、公害の原点であるという歴史の重みに感銘した。その後、銀山平の「旅館亀村別館」にて懇親会を行い宿泊。翌日は、庚申山班と備前楯山班に分かれての登山、雨模様の子報が出ていたが、幸いに雨にもあわず残雪の山を楽しんだ。(参加者二十四名)

六月二十日(日) 第三回山岳映画の夕べ。羽田栄治会員を講師に迎え、「アークイブって何のこと」と題した講演と「山男」一九六一年(昭和三十六年)作品、「未踏の水壁」一九六〇年(昭和三十五年)作品の二本の映画を鑑賞した。時代を感じさせない素晴らしい映像であった。(《公益的事業》(参加者八十五名))

七月四日(日) 日光山系清掃登山を県山岳連盟との共催で、奥日光周辺で実施した。本支部はこの事業を、「山の日プロジェクト」社会貢献事業として位置付け、前日には「日光の自然を考える集い」を開催し、地元の伊藤誠氏の講演会を催した。講演の内容は、鹿による食害についてが主なものであった。清掃活動は、本支部は西の湖から中禅寺西岸をハイキングしながら行った。参加者は総勢約二百名余、(本支部関係者参加者十二名)。また、九月四日(日)には、那須岳クリーンキャンペーン

にも参加し、日光と同じような活動に参加した。(本支部関係者参加者十六名)(《公益的事業》)

八月二十八日(土)～二十九日(日) 恒例の奥鬼怒での夏山行と懇親会。金精峠、根名草山越えの登山コースに六名、女夫淵からのハイキングコースに十二名が奥鬼怒温泉郷の加仁湯に集合。名湯で疲れを癒し、懇親会では登山談義に花が咲いた。翌日は全員で鬼怒沼と鬼怒沼山へのハイキングを行った。(参加者十八名)

十月十一日(月・祝) 秋山山行として、日光の市街地から登山で、日光連山の展望台である鳴虫山に登山した。紅葉には少し早い時期であったが、静かな山行を楽しんだ。好天に恵まれ、山頂付近はいくらか紅葉もはじまり、男体山を盟主とする日光連山の展望を満喫した。この山行は二月に予定している三支部(栃木・千葉・茨城)合同懇談会の下見山行として実施した。

十一月二十三日(火・祝) 第二回「ヒマラヤの集い」講演会。登山家でもありカメラマンでもある黒田誠氏を講師に迎え、氏のこれまでの山行や最新の登山活動の報告をしていただいた。アンデス、ヒマラヤ、アルプスなどでのクライミングやスキーの活動を素晴らしい映像とともに楽しませていただいた。(《公益的事業》(参加者六十一名))

十一月二十七日(土) 秋季講演会。「栃木の峠」の著者である

桑野正光会員（本支部会員）を講師に迎え、「峠でたどる栃木の峠と文化」と題して講演を行った。峠は、時代の盛衰とともに、時々の政治・経済や文化などと深い関わりを持ちながら地域の歴史とともに歩んできたが、今まさに時代の波の中に埋没し、人々の記憶から消え去ろうとしている。このまま地図の上からも消滅してしまえば、日本人の精神や文化も失うことになる。力説、興味の尽きない内容であった。《公益的事業》（参加者百十八名）

恒例となった三支部（栃木・千葉・茨城）の合同懇談会は、第四回目を迎え二月十二日（土）～十三日（日）、本支部の主管により日光市で開催した。初日の日光市内は降雪により一面の銀世界となり、遠来のお客様を歓迎した。まず、日光山興雲寺律院住職中川光喜氏の「日光の修験道」についての記念講演を拝聴、奈良時代から現代までの悠久の山岳宗教の歴史について勉強した。その後、宿舎に入り恒例の懇談会となった。

翌日は、素晴らしい好天に恵まれ、日光連山の展望台である鳴虫山登山班と日光の世界遺産巡り班に別れ、それぞれ充実した活動ができた。鳴虫山登山は、新雪の処女雪をラッセルしながら青空の下で登頂、このような機会は滅多にないので大いに感動。世界遺産巡り班は、地域のボランティアアガイドの案内で普段見学できないような「もう一つの日光」を堪能し、その後東照宮を職員の方に案内していただいた。それぞれの活動終了

後は、日光駅前で名物の「湯葉御膳」の昼食に舌鼓、昼食後解散となった。次年度は千葉支部の担当である。

本支部も少しずつだが所帯が大きくなりつつある。本年度も会員の期待にそえるよう、アルパインクラブとしての登山活動、会員相互の親睦を図る行事、そして地域に貢献する公益的事業の三本柱で充実した活動を活発に進めていく予定である。また、「山の日」制定に向けても、清掃登山などの行事や講演会の開催などの公益的事業を通して、積極的に取り組んで行くつもりである。

なお、十月一日付で創設以来支部長を務めた日下田實会員が勇退し、山野井武夫会員が支部長の任に就いた。（渡邊 雄二）

## 茨城支部

当支部は二〇〇七年（平成十九年）六月に、全国で二十七番目の支部として、二十一人の会員で発足した。現在三十一人となり、ほぼ隔月の講演会および山行を中心に意欲的にクラブライフを盛り上げて来ている。今年度は創立三周年を迎え、四回の講演会および二回の野外研修会さらに三回の支部山行と第二回海外山行を実施した。また特別山行として第三回自閉症者協会への登山支援を行った。

（講演会）

晩餐会で同席した縁で講師を依頼した内田博会員により「私のトレッキング体験―ヒンズークシユから横断山脈まで」の講演をしていただき、聴衆に感銘を与えた（五月）。

長岡正利会員による「カラコルムとヒンズークシユでの最近一世紀における氷河の変動」（九月）。

権名正明氏（茨城県山岳連盟海外委員長）による「エクアドル登山と中米の旅」を昨年に続いて二回目の講演をいただき、日本山岳協会との交流を一層深めることが出来た（十一月）。

奥井清会員（支部長代行）による「ダーウインの種の起源と人類の誕生」（二十一年一月）。

（野外研修会）

杉山敬特別会員（キノコアドバイザー）による「南会津・紅葉とキノコ狩り」体験教室（十月）。（十一人参加）。

堀内孝雄会員（森林インストラクター）による「愛宕山森林植物観察会」（十月）。（七人参加）。

（支部山行）

風神山―真弓神社、大竹正徳会員のリーダー。六人参加（四月）。

有明山、西川元嬉会員のリーダー。二人参加（八月）。

三岩岳、山本幸生会員のリーダー。六人参加（十月）。

（第二回海外山行）

八月三日―七日にわたり朝鮮半島の最高峰の白頭山（二七四

四〇）へ四人の会員と千葉支部会員ら計十一人で参加し、無事登頂を果たし元気に帰国した。

（第三回特別山行）

茨城県自閉症協会への協力支援として、三十五人の自閉症者およびその家族の登山にさいし、当支部の八人の会員が上高地山岳研究所に二泊して上高地の岳沢小屋（二二七〇）へ支援登山を行い、全員無事に到着して大きな歓声を上げることが出来た。

（三支部―栃木、千葉、茨城―合同懇親山行）

一一年二月十二―十三日に栃木支部主催により、日光市内ホテルにて講演会および懇親の集いがあり、翌日は鳴虫山登山および東照宮の世界遺産見学に参加し相互の交流を深めることが出来た。当支部より十三人が参加した。（浅野 勝己）

## 埼玉支部

・設立総会を二〇一〇年（平成二十二年）四月四日 さいたま市民会館で開催した。出席者は埼玉県在住会員 六十五名 委任状七十一名分（全会員百四十名）

石橋正美会員を議長に選出し、一号議案 埼玉支部規約、二号議案 二十二年度事業計画、三号議案 二十二年度予算、四号議案 役員選出。以上の議案について提案を行い、原案

通り承認される。

・四月十五日 支部委員会は支部委員十五名出席で総会の反省と各委員会の現状報告を行う。

委員会は広報、自然保護、山行・集会、安全登山、社会貢献、総務委員会で構成され、活動を開始する。

・五月十八日 支部委員会 十五名出席

・ホームページの開設準備で、試案を作成した。開設のためにはホスト（サーバー）契約が必要。ホームページの内容の中に埼玉の山に関する資料を蓄積して利用できるようにしたい。

・メールによる情報伝達のためのアドレスと現状を把握し、会員アドレスを確保する。

・会員の登山促進策として埼玉県五十山を参考にスタンブラリー等を企画する。

・六月十一日 支部委員会 十二名出席

・会員通信（支部会誌）の名称は埼玉支部報に決定し、発行は年間三回

・一〇年度の夏・秋・忘年・冬の「四季の山行」を計画し、各担当リーダーを決定。

・七月十四日 支部委員会 十一名出席

・支部報の第一号はA4で印刷をし、会員分百四十部、本部・他支部分三十部、新入会員分二十部、他の県内山岳団体分十

部の計二百部を印刷し配布した。

・八月十九日 支部委員会 十三名出席

・四季の山行 夏の山行は南アルプスの早川尾根に八月六日、八日に行った。三名参加

・九月九日 支部委員会 十二名出席

・社会貢献の関係団体との面会で埼玉支部の紹介のリーフレットが必要となり、作成した。

・九月十五日に「増加傾向の山岳遭難」のテーマで慈恵医大槍ヶ岳山岳診療所元勤務の野村埼玉支部副支部長の講演を開催する。四十三名参加

・十月十四日 支部委員会 十一名出席

・四季の山行 秋の山行は会津高原の七ヶ岳・三本槍岳の山行を行う。十二名参加

・自然保護は大高取山で植物と地質の勉強会を開催する。

・五十山ラリーは十一月から四月までの山行スケジュールを決定した。武甲山十一月十三日、金勝山十二月十一日、日和田山一月八日、宝登山二月五日、四阿屋山三月五日、両神山四月九日 以上を日帰りで行う。

・十二月九日 支部委員会 十名出席

・十二月十一日～十二日 忘年山行を行い、自分流の海外登山をテーマに大山会員、田尻会員の講演を行う。三十四名参加

・一月十三日 支部委員会 十名出席

・ 一月十五日 埼玉支部会員同士の親睦を目的にした懇談会を開催し、事業実績および計画の報告。三十名参加

・ 一月二十九日 「他人事でない山岳遭難」をテーマに埼玉県警山岳救助隊の飯田雅彦副隊長講演。八十六名参加。

・ 障害者の理解を深めるために障害者登山を企画しており、日和田山の登山に一年四月十七日を予定。

・ 二月九日 支部委員会十二名出席

・ 二月五日 スキー集会 嬌恋スキー場 五名参加

・ 二月十九日～二十日 四季の山 冬の山行 学習院光徳小屋および周辺スノーハイク

・ 埼玉支部報第二号を発行し、全員に郵送した。(富樫 信樹)

## 千葉支部

二〇一〇年(平成二十二年)五月十五日、千葉市において定例総会を開催し、〇九年度の事業報告および決算報告、一〇年度の事業計画案および予算案が提案通り承認された。今年度は

支部の基盤作りを最優先と考え、会員・会友同士の親睦を第一義とした諸山行や懇親会、併せて、近い将来の公益法人化を前

提とした一般参加者を対象とした登山に関する講演会ならびに前年度継続事業の房総半島分水嶺踏査等を実施した。

年度末会員数は百二十二名(含会友二十七名)で主な活動は

次の通りである。

### 一 山行

五月十六日三舟山、五月二十一～二十二日上高地、九月十一日～十二日那須岳と三斗小屋温泉、十月十七日石射太郎山、高

岩山、十一月十四日清澄山、十二月四日鎌倉アルプス、十二月十二日弘法山、一年一月二十二日嵯峨山、二月十三日日光・

鳴虫山

二 房総半島分水嶺踏査

二〇〇九年十月第一回長柄町六地藏をスタートに、今までで十四回の活動を実施、延べ参加人数は百七十名、踏査予定コース全体の約二分の一を踏査した。このうち二回は一般県民にも参加を呼びかけ公益活動の一端を担った。引き続き実施する。

三 懇親会、見学会

・ 八月二十一日 夏期ビールパーティ。アパホテル東京ベイ

・ 七月十三日 東京科学博物館見学。ガイドの案内で生物多様性展等を見学

・ 十月二日 千葉国体山岳競技応援。併せ千葉岳連と交流

四 講演会

・ 五月十五日「山登りと私」熊谷敏人氏(千葉市長)

・ 十月二十四日「登山の医学」一般県民を対象に公益活動の一環として千葉市教育委員会の後援も得て開催、参加者約百二十名。講師 増山茂会員(東京医科大学医療センター)

五 支部だより 年四回発行

六 会議等

通常総会五月十五日、支部委員会十一回開催。栃木・茨城・千葉三支部合同懇談会

七 本部および他支部行事参加

自然保護全国集会、全国支部懇談会、支部長会議、事務局担当者会議、埼玉支部設立総会、年次晩餐会

八 山の日イベント

講演会、分水嶺踏査参加の一般県民、会員に対しパンフレットを配布、広報活動を行った。(諏訪 吉春)

## 東京多摩支部

二〇〇九年(平成二十一年)二月に設立した東京多摩支部に  
とって、一〇年度は実質初年度。最大の課題は組織固めだった。  
総務、広報、IT、山行、集会、自然保護の六つの委員会の活  
動を軌道に乗せるとともに、多摩在住の日本山岳会会員の入会  
率が五三・三%と低いこともあり、いかに入会率を高め、事業  
を着実に進めていくかを念頭に置いた。

とくに力を注いだのは、①サテライト・サロン活動、②広報  
活動の充実、③設立記念事業「東京都県分境嶺踏査事業」、④第  
二十六回全国支部懇談会の開催、だった。

四百余名の日本山岳会会員が在住する多摩地区には都心に向  
かって走る交通網が発達している。路線別に近隣在住者が集う  
サテライト・サロンを組織した。立川、吉祥寺など五カ所で設  
立した。二カ月に一度、誰もが参加できる講演会、懇談会・懇  
親会等を開催している。未加入会員への呼び掛けも積極的に行  
い、組織固めの先兵となっている。

メディアによる広報活動は支部報「たま通信」を年四回発行、  
うち一回は未加入会員へも配布する。ホームページは一般の人  
たちも分かりやすいように内容を充実させた。メールマガジン  
「たま便り」は行事案内・報告を中心に会員百二十名に配信して  
いる。このメディアによるコミュニケーションとサテライト・  
サロンでの身近なコミュニケーションとが一体となって、幅広  
い、かつキメ細かい広報・PR活動が展開されるよう心掛けて  
いる。

「分境嶺踏査事業」は朝日・読売新聞に取り上げられたのが  
キッカケで一緒に歩きたいという一般読者からの問合せが殺  
到。毎回五十名前後の参加者のうち約半数が一般参加者となっ  
た。山行で日本山岳会の良さを知り、入会するケースが増えて  
いる。

第二十六回全国支部懇談会の開催は突然の話だった。五月十  
三日の日本山岳会常務理事会で東京多摩支部の主管が検討され  
てから九月五・六日の開催まで四カ月を切る時間のなかで、な

んとか開催でき、全国から百七十二名の会員に参加いただいた。各支部のご協力にもよるが、成功させなければならぬと集結した四十七名の東京多摩支部員の力も大きい。四十七士は、支部を支える核となっている。かけがえのないマンパワーである。

### 〈二〇一〇年度のおもな事業〉

一、定例山行 九回実施し延べ百二十名参加。

四月十七日／さくらハイク「美の山」十六名、五月八〜九日／山菜山行「八海山周辺」十六名、六月十一日／赤城山つつじハイク十六名、六月十八〜二十日／韓国交流登山「北漢山」十四名、七月二十五日／御前山十四名、八月二十一〜二十二日／北八ヶ岳七名、九月二十六日／大菩薩嶺十五名、十二月十二日／百蔵山十一名、二月二十七日／鍋割山十一名

二、東京都県分境嶺踏査事業

草戸山から浅間峠まで東京都と神奈川県・山梨県との分境嶺の踏査山行を五回実施した。延べ二百五十人参加。うち一般参加者は百十三名。

①六月十三日／大垂水峠〜景信山五十八名、②十月十七日／景信山〜和田峠五十八名、③十一月十四日／大垂水峠〜草戸山五十二名、④一月二十三日／三国山〜浅間峠四十九名、⑤三月十三日／和田峠〜三国山三十三名。

三、自然観察会 三回実施し延べ四十九名参加。

八月十一日／御岳山のレンゲショウマ観察会二十一名、十一月十七日／高尾の森十三名、一月八日／高尾山シモバシラ観察会十五名。

四、講演会

五月十日／神崎忠男会員の「高尾山からエベレストまで」、一月二十九日／金邦夫会員の「山やの矜持を取り戻そう」の二回実施。延べ二百八十九名参加。

五、近隣支部との交流

十一月十三日／山梨支部企画による横寄山山頂交流会を実施し二十一名参加（山梨十二名、東京多摩九名）

六、懇談会等 計五回実施し延べ四百二十七名参加。

七月十一日／納涼ビアパーティー三十九名、九月五日／全国支部懇談会百七十二名、九月六日／全国支部懇談会山行「高尾山」など八十四名、一月二十九日／年始晚餐会八十九名、一月三十日／年始記念山行「多摩のよこやま」四十三名。

七、サテライト・サロン 吉祥寺、立川、八王子・日野、花小金井、町田の五カ所で延べ十九回開催。参加者総数三百十九名。八、広報 支部報「たま通信」を年四回発行。ホームページを月平均五回更新し、十二月にリニューアル。メールマガジンとして「たま便り」を月五〜六回送信。受信者数百二十名。

九、幹事会十一回、常任幹事会五回、各委員会延べ四十二回。

(山本 憲一)

## 越後支部

○四月十日(土)新潟県山岳協会(以下、県山協)評議員会(総会)上越市(県山協委員会)

○「藤島玄山岳文庫」公開前整理 四月十六日(金)関川村(図書委員会)

○五月二十二日～二十三日(土・日)県山協「自然保護研修会」糸魚川市白池の森(自然保護、県山協委員会)

○五月二十三日(日)第二十二回「海のウエストン祭」協賛。親不知ミニテイー広場(事業委員会)

○支部総会 (総務委員会)  
五月二十九日(土)役員会および総会。会場は福島県大沼郡三島町宮下温泉「栄光館」、県外地区会津担当、役員会議二十名出席、総会出席者三十七名。

○九年度事業報告および決算報告承認。一〇年度事業計画および予算案審議承認。支部助成金の大幅減少。「藤島蔵書目録二〇一〇」完成。第二十二回「海のウエストン祭」協賛支援開始。今年度から六事業委員会―①事業委員会、②自然保護委員会、③図書委員会、④支部報委員会、⑤県山協委員会、⑥総務委員会を設置し活動する。越後支部に変革。予算不足補填策として「支部協力会費」を依頼、支部誌「越後山岳十二号」編纂準備積立第四年次了承。記念講演に森澤堅次支部会員(六八九

四)から「越後と会津の峠など」越後と会津の峠道を歴史、地理的關係を講演いただいた。

○懇親登山 (事業委員会、自然保護委員会)

五月三十日(日)恒例の総会の翌日登山。宿近くの飯谷山(七八三〇)。快晴の中、上佐竹信幸支部委員と共に二十五人が林間の植物を観察し、山頂からは飯豊山などが展望でき記念撮影後下山、素晴らしいブナの美林の中を楽しく旧飯谷神社経由で下山し、宿に戻り汗を流し懇親登山を終了した。自然保護として清掃登山を兼ねた懇親山行だった。

○六月十二日～十三日(土・日)一〇年度自然保護全国集会(東京)自然保護委員以下四名参加。(自然保護委員会)

○第五十三回高頭祭 七月二十五日(土)開催(事業委員会、自然保護委員会)

本年は寿像碑建立六十周年を記念して尾上会長に來山いただき、新潟県弥彦村地内弥彦山大平園地にて開催。弥彦山奥の院にて新潟県登山祭、弥彦松明登山祭も例年どおり併催実施された。支部参加者六十一名が高頭仁兵衛翁寿像碑前に集い、尾上会長の「山の日の制定について」講演会の後、弥彦山山頂へ移動し奥の院にて神事。山頂十六時二十分松明火点、下山開始。二十時弥彦神社到着、神事後弥彦駅前まで行進、体育館にての懇親会で幕を閉じた。弥彦山登山道の清掃登山実施。

○九月五日～六日(日・月)第二十六回全国支部懇談会(東京

多摩支部)参加者四名。支部活性化、支部報担当者会議(事業委員会、支部報委員会)

○九月十一日(十二日(土・日))日本山岳協会「全国自然保護総会」柏崎市・黒姫山(自然保護・県山協委員会)

○支部役員会 十二月十一日(土)支部晩餐会に先立ち役員十九名出席。全国支部長会議報告、各事業委員会報告、①事業委員会(総会後の懇親登山、高頭祭、信濃・山梨支部交流は諸事情により開催直前で中止)、②図書委員会(図書整備実施)、③自然保護委員会(飯谷山、弥彦山清掃登山を実施、自然保護会議等に参加)、④支部報委員会(支部会報「越後支部報」創刊号発行)、⑤県山協委員会(県山協諸行事参画・広報実施)、⑥総務委員会(総会実施、支部晩餐会実施、諸会議開催・出席)以上の報告と討議。現在の支部財政不足状況から「支部協力会費」を永年会員、終身会員にお願いし約半数の方から御出宝を得たが、大幅不足を改善出来ないため「支部会費」二千元徴収を提起し、来年度総会に諮るとした。「越後山岳」第十二号発刊準備進行中の報告。(総務委員会)

○支部晩餐会 十二月十一日(土) 会場・新潟東映ホテル支部会員計八十四名。平田大六前支部長から講演をいただく。井口拓夫永年会員の紹介および成海修新入会員の紹介を実施。本晩餐会は越後のサロンとしての機能を遺憾なく発揮し盛会であった。(総務委員会)

○会議開催状況 委員長会議四月二十四日、十月二十三日、三月二十六日、役員全体会議五月二十九日、十二月十一日の五回開催

○支部動向 入会一名、物故会員一名、退会三名。現支部会員二百二十三名、会友五名、合計二百二十八名。

支部役員二十名(支部長一、副支部長二、事務局長一、委員十、監事二)  
(田邊 信行)

## 信濃支部

四月十七日(二〇一〇年度(平成二十二年)) 信濃支部通常総会が三十八名の会員が出席して開催された。

今年度は役員改選の年であるが、前支部長の遺言として同じメンバーに続投してもらったことになった。

第六十四回ウェストン祭は六月五日に記念山行が行われ、早朝六時に鳥々宿での出発式の後、徳本峠へ向かった。日本山岳会本部役員、新入会員、安曇小学校生徒、保護者、一般参加者等三百名余が新緑の美しい鳥々谷を上高地まで八時間程かけて歩いたのであった。

六日はすばらしい天気のもとウェストン広場で十時から碑前祭が行われた。恒例の記念講演は日本山岳会常務理事成川隆顕氏の「穂高礼讃、山の日をつくろう」というテーマで、山の日

制定に向けての強いメッセージを込めた話であった。

八月十九日 一般登山愛好者向けに信濃毎日新聞社と共催で、岩崎元郎氏による「健康登山講座」の講演会を開催した。

十月十六・十七日 美ヶ原で前支部長金子丞二氏が一月十七日急逝されたことを偲び、追悼山行が行われた。奥様にも来ていただき、三十五名がそれぞれの思い出を辿りながら秋の草原を歩き、山本小屋では酒を酌み交わしながら夜遅くまで語りあった。

信濃支部は理事等の役員で携わっているものがいくつもあり、それぞれ年に数回行事がある。詳細については省略するが、主なものは次のようなものがある。

\* 松本市・カトマンズ市姉妹提携委員会

\* 松本市・グリーンデルワルト村姉妹提携委員会

\* 田淵行男記念館

\* 徳本峠友の会

信濃支部の山行は次の通り

・ 四月二十五日 御嶽山

・ 四月二十七日 上高地開山祭

・ 五月三・五日 立山 劔岳

・ 六月五日 ウェストン祭記念山行(鳥ヶ谷―徳本峠―上高地)

・ 七月十八日 甲武信ヶ岳

・ 八月七・九日 劔岳

・ 十月十六・十七日 美ヶ原追悼山行

・ 十一月七日 東山

・ 二月十二・十三日 八ヶ岳

・ 三月五・六日 乗鞍岳スキー山行

信濃支部報は第五十五号が六月に、第五十六号が一月に発行された。  
(飯村 富彦)

## 山 梨 支 部

山梨支部(支部長 古屋学而 会員八十二名)は、主な事業として、①山梨二百山(仮称)の選定と踏査、②第二十九回深田祭、③第六回山の博覧会「山を知ろう 山へ行こう」の開催、④第五十一回木暮祭、⑤東京多摩支部との交流会のほか、機関誌『甲斐山岳』第三号の発刊、定例支部山行などを行った。

①すでに「山梨百名山」は県が一九九六年(平成八年)に制定したが十年以上経過し、その後の登山者の要望などを鑑み、百山を追加設定することにして百四十山を新規に選んだ。今後とも実査を鋭意継続していく。

②深田祭は、毎年四月第三日曜日、本年度は十八日、深田氏終焉の地「茅ヶ岳」山麓の深田記念公園で行われた。多くの登山者が茅ヶ岳記念登山をすませてから碑前に参集した。来年度は三十回記念を予定しており、機関誌『甲斐山岳』第三号もその

特集号とした。

③山の博覧会は六回目となり、七月十日に実施した。県内外から四百三十名が参加し、会場の山梨学院メモリアルホールはほぼ満席だった。本年のテーマは「八ヶ岳特集」。山梨県の「やまなし山の日」および日本山岳会「山の日」関連プロジェクトの一環である。講演は三つ。青年小屋経営者で北杜警察署管内山岳救助隊長を務める竹内敬一さんの「八ヶ岳の魅力と危険」、県立考古博物館、保坂康夫さんの「縄文の八ヶ岳」、小淵沢高福寺住職、水原康道さんの「八ヶ岳の信仰」。最後に山梨放送制作の「八ヶ岳——〇〇万の奇跡に魅せられて」を上映した。また、閉会の挨拶では本部の成川隆顕常務理事が「山の日」制定の運動について強力にPRを行った。毎回山梨学院大学の絶大な支援と協力もあり、来年度は「南アルプス特集」と題して七月九日（土）に開催する予定である。

④十月十七日には第五十一回木暮祭を開催した。木暮理太郎生誕地の群馬県太田市から設立まもない「木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会」の会員二十四名がバスで駆けつけた。碑前祭のあと、皆で「きのこほうとう」食べながら交流を深めた。最後に矢崎会員が「木暮理太郎と増富の山々」と題したミニ講演を行った。

⑤二十二年二月に設立された東京多摩支部と、十一月十三日、奥多摩の都県境上にある横奇山山頂で交流会を開いた。総勢二

十名余が東西から参加し、短いながらも非常に充実した時間を共有でき感激した。今後も隣接支部との交流会を継続して実施していきたい。

(古屋 寿隆)

## 静岡支部

四月十四日（水）一八・三〇〜静岡労働会館視聴覚室にて静岡支部通常総会を開催した。大島会員（会報担当）の開会の辞で始まり、久保田支部長は挨拶で日本山岳会の課題である会員増等の課題と共に、本年は支部六十周年記念行事を行うので支部会員の協力をお願いした。その後、〇九年度事業報告、会計報告ならび監査報告が承認され、一〇年度事業計画案、予算案が承認された。なお、関連して六十周年記念行事実行運営のためのプロジェクトチームを立ち上げることを事務局より提案し承認された。次いで、〇九年度真富士山登山道整備事業報告と会計報告と一〇年度整備事業案と予算案が提案されたが詳細を欠いたためにやや紛糾した。このため支部長を中心に真富士山について委員会を立ち上げて検証することにして承認された。

出席会員三十四名、委任状出席六十名、計九十四名（支部員百二十二名）で総会は成立。

終了後が静岡駅近くの居酒屋「根菜舌」で大半の三十名が参加して懇親を深めた。

## 【公益】

六十周年記念事業のために二年続けた登山教室は休み。六十周年記念事業の記念展示会、記念シンポジウム（コージェイネータ大石惇元支部長、Ⅰ『富士山の雪崩と大量遭難』パネラー安間莊元支部長、八木功会員、Ⅱ『南アと深南部の自然保護』パネラー塩沢寿雄氏、加藤正俊氏、Ⅲ『南アにおける高山植物の鹿の食害』パネラー鶴飼一博会員、原田勉氏）、記念講演会（『アフリカの山とゴリラの魅力』講師京都大学大学院教授 山極寿一氏）を一般に公開して公益事業とした。展示会来場者延べ七百六十三名、シンポジウムと講演会参加者延べ百八十四名といずれも好評であった。

・真富士山登山道整備事業（三年計画の三年目）静岡市からの委託事業で真富士山の頂上から南へ駒引峠にかけての尾根道の整備を片山健会員中心に行い、完成した。六月十二日、六月二十六日、七月三日、九月十八日、十月二日に五十名くらいの参加で行った（大滝・一本杉峠に「日本山岳会」の名入りの案内板を設置）。またこの前後に荷揚げ、荷下ろしを行っている。

## 【共益】

・山行等  
①六十周年記念事業の一つとして記念山行を行った。九月二十六日（日）賤機山縦走

静岡駅前七時集合、C.L広澤和嘉会員、S.L宮城島好史会員

で十九名の参加。駅前から県庁・市役所前、浅間神社を経由して静岡の地名の由来となった賤機山をややまだ暑い茶畑道を三つの三角点を確認しながら昼食を挟んで約四時間ゆつくりと歩いた。

②定例の懇親山行を十一月十三、十四日に行った。今年度は中部地区支部会員担当ということで一日目、「静岡市井川少年自然の家」に集合し、懇親会を行った。二日目は、三ツ峰、七ツ峰一五三三に登った。幸い好天に恵まれ山行を楽しむことが出来た。参加人員は十六名であった。

③みかん狩りを十二月十二日に、由比・豊島農園で実施した。会員十七名、非会員十二名の参加、長谷川廣司会員の手打ち蕎麦の差し入れもあり大盛況であった。

## ・新年会

一一年（平成二十三年）一月九日、静岡駅南の静岡市駿河区南町「東海鮮会館」で正午から開催した。久保田支部長の挨拶、新永年会員の青島秀夫会員の挨拶、新入会会員として後藤尚会員、池谷和明会員の紹介と挨拶、入会希望の石間宏美氏の紹介と挨拶があり、その後乾杯となった。宴会の初めに遠来からの会友である山崎郁郎会員、里見清子会員の挨拶を受けた他、夏のモンゴル登山の説明があった。また宴会中に参加者全員の紹介を行った。和氣満々のうちに閉会の三時となった。支部会員三十六名と支部会友二名、入会希望者一名の計三十九名の参加

であつた。前々年三十二名、前年の三十六名よりまた多くなつた。

解散後、三分の二ほどの会員が静岡駅ビル内の居酒屋で二次会をもつた。

・会報

一〇年五月『不盡』六十七号発行

一一年十一月『不盡』六十八号発行 支部創立六十周年記念号

定例会 五月十二日(水) 十二名、十月十三日(水) 十三名、

六月九日(水) 十二名、十二月八日(水) 十名、七月十四日(水)

十六名、二月九日(水) 十七名、九月八日(水) 十二名、三月

九日(水) 十六名

・ビア懇親会 八月十一日(水) 静岡駅ビル「バルシェ」屋上

十六名

・その他 前年度に続いて定例会での会員講話を継続している。

五月は實川欣伸会員と大石博会員、六月は登三郎会員と有元利

通会員、七月は青島秀夫会員、熊岡達雄会員、望月照夫会員、

九月は青野興喜会員で、十月は近藤浩之会員が会員講話を行っ

た。(有元 利通)

## 東海支部

二〇一〇年度(平成二十二年)、東海支部では登山教室の充実

など通常の活動を続ける中で、支部設立五十周年(二〇一一年)に向けての事業の準備をはじめ、若い世代への対応・公益法人

改革など新しい流れへの対応なども積極的に進められた。一

方、冬季ローツェ南壁完登など数々の業績のあつた田辺治支部

員がダウラギリ峰で遭難し、その偲ぶ会を終えて間もなく東

海支部設立に携わつた支部常任評議員中世古隆司氏も年末に永

眠されるなど、東海支部の貴重な人材を失つた年でもあつた。

【支部創立五十周年事業計画の概要】

二〇一一年(平成二十三年)が支部設立五十周年になる。五

十周年は節目の年、記念行事を盛大に開催することとし、以下

の内容で検討を進めている。

一. 基本的考え方

冒険とバイオニアワークを目指す東海支部の活動の原点であ

る尖鋭的な海外登山を中心に一般支部員・支部友も参加できる

各種登山計画および講演を実施し最後に記念式典を行う。

二. 事業内容

(一) 式典

式典日時は二〇一一年十一月五日(土)とする。

(二) 海外登山隊の派遣(二〇一一年)

①若手を中心とした未踏ルートからの登山。

②第十一次インドヒマラヤ登山隊 内容については別に記

載。

(三) 記念講演・映画会

逐次実施予定。

(四) 五十山ラリー

支部活性化を目的とし現在実施中。

(五) 海外トレッキング

支部員・支部友が参加できる海外トレッキングで別表の九コースを実施する

【第十一回インドヒマラヤ登山隊派遣準備】

一九八八年にヤン峰に派遣して以来十次十四隊をインドヒマラヤの六〇〇〇峰に派遣してきた。第十一次となる一一年七月の派遣を目指し準備を進めている。今回はチャンドラ川流域のカルチャナラ左岸の六〇〇〇峰に未踏峰二座の登頂を目指す。

【五十山ラリーの展開】

支部創立五十周年の記念事業の一環として五十山ラリーを展開している。内容は日本百高山の内五十高山や東海支部選定の

別表

コース	時期
モンゴル高原	2010年5月実施済み
ネパール ラリグラスを見る旅(ランタン谷)	2011年4月
チベット カイラス	2011年5月頃
スイス・フランス ツェルマット・シャモニー	2011年6月下旬
インドヒマラヤ トレッキング	2011年7月
利尻島(国内)	2011年夏頃

花の山から五十山を登るなど指定された九コースでそれぞれ五十山を登ることを目標とするラリーで、期間は〇九年一月から一一年九月まで。参加者はいずれかのコースを選定して五十山にチャレンジしている。

【東海学生連盟の活躍】

東海山岳学生連盟は十年近く休眠状態であったが関係者の努力の結果〇九年十一月再設立総会が開催された。当初は七大学四十五名の参加者であったが、現在は十三大学百名を越える大所帯となった。一〇年は日中韓大学生交流登山への参加を果たし、今後は登山技術の向上、ヒマラヤ登山などをテーマに活動を続けている。

【生物多様性条約第十回締約国会議パートナーシップ事業への参加】

表記の会議が一〇年十月に名古屋市で開催された。この会議は市民社会の参加を重視していることから東海支部では森づくりに進めている猿投の森をフィールドとするパートナーシップ事業に参加し下記の四事業を実施した。

- ① 六人の生態学者による毎月一回の講演と森の観察会
  - ② 「森の幼稚園」の開園(幼児の森林体験)
  - ③ 「森の音楽祭」の開催
  - ④ 「森林観察道」の作設と森林観察会の観察
- 【ボランティア活動の拡大】

従来から知的発達障害児の集まりであるスペシャルオリンピックス(SO)愛知の支援登山を行ってきたが、本年は鈴鹿・朝明溪谷にて一泊登山を行った。また幼稚園児を対象とした親と子のふれあい登山を実施した。さらに視覚障害者支援登山にも取り組んだ。視覚障害者との登山により健常者自身も登山の意義を再認識することができ、継続的に取り組んで行くこととなっている。

(佐野 忠則)

## 岐阜支部

二〇一〇年度(平成二十二年)四月十七日総会は、中津川市の民宿「子の川」にて開催。総会前に一昨年の山岳講演会で尾上会長にお話しいただいた「ナイロンザイル事件」を題材にした井上靖の小説「氷壁」の映画鑑賞。尾上会長の話と比べるかなり脚色されるとおもいつつ、菅原謙治、山本富士子、野添ひとみといった往年のスター競演には好評であった。定時総会に入り、早田支部長の挨拶、本部の宮崎副会長から日本山岳会の抱える問題点、その対策として尾上会長が掲げる四つの再生プロジェクト、それらを細かく説明いただいた。引き続き議事に入り、事業報告・決算、事業計画・予算が承認された。最後に、岐阜今西錦司賞の発表があり、恵那山をフィールドにウエストーン祭の開催、ウエストーンの登った古道の復元、過日の

遭難事故に対する救助活動に顕著な功績があった、「中津川山岳会」が表彰された。

翌、十八日の春期懇親山行は前夜のお祓いが利いたのか絶好の登山日和。登山道は馬籠宿から南沢山を越え長野県清内路村に至るもので東山道の間道として江戸時代から栄えていた。N氏が復元取り組んでいて、同氏の案内で細野部落から林道を六ヶ程乗り入れる。左山右谷のトラバース道でゆっくり登り、左側の景境稜線が次第に低くなると南沢山頂上だった。広い笹原の頂上からは北アルプスや御岳、中央、南アルプスの眺望で全員満足。

五月二十三日の春期現地小集会の虎子山は、春日村もりもり村温泉駐車場に集まるが降り頼る雨で早々に中止。

六月十三日、今西錦司山行は越前富士と呼ばれる日野山。雨になりそうな空を眺めながら日野神社を右に見て、山腹の階段まじりの急登を難なく経て観音像が鎮座する室堂で小休止。山頂の社殿から右方向の三角点で「ヤッホー」を三唱して小雨の中を下山。北アルプス夏期山行は上高地東鎌尾根の西岳から南の赤沢山に八月二十七日から三日間かけて登る。西岳テント場から赤沢山の間に必要なV字キレットがあり、装備不足で断念する。秋期懇親山行は十月九日、十日に白川村の三方崩山の予定であったが、低気圧の湿った空気の流入で四国から東海で強雨予報で中止。

十一月七日の秋期現地小集会は滋賀県木之本の己高山に登る。山頂近くの鶏足寺跡の広い境内には門、石段等がそのまま残り遙か昔が偲ばれた。

五支部合同懇親山行で七尾市の城山に十一月十三日、十四日に参加。懇親会では会員による琴、尺八の演奏があり、なかなかのものであった。翌日の城山は尾根筋を通る道で両側は谷に向かつて鋭く切れ落ち、上杉謙信も手を焼いた難攻不落の城跡であった。食事後は地元ボランティアの案内で史跡を巡りながら下った。複雑な地形を利用した出城、石垣、抜け道で価値のある史跡であった。

冬期現地小集会は二月二十七日に寺尾千本桜の西側の汾陽寺山に登る。五百七十年前に創建された汾陽寺境内手前から取り付くが、あまり利用されていないのか草が覆っていたり倒木が多く注意深く道を辿る。稜線は平坦で三角点があったので頂上とした。食事後は急な道を下り千本桜道で解散。

二月二十六日、二十七日に富山立山町での大品山五支部合同懇親スキーに参加。大品山からあわすのスキー場、ゴンドラ乗り場へ滑降。尾根の右側は崖になっていて寄り過ぎないように注意。発電所の調整池は上部から左に巻き安全なところを通過。あわすのスキー場から左へ左へトラバースしてゴンドラ乗り場着。

三月十三日に御嶽山で冬山雪上登山を計画していたが、東日

本巨大地震の影響でスキー場のゴンドラが運休で中止した。

一般市民を対象にした山岳講演会を十一月十三日に、講師に元高山短期大学・飛騨自然博物館講師の小野木三郎氏を迎え「山の楽修」の演題で開催。

氏は、「アルプ」(「自然に対しての畏敬の思い」を貫いた文芸誌)という山の文芸・芸術雑誌が私の山の教科書、自然との付き合いの術のバイブルとなった。日本山岳会も発足当初から単に山頂に登る、山頂を征服するという純粹なスポーツ登山者だけから成立したと言いつつ「アルプ」的山とのかかわりが息づいていると思う。ふるさと岐阜の大地の緑の植生は北半球の縮図のようなもので、生物多様性の宝庫。「山の自然を楽しみ、遊山、楽山、知的山登り」に向かい、ゆつたりのんびり楽しむ自遊人が増えてきている今日この頃だ、と結ばれた。「権現の森林づくり」では、五月十五日「私たち県民の森林づくり」植樹祭とし、県関係者、支援会社、岐阜薬大、西濃学園、一般参加を含め総勢九十六名で権現の森林に登り、寄付をいただいた(財)オイスカさんに記念植樹をしていただいた後、四百本の植樹を行う。

十一月十三日は山岳講演会の小野木三郎講師を迎えて権現の森林で「芋煮会」を開く。小野木講師のお話や会員のフルート、横笛の演奏にあわせ大合唱で森づくりの労をねぎらった。四月四日から十二月五日までに、作業回数十九回、延べ参加者数は

二百七十九名を数えた。

その他、岐阜支部会報「岐阜山岳」を二回発行。自然保護全国集会、県内外山岳団体の会議・事業に積極的に参加し、情報収集と交流を深めた。

(今峰 正利)

## 京都支部

第五回京都「今西錦司賞」は会員の能田成氏が「日本海はどう出来たか」(ナカニシヤ出版)で受賞した。ユーラシア大陸の一部だった日本列島は、西日本は時計回りに、東日本は反時計回りに回転して今の形になっている。プレートテクトニクスに基づいて理論化した新しい発想が受賞理由。

京都支部会員の同志社大学山岳部現役四人がヒマラヤ山脈の西北に位置する未踏峰「チャンラ峰」(六五〇三m)に挑み、九月二十七日に初登頂に成功した(同志社大学西北ネパール登山隊)。

会員の有志の会として、陀羅佛小屋(長野県大田市)管理運営の京都陀羅佛会。滋賀県大津市の滋賀県有林の藤尾の森づくりの会等が活動している。

京都支部の主な活動は以下の通り。

四月二十一日(水) 日本山岳会京都支部総会 京大会館

四月二十八日(水) 自然保護部会ヤマシヤクヤク調査 京都北山

五月一日(土)～五月四日(火) 京都支部春山合宿 雷鳥沢

五月・十月(二回) スケッチ山行 甲斐駒ヶ岳・雨飾山

五月・十二月 平日例会山行(七回) 雨乞岳・池内山・ホサビ

山・長老ヶ岳・地藏杉・天狗畑・岩湧山・西山

六月十二日(土)、十三日(日) 今西錦司先生を偲ぶ会 北山荘

七月十七日(土)～十九日(月) 夏山山行・風吹大池

七月三十一日(土) 大文字山納涼山行

七月三十一日(土) 愛宕山千日詣

八月一日(日)～五日(木) 夏山山行・針ノ木岳・烏帽子小屋

八月二十八日(土) 沢登り山行・起し又谷

九月十七日(金) 夜～二十日(月) お月見山行 月山

九月十八日(土)～二十日(月) 広島支部合同山行 聖岳・高

岳・臥竜山

十月九日(土)～十一日(月) 秋山山行・須城山塊

十月十六日(土)、(日) 森の勉強会 西大台

十一月～一月(三回) 鈴鹿の静かな山歩き 尾高山・釈迦ヶ

岳・野登山・仙ヶ岳・旗山・油日岳

十一月十三日(土)～十四日(日) 五支部合同山行 七尾城山

一月十五日(土) 愛宕山初詣と柚子風呂

一月十九日(水) 京都支部新年会 南禅寺順正

一月二十六日(水) 山水会「チャンラ峰初登頂」 同志社大学

学生会館 小林博史会員

二月六日(日) カンジキ山行 ヤケオ山

二月十六日(水) 山水会「日本海はどう出来たか」 同志社大

学学生会館 能田成会員

二月十九日(土)、二十日(日) スキー例会 野麦スキー場

二月二十六日(土)、二十七日(日) 五支部合同スキー山行 大

品山

(伊原 哲士)

## 富山支部

・播隆上人ゆかりの地上宝村探訪

播隆上人の足跡を学ぶ会を会員五名、播隆生家の会二名の参加で九月十八日に実施した。上宝ふるさと歴史館、釈氏岩屋参籠修行の地)、本覚寺(臨濟宗)を訪ねた。上宝郷土研究会の川上会長・佐野会員から笠ヶ岳登頂ルートなどの話を伺い、本覚寺石井住職から播隆自筆の「迦多賀岳再興記」などの所蔵品を見せていただいた。翌日は三名が新穂高温泉から別の三名の会員とともに笠ヶ岳に登った。

・第三回山岳講演会

公益事業として始めた支部会員による県民向け講演会。今年度は二月十八日富山県民会館において、金沢大学医学部十全山岳会前会長北野喜行氏による「立山・剷岳周辺に発生した高山病と外傷―十全山岳会夏山診療活動記録から」。重症高山病の

発症事例やヘリコプター搬送された外傷登山者の症例などが紹介され、安全登山へのアドバイスがあった。五十六名出席

・五支部合同スキー山行(富山支部担当)

昨年から富山支部も仲間に入れていただいた合同山行。二月二十六日立山山麓の立山国際ホテルに関西・京都・福井・岐阜・富山の各支部から三十三名が集結。翌日リフトを乗り継いでゴンドラ山頂駅に集合、三班に分かれて瀬戸蔵山→大品山→粟栗野スキー場のコースを滑った。

・二〇一〇年度の例会山行や行事

四月十六日 一〇年度総会(富山電気ビル)二十五名

五月八日 高頭山登山道整備 六名

五月九日 第二十五回播隆祭(播隆上人顕頌碑前)会員十七名と生家の会の方々二十九名、一般登山者等計約六十名。散会后高頭山へ。

六月十二日 金剛堂山 十一名

七月三日 僧ヶ岳 六名

八月五日 例会(とやま市民交流館)十二名 正橋剛二会員が講演「山の話あれこれ」、北の門で懇親会

九月五〜六日 全国支部懇談会(多摩市京王プラザホテル)二

名

九月十九〜二十日 笠ヶ岳 笠新道ルート 六名

十月五〜六日 八ヶ岳 五名 赤岳展望荘でJACC〇〇会のメ

ンバーと交流

十一月十三、十四日 五支部合同懇親山行（七尾城山）八名

十二月四日 年次晩餐会 五名

十二月十日 支部忘年会 十七名 とやま市民交流館でDVD

「花嫁の峰チヨゴリザ」を上映後ふる里で懇親会

一月二十三日 大品山、粟栗野 六名 下山後立山国際ホテル

で親睦会総会 十五名

二月二十六、二十七日 五支部合同スキー山行 九名

〇八年四月まで長きにわたり木戸前支部長の下で事務局長を

つとめられた高柳清美会員が三月十五日急逝された。心からこ

冥福をお祈りいたします。

（山田 信明）

## 石川支部

石川支部は四月十七日（土）、二〇一〇年度（平成二十二年）度

定期総会を白山市瀬波の「白山里」で開催し、前年度の事業報

告、会計報告の後、今年度の事業計画案、予算案等を承認する

とともに、役員改選では新事務局長兼石川県山岳協会理事に前

川陽会員を選任した。

本年度の事業活動では、中川支部長提唱による「山岳からし

い公益事業」として「ふるさと登山道整備事業」を本格的にス

タートさせた。特別作業チームの西嶋鍊太郎チーフリーダーを中

心とした多数の会員の参加により連帯感が醸成され、支部の活  
性化が図られた。

また、セブンサミッターの田中康典会員指導による登山技術

講習会を富山県立山町の国立登山研修所で実施し、会員の技術

向上を図った。

主な事業内容については以下のとおりである。

・四月十七日 一〇年度定期総会 出席者二十名（委任状十五

名）

会員動向としては二名が会友から会員に、四名が会友として

入会した。

・四月十八日 山岳講演会（支部共催公益事業） 演題「夢を

追ってセブンサミッツ」、講師「田中康典会員」、会場「深田

久弥山の文化館」参加者四十名

・四月二十四日、二十五日 テント泊山行「野伏ヶ岳」参加者

八名

・五月九日 山岳講演会（支部主催公益事業） 演題「夢を追っ

てセブンサミッツ」、講師「田中康典会員」、会場「石川県金

沢勤労者プラザ」参加者六十名

・五月十六日 ふるさと登山道整備調査（公益事業）「順尾山、

奥高尾山」兼新緑山行（順尾山、大倉山）参加者十六名

・五月三十日 ふるさと登山道整備調査兼新緑山行（公益事業）

「中宮山、大瓢箪山」参加者十四名

- ・六月十二日～十三日 ふるさと登山道整備作業（公益事業）「杉峠・小原峠」現地までの林道崩落通行止めにて中止
- ・六月十九日～二十日 登山技術講習会（初級～中級）会場「立山町・国立登山研修所」アルパイン・ガイドおよび上級登攀ガイド資格を有する田中康典会員指導によりロープやスリング等の操作方法と屋内人口壁及び屋外人口壁における登攀と懸垂下降の研修を実施した。参加者十七名
- ・七月四日 自然観察会（公益事業）「中宮山展望台」荒天のため中止
- ・八月二十三日～二十六日 北アルプス縦走「雲の平」水晶岳～赤牛岳～高天原温泉」参加者三名
- ・九月二十八日～十月二日 ふるさと登山道整備作業（公益事業）「順尾山～奥高尾山間登山道復旧整備」金沢市湯涌温泉南方に位置する奥高尾山と順尾山を結ぶ約三キロの登山道を刈込み等で整備し「浅扉みくまりの道」と名付ける。また、途中二ヶ所のピークを、「心野谷山」「西谷山」と名付け、コース全体を分かりやすく、親しみやすくする。アップダウンのある同コースは金沢近郊にしてポリウム感が楽しめ、登山愛好者からも期待が高い。延べ参加者四十一名
- ・十一月十三日～十四日 第十回五支部（富山・福井・岐阜・京都・石川）合同懇親山行（石川支部担当）
- 十一月十三日、七尾市中島町の「国民宿舎能登小牧台」に神

崎副会長や五支部メンバー等、総勢六十三名が集合。神崎副会長の「支部活性化」についての講演後、中川支部長の挨拶で懇親会となる。途中、支部会員とその仲間による尺八と箏で「春の海」等を演奏。翌日は上杉謙信が攻略に二百八十日を要したとされる七尾城址の登城路を登り晩秋の山城を散策した。

- ・一月十五日～十六日 新春登山と新年会 「動山・大杉青年の家」新雪のかんじき山行と猪肉や牡蠣貝等の新年会で盛り上がる。参加者二十四名
- ・二月二十日 冬山かんじき山行 「富士写ヶ岳」参加者十名

支部会報「峰」発行 「平成二十二年第一号～第五号」

（前川 陽）

## 福井支部

四月三日 京都支部・関西支部・「藤尾の森作り」の会との交流会を、プラントピア朝日と丹生山地を歩く。

四月九日 総会に向けての役員会を開催する。

四月十七日 福井県職員会館にて出席者および委任状を含め五十六名の参加で始まる。事業報告・新年度の事業計画案・決算報告・予算案が提案され、全議案、原案通り承認された。その後懇親会があり会員同士の交流を深めた。

五月九日 岩岳登山と支部会員の白馬村どんぐりロックガーデン散策。

五月二十九～三十日 前日は泰澄祭の前夜祭、翌日は、岐阜支部・富山支部・石川支部・京都支部・福井支部と当日参加者達と越知山までの泰澄ウォークが行われ、越知神社の御本社にて神事を受け、野外コンサートが行われた。

六月十九日～二十日 上高地山岳研究所泊まり（上高地周辺を歩く）

七月二十四～二十五日 白山集中登山

八月八日 森づくりおよび散策路の整備

九月四～五日 全国支部懇談会および支部長会議が東京多摩支部にて行われた。

九月二～二十日 チベット未踏峰登山（ダカンリー峰の山頂に故三田村会員のピッケルを立てる）

十月十七日 初榊山登山

十一月六～七日 東九州支部創立五十周年記念事業に参加

十一月七日 泰澄の森づくりおよび散策路の整備

十一月十三～十四日 五支部合同懇親山行（石川支部主管）

七尾城山への登山に参加

十一月二十二～二十五日 立山スキー初滑り

四月～十一月まで夜叉ヶ池パトロール

十二月四～五日 日本山岳会年次晩餐会に参加

十二月十九～二十日 福井支部晩餐会（かんぼの宿福井）山行は文殊山

一月八～九日 スキージャムにてスキー研修

二月十八～二十二日 北海道スキー研修

二月二十六～二十七日 五支部山スキー（雷鳥バレーから大品山）

三月二十日 岩籠山に登山

（船田 洋子）

## 関西支部

開始から一年が経過した「近畿分水嶺踏査」は二十二年四月現在、宇陀山地東端、奈良と三重の県境に位置する三峰山（霧水で有名）まで踏破した後、青山高原を経て鈴鹿峠から鈴鹿山脈を順調に北上している。通年温順な鈴鹿の山々も今冬は多くの降雪があり、鎌ヶ岳から竜ヶ岳の縦走はそれまでの日帰り山行からテント山行となったので苦勞も多かった。三月末の治田峠から藤原岳・鈴北岳を経て鞍掛峠までの行程は冬山の様相を呈しており、深い雪と重荷に喘いだがい深い行程となった。講演関係も「東チベットーカンリガルポ山群ロブチン峰初登頂」は成功への道程はもとより、地球観測衛星から得たデータと現地での注意深い観測から山座同定や標高の推定を行った報告などと興味深く、今後の当該地域への興味をさらに亢進させる

ものであった。

四国に支部をという機運が高まる中、「四国同好会」の活動は徳島県をはじめとした会員の増加とともに活発化している。十月十七日、同好会が主催した「小島烏水に学ぶもの」と題した講演会は講師に烏水研究の第一人者である会員で作家の近藤信行氏を招いて行われたが、四国出身の烏水の生い立ちやアルビニズムを広めるに到った経緯、登山にとどまらない幅広い功績について、耳を傾ける会員および一般参加者は八十五名にほった。

例年十一月に行っている「著者と語る会」は支部の蔵書を大阪府立中央図書館に寄託したこともあり、会員外にも公開して中央図書館の会議室で行われるようになっていた。今回は「大阪山の日」の行事の一環として、十一月十三日に平井一正(チヨゴリザ登頂者) 会員に「未知の世界に挑んだ五十年」と題した講演を行ってもらった。一九五八年(昭和三十三年)黎明期のヒマラヤ、チヨゴリザ初登頂後、多くの遠征隊で指揮をとられた半世紀の情熱と精神力の継続は山登り以外にも通じる示唆に富んだ話で、聴講した三十二名が感銘を受けた。

〈総務〉

・総会 四月二十一日 大阪セルロイド会館、参加者三十六名  
 ・評議員会 二〇一一年(平成二十三年) 四月十三日(予定)  
 (総会議案審議) 大阪凌霜クラブ

・夏期懇談会 八月二十五日 大阪凌霜クラブ 参加者五十名

講演・「東チベット・カンリガルボ山群ロブチン峰初登頂」

講師・井上達男会員(神戸大学・中国地質大学合同カンリガルボ山群学術登山隊長)

・新年会 一一年十月二十六日 梅田大東洋、参加者五十四名

・藤木祭 一〇年九月二十六日 芦屋高座の滝前 参加者百名

(大阪府、兵庫県山岳連共催)

〈山行〉

・四〇〇〇山ケランブリ

四月四・五日 「奥美濃 烏帽子山・高丸」参加者二名(会員

外一名)

五月十五・十六日「熊野 雨谷山・西ノ峯・一族山」五名(会

員外二名)

六月十三・十四日 「大蛇窟・三津河落山など」四名(会員外

一名)

七月三・四日「花房山・権現山」五名(会員外三名)

八月十二・十六日「光岳・信濃俣・大根沢山・大無間山」七名

(会員外二名)

九月二十四・二十五日「タンボ・雷倉」六名(会員外三名)

十月二・三日「七面山・頂仙岳」六名(会員外三名)

十一月二十二・二十三日 「飯盛山・迷岳・古ヶ丸山」五名(会

員外二名)

十二月二十五・二十六日「上谷山」八名(会員外四名)

一月九・十日「観音山・扇形山」七名(会員外一名)

二月十一・十二日「和佐又山・白屋岳」七名(会員外四名)

三月十二・十三日「白髭山・勝負塚山」四名(会員外一名)

三月十九・二十日「道齊山・飯降山・鷲鞍岳」五名(会員外二名)

・近畿分水嶺踏査

十三回目 四月二十四・二十五日「天狗山・高見山・三峰山」

二十四日十八名(会員外四名)二十五日二十四名(会員外七名)

十四回目 五月二十二・二十三日「学能堂山・大洞山・尼ヶ岳」

二十二日十五名(会員外六名)二十三日十八名(会員外六名)

十五回目 六月二十六・二十七日「桜峠・布引峠・塩見峠・青

山高原」十五名(会員外三名)

十六回目 七月二十四・二十五日「青山峠・笠取山・長野峠」

二十四日二十名(会員外五名)二十五日二十一名(会員外五名)

十七回目 八月二十一・二十二日「長野峠・伊賀越・蝙蝠峠」

二十一日九名(会員外一名)二十二日十名(会員外二名)

十八回目 九月十九・二十日「蝙蝠峠・靈山・ゾロ峠」十九日

十三名(会員外二名)二十日九名(会員外三名)

十九回目 十月二十三・二十四日「那須ヶ原山・高畑山・安楽

越」二十三日九名(会員外三名)二十四日七名(会員外三名)

二十回目 十一月二十・二十一日「安楽越・仙ヶ岳・水沢峠」

二十日二十名(会員外四名)二十一日十八名(会員外三名)

二十一回目 十二月十八・十九日「鎌ヶ岳・御在所岳・根の平

峠」十八日十三名(会員外二名)十九日十七名(会員外二名)

二十二回目 一月二十九・三十日「中峠・羽鳥峰峠・八風峠」

二十九日十一名(会員外三名)三十日十一名(会員外三名)

二十三回目 二月二十六・二十七日「三池岳・竜ヶ岳」二十六

日十二名(会員外三名)二十七日十二名(会員外三名)

二十四回目 三月二十六・二十七日「治田峠・藤原岳・御池岳・

三国岳」二十六日十一名(会員外二名)二十七日十一名(会員

外二名)

・ゆるやか山行

四月十四日 東山三十六峰一「伏見稲荷・阿弥陀ヶ峰」二十五

名(会員外三名)

六月九日 東山三十六峰二「鳥辺山・栗田山・双林寺」十三名

(会員外二名)

十月五日 東山三十六峰三「蹴上・南禅寺山・吉田山」十名(会

員外一名)

十一月九日 東山三十六峰四「大文字山・北白川山・茶山」十

三名(会員外二名)

十二月七日 東山三十六峰五「瓜生山・赤山」十三名(会員外

二名)

三月二十九日 東山三十六峰六「比叡山」十五名(会員外二名)

・おおさか「山の日」関連行事

十一月二十七日 孫と一緒にハイキング「ほしだ園地」八名(子供三名)

・自然観察山行

五月十二日 「クリンソウを見に」十四名(会員外四名)

三月二日 「フクジュソウを見に」四名

・レスキュー講座(実技)

十二月四日 蓬萊峡四名

・その他の山行

五月三十一日 伏条台杉を訪ねて「湯槽山(片波山)」六名

十二月十二日 多紀アルプス「金山 鬼の架け橋」七名(会員外一名)

外一名)

一月九日 陽だまりハイク 播磨の山「三濃山」十八名(会員外五名)

外五名)

二月二十二～二十四日 近場でスキー「ハチ高原」四名(会員外一名)

外一名)

二月二十六・二十七日 五支部合同スキー「大品山」五名

〈自然保護〉

・やまみち巡視保全活動

四月十五日 北山自然歩道 四名

九月十七日 山脈自然歩道 三名

二月二十四日 竜王山自然歩道 八名

・自然観察会(山行委員会と共催)

五月十二日 三嶽 クリンソウ群落 十四名(会員外四名)

三月二日 ポンボン山 福寿草群落 四名

・東お多福山草原化調査作業(四団体協働)

五月二十六日 春の植生調査 四名

七月二十八日 夏の植生調査 四名

十月十三日 秋の植生調査 六名

十一月二十四日 刈払い作業 三名

・本山寺の森づくり準備調査活動

八月三十一日 一名

十二月二十七日 二名

三月七日 二名

・第一四回森の勉強会(東海・京都・関西支部共催 担当関西支部)

十月十六・十七日 西大台 冷湿帯の森林 横田岳人 龍谷大

学准教授 三十一名

・西大台地区利用適正化計画検討協議会

十二月十八日・二月二十一日 上北山村 各一名

・自然保護全国集会

六月十二・十三日 東京 上智大学 二名

〈その他〉

・支部報

・支部報

一三九、一四〇、一四一、一四二号（各四百五十部）を刊行した。

（重廣 恒夫）

## 広島支部

広島支部は二〇一〇年（平成二十二年）十一月三日に創立十三周年を迎えた。当年度の支部活動を次の六項目でまとめてみた。

① 拡充する活動に合わせて支部組織を十二委員会・部とした。指導、遭難対策の二委員会を一時指導遭難対策委員会にしたが、年度途中で安全登山推進委員会に変えた。ジュニア・ユース育成委員会と支部ルーム委員会を新たに設けた。

② 安全登山推進委員会で先行したのがJ・H・A・T（J・A・C広島支部アルパインチーム）。六名のスタッフと第一期生十名がクライミングを中心に二年間かけて岳人としてのリーダーづくりを目指している。この二月には大山北壁を登攀した。

③ J・A・C広島支部隊が五月二日、中国四川省のシャーチャンラー峰（五四七〇m）に初登頂した。北東壁から松島宏、佐藤建会員が一峰を、北稜から吉村千春（隊長）、加藤満会員が三峰を攻略した。

④ 例会山行がグレードアップした。第一山行委員会は日帰り

ペースだったが新たに宿泊を取り入れ延べ三百四十八名が参加した。北アルプス遠征五年目は奥穂高岳を選び十二名が参加した。第二山行委員会は四回の北アルプス遠征（槍ヶ岳、霞沢岳、東沢谷、正月の常念岳）や地元（山）の山（テント泊）に百二十四名が参加した。

⑤ 中国新聞から受託している登山講座は七年目の運営を終えた。三地区（広島、福山、呉）四講座十一クラスの参加延べ人数が一千七百十二名、スタッフ延べ人数三百二十五名を加えると二千三十七名の大台となった。新たに設けた小学生対象のジュニア自然学校には、ときおりP・T・Aも加えて実施し、今後の拡大が期待されている。

⑥ 交流委員会は京都支部、北九州支部と交流を重ねている。東京多摩支部主催の全国支部懇談会に先がけて開かれた支部活性化会員集会（本部活性化プロジェクト主催）では要請を受けた兼森志郎総務委員長が基調講演を行った。東北各支部の会員有志で結成された七夕会が来広し交流登山を行った。これがかきかけで八方尾根での交流スキーへと発展した。（国枝 忠幹）

## 山陰支部

二〇一〇年度（平成二十二年）は、高田支部長退任のあと白根新支部長が総会で選出された。

四月十六日 通常総会 米子市公会堂 二十六名  
 五月二十一日 五月例会 米子市公会堂 十三名  
 六月十二～十三日 支部長会・総会 東京 一名  
 六月十八日 六月例会 米子市公会堂 十七名  
 七月十七～十九日 雨飾山山行 四名  
 七月二十四日 七月例会 米子市公会堂 十三名  
 支部報「きやらぼく八号」発行  
 八月二十二日～九月三日 DBSを利用した県民訪口派遣事業に参加。韓国・ロシア 八名  
 八月二十八日 八月例会 米子市公会堂 七名  
 九月四～五日 支部長会議・支部懇談会 東京・多摩支部一名  
 九月二十五日 九月例会 米子市公会堂 十三名  
 十月二十三日 一〇月例会 米子市公会堂 十一名  
 「大山頂上トイレの汚泥キャリイダウンボランティア」参加 二名  
 北九州支部創立十周年記念式典・英彦山登山 四名  
 十一月二十七日 十一月例会 米子市公会堂 十四名  
 十二月十二日 支部年次晩餐会 米子ワシントンホテル ゲス  
 ト高橋保夫会員 二十四名  
 支部報「きやらぼく九号」発行  
 一月二十七日 一月例会 米子市公会堂 十二名  
 二月五～六日 全国支部事務局担当者会議 東京 一名

二月十一～十二日 大山冬山パトロール 三名  
 二月二十六日 二月例会 米子市公会堂 十三名  
 三月十二～十三日 大山冬山パトロール 五名  
 三月二十六日 三月例会 米子市公会堂 十三名  
 「大山概念図」第四版第一回印刷限定二百部  
 改訂は十二年ぶり、改訂版発行の要望があったことから、大山遭難防止協会、地元大山町、伯耆町の協力により大改訂を行った。現地調査や名称変更には岳獅会の絶大な協力なくしては成し得なかった点が多い。  
 現時点では、最も正確にまとまった登山用の図面として、八橋警察署管内・大山遭難対策用「大山エリアマップ」に活用される予定である。  
 その他の活動として、「大山横手道ブナを育成する会」の事務局長として、山陰支部会員が獅子奮闘しており仲間として今後一層力を入れたい分野である。  
 今後の長期ビジョンとして海外登山だけでなく、身近な伯耆・出雲の山々から百山を選んで、創立七十周年には「雲伯百山」(仮称)として発行できるような記録法と楽しみ方を工夫し、新会員募集の手段にもなるような多目的登山に向けて努力する覚悟である。  
 (伊澤 寿高)

## 福岡支部

《二〇一〇年度（平成二十二年）の主な事業》

●「平成二十二年通常総会」を一〇年四月二十五日に福岡市中央区赤坂の「みくに」にて開催した。出席者二十六名、委任状三十五名、計六十一名。副島勝人支部長挨拶につづき、平成二十一年度事業報告、平成二十一年度会計報告、役員改選、平成二十二年事業計画、平成二十二年会計予算等が審議され承認された。新役員については以下のとおりで承認された。

支部長：副島勝人（八二二五）、副支部長：中馬董人（六二二二）、高木莊輔（二二九二）、委員（総務）：渡部秀樹（九八二六）〔総務協力員：渡邊美代子（二三五四六）〕、（会計）：佐々木耕二（二一九九四）、（支部報）：辻和毅（七六九八）、倉知清司（七一三〇）、（自然保護）：山本博（二二三二）、井上晋（二二五四〇）、（事業）：藤野忠臣（九三八九）、酒匂輝昌（二〇七九七）、監事：浦一美（九五〇六）、藤井哲夫（二二三八五）、顧問：田中昭男（三七二四）、松本僮夫（四六〇七）、深田泰三（八一三六）、中山健（二〇三〇九）、事務局：渡部秀樹

●支部報No.二十三『郷土の山々―懐かしき山径と歴史をふりかえる』特集号を一〇年四月十六日に発行した。主な内容：「福岡支部状況報告二期目を終えて（支部長・副島勝人）」、「宝満山の古代祭祀遺跡（小西信二）」、「昭和三十年頃の祖母・大崩山群（松

本僮夫）」「わがふる里の山・大坂山（中山健）」「北九州の山：…そして愛しき岳人たち（成末洋介）」「懐かしき阿蘇の高岳（松隈茂）」「雷山スキー場での写真（井上晋）」「私の山は福知山から始まった（酒匂輝昌）」、「幻のメトロガン（深田泰三）」「サハラ砂漠の真ん中アルジェリア最高峰タハト山に登る（渡部秀樹）」他。

●支部報No.二十四『世界遺産屋久島の自然保護を考える』特集号を一一年一月二十二日に発行した。主な内容：「福岡支部状況報告二期目を迎えて（支部長・副島勝人）」、「屋久島への提言、まで（山本博）」、「屋久島世界遺産登録と現状（太田五雄）」、「屋久杉の受難に想う・伐採と保護（松本僮夫）」、「ヤクシカと植物の保護（井上晋）」、「自然保護雑考（中山健）」、「北アルプスと屋久島を歩いて思うこと（大和正典）」、「事務局報告（渡部秀樹）」他。

●「岳人のつどい」を一一年一月二十二日（土）に開催した。映画「白き水河の果てに」（一九七七年日本K2登山隊記録映画）を上映。映画解説を登頂者である重廣恒夫関西支部長にお願いした。参加者十二四名（会員二十八名、会員外九十六名）会場：太宰府館まほろばホール。また同会場にて懇親会を開催した。参加者六十七名（会員二十八名、会員外三十九名）

●自然保護全国集会（日本山岳会自然保護委員会との共催）に参加した。一一年六月十二日（土）～十三日（日）「世界自然遺

産」を考える―自然環境の保全と利用のあり方を考える―をテーマに上智大学四ツ谷キャンパス（東京都千代田区）にて開催。福岡支部の太田五雄がパネリストとして参加。

●「山の図書館の集い」を九州登山情報センターと共催で行い、日本山岳会所蔵の貴重な映画『ナンダコット征服』と『THE EPIC OF EVEREST』を上映し渡部秀樹が解説した。一〇年十月二十四日（日）会場…大宰府館まほろばホール

●山行、自然観察会など

一〇年四月二十五日（日）「天拝山歴史ハイク」を開催した。参加者十六名。

一〇年十一月十三日（土）～十四日（日）くじゅう飯田高原タテ原湿原、長者原～雨ヶ池～法華院にて自然観察会を行った。参加者十一名。

一〇年十二月十一日（土）「忘年登山・二丈岳」と懇親会（きらの湯）を開催した。参加者十六名。（渡部 秀樹）

## 北九州支部

●通常総会開催 二〇一〇年（平成二十二年）四月二十四日（土）

（一）第十一回通常総会を小倉リーセントホテルで開催。出席者四十八人、委任状提出者六十人。大庭支部長の挨拶に続き、

平成二十二年度の事業報告、収支決算報告、監査報告が承認され、引き続き平成二十二年度の、役員人事（案）、事業計画（案）、収支予算（案）が審議され承認可決された。

（二）記念講演会 講師、日本山岳会北九州支部 園川陽造会員、演題「山岳遭難対策について―中・高年の事故現状―」

（委員会開催）

定例委員会、平成二十二年五月十二日、七月七日、九月一日、十一月十日、平成二十三年一月十二日、三月二日

臨時委員会、平成二十二年四月七日

（行事）

五月二十九日～三十日、広島支部との交流事業の一環として英彦山山開き行事に参加（参加者） 広島支部 杉村支部長以下

十一人 北九州支部 大庭支部長以下二十五人

六月十二日 支部長会議・日本山岳会総会（東京）伊藤副支部長が代理出席

六月十二日～十三日 自然保護全国集会（東京）、十三日のみ開口事務局長（自然保護委員）が出席

九月四日 支部長会議（多摩市）大庭支部長が出席

九月五日 支部報編集者会議（多摩市）伊藤副支部長と関口事務局長が出席

九月五日 全国支部懇談会（東京多摩支部主管）大庭支部長以下七人出席

九月五日 全国支部懇談会（東京多摩支部主管）大庭支部長以下七人出席

九月六日 記念登山 高尾山 伊藤副支部長以下六人参加

十月三十日 北九州支部創立十周年記念式典と記念パーティーを小倉の「アルモニーサンク」(前九州厚生年金会館)で開催。本部より尾上会長を迎え祝辞と記念講演をしていただく。演題「ナイロンザイルと東海支部」

(出席者) 本部 尾上会長、北海道支部 新妻元支部長、長谷川前支部長 東京多摩支部 森常任評議員、東海支部 石原永年会員、関西支部 重廣支部長、山陰支部 中井副支部長以下四人、広島支部 杉村支部長以下四人、福岡支部 松本徂夫元支部長、副島支部長 以下五人、熊本支部 工藤支部長、東九州支部 梅木支部長以下四人、宮崎支部 岡本副支部長以下四人、北九州支部 吉村元支部長、大庭支部長以下五十二人、合計八十二人

十月三十一日 記念登山 英彦山 参加者二十八人

十月三十一日 記念観光「関門海峡の歴史探訪」参加者七人

十一月六日 東九州支部五十周年記念式典と祝賀会 大庭支部長以下十一人出席

十一月七日 記念登山 鶴見岳 参加者伊藤副支部長以下十人

十二月五日 支部長会議(東京)、大楠副支部長が出席。年次晩餐会、出席者九人。昨年に引き続き、皇太子殿下がご出席になり大盛況であった。

十二月十二日 支部忘年会(九重法華院温泉)、支部長以下二十

二人

一月三十日、三十一日、事務局担当者会議(東京)、事務局長出席

(山行)

四月十九日 陶ガ岳(山口県)、クライミング研修、参加者十四人

五月三十一日 英彦山山開き登山、参加者十一人

七月四日、五日 祖母山(オオヤマレンゲ観賞)、参加者十四人

八月七日、十一日 甲斐駒ヶ岳(黒戸尾根経由)と仙丈ヶ岳、参加者六人

九月六日 福智山系、間欠冷泉の泉源見学、参加者二十人

十月十日、十一日 川床と船上山(鳥取県)縦走 参加者八人

十一月三日、越敷岳(大分県)、参加者十三人

十二月十三日、大船山、参加者十人

一月二十三日、二丈岳、参加者十八人、ビジター十二人(十人は門司山歩会所属)

二月十一日、十四日、伯耆大山(冬山訓練、テント泊)、参加者五人

三月二十八日、英彦山清掃登山(三コースより入山)、参加者三十一人

(自然環境保全事業)

・年度末の恒例事業として実施している清掃登山は今年度三十

一人の会員で、添田町役場の協力を得て英彦山で行った。中岳上宮付近、休憩舎、野営場を中心に回収したゴミは燃えるゴミ十袋、燃えないゴミ十四袋であった。

九州森林管理局より委嘱された森林保全巡視活動を日常の登山を通じて随時行い、管理局に活動報告書を提出している。

#### 〈広報活動〉

会員相互の情報伝達メディアとして支部報を活用するため隔月発行を行ってきた。

#### 〈地域貢献事業〉

初心者を対象に市民センター、公民館などの公共の場を通じて登山の案内、登山知識・技術の講習を行った。

#### 〈サロンの開催〉

原則として毎月第四水曜日に小倉京町の「コールド」で十八時～二十時に開催。だれでも予約なしに自由に参加できるオープンな懇親の場である。

（大庭 常生）

## 東九州支部

二〇一〇年度（平成二十二年）最大の行事は支部設立五十周年の記念事業だった。

本部はもちろんのこと、隣接する福岡、熊本などの支部からは遅れての設立ではあったものの、五十年にはやはり「時の重

み」があった。設立時の会員で現存する会員番号四千番台はわずか一人ということだけでも、それを十分に示してくるだろう。そして、多くの先輩たちの努力の積み重ねによって今日の支部があることを、記念誌で「五〇年の歩み」を書いたことによつて、改めて実感した。

事業は十一月六～七日を中心に実施した。記念式典には神崎副会長はじめ、全国各支部からたくさん仲間が集まってくれた。記念講演会には大分県内から一般の人たちの出席も多かった。懇親会では話がはずみ、各支部からのアトラクションもちようだいし、ついには夜の街まで繰り出した。記念の山行も順調、前後して開催した「登山文化展」の入場者も多かった。また、事前に行ったエベレスト街道記念トレッキングも快適に終えた。記念誌もまた、尾上会長の祝辞をいただき、充実した内容となった。事業の詳細は「支部報」で紹介したので割愛するが、全国の会員の皆さんに厚く感謝したい。

問題は今後である。おりしも日本山岳会は公益を目指して新しい道を踏み出した。東九州支部もまた、これを機に五十一年目からの新しい前進を図らねばならない。公益的事業としては恒例の青少年登山大会や自然保護活動、登山指導など、共益としては月例の山行などが定着しているが、いずれをとつても情性に任せるのではなく、新規の見直しを求められようし、場合によっては原点に立ち戻ることも必要になろう。前途はたやす

いものではない。

さらに、支部組織の充実と拡大、そのための会員の増強、とりわけ若手会員の獲得、また海外を目指したり、より高度の登山を実行するための会員の資質の向上が課題となる。記念事業の実行委員会に全会員を結集してそれなりの成果を得たことを足掛かりに、皆の意見を徹底的に聞き、会員・会友あげて全力で取り組みたい。そのためにも、新年度からは支部長、事務局が交代、心機一転を図る。

また、一般社会に対して山岳会、支部の存在を認識してもらうことも大切だと思う。それには「山の日」制定運動も一つの手段となろう。大分県山岳連盟、大分勤労者山岳会との話し合いは出来たし、大分県キャンプ協会、野外活動の各種NPO法人、自然保護団体との提携も生まれた。大分県地質学会、歴史と自然を学ぶ会など、学術組織も協賛の意思を示してくれた。今後は森林組合、JA、あるいは植林などにも取り組み始めた漁業組合などを含めて、制定運動の大分県委員会設立も視野に入っている。ともあれ、広く県民を巻き込むことによって、「山の日」実現に向けて機運を高めると同時に、日本山岳会の存在感を高めたいと思案している。

(梅木 秀徳)

## 熊本支部

公益法人移行問題が話題になってから、毎年支部活動も活発化してきたように思う。昨年度は山行が十三回(約二百五十名)、支部総会・懇談会(八十五名)、日頃の支部活動や自然の魅力を広く紹介するための「山の写真展」、「海外登山報告会」では約七百名の参加があり、総計でも約千名の人が活動したことになる。公益事業率も六〇%を超えて、それなりの活性化は進んでいると思うが、それぞれの事業について精査してみると参加者の固定化があり、支部員の高齢化だけではない理由も見えるようだ。

昨年度は、支部活性化委員会から支部会員一〇%の会員増の要請もあったが、年間を通して多少の増減はあったが昨年の数におさえるのがやっとだった。正会員の入会はただ一名だったが、登山者過疎県である熊本では一名でも入会があれば貴重な会員となる。市井には高校登山部経験者もかなりいるのでそのあたりに勧誘をするとその気になる者もいるが、最後は会費、入会金のところで進まなくなる。もし、将来公益法人移行が認められて、会計処理上の問題が変わり、還元金の減額などになると支部会計は逼迫するであろう。何としても会員増を図らねばならない。若者を惹きつけ、喜んで入会できる環境は出来ないものか。

支部事業の中で、昨年から登山教室の他に登山研修会を始め

た。昔は山に登る者は、どこかの山岳会に入会し、そこで山の知識、技術、体力、判断力などを身につけたが、今ではツアー登山が主流になり、登山の準備もせぬまま、ツアーリーダーに連れてってもらうような登山者が多くなった。そのような登山者に安全登山の基礎から指導するために始めたのだが、参加者の反応は良好のようである。登山は、自らの意思で登山に参加した登山者の自己責任である。行動中は「自分の身は自分で守る」だけの力は求められる。そのために研修会を始めたのだが、自立できるまでにはかなりの時間も掛かりそうだ。

昨年もう一つ貴重な体験は祖母山での遭難救助だった。山岳連盟と合同で、延べ二百五十名で捜索を行ったが、残念ながら発見・救助は出来ずにいる。単独行で、家人に何処の山に行くことも告げず出掛け行方不明となり、未だ何の手掛かりもない。この中で厳しい現場での捜索活動、安全登山の大切さなど学ぶことも多かった。宮崎支部からも捜索支援をいただき、両支部交流登山で築いた絆がとてもし輝いて見えた。

(工藤 文昭)

## 宮崎支部

富崎県にとって二〇一〇年度(平成二十二年)は、大変な

年であった。

家畜の伝染病である口蹄疫の蔓延、鳥インフルエンザの発生、霧島山系新焼岳の噴火による降灰被害など相次ぐ自然災害に見舞われ、県民の日常生活に大きな打撃を受けるとともに、これが地域経済に与えた影響もはかり知れないものがあった。

そのような状況のなかにあつて、一〇年度は、宮崎支部創立二十五周年の記念すべき年に当たっており、年度計画により七月十五日には盛大に記念式典を開催する予定になっていた。しかし三月末に県内中央地区で発生した口蹄疫は県内の各地に飛び火し、六月になっても収束の見通しが立たず、県当局からは県民に対して、各種の行事、会合、イベント等の自粛要請が出されることとなった。

支部においては、式典を開催するかどうするかを決断を迫られることになった。思慮を重ねて検討した結果、会員の総意により、ごく内輪だけの記念式典にとどめて開催しようという結論に達して、どうにか予定日に開催することができた。

その他支部の年間行事計画に基づく主要行事も、一部中止、縮小、延期等を余儀なくされるものがあるなかで、定例の登山研究会は毎月開催することができ山岳に関する知識技能の研修に努めるとともに、会員の意志の疎通と親睦をはかることができた。

また、十三回目を迎えた「子ども登山教室」では、参加した

子どもたちに山や海での体験や団体行動を通じて、礼儀、しつけ、人に対する思いやりの心などを学ばせることができ、次代をになう子どもたちの健全な精神の育成にわずかながらでも寄与できたことは会員の大きな喜びであった。

さらに二十六回目を迎えた「宮崎ウエストン祭」では、自然愛、人間愛に満ちた師の精神をいつまでも継承し、自然環境の保全に努めていこうと祖母山のもとと五ヶ所高原にて参加者が誓いあった。

支部でのごうした営みが、登山を通じて社会に貢献したいという人たちの共感を呼び、少しずつでもその輪が広がって、共に活動したいという仲間が支部に入ってきてくれることを大いに期待するものである。

このほか二〇一〇年度における宮崎支部の主な行事・活動は以下の通り。

《行事・会議・研修会》

・第二十七回定期総会（四月十日 出席者八十八名、内委任状三十五名）

・宮崎支部創立二十五周年記念式典（七月十七日 五十二名出席）

・定例役員、委員長等会議（毎月第一木曜 十二回開催 延べ九十七名出席）

・定例登山研究会（毎月第一木曜 十二回開催 延べ四百三十三

七名出席）

・各行事準備委員会（九回開催 百四名出席）

《定例山行》

・定例山行年度計画により、九州脊梁の白鳥山ほか七回実施（五月、六月、七月は、口蹄疫防疫のため中止）

・宮崎支部創立二十五周年記念グループ登山

・七月二十六日～二十九日（乗鞍岳・西穂高コース 参加者二名）

・七月三十日～八月二日（北海道利尻コース 参加者五名）

・八月二十二日～二十七日（北岳・間ノ岳・農鳥岳 参加者三名）

・九月十八日～二十二日（北岳・間ノ岳 参加者三名）

・九月五日～十一日（槍ヶ岳コース・雲の平コース 参加者二十名）

・十一月三十日～十二月十三日（ニュージールランドトレッキング 参加者会員等七名）

《他支部との交流および登山》

・五月八日～九日第四回熊本交流登山（熊本県山鹿市八方ヶ岳 他二山 参加者三十三名）

・九月五日～六日 全国支部懇談会および記念山行（東京多摩支部主管 三名出席）

・十月三十日～三十一日 北九州支部創立十周年記念式典および

び記念登山(四名出席)

・十一月六日～七日 東九州支部創立五十周年記念式典および記念登山(八名出席)

《第二十六回宮崎ウエストン祭》

・十一月六日～七日(高千穂町 会員参加者二十二名、一般参加者約三百名)

《第十三回こども登山教室》

・八月二十一日～二十二日(鹿児島県志布志市御在所岳登山・国立大隅青少年自然の家での海浜いかだ漕艇訓練 参加者四十九名)

《第十六回宮崎家庭裁判所短期委託補導登山》

・十一月二十五日(双石山 参加者十六名)

《宮崎水源の森づくり育林活動》

・八月八日、二月二十日、三月二十六日(下払い、補植作業三回実施 参加者延べ二十六名)

《山岳活動写真パネル展》

・十一月二十七日～二十八日(第十六回宮崎中央公民館まつり、会員参加者三十九名、一般参加者約一千名)

・三月十二日(地域と市民活動の博覧会、会員六名、一般参加者約三千名)

《清掃登山・晩餐会》

・十二月十一日(清掃登山～岩壺山・花切山・双石山・釈迦ヶ

岳の四班に別れて実施、夜は晩餐会 四十三名出席)

《宮崎支部報の発行》

・四月一日(第三十二号)、七月一日(第三十三号)、十月一日(第三十四号)、一月一日(第三十五号)(年四回発行・各A4版八ページ各二百部)

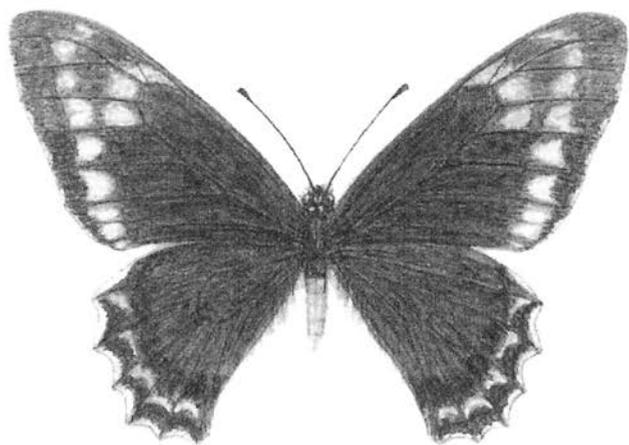
奇しくもこの原稿を執筆中に東日本大震災による大惨事のニュースが、連日流れてひどく心を痛めた。

最近全国的に、いや世界的にみても地震・津波・集中豪雨・異常な降雪、寒波、猛暑、火山の噴火など、自然がもたらす災害の発生が多くなってきているような気がする。

これらの現象にみられる地球の異変は、豊かな自然環境を破壊して、あくなき利便さと快適さを求める人類の愚かな行為に対して、警鐘をを与えているような気がしてならない。

支部創設の目的に「登山活動を通じて自然愛護精神の高揚を図り：」とあるが、我々山を愛する者にとって、その意味の深さと重さをもう一度かみしめ、身近なところから自然環境を守る活動を実践しなければならない時がきているのではないかと、思い知らされた。

(末永 軍朗)



山女子、今日も山に登る	山女子	BAB ジャパン	1300	四六判	188p
山女子宣言	山女子	イカロス出版	1200	A5	157p
山造り承ります ※増補版	島崎洋路	川辺書林	1650	四六判	257p
山で見た夢—ある山岳雑誌編集者の記憶	勝峰富雄	みすず書房	2600	四六判	285p
山道具完璧メンテ BOOK	樫出版社／編	樫出版社	1300	A4	152p
山と建築 Vol.2 里山の再生とその未来	土本俊和／監 信州大学山岳科学総合研究所／編	信州大学工学部建築学科土木研究室 オフィスエム／発売	1000	A4	68p
山と人	高室陽二郎	山梨日日新聞社	2000	四六判	414p
山に咲く	山野ふうろ	信濃毎日新聞社	1400	A5	223p
山の遭難	羽根田治	平凡社	760	新書判	255p
山の花わかる! 図鑑	木原 浩／写真 柴崎その枝／文	山と溪谷社	1200	四六判	79p
山登り入門サポート BOOK	ネコ・パブリッシング／編	ネコ・パブリッシング	952	A4	98p
山登りの作法	岩崎元郎	ソフトバンククリエティブ	730	新書判	183p
山・ひと・自然	信州大学山岳科学総合研究所・総合地球環境学研究所／編	信州大学山岳科学総合研究所 オフィスエム／発売	933	A5	148p
槍ヶ岳開山 新装版	新田次郎	文藝春秋	695	文庫判	399p
悠久の山々	月岡 恵	考古堂書店	1500	A5	165p
ヨーロッパアルプス登山・ハイキング ※改定版	金原富士子	本の泉社	1905	A5	343p
よみがえれ知床—100 平方メートル運動の夢	辰野 和男／編・著 関根郁雄・深沢 博／著	朝日新聞出版	740	新書判	222p
【ら】					
利尻山—弧峰の詩 ※写真集	林 久夫	山と溪谷社	3000	290	91p
Little Tibet リトル・チベット ※写真集	伊勢祥延	中国書店	2857	A4	150p
【わ】					
わが回想のアルプス	近藤 等	東京新聞出版部	2381	A5	189p
わかりやすいロープとひもの結び方ハンドブック	リベラル社／編	リベラル社 星雲社／発売	1095	新書判	173p

ヒマラヤのドン・キホーテ—ネパール人になった日本人・宮原巍の挑戦	根深 誠	中央公論新社	1800	四六判	309p
ヒマラヤ初登頂物語 新装版	岡本まさあき／画 上村信太郎／構成・文	山と溪谷社	1000	A5	189p
百年前の山を旅する	服部文祥	東京新聞出版部	1714	四六判	237p
百霊峰巡礼 第3集	立松和平	東京新聞出版部	1800	四六判	307p
病気に負けない健康登山	齋藤 繁	山と溪谷社	952	新書判	216p
富士 ※写真集	大山行男	クレヴィス	1200	A4	31p
富士詩 ※写真集	大山行男	クレヴィス	1200	A4	29p
富士山最後の強力・並木宗二郎	井ノ部康之	新人物往来社	667	文庫判	255p
富士登山サポート BOOK	ネコ・パブリッシング／編	ネコ・パブリッシング	933	A4	106p
富士登山と熱海の硫黄温泉訪問—1860年日本内地の旅記記録	ラザフォード・オー ルコック／著 山本 秀峰／編・訳	露蘭堂 ナウカ 出版／発売	2200	A5	163p
富士登山パーフェクトガイド	JTB パブリッシング／編	JTB パブリッシング	1300	A5	143p
ブナの森の四季	植村 愷	文芸社	1800	A5	242p
ブルーアイズ—バタゴニアの水 河から ※写真集	生田理和	山と溪谷社	1300	四六判	88p
北海道の登山史	安田 治	北海道新聞社	1800	A5	359p
北海道野鳥観察地ガイド	大橋弘一	北海道新聞社	1900	A5	239p
香港アルプス	金子晴彦・森Q三代 子・香港山海徑倶楽 部	アズ・ファクト リー	1800	A5	351p
<b>【ま】</b>					
マイ・トレッキングノート	NPO 法人日本ト レッキング協会／編	ぎょうせい	1524	A5	162p
萬歳楽山	佐藤 力	歴史春秋出版	1143	四六判	144p
萬歳集歌の山旅	三鍋久雄	桂書房	8000	A4	554p
みんなの自然をみんなで守る 20のヒント	竹内純子／編	山と溪谷社	1800	A5	127p
ムスタン爺さまの戯言	近藤 亨	新潟日報事業社	1429	四六判	195p
森の開発と神々の闘争—屋久島 の環境民俗学 ※改定増補版	中島成久	明石書店	2500	四六判	288p
森へ行く日	光野 桃	山と溪谷社	1600	A5	143p
<b>【や】</b>					
屋久島白谷雲水峡と白谷川	大田五雄	南方新社	1800	A5	153p
山・川・海の環境社会学	大野 晃	文理閣	3600	A5	293p
ヤマケイ文庫 新編単独行	加藤文太郎	山と溪谷社	940	文庫判	349p
ヤマケイ文庫 新編風雪のビ ヅァーク	松濤 明	山と溪谷社	1000	文庫判	389p
ヤマケイ文庫 垂直の記憶—岩 と雪の7章	山野井泰史	山と溪谷社	880	文庫判	286p
ヤマケイ文庫 残された山靴	佐瀬 稔	山と溪谷社	880	文庫判	286p
ヤマケイ文庫 ミニヤコンカ奇 跡の生還	松田宏也／著 徳丸 壯也／構成	山と溪谷社	920	文庫判	301p
ヤマケイ文庫 梅里雪山	小林尚礼	山と溪谷社	1100	文庫判	366p

トムラウシ山遭難はなぜ起きたのか	羽根田治・飯田肇・金田正樹・山本正嘉	山と溪谷社	1600	四六判	303p
トレッキング実践学	高橋庄太郎	樞出版社	1400	A5	207p
<b>【な】</b>					
名古屋周辺の山ベストコース200 ※改定新版	山と溪谷社／編	山と溪谷社	2500	190 × 190	423p
雪崩リスク軽減の手引き	出川あずさ・池田慎二／著 日本雪崩ネットワーク／編	東京新聞出版部	1524	B5	96p
新潟100名山	新潟県山岳協会／監	新潟日報事業社	2600	A5	411p
日本人なら富士山に登ろう！	田部井淳子	角川グループパブリッシング	743	新書判	185p
日本の山の34年	日本山岳写真集団／編	モーターマガジン社	1095	四六判	185p
日本の山 風景撮影ガイド	鈴木澄雄	随想舎	2000	A4	294p
日本100岩場4 東海・関西 ※増補改訂版	北山 真／編	山と溪谷社	2200	A5	183p
NO LIMIT 自分を超える方法	栗城史多	サンクチュアリ出版	1400	四六判	211p
登れる！富士山	佐々木亨	山と溪谷社	1400	A5	112p
<b>【は】</b>					
白山に登ろう	袖木寿二	北國新聞社	1905	B5	154p ※ 新装版
はじめての山登り一関東版	JTB バブリッシング／編	JTB バブリッシング	900	B5	81p
裸の山 ナンガ・バルバート	ラインホルト・メスナー／著 平井吉夫／訳	山と溪谷社	1800	四六判	391p
華恵、山に行く。	華恵	山と溪谷社	1400	四六判	167p
花かおる八島湿原	下諏訪観光協会／編	ほおずき書籍 星雲社／発売	762	四六判	65p
花の百名山登山紀行	稲泉三丸・稲泉弘子	郁朋社	1500	四六判	321p
パノラマ富士山	山下茂樹	ビエ・ボックス	2400	180 × 260	117p
晴れのち曇り 曇りのち晴れ	熊谷 榎	白山書房	1900	四六判	296p
日帰りで満喫！のんびり山あるき地図	中田真二	学研	1200	B5	95p
日帰りハイク 関西	JTB バブリッシング／編	JTB バブリッシング	933	B5	95p
日帰りハイク 関東	JTB バブリッシング／編	JTB バブリッシング	933	B5	95p
秘境に学ぶ幸せのかたち	田淵俊彦	講談社	1700	四六判	303p
英彦山・犬ヶ岳山地の自然と植物	熊谷信孝	海鳥社	4000	A5	287p
飛騨の山 研究と案内	飛騨山岳会	ナカニシヤ出版	2500	A5	306p
人は山を目指す	能勢 博／著 信州大学山岳科学総合研究所／編	信州大学山岳科学総合研究所 オフィスエム／発売	933	A5	53p
ヒマラヤに咲く子供たち	内野克美	中央大学出版部	2600	230	95p

Snow Forest 雪の森へ	秋山恵生	ほおずき書籍 星雲社/発売	1000	四六判	120p
世界遺産ガイド—世界遺産登録 をめざす富士山編	古田陽久・古田真美 /編	シンクタンクせ とうち総合研究 機構	2500	A5	128p
世界のでっぺんに立った!—熱 年女性7大陸最高峰制す 【た】	久末眞紀子	北海道新聞社	1500	四六判	301p
楽しい!日帰り山歩き入門	神崎忠男/監	主婦と生活社	1300	A5	159p
田部井淳子のあんしん!たのし い!山歩きお悩み解決BOOK	田部井淳子/監	毎日コミュニ ケーションズ	1886	B5	92p
田部井淳子のはじめる!山ガー ル	NHK出版/編 田 部井淳子/監	日本放送出版協 会	1143	280	157p
地形図の読み方・歩き方—標高 0メートルから山岳まで	渡辺一夫	誠文堂新光社	1800	A5	159p
西藏全誌	青木文教/著 長野 泰彦・高本康子/ 編・校訂	芙蓉書房出版	15000	A5	461p
チベットの大地へ	和蔵一起	ブイツーツ リレーション 星雲社/発売	1300	四六判	183p
茶馬古道の旅	竹田武史	淡交社	2400	A5	175p
中高年に贈るラクラク登山術	石丸哲也/文 中尾 雄吉/絵	山と溪谷社	952	新書判	206p
中高年のための日本の三千メー トル峰	八重 勉	ベガサス	1400	A5	177p
中国歴史偽造帝国—チベットか ら60の反証	チベット亡命政府情 報・国際関係省/原 著 有本 香/訳・ 評註	祥伝社	1600	四六判	265p
鳥海山の水と暮らし	秋道智彌/編	東北出版企画	2800	A5	484p
鳥海山花園鑑	斎藤政広	無明舎出版	1500	四六判	144p
母海新道ものがたり	小野 健	考古堂書店	1800	A5	196p
母海新道を拓く	小野 健	山と溪谷社	1700	180	281p
辻まこと山とスキーの広告画文 集	辻まこと/画 秀山 荘/編	山と溪谷社	3000	A5	215p
でこでこてっぺん	ゲキ	山と溪谷社	1300	130 × 190	224p
てのひらマップ八ヶ岳	小学館/編	小学館	750	148 × 106	1p
トウガラシ讃歌	山本紀夫	八坂書房	2400	四六判	310p
東京起点沢登りルート120	宗像兵一/編	山と溪谷社	2200	A5	287p
東京近郊ENJOY!ハイキング	成美堂出版編集部/ 編	成美堂出版	950	240	127p
東京近郊ゆる登山	西野淑子	実業之日本社	1200	A5	125p
東京周辺の山ベストコース 350 ※改定新版	山と溪谷社/編	山と溪谷社	3000	190 × 190	783p
東京発ドラマチックハイキング 初級編	伊藤幸司	スタジオタック クリエイティブ	1200	150 × 150	143p
登山者のためのファーストエイ ド・ブック	恵 秀彦	東京新聞出版部	1333	新書判	162p
とちぎ「里・山」歩き	増田俊雄	随想舎	1428	B5	151p

凍える帝国—八甲田山雪中行軍 遭難事件の民俗誌	丸山泰明	青弓社	3400	A5	262p
言葉ふる森—作家による「山」 のエッセイ・紀行30編	山と溪谷社／編	山と溪谷社	1500	四六判	173p
【さ】					
山岳遭難最新エマージェンシー BOOK	樞出版社／編	樞出版社	1200	A4	143p
山岳装備大全	ホーボーゲン・村 石太郎／文 永易量 行／写真	山と溪谷社	1980	A5	296p
山岳と極地から見た地球の今	高橋修平・上田 豊・渡辺興亜／著 信州大学山岳科学総 合研究所／編	信州大学山岳科 学総合研究所 オフィスエム／ 発売	933	A5	85p
山行十話	望月孝一	西田書店	1800	四六判	354p
三百名山完登と富士山三百登	有元利通	羽衣出版	1238	四六判	363p
山歩びより	主婦と生活社／編	主婦と生活社	933	B5	88p
十五年戦争下の登山研究ノート	西本武志	本の泉社	1800	A5	295p
首都圏親しみの登山	石原裕一郎	心交社	1500	A5	199p
春夏秋冬島の山旅	敷島悦朗	東京新聞出版部	1333	A5	159p
春夏秋冬山のほり	増永迪男	ナカニシヤ出版	1900	A5	224p
植物写真家宮誠而写真全集 1— 花の山岳写真 ※写真集	宮 誠而	北陸美術出版	10000	A4	144p
初代竹内洋岳に聞く	竹内洋岳／述 塩野 米松／聞き書き	アートオフィス プリズム 丸善 ／発売	1900	四六判	540p
ジョン・ラスキンと地の大聖堂	アンドレ・エラル ／著 秋山康男・大 社貞子／訳	慶應義塾大学出 版会	5800	A5	359p
白神山地で活躍する人々	弘前大学白神自然観 察園／編	弘前大学出版会	1000	A4	58p
知床の自然保護	斜里町立知床博物館 ／編	北海道新聞社	1800	A5	230p
新版 アタック山梨百名山	山梨メープルクラブ ／編	山梨日日新聞社	1600	A5	214p
新ヤマケイポケットガイド山 業・木の実	水野伸彦・小葉竹由 美	山と溪谷社	1200	文庫判	281p
新ヤマケイポケットガイド高山 の花	永田芳男・伊地知英 信	山と溪谷社	1200	文庫判	281p
新ヤマケイポケットガイド野の 花	木原 浩・酒井 巧	山と溪谷社	1200	文庫判	281p
新ヤマケイポケットガイド野山 の昆虫	今森光彦・荒井真紀	山と溪谷社	1200	文庫判	281p
新ヤマケイポケットガイド薬草 枝	平野隆久・柴崎その 枝	山と溪谷社	1200	文庫判	281p
新ヤマケイポケットガイド野鳥	吉野俊幸・山田智子	山と溪谷社	1200	文庫判	281p
新ヤマケイポケットガイド山の 花	木原 浩・柴崎その 枝	山と溪谷社	1200	文庫判	281p
すぐに使えるロープワーク便利 帳	羽根田治／監	池田書店	950	四六判	187p

鬼ノ城山塊登山詳細図 全36 コース	守屋益男	吉備人出版	500	230 × 110	1p
終わりそうもない「天空への旅」	前田 武	アドバンテージ サーバー	1200	A5	139p
温泉名山1日トレッキング	土井正和	交通新聞社	1200	A5	143p
御嶽山 静かなる活火山	木股文昭	信濃毎日新聞社	1600	A5	195p
御岳山 霊なる山の素顔	信濃毎日新聞社/編	信濃毎日新聞社	1400	A5	150p
【か】					
圏谷のシンフォニー—北アルプ ス・穂高湖沢 ※写真集	白旗史朗	山と溪谷社	5000	310 × 310	153p
岳人備忘録—登山界47人の 「山」	山本修二/編・著 三原久明・星野秀樹 /写真	東京新聞出版部	1619	A5	495p
かながわのハイキングコースベ スト50 プラス3 ※新装版	山本正基	神奈川新聞社	760	文庫判	254p
神々の国・ネパール王国とブー タン王国へのいざない	中川 豊	牧歌舎 星雲社 /発売	1200	四六判	223p
上高地	中西俊明	平凡社	4200	A4 変	112p
上高地の自然図鑑	蛭川憲男	メイツ出版	1800	A5	183p
軽井沢町植物園の花 第3集	軽井沢町教育委員会 /編	ほおずき書籍 星雲社/発売	2000	A5	177p
川喜田二郎の仕事と自画像	川喜田喜美子・高山 龍三	ミネルヴァ書房	3800	四六判	381p
関西周辺の山ベストコース250 ※改定新版	山と溪谷社/編	山と溪谷社	2500	190 × 190	487p
関西百名山地図帳	山と溪谷社/編	山と溪谷社	3000	A4	198p
gan さんが週行 北海道の沢登 り独断ガイドブック	岩村和彦	共同文化社	2200	A5	240p
関東周辺登山口情報 800 上 南関東+山梨編	全国登山口調査会/ 編	双峰社	2000	A5	323p
関東周辺登山口情報 800 下 北関東+新潟編	全国登山口調査会/ 編	双峰社	2000	A5	346p
希求—チベット仏教の聖域 ※写真集	高城泰輔	日本写真企画	2800	A4	58p
奇跡の生還へ導く人—極限状況 の「サードマン現象」	ジョン・ガイガー/ 著 伊豆原弓/訳	新潮社	1800	四六判	255p
九州の山歩き 決定版 ※増補版	吉川 満	弦書房	2000	A5	247p
教科書になかった登山術	山岸尚将	東京新聞出版部	1619	A5	222p
極圏・雪氷圏と地球環境	遠藤邦彦・山川修 治・薬谷哲也	二宮書店	3800	A5	254p
骨鬼(くい)の末裔	新谷暁生	須田製版	1600	A5	252p
空白の五マイル—チベット、世 界最大のツアンポー峡谷に挑む	角輪唯介	集英社	1600	四六判	307p
九重山法華院物語	松本徂夫・梅木秀徳	弦書房	2000	A5	270p
小出郷山岳史	小出郷山岳協会/編	小出郷山岳協会	2000	B5	278p
高山の花わかる!図鑑	永田芳男/写真 伊 地知英信/文	山と溪谷社	1200	四六判	79p
幸福立国プータン	大橋照枝	白水社	1900	四六判	189p
極上の山歩き—関西からの山 12ヶ月	草川啓三	ナカニシヤ出版	1500	A5	127p

# 山岳図書目録 (2010年)

日本山岳会図書委員会

本目録は、店頭で見つけにくい地方出版社の本を、幅広く紹介することを心がけています。また、「登山」と密接に関わる「環境問題」「里山」「冒険・探検」「宗教」などの分野の本も、一部とりあげています。どうか有効にご活用ください。

\*判型が数字で表示されているものの単位はmm(天地×左右)、価格は原則として本体価格ですが、ごく一部税込みになっています。

## 山岳図書目録

書名	著者名	発行所	価格	判型	ページ数
<b>【あ】</b>					
アウトドア・クライミング	井上大助	樫出版社	1400	A5	175p
あした、山へ行こう!	鈴木みき	講談社	1200	A5	143p
単独行者(アラインゲンガー)	谷 甲州	山と溪谷社	2500	四六判	505p
一新・加藤文太郎伝 生駒山	大阪府みどり公社/ 編 生駒山系歴史文 化研究会/著	ナカニシヤ出版	1700	A5	187p
イザベラ・バード紀行―『日本 奥地紀行』の謎を読む	伊藤孝博	無明舎出版	4200	A5	439p
イザベラ・バードよりみち道中 記	伊藤孝博	無明舎出版	1400	A5	106p
イタリア中部の山岳都市を歩く	長野 泉	遊人工房	5000	A5	227p
イタリア北東部ドロミーティへ のトレッキング	河野 穰	文芸社	1400	四六判	181p
癒される低山ウォーキング	石井光造	明治書院	1200	四六判	205p
ウォーターウォーキング	丹沢ネットワーク/ 編	白山書房	1800	A5	151p
絵はがきブック 白山の花	橋本確文堂/編	橋本確文堂	500	文庫判	32p
Enjoy フリークライミング	クライミングジム& ショップPUMP/ 監	日東書院本社	1300	240	96p
大谷光瑞とアジア	柴田幹夫/編	勉誠出版	6500	A5	593p
大町桂月の大雪山	清水敏一	北海道出版企画 センター	2800	A5	224p
小笠原自然観察ガイド ※改訂版	有川美紀子/文 宇 津 孝/写真	山と溪谷社	1048	新書判	127p
奥多摩・奥武蔵・秩父人気の山 50	JTBパブリッシング/編	JTBパブリッ シング	1500	A5	191p
尾瀬紀行	永井佐紺	上毛新聞社	1800	A5	247p
大人のスキー 〈特集〉日本ス キー100年、スキー出版50年	実業之日本社/編	実業之日本社	1238	A4	177p

from the south via the central glacier and west ridge. The American Alpine Journal described this ascent, but it is not confirmed.

2007 : In May a Chinese team of 3 members made the 2nd ascent of Dangchezhengla via the same route as the Japanese. A Chinese top climber was killed on the descent

2007 : In October 4 members of a British-American expedition entered the north side. They set up BC at 4,400 meters and ABC at 4,900 meters. The first attempted to climb 5,850 meters, but they could reach only 5,600 meters peak on the SE side. Thereafter they made the 3rd ascent of Dangchezhengla via a new route on the north face. They finally challenged the main summit 6,060 meters but were not successful. They moved BC to a point at 5,100 meters, attacked the north ridge (a spur beneath the summit) but were forced to give up the climb at about 5,400 meters because of extreme coldness and unstable snow conditions. The party was led by Dave Wynne-Jones.

2009 : In autumn a British party of Derek Buckle and Dave Wynne-Jones revisited the north face of Yangmolong main peak. As aforementioned, however, they were involved in a serious trouble with villagers of Sang Qu. They attempted on the north ridge but again failed.

An American-Chinese team led by Jon Otto attempted on the south face of the main peak. They started to climb the south face just beneath the summit, but they were unable to breakthrough the lower part of frazil and dangerous rock wall. A German party came to the south side but went back with no result.

2010 : In November Jon Otto, Tim Boetler (Cameraman) and Chinese climbers again challenged the main summit. They entered the north side from a valley east of Dongba having crossed a high pass at about 5,000 meters. The descent from the pass to east was so steep that they had to rappel down a valley of the north face of the main summit. They attached the north ridge but could not exceed a point of 2007 British expedition. Dave Wynne-Jones appreciates that they found an access route to the north face of the main summit.

The Yangmolong main peak has refused several attempts and still remains untrodden. Who does challenge in 2011?

On July 30, we made reconnaissance of the eminent three peaks south of Sichuan-Tibet Highway. Pictures were taken from a Tibetan village at 4,310 meters.

On July 31, we went to Lamaya from Litang to have a panoramic grand view of the east face of Genyen massi crossing a high pass of 4,830 meters "Three smith brothers". Being compared with 1999 when we made a caravan of the old trade path to Batang, road conditions have surprisingly been improved. Driving hours were only one-fourth.

Genyen 6,204 meters was first climbed via south face by a Japanese expedition from the Himalayan Association of Japan in 1988. Several years ago an Italian party made the second ascent via a new route on the east face. American famous climbers, Charlie Fowler and Christoff Boskof were lost on the mountain. In the north / northeast / northwest of Genyen a climbing paradise of outstanding rock towers of 5,500 5,900 meters surrounds a valley of 600 years historical monastery of Rengo Gompa.

These fantastic peaks are sleeping yet untouched by any of climbers.

The following four photos (see, page 98) are of 1999 journey from Litang to Batang on old trade path.

### **Yangmolong - an impregnable fortress, main summit 6,060m**

The first half of the pictures shows the south face of Yangmolong massif and the second half shows the north face. (see, page 99, 102)

Attempt on Yangmolong massif began in 1991. The following is a brief chronicle of climbing and explorations.

1991 : A Japanese party from Nippon University first entered the northern side and attempted on the north face of Yangmolong main peak 6,060 meters. They retreated from a point at about 5,400 meters on account of bad weather and danger of avalanche.

2000 : In June Nakamura and Nagai reconnoitered the south face.

2003 : In June a Japanese expedition from Kyoto of the Hengduan Mountains Club made the first ascent of Dangchezhengla 5,833 meters from the south via the central glacier between Dangchezhengla and the central peak, Makara, 6,033 meters. They reached the summit via the east ridge from the col.

2003 : There is information that a Korean party made the first ascent of the central peak

valley to unclimbed Kawarani 5,992 meters of Gonkara Shan range.

- ④ A route from Dongba to east which leads to the northwest side of Yangmolong has no problem. In this valley Tibetan are friendly and welcome foreigners. In autumn of 2011 a Japanese student party from the Waseda University took this route for reconnaissance of unclimbed peak 5,850 meters and an American/Chinese expedition made use of this route to reach the north face of Yangmolong.
- ⑤ An access from Dongba to southeast via Zhongba to reach the south face of Yangmolong is easiest. Villagers are willing to cooperate with and support expeditions. Nakamura and Nagai first traced this route to reconnoiter the south face of Yangmolong in June, 2000. Since then several parties took advantages this approach. A Japanese party from the Hengduan Mountains Club entered the south side and made the first ascent of Dangchezhenla 5,833 meters in October, 2002. No conflicts with local villagers happened.

#### Plan changed for Identification of Peaks

*“Anything happens in China, nothing is impossible in China”* When facing difficulties while traveling the Tibetan marches, I always tell myself this words. I cannot return home without crops from expensive expedition to eastern Tibet. Having resigned the original plan to explore Xiangqiuqieke massif from south and to traverse the Litang Plateau from west to east, I made up my mind to survey and identify peaks of the Shaluli Shan in Litang Plateau as much as possible, as many peaks still remain unknown. As usually, I carried with me sufficient maps of the mountains necessary for the identification. I describe what I did for the purpose, as follows.

1. To access to Xiangqiuqieke massif and other massifs ranging to east from the Sichuan-Tibet Highway for taking pictures as many peaks as I could.
2. To access to Genyen massif for taking pictures of rock peaks
3. To gather and review as many pictures as possible of the past expeditions to the Genyen, Xiangqiuqieke and Yangmolong. This brought a considerable amount of valuable materials for identification.

A panorama from Genyen in 1988, my journey 1999/2000 and photos of 2005 Yamanashi expedition, Tomas Oblutovic 2008 Derek Buckle 2009 and Tim Boetler 2010 are very much useful for the peak identification.

On July 29, we ascended to a point at 4,700 meters from a monastery of the new nomad village and luckily could take photos of the north face of Xiangqiuqieke massif.

pastures, gentle streams and hundreds grazing yaks. It was surprising that on the way many Chinese university students were heading for Lhasa by bicycles. They told us that it would take 25 days from Chengdu westwards to Lhasa. This is a sort of modern style pilgrimage. We came across abundant flowers of blue poppies (*Meconopsis*). The Sichuan-Tibet Highway has continuously been well refurbished with new construction of tunnels between Haizi Shan Pass and Batang, which has made an eminent short cut possible.

A famous "Litang Horse Festival" to which foreign tourists visit is held on August 1 every year. However it was suddenly cancelled this year (2010) because of unknown but perhaps political reason. The authority would have caught a sign of unrest and resistance among warlike Khamba people. But no body responded to my question on the reason.

### **Approach to Xiangqiuqieke and Yangmolong**

There are five routes for entering Xiangqiuqieke and Yangmolong massifs. We must know that nature and attitude to foreigners of Tibetan inhabitants is different in each valley to enter. I introduce the five valleys from north to south.

#### **1) Xiangqiuqieke:**

- ① To the north side from a point (entrance to a new nomad village) at 4,300 meters on the Sichuan-Tibet Highway 10km east of the Haizi Shan Pass. A Japanese team from Yamanashi followed this route with no problem in 2005.
- ② From a road maintenance station 336 to Tarilong valley to approach to both the north and south sides. A local secretary of the district advised us not to enter this valley because villagers are exclusive and even villagers chief cannot administrate them. Therefore our first plan had to be given up.

#### **2) Yangmolong:**

- ③ A valley, Sang Qu Sanglongxi between the station 336 and Dongba is the geographically best route to the north side of Yangmolong, but most dangerous because of bad-natured villagers. As aforementioned, in 2009 a British party met robbery and was requested extra-ordinary expenses for motor-bikes. In the same year an American and German parties were forced to turn to the southern side. They were told by the villagers that foreigners would cause catastrophe. Since then the Batang County government has prohibited foreigners to enter this valley. Several years ago a British party encountered the same case agitated by Lamas when they entered a

summit 5,956 meters sharply soaring to sky was first climbed by an American party of Joe Puryear in 2007. Unfortunately Joe was lost as the cornice collapsed under his feet in Labuche Kang 7,367 meters in Tibet. However all other 5,500-5,900 meters peaks have not been attempted yet and remain untraveled. These alluring and fantastic peaks will undoubtedly be spot-lighted as an alpine paradise like the Qonglai Mountains and enchant challenging climbers in near future. A typical peak of granite tower is shown below.

## **Shaluli Shan-Litang Plateau, Summer 2010**

Being compared with serious flood damages caused by ex-ordinary weather in Yunnan, the climate in the West Sichuan Highlands was rather stable, roads were not blocked up. However, our expected plan failed on account of the aforementioned reasons.

### **To the Litang Plateau, West Sichuan Highland**

Though the expected plan to unveil the Xiangqiuqieke (5863m) massif and to travel through the Litang Plateau was not come off, I describe so far available information on these least-known mountains, to which only two parties have made an approach till now. In autumn of 1999 Nakamura and Nagai viewed two 5,700 meters peaks of the massif from the south on the way of horse caravan from Lamaya to Batang. In 2005 a Japanese party from the Yamanashi Mountaineering Federation reconnoitered the northern side. They reached a lookout point of a panorama of the north face beyond Lake Cunahecou from the Sichuan-Tibet Highway. But the weather was not so fine. In 2009, a British Yangmolong expedition photographed a whole panorama of the southwest face from their base camp. In 2011 a New Zealand female team will make a challenge on the main summit of Xiangqiuqieke (5863m).

On July 27, we departed from Chengdu. Members were Nakamura/Nagai and local staffs from Sichuan Earth Expeditions Inc.: guide Pan Yayu (47 Han), cook Zhong Jinbing (41 Han) and driver Wang Yonglian (43 Han). Pan Yayu speaks perfect Japanese. He is reputed as an excellent guide among Japanese visitors, but because of Han minority he is not talented for negotiation with local Tibetan people and would not be suitable for sensitive areas in eastern Tibet. As a British great explorer, F. M. Bailey suggested, you had better employ Tibetan guide while traveling through off the beaten tracks in the Tibetan marches.

We drove 520km to Yajiang in a day, and on July 28 we got to a village north of Batang driving the Sichuan-Tibet Highway whole day through the fertile Litang Plateau 4,000-4,600 meters. Landscape in summer of the plateau was stunningly beautiful full of green

tourists.

On July 17, we visited Baihualing Protestant church on the right bank of Nujiang 30 minutes away from Like to south on the way to Baoshan so that we might interview with a manager of the church. Lisu minority tribe has own language using alphabet.

We drove across the Mekong-Nujiang Divide at 1,960 meters and entered the highway connecting Kunming and Luli, a border town to Myanmar. In the early afternoon we arrived at Baoshan City, a center of traffic in west Yunnan. Baoshan is a wide and fertile basin and cultivation of coffee is now rapidly increasing in the Nujiang sub-tropical areas. In near future Baoshan brand coffee will become popular in the world market.

## **2. Alpine Paradise – Peak Identification of Shaluli Shan, Litang Plateau Sichuan**

After Nakamura visited Christian churches in the upper Salween (Nujiang) basin in northwest Yunnan, a pair of old explorers, Nakamura (75) and Nagai (77) headed to the Litang Plateau having left Chengdu on July 27 for exploring veiled mountains massif of Xiangqiuqieke northeast of Batang and Yangmolong massif. Our first objective was to unveil the Xiangqiuqieke massif 5,700–5,800 meters from the southern side, and then to travel through the heart of the Litang Plateau from west to east by 10 days horse caravan crossing two high passes 4,800–5,100 meters. We had soon to get to know, however, our prospect went wrong. We could not enter a valley to the southern side of the mountains massif because of unfriendly and hostile Tibetan inhabitants in the valley. The caravan through the Litang Plateau could also not be organized because a nomads chief refused to provide us with horses and muleteers as no villagers wanted to go to a distant place from their home tents even if they were paid enough money.

### **Climbing Paradise in Future**

On account of easy access the Qonglai Mountains massif of Mt. Siguniang are popular and crowded with many rock climbers, but many accidents have taken place. Almost all outstanding rock peaks around 5,500 meters have already been ascended. To my best knowledge only Goromity 5,609 meters remains unclimbed after an attractive Seerdenpu (Barbarian Peak) 5,592 meters was first scaled by a American party and Niuxinshan 4,942 meters was climbed by a Japanese party via a new route on the southeast face.

One of the most expected climbing fields next to the Qonglai Mountains is a group of rock peaks of Genyen massif in the Shaluli Shan, Litang Plateau. Genyen 6,204 meters was first climbed by a party from the Himalayan Association of Japan in 1988 and the second highest

On July 14, we went up north along the Nujiang to near the border with Tibetan Autonomous Region. It was raining continuously from previous night. "Stone Gate" (Kindgon-Ward's Marble Gorge) was spectacular. The water level became very high and the river was raging.

After the gorge we visited Qiunadang in a valley on the left bank. A Catholic church looked dilapidated with no maintenance. A trail to north from Qiunadang leads to Bongga, ruins of a Catholic church in four hours and then to Aben of Tsawarong in eight hours on foot. We further went up to a Catholic church at Chuguan, which was the last village in the valley. All of 160 inhabitants of 24 families were Nu minority tribe and 80 % were Catholic believers. A 74 years old sexton of the church was a Tibetan who came from Deqen. His father used to serve for Father A. Genestier.

On July 15, after heavy rain in the morning it became very hot in Bingzhongluo. We visited Demalo for meeting Tibetan Catholic believers, who were our muleteers in 2004 expedition. They accompanied us to retrace Catholic missionaries' trails constructed in late 19th century from Tsekou of Mekong to Demalo in Nujiang (Salween) basin. Aluo, a chief of the muleteers welcomed me at his house. The intelligent and capable Tibetan was now an owner of a bar and guest house and working as a reliable guide in Gongshan and Bingzhongluo as well. To my surprise, meanwhile, Catholic church of Demalo was also dilapidated.

Demalo 1,870m has 12 villages with 3,000 inhabitants, 80 % of which are Catholic believers. They have three names of Tibetan, English and Chinese. After Demalo we went to a recently refurbished Catholic church of Yonglaga 1,574m with 100 believers. Catholic church in Gongshan was also dilapidated. Later in Baoshan we got to know the reasons that Protestant churches were increasing whilst Catholic churches were declining.

Roughly classifying areas of distribution, Protestant churches mainly locate south of Gongshan town and Catholic churches concentrate in the north of Gongshan town. Perhaps on account of topography of the Nujiang basin south of Gongshan, Protestant churches are more on the right bank of Nujiang.

On July 16, we moved from Gongshan to Liuku 680m along the Nujiang. It was hot and humid. Thermometer recoded 32°C. Liuke in a sub-tropical zone was developing tremendously fast. Streets were congested with new model cars. Hotels were fully occupied. Another township was being constructed. We took many photos of Protestant churches on the way. A cross of Protestant church above roof is red colored whilst a cross of Catholic church is white colored. The Nujiang grand canyon en route is attracting

town in Gongshan Dolong Nu Minorities Autonomous County. In this remote corner of Northwest Yunnan construction of infrastructures is progressing rapidly and spectacular landscapes of Nujiang canyon with deep gorges are important resources of tourism to allure and enchant visitors.

In fact Kawakabu is almost always covered with cloud throughout the year except for late autumn. In spite of only 5,128 meters in height, glacier exists and high passes on the watershed are closed with snow till late May, as this area of the Gaoligongshan range has heaviest precipitation of snow fall in Yunnan. Topography and climatic conditions make Kawakabu "Veiled mountain".

I mention a few comments on an altitude of Kawakabu. Kingdon-Ward wrote a name of Keni-chun-pu (over 20,000ft) on his map of the journey 1911 (*The Land of the Blue Poppy*) but he assumed a height of Gompa La to be 17,000ft (5,182m) almost same as 5,128m of present altitude. It was measured from a pass at 13,000ft near Gompa La in the journey 1922. Joseph rock, an American plant hunter and geographer viewed Kawakabu in October, 1923 and recorded it as Kenychunpo, over 20,000ft, on his map.

### **New Wave-the Christianity in Nujiang (Salween) Basin**

We visited many Christian churches in a week from July 12 to 18 and got to know the fact that the Catholic missions were rather on the decline whilst the Protestant missions were expanding in the Nujiang basin. This was a new discovery.

On July 12, we went to a church of Lizu tribe, which was a center of religious activity of the Protestants in Gongshan and adjacent villages. Young Lisu were enjoying a dance

On July 13, we moved from Gongshan to Bingzhongluo, and visited historical Zhongding Catholic church where I met again a Tibetan female believer who managed a entrance key and paid a visit to a cemetery of Father A. Genestier from the Missions etrangeres de Paris (MEP) who gave an advice to Kingdon-Ward in 1922 on best timing to enter Dulong Jiang. The church was recently reconstructed and well maintained.

A Lamasary, Puhua Si, famous as a base for cracking down on activities of Christianity, was of our interest. We paid a short visit to the monastery under refurbishing.

A guide book published in the Gongshan County Tourist Bureau show a lookout point of Kawakabu on its map. With a great anticipation we headed to the point but no villagers knew how to get there. Only one Tibetan provided us with information. He told us that a return trip to terminus of the glacier of Kawakabu would take one week only on foot as a trail was too bad and steep for a horse.

- 1) More vehicles than three cars cannot pass in one time.
- 2) A vehicle over three tons is not allowed to pass.
- 3) Any visitor cannot pass without a special permit. (No foreigner was allowed to pass.)

In fact there happened serious accidents. Two tracks fell down to the Dulong Jiang, six persons being lost in two months. We had to resign to visit the Dulong Jiang.

### Where is Gompa La? – “Veiled mountain” Kawakabu 5,128 meters

There was one thing to confirm before entering the Dulong Jiang basin. A plant hunter, Frank Kingdon-Ward was the third as a foreigner to have reached Putao (Fort Hertz) of North Burma from Yunnan. He crossed over the Gaoligongshan to the Dulong Jiang from east in October, 1922. The first was Prince Henri d'Orlean in 1895 (*From Tonkin to India - by the Sources of the Irrawadi, January '95-January '96* Prince Henri d'Orlean, London 1898) and the second was a British explore, E. C. Young in 1906. (*A Journy from Yun-nun to Assam, The Geographical Journal*, August 1907 Vol. 30 No. 2) Presumably there were four routes to go across a watershed that shares the Nu Jiang (Salween) and Dulong Jiang (Irrawaddy). F. Kingdon-Ward described in his narratives on journey 1922 that he passed “Gompa La”, one of the four routes (*From China to Khamti Long* Edward Arnold & Co. London 1924). It has been difficult to locate it since he had not used a name of Gompa La in his previous journeys in 1911 (*The Land of the Blue Poppy*) and 1914 (*Mystery Rivers of Tibet*). Heinrich Handel-Mazzetti, an Austrian botanist, came here and soon after Kingdon-Ward in 1914 and recorded the highest peak of Gaoligongshan as Gompa La. A careful and repeated reading of the Kingdon-Ward's 1922 journey led me to convince that Gompa La must be veiled Kawakabu 5,128 meters. He did not stand atop of Gompa La (Kawakabu), but avoiding a route on a glacier he walked on steep rocky path for crossing the watershed from east to west. In recent year a Scottish plant hunter, Michael Wickenden crossed Gompa La. (*Exploring The Upper Dulong River - The KWL Expedition to North-West Yunnan, September - October 2008*)

In my journey to have retraced missionaries' trails from Mekong to Nujiang (Salween) in autumn of 2004, I could luckily take panoramic pictures of the east face of Kawakabu and neighboring peaks ranging north to south on the Gaoligongshan. The other two photos that I took are shown as below. (see, page 61-62)

I have written “Veiled mountain”. Nevertheless it does'nt mean that it is located in a furling place. Kawakabu is a lofty mountain with a glacier but soaring very close to a town of Bingzhongluo on the right bank of Nujiang (Salween). Bingzhongluo is the northernmost

owners in the building trades, Chad contracting and myself designing - we pulled the plug and came home a week early.

We would like to extend our sincere thanks to the American Alpine Club, the Mugs Stump and Lyman Spitzer climbing grant programs for their generous support of the expedition. For us, these exploratory trips in Asia would not be possible without the financial support of the grant programs. The expedition was also supported by the Four Sisters Film project: keep your eyes out for their impressive work.

## A Journey to West Sichuan 2010

Tamotsu NAKAMURA

### 1. Visiting Christian Churches in Salween Basin Yunnan

We planned two stage journeys in summer of 2010. The first stage was in Yunnan to gather updated information in a most isolated region of the upper Irrawaddy River, Chinese name Dulong Jiang, a country of the Dulong minority tribe, and then to visit Christian churches in the Salween River Basin. The second stage was in Sichuan to explore the unknown Shaluli Shan - Litang Plateau. The latter is reported elsewhere.

#### **Dulong Jiang (upper Irrawaddy) and veiled Kawakabu**

To Dulong Jiang (main stream of upper Irrawaddy River)

Dulong minority tribe's population is 5,700 - 5,800. The same tribe called "Taron" inhabits in the upper Irrawaddy basin in North Myanmar. They had a custom to make tattoos on women's face.

I left Tokyo on July 6 and joined my colleagues, Morita and Suzuki, at Kunming, Yunnan. On July 12 we headed for the Dulong Jiang from Gongshan and were soon stopped by officials at a check-post on the way to the Dulong Jiang. A vehicle road of 96km to cross the Gaoligongshan range forming the Salween-Irrawaddy Divide to Dulong Jiang from Gongshan town already opened a couple of years ago. Nevertheless the Gongshan County government ordered a traffic control between Gongshan and Dulong Jiang for two and half years from June 1, 2010, till December 31, 2012, for refurbishing and reconstructing the road damaged by floods and landslides caused by heavy rain fall.

free climbed most of the wet and snowy pitch "protected" by a Ropeman on the fixed line. Without a moon, the Tibetan skies were thick with starlight as we climbed through the rest of the rock walls and up the mixed gullies reaching our high point at dawn.

After breakfast we opted to traverse under the gendarmes to the left and completed four difficult 5.10 C2 horizontal pitches to reach more simul-climbing terrain on the upper mountain. The weather was holding and we completed the upper 300m to the summit ridge in a single pitch. The summit ridge offered spectacular cornice walking and easy mixed climbing accompanied by giant raptors flying below. Reaching the summit at 2:30 PM we enjoyed unmatched views of the entire range. For the first time I was able to organize the complex topography of the Quonglai mountains in my mind. It was my third summit in the area, Chad's seventh.

The descent went relatively smoothly, the traverses were difficult to reverse but we sorted them out with a few pendulums and sideways raps. Our lead line suffered two debilitating core shots, and on our final rap our tag line became hopelessly stuck behind a flake on an overhanging rappel. Despite our best efforts to retrieve it, we regretfully had to leave it behind. We arrived at our high camp at 11:30 PM, after 34 hours on the go.

We named the route "Headwaters" after its obvious position in the hydrology of the region, a gesture to the Yeti himself, and as an acknowledgement of the alarming glacial recession underway here - a major threat to the crowded Chinese lowlands extending thousands of miles downriver.

A few days later, we (along with John Dickey), nearly made the first ascent of a stunning granite spire of 5086m near Se'erdenpu. Unfortunately, in the dark, after 600m of absolutely classic free climbing, I had to turn back some 25m from the summit faced with steep, unprotectable arte climbing and no bolt kit. On the descent we destroyed our only remaining lead line. (see, page 43)

Chad and I broke down base camp and returned to Rilong, the village below the peaks, and learned that the Polish team was also hit with rock fall on the north face and was in a hospital in Chengdu. It sounds like they are okay, but have broken hands. Meanwhile, a Chinese team had replaced them and started up the north face nose route. We checked the weather and were discouraged to see that our windows appeared to have ended for the foreseeable future. The odds were stacking up against us; all our ropes were destroyed, another team was already on the north face objective, and the weather forecast was grim. With the first ascent behind us and piles of work awaiting us at home - we are both business

September alone. The first of the three teams, from Japan, had been rescued after incurring rock fall injuries the week prior to our arrival.

Our itinerary called for acclimatizing in the adjacent Changping Valley near Siguniang until mid September, and we promptly set to work establishing an advanced base camp at the head of the valley under the east face of Seerdenpu. As we did so, our liaison officer informed us that a Polish team arrived at the base of the north face nose. The abandoned Japanese tent still remained a third of the way up the nose. Storms arrived and deposited the first autumn snowfall on the peaks during the first week of September.

The new snow and crowds on the north face encouraged us to remain focused on the mixed terrain on the east face. After much deliberation, we went to work on a line on the northeast ridge. On our first attempt, we found solid granite rock climbing, going free at 5.10 for the first 250m. At nightfall, we rapped back to our high camp, left a line fixed over the crux slabs and set the alarms for a predawn start. The skies deteriorated throughout the night and by four AM half a foot of new snow had fallen.

Four days later we returned amid marginal weather, but psyched to be pushing higher, gaining acclimatization if nothing else. As we gained the northeast ridge proper, Chad took the lead and we were pleasantly surprised to find straightforward passage up the ridge in a hidden gully, offering 300m of snow and mixed climbing up to M5. The weather was poor and visibility nearly nonexistent but we continued upward. At 5200m the gully terminated at a small col and a series of complex gendarmes guarded the upper mountain. In the waning daylight, I led up a steep gendarme drytooling a thin crack. While trying to clear snow and find some gear, my tool ripped and sent me hurling off backwards for my first real alpine whipper. A bit shaken up, discouraged and without any bivy gear, we decided to rap again and try tomorrow. For the second time in a row we awoke to several inches of new snow by morning. Again, we cached our food and fuel and made our way down the slippery talus back to base camp.

After one rest day in base camp, my wife Jenna called in a splitter forecast. We repacked the kit and set off at 1:30 PM up the fifteen miles of swamps and talus to the base of the route. As we approached the head of the valley, we agreed that we didn't want to risk getting stopped by a sudden storm again and thought the best strategy would be to simply begin climbing as soon as we reached the base. After a quick brew stop at our high camp we started up the route at 11:30 PM. The 5.10 slabs were running with snow melt, so I was forced to do some interesting A2 by headlamp instead. We had left a line fixed over a section of the second pitch, but nervous about the rope's integrity after the past storm, I

April 29: Rest. Climbing routes decided

April 30: No progress due to bad weather

May 01: BC to ABC as the weather improving

May 02: To the summit (Our GPS indicated 5,497m)

NE face party, Matsushima and Sato, reached the main summit. Grade III IV

N ridge party, Yoshimura and Kato, gave up at the PK 3.

May 03: ABC to BC

May 04: BC to Dang Ling

May 04 to 9: Dang Ling Danba Chengdu Shanghai Hiroshima

We could luckily succeed in the first ascent of a fascinating peak "Xiaolangla" by launching a swift attack.

## First Ascent of Se'ferdenpu 5592m, QonglaiMountains, Sichuan

Via Northeast Ridge – Route "Headwaters"

Dylan Johnson

Funded in part by both a Mugs Stump Award and a Lyman Spitzer Award from the American Alpine Club, Chad Kellogg and I reached the unclimbed summit of China's Se' erdenpu on September 13th after three attempts during the expedition. The peak forms the high point above the heads of two river valleys: the Changping River flows out off its east and south faces, and the Shuanqiao River descends from its north and west flanks. The north and west faces form a 1600m granite wall, and are remarkably accessible. One can take a public bus on a paved road to within a couple hours walk of the base. The much more remote south and east faces are some 1200m high and are composed of a combination of alpine big walls and complex alpine mixed terrain.

Chad and I had been hoping to make an attempt on the iconic granite peak since we made a reconnaissance trip to the north face in 2008 after climbing Siguniang. Se'erdenpu, the Yeti - or "Savage Peak," as it's translated, bears distinct resemblance from the north as the head and face of a "savage." Our original plan was to ascend the unmistakable five thousand foot nose of the yeti. The compelling line and ease of access has attracted somewhere around a dozen expeditions over the past decade.

Upon our arrival, we learned that three expeditions were attempting the line in August and

are inherent in this region of the Dadu River basin.

I organized an expedition to attempt on Xiaqianga in spring of 2010.

**Period:** April 24 to May 9, 2010

**Name of expedition:** Japanese Alpine Club Hioshima Section

**Leader:** Chiharu Yoshimura

**Member:** Hiroshi Matsushima, Mitsuru Kato, Ken Sato

## Outline of Expedition

The expedition members drove to a village of Dang Ling (3,300m) from Chengdu along the Dadu River and a tributary flowing into the main stream near Danba town-ship. A distance from Danba to Dang Ling is 68km. Then we set up a base camp (BC) on the shore of Da Haizi at 4,350m and soon started climbing. Walking time from Dang Ling to Da Haizi is eight hours to southwest. Reconnaissance led us to establish an advance base camp (ABC) at 5,020m as shown on the following map(see, page 23) with climbing routes. An attempt was made from two different routes, say, one was the northeast (NE) face and the other was the north (N) ridge. (see, page 26)

**NE face route:** First to follow a couloir on the face and then to climb up directly the summit rock wall to the top. The northeast ridge is very steep and has rock pinnacles to be negotiated on the way to the summit, which provides an attractive climbing route.

**N ridge route:** First to ascend to the north col and to continue climbing a steep north ridge with outstanding rock peaks ranging one after another to the main summit like the back of a dinosaur to the top. This ridge is the main divide of the Daxue Shan range. The long and large south ridge also constitutes the main divide.

On May 2, two parties departed from the ABC at 6:00am. NE party stood atop the main summit (Pk 1) at 14:40, but N ridge party reached only Pk 3 because of lack of time. The both parties gathered at a col between Pk 2 and Pk 3 and returned to the ABC at 20:40

## Itinerary

April 24: Hiroshima Shanghai Chengdu

April 25: Chengdu Danba

April 26: Danba Dang Ling

April 27: Dang Ling to Da Haizi BC ferrying gear and supplies by 11 yaks

April 28: Reconnaissance from BC to a point at 5020m (on the foot of the NE face after making a detour around the northeast ridge)

# The Southeast Face of Mt. Logan

Katsutaka YOKOYAMA

In early May, the author and Yasushi Okada of Giri-Giri Boys climbed the 2500-meter Southeast Face of Mt. Logan in a single alpine-style push. The pair then continued to the East Summit (ca. 5900m) before descending via the extremely long East Ridge. Their route climbs the steepest wall of broad south face, which had been called "the biggest and most significant remaining alpine challenge of North America" over the past two decades.

Yokoyama, Okada and Genki Narumi arrived on the Seward Glacier in mid-April and acclimatized on the East Ridge in eight days' round trip. It covered almost 60 km of distance. After Narumi had decided to drop out from the climb, Yokoyama and Okada started up the wall on 4 May and reached the East Ridge at 11 pm on the third day. Next day on 7 May, they continued to the East Summit and descended the East Ridge to make one more bivouac at 3170m. Next day, it was 30 km of long walk without snow shoes or skis to their base camp which they finally reached at 11:45 pm in the same day.

They christened the route "I-TO", which means thread, line, relationship etc. in Japanese, and graded ED + WI5 M6. Their climb won 19th Piolets d'Or in April 2011.

## First Ascent of Xiaqiangla 5470m, Daxue Shan, Sichuan

Chiharu YOSHIMURA

What should be the next target after Bawangshan 5551m in Qonglai Mountains, of which I made the first ascent in 2007 (JAN vol. 9 May 2008) No much time was required to search for a suitable mountain fitting to our conditions: unclimbed, beautifully towering and easily accessible.

An outstanding peak having been thus focused is Xiaqiangla 5470m located in the northern rim of greater Daxue Shan range stretching west of the Dadu River basin. Famous Minya Konka massif dominates the southern part of the mountain range. Only Tom Nakamura, Tadao Shintani and Kiyoshi Kawajiri made an access in the past. Xiaqiangla is not only alluring for its sharp pyramid soaring to sky, but is attractive for so-called "Valley of Beauty" of Danba county, where you will come across unique Tibetan local culture featured by affluent heritages of arts, literatures and building designs such as stone towers which

---

## The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : 5-4 Yonban-cho Chiyoda-ku, Tokyo 102-0081

---

### Office Bearers and Committee

(May 2011)

*President* : ONOE Noboru

*Vice-President* : MIYAZAKI Kohichi, KANZAKI Tadao  
FUJIMOTO Keikow

*Honorary Secretary* : MIYAZAKI Kohichi

*Honorary Treasurer* : OKABE Hiroshi

*Honorary Editor* : NARIKAWA Takaaki

*Auditor* : FUKAGAWA Yasuaki, HIRAI Takuo

---

### Committee

OHTA Kohsuke	YAMAKAWA Yohichi	TANIGAWA Taro
HORII Masako	HAGIWARA Kohji	NAGATA kohtaro
SOHMA Tsutomu	NOZAWA Seiji	NAKAYAMA Shigeiki

---

### Council

HATANO Kazuhiko	HAMAGUCHI Kin'ichi	DOHMOTO Akiko
ABE Kazuyuki	YAMAMOTO Seiji	HANEDA Eiji
SAKAGUCHI Saburo	MINOOKA Mitsuo	NAKANO Kazuo
KONDOH Midori	SHIOZAWA Atsusi	TAKATOH Hiroshi
TERANISHI Nobuo	MORI Takeaki	NIIZUMA Tohru
KOAZE Takashi	WATANABE Tamae	

---

### Chair of Local Section

<i>Hokkaido</i> : TAKIMOTO Yukio	<i>Shizuoka</i> : KUBOTA Yasuo
<i>Aomori</i> : SHIMOYAMA Hisashi	<i>Tohoku</i> : OGAWA Tsutomu
<i>Iwate</i> : UCHIYAMA Tatsuo	<i>Gifu</i> : HAYATA Michiharu
<i>Akita</i> : SASAKI Tamihide	<i>Kyoto</i> : TSUKAMOTO Keichi
<i>Yamagata</i> : WATANABE Makoto	<i>Toyama</i> : YAMADA Nobuaki
<i>Miyagi</i> : TAKAHASHI Tsuguyoshi	<i>Ishikawa</i> : NAKAGAWA Hiroto
<i>Fukushima</i> : OHGAI Tsukasa	<i>Fukui</i> : MIYAMOTO Kazuo
<i>Tochigi</i> : YAMANOI Takeo	<i>Kansai</i> : SHIGEHICO Tsuneo
<i>Ibaraki</i> : HOSHINO Yoshihisa	<i>San'in</i> : SHIRANE Hajime
<i>Tokyo-Tama</i> : TAKENAKA Akira	<i>Hiroshima</i> : SUGIMURA Isao
<i>Saitama</i> : ISHIBASHI Masayoshi	<i>Fukuoka</i> : SOEJIMA Katsuhito
<i>Chiba</i> : SHINOZAKI Hitoshi	<i>Kita-kyusyu</i> : ITOH Kyujiro
<i>Echigo</i> : YAMAZAKI Yukikazu	<i>Higashi-kyusyu</i> : KATO Hidehiko
<i>Shinano</i> : IIMURA Tomihiko	<i>Kumamoto</i> : KUDOH Fumiaki
<i>Yamanashi</i> : ENDO Yasuhiko	<i>Miyazaki</i> : SUENAGA Ikuro

# SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

---

Volume 106 No.164

Issued June 2011

---

## CONTENTS

- \* The First Ascent of the Southeast Face of Mt. Logan ..... K. Yokoyama ..... ( 7 )
- \* First Ascent of Xiaqiangla 5470m, Sichuan ..... C. Yoshimura, H. Matsushima ..... (20)
- First Ascent of Changla 6563m, West Nepal ..... H. Kobayashi ..... (29)
- \* First Ascent of Se'erdenpu 5592m, Qonglai Mountains ..... D. Johnson ..... (38)
- Winter Solo Climbing on the West Ridge of Mt. Hunter ..... M. Kuriaki ..... (45)
- \* A Journey to West Sichuan 2010 ..... T. Nakamura ..... (57)
- Mount Everest a History of Discovery and Its Naming ..... T. Kaneko ..... (104)
- Mountains of Muzart River Area, Tian Shan ..... T. Ogawa ..... (123)
- Accidents of Himalayan Climbs by Japanese ..... K. Yamamori ..... (135)
- A Tracing the Kumano-Kodo ..... S. Ishioka ..... (145)
- Visiting European Alpine Circles Poland, Spain and Germany .... T. Nakamura ..... (156)
- Book Reviews ..... (176)
- In Memoriam ..... (208)
- Minutes of Meeting for JAC during April/2010—March/2011 ..... (253)
- Report from the Local Sections during 2010—2011 ..... (279)
- 
- Catalogue of Japanese Mountain Books in 2010 ..... (A30)
- English Summary ( \* ) ..... (A15)

— 広告掲載 —

カモシカスポーツ（表紙）  
山と溪谷社  
（株）モンベル  
アルパインツアーサービス  
アライテント  
槍ヶ岳山荘  
立山室堂山荘  
早月小屋  
雷鳥沢ヒュッテ・ロッジ立山連峰  
東京新聞出版局  
好日山荘  
カシオ＜PROTREK＞  
アトラストレック（裏表紙）

登山技術の決定版シリーズ

# 登山技術全書

●定価1890円～2730円(税込)

●B5判●136～176ページ

これまでの登山技術書になかったワイドな判型で、カラー写真を多用し、よりビジュアルに表現した内容。また、ひと目でわかる絵解きのハウツーも満載。初心者はもちろん、ベテランの登山者も納得のオールラウンドに使える登山技術書。

## ① 登山入門 野村 仁著

これから山登りを始める人が山を自由に歩けるようになる登山の基本を徹底解説

## ② 縦走登山 山田哲哉著

無雪期の宿泊を伴う縦走登山に必要な知識と技術を解説

## ③ 雪山登山 遠藤晴行著

歩行技術から雪崩対策まで、雪山の技術と知識をいちから解説

## ④ 沢登り 中村成勝・深瀬信夫・宗像兵一著

涼かな渓谷歩きから険谷突破の技術まで、沢登りの最新知識を解説

## ⑤ バックカントリースキー&スノーボード

菊池哲男・北田啓郎・松澤幸靖・会田二郎・近藤謙司著

## ⑥ アルパインクライミング 保科雅則著

岩登りからアイスクライミングまでバリエーションルートに登るための高度な登攀技術

## ⑦ フリークライミング 北山 真・杉野 保・新井裕己著

トレーニングからクラック、ホルダリングなど最新フリークライミングテクニック

## ⑧ 山岳地形と読図 平塚晶人著

山岳地形の見方と地図、コンパスを使ったナビゲーション

## ⑨ 登山医学入門 増山 茂監修

山で起こりうるケガや病気の対処法と原因そして予防まで

## ⑩ 山岳気象入門 村山貢司・岩谷忠幸著

観天望気やITを駆使しての気象情報入手など、山の局地気象を的確に判断する方法を紹介

## ⑪ セルフレスキュー 渡邊輝男著

遭難を防ぎ、安全登山を実現する山のトラブル脱出法

## ⑫ 海外登山 中村 進著

憧れの高峰に登るためのノウハウとタクティクスを詳しく解説



山と溪谷社

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-11 住友不動産九段北ビル8階  
カスタマーセンター03-5275-9064/http://www.yamakei.co.jp

SINCE 1975  
**mont-bell**  
FUNCTION IS BEAUTY



トレントフライヤージャケット ¥19,000(税込) 平均重量：220g / 収納サイズ：7×7×14cm (Mサイズ) / サイズ：XS・S・M・L・XL (男女兼用)

## 機能を極めたものにこそ“美”は宿る。 「トレントフライヤージャケット」



世界最軽量・最小収納サイズ\*を実現した、全天候型ウエア。  
防水性・防風性・透湿性の3つの機能を併せ持つ、“GORE-TEX®ファブリクス”を採用し、縫製方法からパーツの選定にいたるまで徹底的に軽量化を図りました。  
わずか1gにこだわるひたむきさが、220gという驚異的な製品重量を実現。  
雨の多い日本のアウトドアで快適に行動するため、フードの形状やジッパーの防水性をもとより縫い糸の撥水にまで妥協を許さず作り込んだ一着です。

\*ゴアテックス®メンブレンを使用したレインウエアにおいて、2010年12月モンベル調べ。

株式会社 **モンベル**

【お問い合わせ】モンベル・カスタマー・サービス ☎0088-22-0031 / TEL.06-6536-5740  
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

[www.montbell.jp](http://www.montbell.jp)

# 登山とトレッキングの 専門旅行会社です。



## 登頂ツアー

日本の山から世界各地の高峰、氷河の山まで。



## 日帰りハイキング

ホテルやロッジをベースにして、周辺の高原や湖、小ピークへ。

## オーバーランド

遥かなる大地を長距離にわたって走破する、壮大な旅。

## トレッキング

数日間にわたり、テントやロッジに泊まりながら歩く山旅。



## スケッチ・写真教室・花の観察

講師が同行し、ていねいに指導します。

## オリジナルツアーを企画してみませんか。

山岳会、ハイキングクラブで企画するオーダーメイド。

**出張説明会** 山の仲間がお集まりのときに、当社スタッフが資料やスライドでご説明します。お気軽にお問合せください。

ツアーカタログをご請求ください

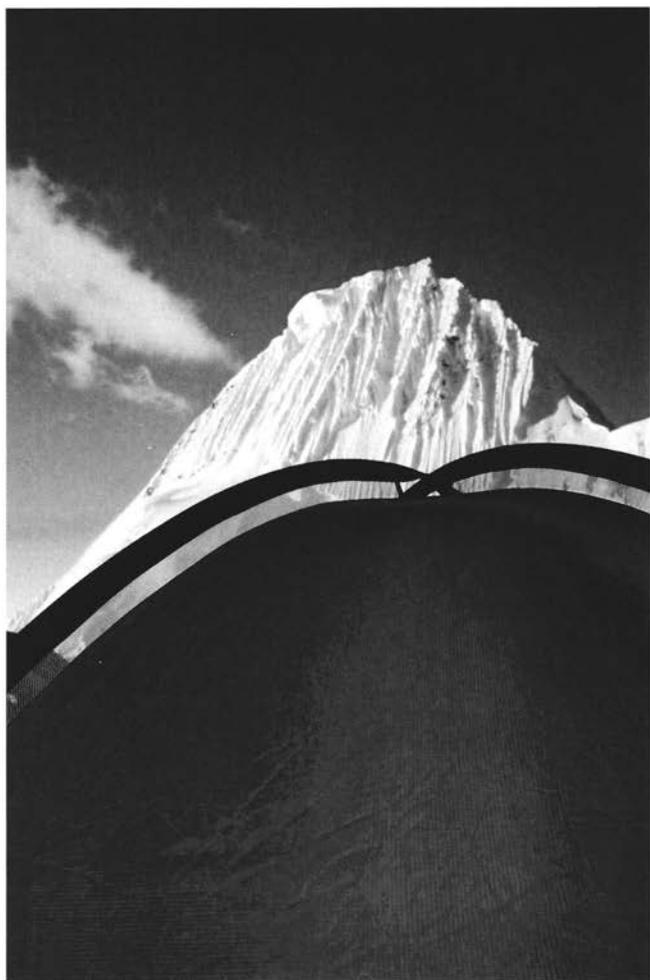
## 世界の山旅・辺境の旅を手がけて42年の実績

観光庁長官登録旅行業第490号/一般社団法人日本旅行業協会 正会員 ©ボンド保証会員  
**ALPINE ツアー サービス 株式会社**

本社 〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海事ビル4階  
東京/☎03(3503)1911 大阪/☎06(6444)3033  
名古屋/☎052(581)3211 福岡/☎092(715)1557  
札幌/☎011(711)7106 仙台/☎022(265)4611(転送)  
(株)りんゆう観光 広島/☎082(542)1660(転送)

HP <http://www.alpine-tour.com>

e-mail [info@alpine-tour.com](mailto:info@alpine-tour.com)



アルパマヨ西南壁 佐藤嘉彦

ウラヤマでも、ヒマラヤでも

Made in JAPAN

**ARAI TENT**

[www.arai-tent.co.jp](http://www.arai-tent.co.jp) | 04-2944-5855

槍ヶ岳山荘

☎090-2641-1911

槍沢ロッヂ

☎0263-95-2626

岸岳小屋

☎090-4524-9448

大天井ヒュッテ

☎090-1401-7884

壱沢小屋

☎090-2546-2100

【事務所】

〒390-0813

長野県松本市埋橋1-7-2

TEL. (0263) 35-7200

FAX. (0263) 35-0637

あこがれの  
槍ヶ岳。

<http://www.yarigatake.co.jp/>



残雪、花、そして新雪まで  
立山を楽しむベースキャンプとして  
ご利用下さい。

◆ バスターミナルより徒歩10分

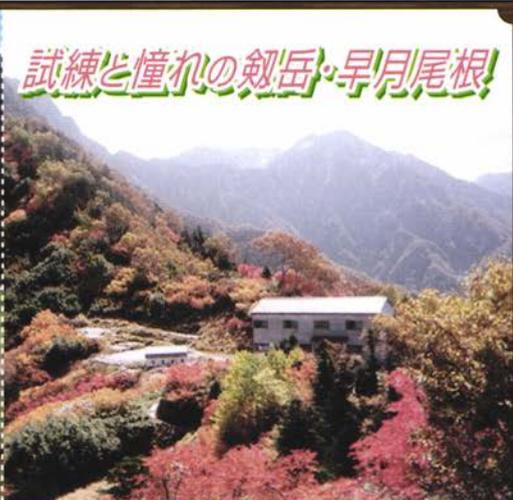
立山室堂山荘

TEL 076-465-5763

<http://www.murodou.co.jp>



試練と憧れの劔岳・早月尾根!



◆ 馬場島から一直線 早月尾根は山を楽しむだけでなくお花も楽しめる尾根で、花の百名山にも載っています。

## 早月小屋

[シーズン中] TEL.090-7740-9233

[メール予約可] hayatsuki@ma.net3-tv.net

<http://www.net3-tv.net/~hayatsuki/> 〒930-1406 富山県中新川郡立山町芦峯寺63-2 佐伯謙一



\*立山・劔岳・大日岳の行き帰りにご利用ください。

奥大日岳をバックに隣接するヒュッテ(左)とロッジ

雷鳥沢温泉 ◆ 湯量豊富な登山とハイキングの宿

## 雷鳥沢ヒュッテ

[シーズン中] TEL.076-465-5727

## ロッジ立山連峰

[シーズン中] TEL.076-465-4594

事務所 TEL.076-482-1617 (FAX兼) <http://www.raichozawa.net>

お得な

# 岳人 定期購読のご案内

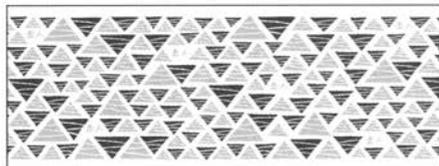
定期購読 3 大特典 ★ 割引サービス ★ 送料無料 ★ オリジナル手ぬぐいプレゼント

山の専門誌『岳人』（毎月 15 日発売）の年間購読にお申し込みいただきますと、1 年 12 冊 9,600 円のところ、600 円をサービスし、年間 9,000 円でご購読いただけます。お申し込みいただいた方には、もれなく“オリジナル手ぬぐい”をプレゼント。送料も弊社が負担いたします。お得な岳人の定期購読を、是非ご利用ください。

定期購読をお申し込みいただいた方に

『岳人オリジナル手ぬぐい』

もれなくプレゼント!!



なお、品物は予告なく変更になる場合があります。

※途中解約は出来ません

※海外発送は受け付けておりません

## 岳人 別冊

定期購読のご案内

岳人 10 月号別冊

岳人 7 月号別冊

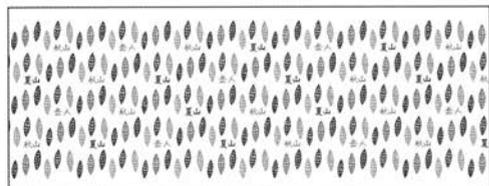
### 秋 山

8 月末発売予定

### 夏 山

5 月末発売予定

2大特典 送料無料  
オリジナル手ぬぐい



なお、品物は予告なく変更になる場合があります。

岳人別冊は、毎年『秋山』『夏山』が発売されております。定期購読料は 2 冊セットで 2,200 円です。定期購読をお申し込みいただきますと、送料を弊社が負担し、ご自宅にお届けいたします。発売日をお忘れになっても買いそびれることはございません。また、お申し込みいただいた方には、もれなく“オリジナル手ぬぐい”をプレゼントいたします。是非お申し込みください。

※途中解約は出来ません

※海外発送は受け付けておりません

お申込み  
お問合せ

東京新聞出版部（中日新聞東京本社）

TEL03-6910-2527 FAX03-3595-4831

E-Mail: syuppan@tokyo-np.co.jp

登山・アウトドアの専門店

# 好日山荘

since 1924

山道具あります!

常圧低酸素室稼働中



瑞穂店 042-568-7913

新潟亀田店 025-378-5123

詳しくは直接店舗までお問い合わせください。

## 好日山荘 店舗一覧

関東地区：銀座店／新宿西口店／池袋西口店／横浜西口店／浦和バルコ店／玉川ガーデンアイランド店／藤沢プラザ店／町田店／瑞穂店／千葉バルコ店／LALAガーデンつくば店／さかい屋川崎店／さかい屋横須賀店／ララスクエア宇都宮店 中部地区：名古屋栄店／春日井店／各務原店／静岡バルコ店／メイワン浜松店／金沢西インター大通り店／福井北四ツ井店／富山豊田東店／新潟亀田店 近畿地区：大阪梅田店／神戸本店／なんば店／明石大久保店／ロックシティ姫路店／WEBプラス店／京都店／紀三井寺店／奈良田原本店／フォレオ大津一里山店／ビオルネ枚方店／川西店 中国地区：広島紙屋町店／岡山ビブレ店 九州地区：福岡バルコ店／マルヤガーデンズ鹿児島店／大宰府インター店／アトム小倉店

WebShop

本店 [www.kojitusanso.com](http://www.kojitusanso.com) 楽天店 <http://www.rakuten.ne.jp/gold/kojitu/> Amazon 店

## 株式会社 好日山荘

〒651-0083 神戸市中央区浜辺通2丁目1-30 三宮国際ビル6F [www.kojitusanso.jp](http://www.kojitusanso.jp)



[www.gravity-research.jp](http://www.gravity-research.jp)

クライミングジム グラビティリサーチ

【グラビティリサーチなんば】TEL:06-6645-0631

大阪市中央区難波千日前12-35 SWINGヨンモトビル 3F

【グラビティリサーチ神戸】TEL:078-855-8043

兵庫県神戸市中央区磯上通4-3-10 IPSX EAST 1F

# CASIO



**PRO TREK**  
Feel the field

# 大自然を 歩く指針。

トリプルセンサー×アナログインジケーター  
独立駆動のインジケーター針が、方位・気圧・高度の量的な把握を促す。大型ネオブライト針の採用により暗所での視認性も確保したアナログライン〈PRW-5100〉誕生。フル“アウトドア”スペック電波ソーラー プロトレック。

[方位計測]

[気圧／温度計測]

[高度計測]

PRW-5100-1JF  
¥54,000(税込¥56,700)

**TOUGH  
MVT.**  
TOUGH MOVEMENT

**MULTI-BAND  
WAVE**

protrek.jp

## 編集後記

世界に伍して第一線で活躍する日本人の登山記録が毎号掲載できるのは大変喜ばしいと思う。

地理的未知を残す東チベットの入域が困難となり、中村 保さんの探検の記録は四川と雲南の民族と特異な歴史を探る旅と、クライミング対象となってきた未開の山群を確認し解明するものである。

独自の資料をいくつも用いて書かれたエヴェレストの山名についての論考は、金子民雄さんならではのものです。大変興味深い。

最近になって注目され出した天山山脈主脈の新疆側の高峰群について、この山群に最初の登山隊として入られた小川 務さんにご紹介をお願いした。

昨年と同じ時期から作業を始めたが、予定原稿のうち三つが間に合わなかったのはまことに残念である。

今回は表紙の写真に若い写真家の富士山を使わせていただいた。

編集委員

児玉 茂、成川隆顕、永田弘太郎

編集協力者

五十嶋一晃、中村 保、池田常道、萩原浩司

山岳 第百六年（通卷一六四号）

二〇一一年七月一五日発行

価三五〇〇円

發行所

社団法人

日本山岳会

東京都千代田区四番町五十四  
サンビュールハイツ四番町

（〒一〇〇二一〇〇八一）

電話 ○三三三二六一―四四三三  
振替口座 ○〇三三〇一―四八二九

發行人 尾上 昇

編集人 兎玉 茂

印刷所 株式会社 東京印刷

発売所 株式会社 茗溪堂

東京都千代田区神田駿河台二一―

電話 ○三三三二九一―二八一―  
振替口座 ○〇一八〇一―二四七三

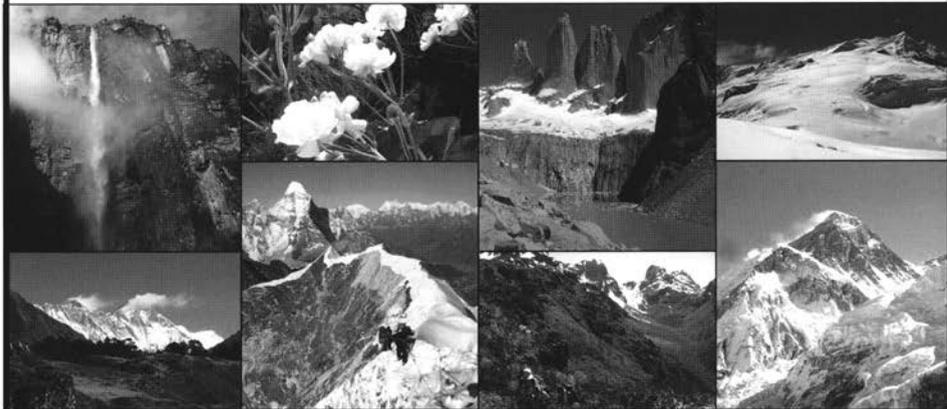
本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。



地球を歩く 世界の山旅 名峰登頂

# ATLAS TREK

アトラストレックでは世界の様々な地域のトレッキングツアー、登山ツアーを企画・募集しています。また、お一人様からの個人手配旅行から、山岳会やハイキングクラブ、山好きのお友達グループなどの手配も承っております。遠方の方でもメンバーの方々の集まる日に弊社スタッフが出張説明会を開催します。お気軽にご相談ください。



## アトラストレック特選ツアー

掲載しているツアーは一例です。詳しくはパンフレット・資料をご請求ください。

① **キリマンジャロ山 (5895m)**  
登頂とサファリ11日間

アフリカ大陸最高峰キリマンジャロに立つ  
旅行期間:2011年10月6日(木)～10月16日(日)  
旅行代金:¥548,000

② **アイランド・ピーク (6160m)**  
登頂24日間

最もポピュラーなネパールヒマラヤ6千m峰  
旅行期間:2011年12月20日(火)～2012年1月12日(木)  
旅行代金:¥678,000

③ **アコンカグア (6959m) と  
エル・プロモ (5430m) 登頂24日間**

アンデス山脈 アメリカ大陸最高峰とチリのモンブランを目指す  
旅行期間:2011年12月21日(水)～2012年1月13日(金)  
旅行代金:¥926,000

④ **ピコ・デ・オリサバ (5699m)**  
登頂9日間

メキシコ最高峰・北米大陸第3の高峰ビッグ“オー”に登る  
旅行期間:2011年12月28日(水)～2012年1月5日(木)  
旅行代金:¥538,000

株式会社 **アトラストレック**

観光庁長官登録旅行業第1167号

Eメール: [info@atlastrek.co.jp](mailto:info@atlastrek.co.jp)  
ホームページ: <http://www.atlastrek.co.jp>

お問い合わせ

〈東京〉03-3341-0030 〒160-0008 東京都新宿区三栄町25番地 三栄ハウス202

〈大阪〉06-6946-9111 〒540-0012 大阪府大阪市中央区谷町3丁目4番5号中央谷町ビル501

The Journal of  
The Japanese Alpine Club

**S A N G A K U**

Vol.106

2011